藝能對談

三宅周太郎

三宅周太郎

藝能對談

創元社版

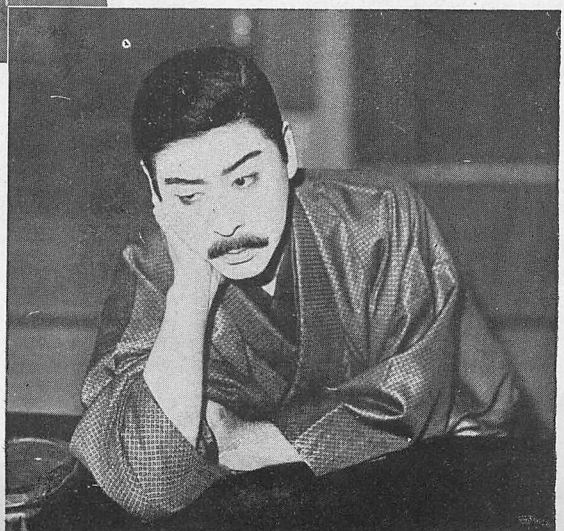
（上）故六代目菊五郎の「五斗の三番」
（下）故七代目幸四郎の『勸進帳』の「辨慶」

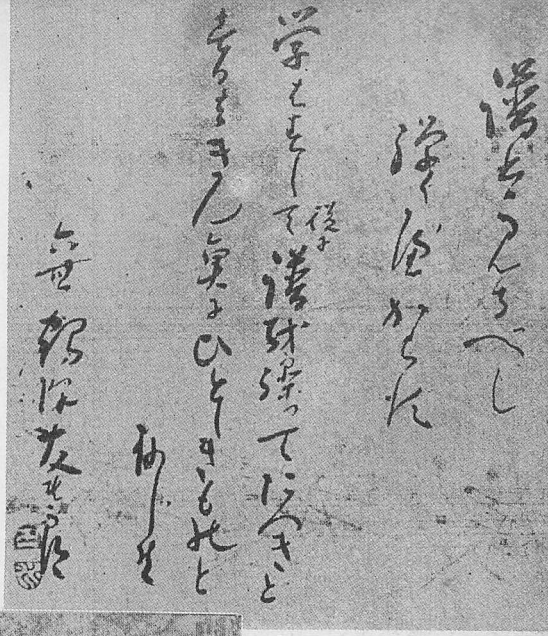
（上）　坂東三津五郎の「梅王」
（下）　同じく『堀川夜討』の「藤彌太」

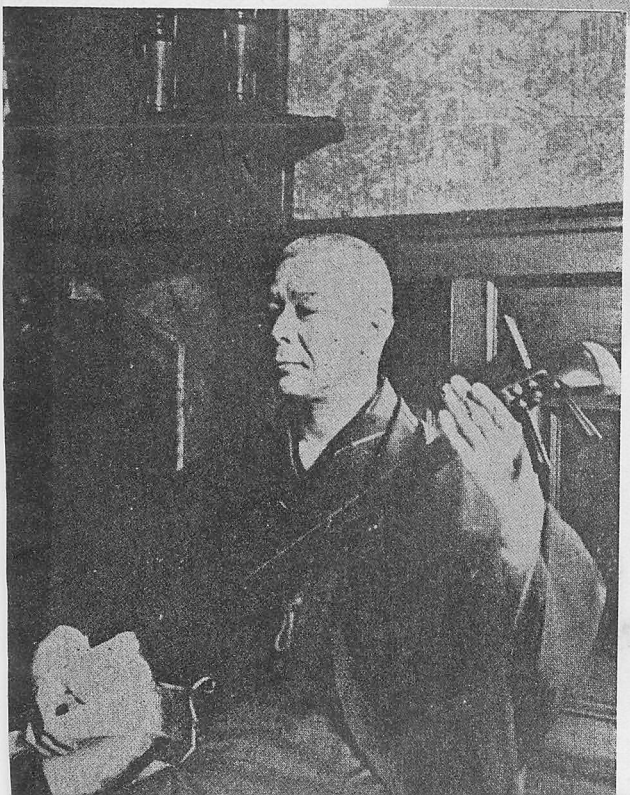
實川延若の『樓門』の「五右衞門」
さんもん

（上）『關取千兩幟』の中村時藏の「おとわ」と市川壽海の「稻川」
（下）同じく阪東壽三郎の「鐵ヶ嶽」（右）と壽海の「稻川」

（上）井上正夫の「澤庵和尚」
（下）喜多村緑郎の『婦系圖』の「酒井俊藏」







文楽座三味線楷下　鶴澤友次郎とその筆跡

（上）　市川海老藏の『助六由縁江戸櫻』の「助六」
（下）　同じく　『近江源氏先陣館』の「盛綱」

中村時藏の「玉手御前」

三宅周太郎

藝能對談

目次

松本幸四郎……七
嵐雛助……一七
豐竹山城少掾……二八
竹本綱太夫……四四
鶴澤友次郎……五六
坂東三津五郎……六七
尾上松緑……七八
實川延若……八九
鶴澤清八……九八
喜多村緑郎……一〇八
阪東壽三郎……一一五
桐竹紋十郎……一二五
市川海老藏……一三五
大谷友右衛門……一三五
片岡我當……一四七

中村時藏……一五七
井上正夫……一六七
市川壽海……一七六
×
白井松次郎……一八八
中野好夫……二〇二
正宗白鳥……二〇九
×
尾上菊五郎追悼……二二九
一、六代目亡き後の歌舞伎……二二九
二、市村座とその苦境時代……二三一
三、菊五郎の一生……二四一
あとがき……二五二

裝幀　岡鹿之助

藝能對談

松本幸四郎（七代目）

三宅　挨拶ぬきで申しますが、貴方は明けて八十におなりですね。前の松助も長命して高齢で舞臺を勤めましたが、あの人は脇役でいつも役が樂だつた。だからそれですんだが貴方は今でもシテの役が多くて元氣です。座頭役者で八十又は八十以上で、舞臺を勤めた人は日本演劇史上でもさう〳〵ございません。近世では明治期の大阪の尾上多見藏ぐらゐのものでせう。それ以來の記錄の人が貴方のわけで、これ程目出度く幸福な事はありません。そこで八十の新年のお祝ひを兼ね、某所でぜひ私に對談してくれとの依頼でお邪魔したわけです。

幸四郎　さうです。八十になります。併し、私程幸福な者はないので、これでいつ目をつぶつても私は思ひ殘す事はありません。豐の松緑は六代目さんの所にゐますし、染五郎は吉右衛門さんの所にゐます。長男の海老藏が又この節は皆さんのお引立てで、大役がつくやうになりました。あの子は一時からだが弱くて案じてゐた。それが丈夫になつて、前年堀越の姉さん（團十郎の娘）の方が私の宅へ三度見えた。二度共何もいはずに歸られたのでおかしいと思つてゐたら、三度目の時初めてお願ひに來たといつて、いひ難いが何とか養子にくれないかとのお

話でした。私は考へたまゝ本人次第にしようと本人にきくと、お父さんは何事も師匠のおかげだといつてゐる。堀越の家へ行つても座ぶとんをしかぬ位にしてゐる。さういふおうちで私を望まれるなら、私を出してもいいでせうといふわけで、長男でも差上げた次第です。それがこの頃は私が何もしないのに、皆様の方で海老藏はいいといつてよくして下さるのです。役者はこちらで手をまはして、頼みまはつてどうにかものになるのが普通ですのに、あれだけは皆さんの方で引つぱり出して下さるのです。三人が三人こんな次第ですから私程仕合せな者はないと思つてゐます。

三宅　さうですとも。松緑と染五郎とは私は京都に殘留してゐても、よく見るので分つてゐたが、海老藏だけは見ぬ悲しさで分らずにゐたのが、十月の「盛綱」を見て感心した。あれは荒けづりで、どこかぼやつとしてゐるのが値打の人で、前途有望ですよ。私はあの人に指導者さへあれば、あれは大物の座頭役者になる人と思つて、お宅の支配人の堀さんに貴方へ傳へてくれと、ことづけをしておいたが耳に入りましたか？　それは貴方は大きな山持ちだといふ話で。——

幸四郎　（考へてゐるが分らぬらしく）　いいえ、まだ聞きませんが。

三宅　それは貴方ぐらゐ幸運な人はなくて、兩手に花といふよりは、貴方は三つの山持ちだと私はいつたので。——海老藏は金の山で佐渡の金山、染五郎は銅の山で足尾の銅山、松緑は銀の山で生野の銀山、つまり、金銀銅と貴方は三つの山持ちだといつたのです。

幸四郎　（笑）　いや、どうもそれは。さうですか。いや有難う。（笑）

三宅　まだありますよ。お宅の支配人の堀さん、これが失禮ながら人材と申したい。役者の支配人や附人（つきびと）は中々むづかしくて、いい人のみとはいへない。その人たちのために主人の役者

が損をしてゐる人のある中で、貴方が堀さんのやうな出來た人を持つてゐられるのは、これも幸運で全く貴方は果報者ですよ。

幸四郎　堀は私を親のやうに思つてゐます。あれは親の代から私のうちに來てゐた者で。

三宅　兎に角いい事づくめの話で緣起がいい。所で、さつき貴方は今の時代だから新作をやりたいといはれた。松竹は「忠臣藏」と「勸進帳」ばかりやりたがるが、あれは度々でお客に失禮だ。あなたは今は新作には演出者があるから、新作に出てみたいといはれたので、私はびつくりした。貴方の新作のうまいのは「アメリカの使」や「曾我の入鹿」（歌右衞門と共演）で私も推賞してゐて分つてゐるが、そのお年で新作とは。……

幸四郎　新しいものをやらんといけませんよ。いや、私の父の勘右衞門は八十六で歿したが、これも八十の時、もう年だから踊りをやめてからだを樂にさせようとして、內弟子の小勘と勘之丞にまかせて遊んでゐた。するとね、一と月たつとぽかんとしてしまつて丸で元氣がなくなつた。それで初めて樂に遊んでゐるのがよくないのが分つて、隨意に仕事をさせてみたら、却つて元氣が出ました。私もそれで前年七月八月九月と三月休んで、少し樂にした方がいいといつてうちにゐました。すると二の腕の下がやせて脂肪がへつた事がありました。又、一昨年でしたか東劇で、六代目が休んでその上吉ちやんが休んだ時、私は代りを引取けて「高時」と「大森彥七」と「河內山」と「矢口」の頓兵衞とに出た事があつた。土臺無茶な話だが、私が代りに出ないと芝居があけられぬのでやつたがね。その頓兵衞も師匠の型だと花道の引つ込みも、刀をかついですた〳〵歩いては入るから樂だが、吉ちやんの代りだ。時藏のお舟も「と、と、さま」といふせりふまはしだから、私も「なアん、だ」といふ時代なやり方をしたし、引つ込みもクモ手の方でやつたからえらかつ

た。それでも途中注射はしたが二十日間やり通したのです。――それで遊んでゐる方がよくない位。

三宅　たいしたからだですね。先達の東北の旅で、貴方はどこかで雪駄のやうな固いカツレツを食べて下痢してゐながら、たうとう押し切つて途中でも病はず、舞臺も休まずにすんださうで實に驚いたといつてゐた人があつた。尤も、松緑はその血をひいていてあの人は丈夫で骨格は貴方に一番似てゐる。

幸四郎　え。あれは永い間應召してゐて、酒も煙草もやめてゐたからよかつたが、歸つて來てから酒も煙草もやり出したが一番丈夫です。それに六代目といふ團十郎に仕込まれて、名人の五代目の血のある「鬼にかな棒」の人についてゐるから仕合せ者だ。あの松緑といふ名は御承知の三代目菊五郎を育てた人のいい名で、前の松助に尾上家でついではとの話があつた。すると松助はあの通りの人だ。私には結構すぎる名でとても勿體ない。私は一生松助で十分、その代り俳號をモーロクとつけさせて頂きませうか、といつたといふしやれた話が殘つてゐるが、その名をもらつたわけ。それに又あの友右衞門がうちの娘と結婚しましたが、あの子も永い間應召してゐて蛇やとかげを食つてゐた。それが歸つて來て一番にうちへ來たのは、先代の友右衞門は、前年幸四郎劇團を作つた時、まつ先に加入してくれた人で私はうれしく思つてゐた。それで廣太郎の事を何とか世話したいと思つてゐると、うちへ來てゐる中に、どうやら娘も好きらしい（につこりしつゝ）ので、これはいいと思つてゐると、緣談がまとまつて、又一人倅がふえたやうなわけ。

三宅　いや、丸でのろけみたいだが氣持のいいのろけで愉快。あの友右衞門はしつかり者でこれもいい女形になれさうですが、あの人は海老藏と正反對で少し抑へてゆく人がゐないといけない。手放しにすると危險。

幸四郎　さうです。どなたもさういはれるが全くだ。併し、中々勉強家でこの間も「朝顔」をやる時、わざわざ大阪へそれを調べに行つたり、文樂を聞きに行く位で。

三宅　さうさう。それは八月で丁度南座で文樂がかかつてゐて、私も用で行つてゐたら友右衛門が來てゐて、これは私のためのいい讀者の方で何かと御厄介になつてゐる藤田年行君のヒイキで、ぜひ一度そちらで會つて話を聞かしてやつてくれとの、通知があつた所だつたので一寸話をしたがいい心がけの役者で。

幸四郎　さうですか。どうぞよろしく。海老藏にもぜひ何かいつてやつて下さい。――

三宅　所で、十一月の東劇で「曾我の對面」で、貴方の工藤を見て、懷舊の情にたへない。覺えてゐられるでせう。あなたはいつも五郎の方に出てゐて工藤は澤山やつてゐられない。それが明治四十三年一月、貴方が歌舞伎座を出て明治座の左團次一座へ加入して、座頭格で初めてこの工藤をした。左團次の五郎、源之助の十郎で。あの時の工藤がなつかしい。

幸四郎　さうでした。いつも五郎の方をやつてゐましたね。その五郎の話だが、今度猿之助君が五郎をやるので聞きに來た。それで私は五郎の仕どころの「けふは」の件を、七代目團十郎のやり方で教へた。七代目は日光で鶯の名品の鳴き聲を聞いて、それから思ひついたといふが、あすこで誰でも「けふは」でドドンの太鼓、これはツケの代りに當るわけだが、そのドドンを入れ「いかなる吉日にて」で又ドドンを入れ、「日頃」で又ドドンとあのせりふの件で六回ドドンを入れる。それが七代目では鶯の聲から思ひついて五つしか入れない。つまり「けふはいかなる吉日にて日頃」まで一と息でいつて、そこで初めてドドンを入れるので、終り迄五つしかドドンを入れない。けれどもこれが本當でドドン六つは半ダースでおかしい。音曲やせりふの間からいつても五つの方が本當だ。師

匠も一と芝居このドドン五つのやり方をした事があつたから幸ひ猿之助は清元屋さんでイキが續くから「けふは」できらずに「日頃」迄一と息のやり方を敎へたわけです。

三宅　さうですか。私はあすこが變つてゐると思つてゐたが、猿之助は聲量はあるからやれるでせう。

幸四郎　え。やつてゐます。私はあの人ならやれると思つたからね。兎に角あのドドンは五つが、日本の藝事からいつても本當だと思ひます。

三宅　序に誰でも貴方には訊くでせうが、「勸進帳」の辨慶の事ですが。——

幸四郎　え。亡くなつた井口政治君が七年前に調べてくれた時に、私がその時迄で全國で「勸進帳」をやつた回數は千三百でした。それが七年前の話。それから九州と東北との旅で百六十五日、堀の興行で百五十日餘りと二年間で三百回やつた。又、これで一世一代といつて四回一世一代を出してゐるから、今日迄ならさうですね。さあ——

三宅　それなら千七百回近いわけですね。ざつと五ケ年間貴方は毎日あの辨慶をやつてゐる事になりますね。

幸四郎　さうでせう。それで文樂の攝津大掾も長命でそんな話があつたと思ふが、私も辨慶を千回やつた時、全部の舞臺の事がすつかり分つて來たと思つた。それは番卒のせりふからおはやしの長唄や笛、三味線の手迄すべて分つて來た。舞臺へ出てゐて、あ今日は誰の三味線の調子が變だとか、誰が一寸でもとちつたとか、向うで氣がつかぬ位の事迄私には分つて來たと思つた。千回やると何もかも分つて來ますよ。

三宅　成程、一藝百回といふのが定式で、百回やるとものになるといふのが原則なのに、貴方のはその十倍だから、千回說は恐れ入りました。それで誰の富樫が一番いいと思ひましたか。

幸四郎　それは度々やつてゐるからやはり羽左衛門でしたね。それからは梅幸、あの人は五代目に何事でも仕込まれてゐるから、富樫をしてゐても、こつちがやりいいやうにしむけてくれました。えらい人でした。せりふを腹から出してくる人は故人の鴈治郎で、これもこつちがその勢ひに押されて力一杯にやれました。

三宅　梅幸の話はいい話ですね。世間は梅幸の富樫を丸で買はなかつたのに、さういふたいした腕があつたのがあの人の値打。やはり世評のよくなかつた梅幸の勘平を、私は大きに買つてゐますが、昨年末三津五郎に會つた時、三津五郎は梅幸の勘平をひどくほめて、六代目にしたつて五代目の勘平はほんの子供の時で知つてゐるわけはない。みな梅幸が教へたといつて極力ほめてゐた。全く梅幸はえらい人だつたと思ふ。――それから私は貴方の古典では「毛剃」に一番敬服してゐますが。

幸四郎　（につこりして）さうですか。いや、毛剃はいろいろ調べて、九州へ行つた時も、毛剃のあの詞は諫早詞で、これは長崎よりの田舍ですが、私は長崎の紅葉亭の主人についていろいろ聞いてみた。その中うちへ諫早生れの女中が來たので、どうか教へてくれと頼んだ。けれども本當の諫早辯にすると殆ど意味が通じない。そこは手加減をする事が要ると思つた。一體あの「バッテン」といふのは英語のバット・ゼンから轉じたといふ位で。

三宅　成程、それで毛剃ではどこが一番むづかしいですか。

幸四郎　奥田屋になつてからの、あの惣七との出會ひです。毛剃が乾分をとめてゐながら、惣七に「こらえさつしやい。一とことやあ―」と目と顏とで向うを抑へてゐるのだから大變です。それだから惣七がしつかりと「こらえさつしやい」を受けてくれないとやつてゐられない。それでこれは外へも話をしたが、私の若い染五郎時代に赤坂の演技座で惣七をした。毛剃

は先輩の市川新藏、これがその初日にそこん所へくると、私の惣七に舞台でゐて大きな聲で「まづいなあ」といふんです。お客に聞えるし實に私はたまらなかつた。二日目も三日目もやはり「まづいなあ」とやられるので、私はやりきれなくなつて、新藏を舞台でふみ倒してどつかへすつとんでしまひたいと思つた。だが、親の手前そんな手荒な事をしてはと思つて、やつと思ひ直して、五日目に今日は向うを睨みつけて狙つて打切る位の氣持でやらうと、その覺悟でやつたら初めて何もいはなかつた。それで無事にすんだが、その時は實に口惜しかつたが、自分が毛剃をやつてみると、やはりこゝが一番骨が折れて、惣七がしつかりしてゐないとやつてゐられないのが分つて來た。——この時に、私の父は知らん顏をしてゐたのが、半年程たつてから私に惣七の話をして、あすこはあのやり方をしないといけないと笑ひながらいつたのでした。新藏の事も又惣七のやり方も知つてゐながら、その時すぐ教へるとためにならぬと思つて、わざと自分で苦しんで考へるやうにさせてゐたわけ。

三宅　昔の名人はみなさういふ風でしたからね。扨、最後に八十でこのやうに丈夫な人は珍しいから伺ひますが、貴方には何か特別の養生法でもあるのですか？

幸四郎　それは誰からもよく訊かれる事です。これはうちの仲たちにはいへぬ事だが、一つは私は親が嚴重で二十歳前後、三十をすぎてからは別だが——品行を謹しんだ。親がやかましくていつも親のそばに寢かされた。世間もそれを知つてゐて、どこにゐても夜は十一時になると、さあお歸りといつて歸へしてくれた。それがよかつたのと、私は腹一杯にものを食はない。酒も煙草もやらない。それから偏食をしないやうにしてゐる。私たちの若い時分の仲間では、どんぶりを三つ食つたといふやうな大食ひの役者がゐたが、早死をしてしまつた。……さ

つきの話の攝津大掾も細君がつききりで、床へ上るのにしても、食事をして四時間目に上るやうに、時間をいつも考へてゐたさうです。それから偏食もいけませんよ。初代左團次やうちの堀のおやぢは揃つて天ぷらが好きで、毎日のやうにてんぷらばかり食べてゐたから、二人共胃がんで死んでしまつた。この間の左團次も養生家だつたのに、肉食が好きで牛や鳥ばかり食つてゐたからあの通り早死してしまつた。

三宅　併し、結局貴方は酒を飲まぬのが何よりでしたね。その點松綠はまだしも生れつきが丈夫だからいいが、海老藏の方は酒が強いのが不安だ。私は一寸會つただけだが、ふだんを見ても松綠のやうに本當の健康體とは思はれない。あれだけ大きな聲を出す割に、顏色もよくないし、猫背のやうな癖がある。あの人は大事な金の山だから餘り酒を飲ましてはいけませんよ。六代目の例があるから。吉右衞門が丈夫なのも酒をやらぬからだと思ふ。

幸四郎　さうです。吉右衞門は存外丈夫で、朝

幸四郎の「毛剃」

も早くから起きてうちの家内も驚いてゐます。海老藏は全くその通りで、どうか貴方からもお序によくいつてやつて下さい。私がそんな注意をしても、なあにおやぢがと思つて利目がないのですから。

三宅　兎に角海老藏はそんな風に誰にも何となく氣をもませる人だが、それが魅力で人氣が出るのです。――何となく氣がかりでほつておけないやうな氣持を起こさせるが、そんな妙な氣持を起こさせる役者は、私は吉右衛門で終りかと思つてゐたら、ひよつくり海老藏なるものが現はれて來た。

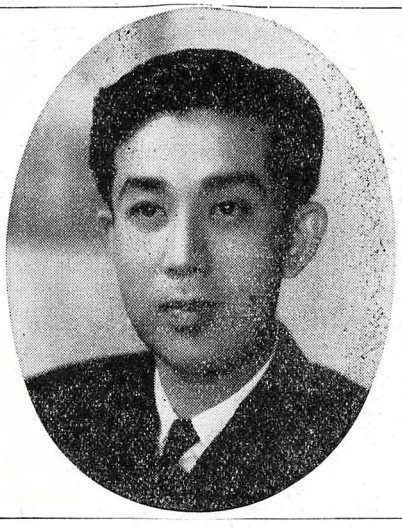
幸四郎　（微笑しながら）そんな所がないぢやないですな。うちの堀も海老藏が一番ひいきで、あれの事といふと眞劍になります。それを松緑はよく知つてゐて、堀に兄貴ばかりをひいきにするといつて笑つてゐますよ。あ、それから本當はここへ海老藏、染五郎、松緑、友右衛門も呼びよせて一緒に會つて頂きたかつたのですが。

三宅　それは恐縮です。いやどうもいろ〳〵有難う存じました。全く何から何迄仕合せな方ですね。貴方、海老藏、染五郎、松緑、それに友右衛門を入れて「仕合五人男」ですよ。私はこの所災難つづきですから、それならその五人男にかこまれて厄でも拂つて頂けばよかつたかも知れませんよ。だが、私は毎日新聞の劇評で呼ばれて、この所三ケ月上京しましたが、まだ關西住ひの悲しさで、そんなわけにもゆきますまい。でも、皆さんは益々仕合せになつて頂きたい。……

（二三年十二月）

後　記

この對談の二ケ月後、幸四郎は急逝した。この夜の話が私として最後のお名ごりとなつたので、この書の卷頭に出して追悼の意を表しておく。



嵐雛助

三宅　今日はお暑い所を御苦勞樣でした。某所で私に俳優の對談をしてくれとの依頼でしたので、私は熟考の上、先づ第一に貴方に白羽の矢をたてました。といふのは失禮ながら全くの大部屋出身で、歌舞伎界に亡靈のやうにつきまとつてゐる門閥がなくて、腕と實力とのみで今日の上方歌舞伎の女形の、人氣者となつた貴方に、私は興味があつたからです。それにさうした本當の新人の進出は、これからの歌舞伎界には必要ですし、民主主義の時代思潮からいつても、才分と技能とがある限り、どんな下廻りの役者でも、これからの時代は貴方のやうに引つぱり出さなくては嘘です。

雛助　どうも有難う存じます。私の方からお伺ひしなければならないのに、南座の支配人の原さんにも申しましたが、私は感激致して居ります。……

三宅　いや、それに私は前年「中央公論」の依

賴で、こんな風にして故羽左衛門から若手や、新派の首腦、菊五郎とも對談し、約一年續けて、それを著書にしてゐますが、未知數の新人の貴方に打つかるのが一つの樂しみで、私はこれをこゝで最初にやつてみたのです。またそれは既に書いたが、貴方を吉右衛門門下の中村蝶太郎とは夢にも知らなかつた。一昨年から京都へ來てゐて少しも知らず、去年二月に南座を見て初めてそれと知つたのです。何しろ嵐雛助とは故市川中車が崇拜してゐた上方の名優でせう。そのいい名を女形の貴方がついでゐるなんて事は、女學生がすぐと映畫のスターになつたのより、もつと考へられない話だからです。尤も、私は貴方は知るまいが君の蝶太郎の無名時代、昭和初期に吉右衛門が本郷座で、今の簑助、もしほ中心に若手の稽古芝居をした時、小さい貴方の腰元が目について、當時の「東日」の劇評でその蝶太郎を推賞した事があつた。……

雛助　いえ、先生、私はそれをよく覺えて居ります。私の十三か十四の時、私よりも旦那（註、雛助は吉右衛門の事を旦那と呼ぶ、師匠といはず旦那といふのは奥床しい感じ）がその劇評をごらんになつて、お前をほめてゐて下さるが、これは切りぬいておくといいといはれたのを覺えて居りまして。……

三宅　さうですか。その緣で私は猶更君と分ると會ひたくなつた。その癖、君はもしほと東寶劇團へ加入してゐたが、その數年間は丸で目につかなかつたが。

雛助　え。「素袍落」の姫御寮に出た位なものでした。

三宅　さうでしたか。所で、役者に年なしといはれてゐるのに、甚だ不粹な身もとしらべを始めますが、私の好きな俳句に「松過ぎて戸籍しらべの來りけり」といふのがあるが、まあそんな無風流をやりますよ。――一體、君は本當の素人出身でしたね？

雛助　え、その通りで父は本郷春木町に住んで

製本商をして居りました。全くの堅氣ですが近くに本郷座があつた所から、私は子供の時からよく本郷座へつれられて行つて居りましたが、これは記憶がないのに、私はその時分喜多村さんの紋のついた刷毛をもらつてゐました。それで考へるとごく小さい時本郷座での喜多村さんの新派の芝居へ、何か一寸した子役で出されたのではないかと思つて居ります。……その中、私の七歳の時の二月に、吉右衛門さんの番頭に鈴木傳兵衛といふ方がありまして。

三宅　知つてゐますよ、亡くなつたが赤ら顔の太つたいい人でしたが。

雛助　さうです。その傳兵衛さんを私のうちで知つて居りまして、それで吉右衛門さんのお弟子にして頂く事になつてお宅へ伺ひ、中村蝶太郎として頂いたのでした。

三宅　その時代はもう今の細君のお千代さんは見えてゐましたかね。何しろ美貌でいい氣質で淺草切つての名妓……

雛助　え、え、勿論お見えになつてゐて可愛がつて頂きました。

三宅　それで君は素人でも歌舞伎へ入つたのだから、藝事は習つてゐたでせうね。

雛助　近所にぽん太さんがゐられたので、そこで踊りのお稽古をし、その旦那は指が不自由な方でしたが、鳴り物のお稽古もしました。

三宅　これは驚いた。私はあのぽん太のうちをよく知つてゐる。本郷三丁目の裏通りで、よく私はあれが昔の新橋の名妓のぽん太と聞かされ、顔形迄も覺えてゐますし、私の知る帝大の或る物好きの學生は、やはりぽん太の所へ、踊りの稽古に通つてゐましたよ。

雛助　へえ。さうですか。それで時々お祭りに私は出て踊つたりしてゐましたが、旦那の所へ參りますと同時に、女の師匠ではいけないからといつて、銀座の花柳の家元の壽輔さんの所へ上る事に致しました。

三宅　踊りでも義太夫でも本式にやるには男の

師匠ですよ。その時分吉右衞門氏は無論市村座の筈だが。

雛助　え、左樣で。それで六代目さんが「御所の五郎藏」の通しを出された芝居に、おいらんについて出るかむろの役が初舞臺でございました。

三宅　番附や控へをなくしたのではつきりいへぬが、それは菊次郎が死んだ翌年の興行で、まだ大田村さんがゐられた全盛時代の終り頃……

雛助　さうです。その通りで。

三宅　あの時代だ。子役は大勢ゐたでせう。

雛助　え、それは大勢で、子役の名札がづらりと二十ばかり並んでゐました。私の名札のすぐ上が今は踊りの師匠ですが、當時のしげる、琴次郎さんで、よく遊んで頂きました。その中、その頃の米吉さんの今のもしほさんを、坊つちやん、坊つちやんと呼んで、これもよく可愛がつて頂きました。それに坊つちやんのお宅は市川の松濤園でしたが、そこへ一緒に行つて子役ばかり集つて、あの時分は皆一生懸命で子供でも立廻りの稽古をやりました。六代目さんがあいふ方ですから見樣見眞似でございませうね。それに舞臺の芝居を見て來て、その眞似やせりふ廻しをそれぞれやるのでした。

三宅　歌舞伎復興、市村座全盛時代だからね。それで君のやうな子役でも門閥のない者は大變だつたでせうね。

雛助　え。身分がきまつてゐて、我々は子供でも目上の方に例へ樂屋や舞臺裏で會つても、決して近よつたり、歩いて行つてすれちがつたりしてはいけなかつたのです。ねえ、先生あの時分は今とちがつて禮儀作法が嚴重でしたね。—それで忘れもしませんが、三階でしたか、廣い所でしたが向うから六代目さんが見えたので、八つか九つの子供心にもお通りになつてしまふ迄は、自分はぢつと立つて待つてゐなければならないと思つて立つてゐたのですが、その時、實は私は小便に立たうとしてゐた途中なの

に、ぢつとお通りを我慢して立つてゐたものですから、どつとそこへそそうをして大騒ぎをした事がありました。子供ですから辛抱し切れなかつたのですね。

三宅　成程。

雛助　そんな風でしたから、いつも芝居への行き歸りは母がついて來て、送り迎へをしてくれたのでした。それで座へ行くと身についた黒衣(くろこ)を仕立ててもらつて、それを着て舞臺の上手や下手のあの幕がつるしてあの所へ座つて、後見でなくて舞臺を見せてもらつてゐるのが仕事でした。尤も、廻り舞臺の時や何か「地がすり」(舞臺にしいてある布(きれ))をたたんでのけるのも、この時代は下廻りから一寸上の身分の「相中(あいうち)」の人がやつた仕事で、子役はそれも手出しは出來ませんでした。

三宅　よかれ悪しかれ市村座は本式の歌舞伎の道場だつたからね。しかし、中々大變でしたな。

雛助　いいえ。それでも私は皆さんに可愛がられたので何とも思ひませんでした。それより私には今思つても苦しかつたのは學校でした。何しろ稽古事と芝居で夜がおそくて、朝九時迄に小學校へ行くのが大變でした。それに私は學校より踊りが好きで、學校は休んでばかりゐて、一年に二十日位より行かなかつたのです。それでタマに學校へ行つて本をあけて見ると、隣のお友だちはぐんぐん進んで先きの方を讀んでゐるでせう。本當に嫌でしたが、これは義務教育ですから仕方なく通つて、お情けでいつもビリで及第させて頂いたのでしたが、この方がつらかつたのです。

三宅　けれども、それは今日君のあるゆえんで、學校より踊りが好きだつたのが取柄でしたよ。君が學校第一の秀才でも博士論文を書く人ぢやなかつたのだから。

雛助　それでこの時分面白い事があるのですよ。先生。あの今の松綠さんの豐さんは仲よく

して頂いた方でしたが、勿論私より年上で私が通つてゐる小學校のつい先きの、京華中學へその頃上つてお出でした。

三宅　本郷の京華だな。猿之助君もあの中學だが。

雛助　それで豐さんが深切にいつも早目に私の學校の前に立つてゐて下すつて、九時よりおくれぬやう時計を見て待つてゐて、早く行けといつてはげまして下さいましたのを嬉しく覺えて居ります。

三宅　君は今と同樣、どうして人に可愛がられる人氣者だな。

雛助　可愛がられるといふと、私は先々代の福助さん（五代目福助）にも大變可愛がられました。と申しますのは私は役者になつた子供心にも、歌右衛門さんの女形が大好きで、歌右衛門さんの淀君の羽子板を持つてゐて、どうかこんな淀君のやうな役がやりたいと思つてゐました。それを通り越してその時分に淺草の吾妻座へ、市村さんのお弟子の市之丞さんが出てゐましたが、この人が歌右衛門さんに似てゐたので、市之丞さんも好きだつた位です。――その中、先生もよく御存じの旦那が市村座を脱退して、新富座へ行かれたので、私もその方へ參つて初めて歌右衛門さんにもお近づきが出來て、代々木のお宅へ出入りさせて頂きました。丁度その頃福助さんの舞踊の會の「羽衣會」が出來たので。……

三宅　私もその頃新富座へ出入りするやうになつて、福助にも稽古場位で落ち合つてゐたので、私はその羽衣會に會員として正式に會費を出して入會した。するとあの氣位の高い無口の福助が、稽古場でわざわざ向ふから丁寧に頭を下げて禮をいつた事があつた。……

雛助　その羽衣會ですが、第一回の帝劇の時にも子役で出して頂き、震災直後、麻布の南座で、福助さんの「鏡獅子」が出た時、今の芝翫さんの兒太郎時代でしたが、その兒太郎さんに私と

であの胡蝶をさせて頂きました。

三宅　大變な役がついたものだな。

雛助　また私は帝劇の梅幸さんの「お夏狂亂」の里の子にも出して頂きました。

三宅　藝は身を助けるで、踊りを早くからやつてゐた一得ですね。尤も、顏が綺麗なのは本郷座の蝶太郎時代でもとびぬけてゐたから。しかし、そんなに子供時代にいい役がついてゐながら、本郷座以外私は君の役らしい役を見てゐないが。……

雛助　あ、それは年頃の聲變りの時代で、殆ど役はつきませず、休んだと同樣でしたが、踊りの方を一生懸命やつて居りましたので。

三宅　それから「東寶劇團」へ入る順序になりますね。あれはいつでしたか？

雛助　それがどうもよく覺えて居りませんが、もしほさんについて神戸へ巡業に來てゐた時で、昭和九年頃でしたか。神戸の宿屋でもしほさんが私に、東寶へ行くが一緒に來ないかと、そつといはれたのです。それも外にお弟子があるのに私を誘つて下すつたので、大變嬉しく思ひまして東京へ歸ると、すぐ旦那の牛込若宮町のお宅へタクシーでかけつけました。そしてタクシーを待たせておいて、こはごは旦那にお目にかかつて「おひまを頂きたい」と、一と口いつたきり逃げ出してタクシーにとび乘りました。びくびくもので伺つたので顏色が變つてゐたので、これだけでも旦那にはよく意味が通じたのでした。

三宅　だが、東寶ではあの通りで、もしほさへ散々の體だから、君なんか我々毎月芝居を見てゐても、存在が分らなかつた。……

雛助　それであの時分は殆ど休み同樣でしたから、昔の先輩のしげるさん琴次郎さんの方で踊りを稽古してゐたので。……

三宅　それから東寶を出て大阪へ來たのでしたね。その時代は私は全く知りませんから、東京のファンのためにも一席辯じて頂きたい。——

雛助　え。（持つてゐたガーゼのタオルで額の汗をふく。その時に自づと肩の線が女のやうになるのも女形らしい）それでたうとう東寶劇團が解散になつて、もしほさんと大阪へ參り、こちらの若手歌舞伎の一座へ御一緒に出て居りました。どうも年月をよく覺えてゐませんが、鴈治郎さんの扇雀時代に「朝顔日記」の宇治の螢狩りが出た時、私は朝顔について出る腰元をしてゐましたのを、白井會長のお目にとまつたのでした。そこでもしほさんが東京へお歸りの時、私だけこちらへ殘るやうにとの話が出て、私は一人で殘つてしまつたわけでございます。その頃ごく初心の若手中心で「道場の芝居」があいて、荒太郎さんの「太十の光秀」で、私が操をしたのが役らしい役のついた始まりでした。また會長のお宅で「技藝道場」が開かれて、我々は義太夫や踊りの稽古を一心にやつてゐました。

三宅　その話は東京で私は聞いてゐて、後進養成のために何よりの催しと思つてゐたのでしたが。嵐雛助なるたいした名前はいつ襲名したのです。

雛助　昭和十八年でした。歌舞伎座で「忠臣藏」が出た時、「盛衰記」の梅ケ枝を舞踊劇にしたものをやつて襲名したのでございます。

三宅　何か口上でもつけて？

雛助　いいえ。口上なしでしたが、これはまだしもとして、もう一と役の方が大變で、「四段目」の顔世をさせられたのですが、相手の判官が梅玉さんでせう。私は顔世の大役に手も足も出ぬ所へ、舞臺の籠の中には自分の旦那樣の判官が梅玉さんで、腹を切つては入つてゐられると思ふと、本當にぶるぶるふるへました。何が何だか分らずに、疊の目がぼうつとかすんでしまつたり、自分の役の居所が分らなくなつてしまつたり。……

三宅　さうでせうね。前進座の國太郎君は君と似て稀な出世をした女形だが、いきなり大役をした時を思ひ返してそれに似た話をした事があ

りましたよ。――だが、君の場合はそれ以上だし、「演劇界」に君が「鏡獅子」と「吃又のおとく」だかをやらされた時の、大役の話がとてもうまく書いて出てゐたが、あれは誰が書いたのでしたか？

雛助　利倉さんです。全くあの時も困つたので「鏡獅子」の大役を二日足らずの稽古でやらされたのですもの。――おとくは又一郎さんの時に急にやる事になつて、稽古のひまもないので本當に舞臺で心臓がはち切れるかと思ひました。……

三宅　さうでせうね。でも、どうにか切りぬけて映畫の主役に迄買はれたのだから、東西を通じての出世人だね。それだけにつらい苦しい身分ちがひの話がある筈ですが、一つそれをいつてくれませんか？

雛助　（ぢつとうつむいてゐたが）いえ、先生それだけは聞かずにゐて下さいませんか。それは私に家柄がないといはれて、つらい思ひや苦しい事はありますが、それをこゝでいへば私は大阪にゐられなくなります。私もそんな事で一層大阪をすてて、東京へ逃げて歸らうかと思つた事がないぢやありません。しかし、その時いつもふいと目の前に會長のお姿が浮んでくるのです。――私が家柄もないのにこんなにして頂いたのはこの方のおかげだと、いつも思つてゐるからですが、目をつぶると會長さんの俤が目の底に寫つてくるので、いや、この方に對してどんな事があつても辛抱しなくては……と思ひます。

三宅　いい話ですね。それで？

雛助　（一寸ためらつてゐたが）ねえ先生。私この間御承知の映畫をとりましたが、あの方面はいいですね。實にざつくばらんで、上と下の區別が殆どなくて、ライトマンの人でも君その顏のこしらへはまづいよといつた調子で、お互に書生流でどんどん話が分つていきますが、我々方面もあゝならないものでせうかね。

雛助の「お里」

三宅　同感。さういふ時代を作りたいから、君のやうな人と私はまつ先きに對談をしたのだ。――だが、それと別問題で私は君の新作の腕は千姫でも十分分つて認めるが、古典はよくないものもあるね。「帶屋のお絹」はよかつたが、「河庄屋の小春」や「雪姫」はひどかつたよ。

雛助　さうですか。雪姫は急にやる事になつたので、芦燕さんが名古屋でやつてゐられたのを、人に頼んで見て來てもらつて寫してやつたので。……

三宅　さうでせう。あれはひどかつた。衣裳も間違つてゐると思つたら、研究不足のためだね。だがお絹はよかつたが。

雛助　あれは延若さんに教へて頂きました。

三宅　そうれごらん。いいと思つたら延若が師匠番ぢや當然だ。何といつても延若と梅玉は本當の事を知つてゐる方だから。

雛助　河内屋さんあたりだと舞臺へ出てゐても、茶椀なら茶椀を持つて行く所でも、河内屋さんの目つきだけで、それが自づと持つて行く順序が分るから樂です。えらいものです。さういふと旦那もえらいもので――いや、少し前に會長の斡旋で、一時東寶の事件で出入りをとめられてゐたのを、お詫びをして頂いて去年の十一月に南座へ見えた時も御挨拶に伺ひましたが、その時えらい事をおつしやつた。お前は上方の女形なのに、まだ東京のなまりがぬけないね。女形だから大阪辯にならなくちやあ、といはれたのですが、私は本當にいい事をいつて頂

いたと感じ入つてしまひました。

三宅　流石に吉右衛門だね。それは私もさう思つてゐたが、君の小春のよくないのも上方の遊女でないからだつた。兎に角苦しみはあつてもこゝ迄のして來たのは、歌舞伎の封建性と門閥打破のために喜んでいいのだ。それだけに勉強第一だし、君は勝氣の人らしいが、その性分の人は特に人の苦言を聞いて新作がうまいからといつて、古典を馬鹿にしては困るよ。よく先輩の話を聞いて、芝居に關する藝談や、いい劇評位は讀むやうにしてもらいたいね。國太郎や花柳章太郎は出世人だが、大變な勉強家で讀書家ですよ。――と、だい分小言幸兵衛になつて失禮。終りを女形らしい話にしたいが、君など白粉が大變でせう？

雛助　え、實に大變です。戰爭中白粉がなくなりさうなので、東京の姉も心配してくれ、私も力一杯買ひ集めて、サーワの固形をつづら一杯一萬個程ためて、三、四年は大丈夫と思つてゐましたが、戰災でゼロになりました。しかし、その後また買ひ集めて、今は相當貯へが出來ましたが、私は色が黑くて、人樣の三倍位白粉がいるので月に固形白粉が百位入ります。でも、白粉だけは頂くのを辭退して居ります。人樣から頂いてもすぐなくなりますし、私は姉一人で兩親にも死別し、身一つですから、白粉ぐらゐには困りませんから。――

三宅　あ、さうですか。君はまだ獨身ですか。それは羨ましい。でも、白粉をもらふのは辭退しても、細君をもらふのは辭退しないでせう。將來の良緣をお祈りしてゐます。

（二二年七月）

豐竹古靱太夫改め

豐竹山城の少掾

——文樂は亡びるか——

記者　敗戰の結果、わが國の文化も非常な變革を來すと思ふのですが、殊に歌舞伎、文樂といふやうな所謂、古典はどうなるか、從來でも屢屢、これらの衰亡が唱へられながらも、最近の傾向では却て人氣を得てゐる有樣です。一體これはどうしたのか、こんなことから話を始めて頂きます。

三宅　さうですね。先程からお話が出てゐましたが、文樂だけでなしに歌舞伎もこの頃は復活した感じで大變な大入りをとつてゐる。文樂が大入りだといふ事は、一つには山城さん（古靱）の人氣の故もありませうが——昨年九月に文樂が東京へ行つて、私もついて行つて、拙い講演を度々やつてまゐりましたが、もう、大變な熱狂ぶりで、大入りです。一體これが文樂の本當の姿か、また一時的なものか、同時に將來どうなるものか、一部の方面からいはれるやうに衰微してしまふものか、これを一つ話題にしたい

と思ひます。

山城　東京をはじめ名古屋の大入りは、第一に天覽といふ事がありましたんで、それが皆さんのお頭にありますし、それに、東京も名古屋も四ケ年振りですからね。長い間參りませんでしたのが、原因していたのではないか――私は皆さんにいろ〳〵訊かれます度に、かう申して居ります。自分と致しましても、第一藝道が上達しての滿員大入りですと、どれほど嬉しいか判りませんが――そのほかはどうも――まあ私が上に立つてゐる時代になつてゐるのですが――代表といふ事で度々申しあげたのですけれども何です、文樂が衰微するといはれたのは、もう何百遍だか判りません。然しいまだにやつぱり續いて來ています。

三宅　さうですね。

山城　私が東京から十二の時に參りましてその間に文樂から四五邊はぬけておりますが、もう丁度――六十年間ほどの事になります。明治二十二年に來ました時から、平野町の御靈の文樂ですがこの跡には、昔の人形芝居といふものがあつたんだぞと云はれるやうになるだらうと云はれたものです。それはまだ越路太夫（後の攝津大掾）の人氣隆々たる時代なんですがね。あんないい聲の名人や、大きな聲の前の呂太夫さんがゐても、つぶれるといふ事を申してゐたのです。六十年――その頃の方がみんな亡くなつて今は私なんかがやつてをる――此處までは續いて參つてゐますが――その間にも入りのない事が間々ありましたし、古い古いといふ事は云はれて來ましたけれども、どうも自分としても、そんなにばたばたと、古いものでも潰れないと思ひますが。併し次の時代の者として、人形遣ひの方は、子供が七八人おります。まあ、太夫も三、四人學校出の人がなつてゐるのですが、三味線ひき、これが成り手がないので御座ゐます。さう云ふものは、皆よつてどうにかして繼續してやるやうに、子供でもどんどん入れてと

いふ事ももくろんでゐますくらゐで御座ゐますが、三味線ひきだけはどうも成り手がないのです。まあ昔は學校へ行かなくても、それだけ上達すればよかつたんですけれども、今では人形遣ひの子供も學校へ行つて歸つてから、文樂のけい古をするといふ事になつております。まあ、そんなんで、御承知の通り、人形遣ひなり、三味線ひきなりは中年からはなれませんのです。子供の時からです。太夫は中年からやれる商賣ですが。この成り手がないといふと、自然消滅で、途絶えることがありはしないかと、それが心配なんです。まあそんなことで、もうもう、昔から榮枯盛衰はいろ〳〵ありましたから——けれども發展策といふ事は難しいですね。新作をやつたからといつて、今の皆さんに氣に入るやうなものをこしらへることは出來ない。これも歌舞伎なり、新劇なりのやうな譯にはまゐりませんのです。あゝいつたものをやらうとすると、この前みたいに乃木さんの淨るりをこしらへて、洋服すがたの人形など、見ていられませんからね。そこで元の古い形式に戻つてやるといふやうな事で……

三宅　だから、そんなものは駄目ですよ。丁度山城さんが仰言つたやうな事を、吉田文五郎が申したことがあります。あの人はたしか人形遣ひになつたのは明治十年頃ですかな。吉田文五郎さんは本年たしか七十九歳で、それでもう七十年間も堀江座と文樂にをられる方ですけれども、矢張り駄目だ駄目だ、といひながら此處まで來たといふ事を、いま山城さんが仰言つたやうに私にいつた事がありますが、その意見と偶然一致してゐますが、そこに文樂の値打があるとも云はれるし、また傳統といふものの値打もそこにある譯です。さうかと云つて無論、なんですよ——日本がかういふ國情になつたんですから、文樂も全然今までの考へで行つていたんぢやあ大變な間違ひがありますが、文樂なども實際將來どうなつて行くか、非常に不安です。

私は文樂が續くとか續かないとか云ふことに對しては分りません。はつきり云ふと分りません。

山城　私も、どうも、今から心配してゐるのです。

三宅　只まあ、將來の文樂といふものは判りませんけれども、若し文樂をこの後多少とも生きのびさせようと思へば、二つの途があると思ふんです。――

その一つはですね。學問として人形淨るりを研究する事です。文樂を教材としての仕事です。學問の文樂なら、私はこれとても何百年の後まで續くとは思ひませんけれども、比較的長く、私は殘るのではないかと思ひます。それは芝居にしたところで、歌舞伎は人形淨るりから出たと云つてもいいくらゐ關係が深いのですから、若し今の芝居が殘る以上は文樂も殘りませう。そして、文樂より日本の芝居の方が長く殘るのは事實でせうから――まあ、文樂の太夫諸氏から見れば役者は、いろ〳〵社會的な地盤を持つてゐるし、人形遣ひや三味線ひきよりは有意義な勉强もやつてゐますから、おそらく歌舞伎芝居の方が後に殘ると思ひます。その點興行物としては文樂は歌舞伎より存續困難ですが、併し、人形淨るりの學問的存在だけは幾らか長く殘ると思ふのです。ましてこの日本が文化國家として進む以上は、さつきも云はれたやうに映畫や新劇はあるでせうけれども、文樂を古典として、學問として古典の研究といふ事は當分は續くと思ひます。古典の研究といふ事は全然絶滅するといふ事はないと思ひます。

もう一つの途はですね、これは山城さんを前にして云ひ難い事なんですが、文樂が謙遜で、本當につゝましやかな方法でもつてやつて行く、本當に良心的な、研究的な藝能として殘すならあるひは殘るのではないかと思ひます。

これを一つ別の言葉で云ふと、文樂のさういふ――まあ假にその時代に櫓下になる太夫さへ

も、眞の最低生活に甘んじて、社會的地位も物質的地位も何も要らないといふくらゐに、本當に純な氣持をもつて、文樂の人形なり淨るりだけを一生懸命やつてゆくといふ淸教徒的な氣持でもつて文樂をやつて行くとすれば、今より小規模なものになつても文樂は存續するのではないかと思ひます。これは我々から云ふと非常に云ひ難い事なんで、最低生活の暮しをしろといふ事なんですから、甚だ私達のエゴイズムを主張するやうな事になるのですが、かういふ風に小規模で本當の研究團體として進むなら、あるひは殘るのではないかと思ひます。今のところこの學問的な存在としてなら長い將來までは殘らないとしても當分は殘ると思ひます。同樣に文樂の人形淨るりをピューリタン、淸教徒的なものにしろといふのですから無理かも知れません。併しさういふ途をゆけば或ひはまた小規模なうちにも殘るのではないかといふことを、今のところ愚考してゐます。文樂のためには實に氣の毒な御注文ですが。文樂を學問所か、修道院かにしようとするのですからね。

記者　お說では、今が最盛期だといふやうに感じられますが、さういふ事でせうか。

三宅　結論づけて云へばさうも云へると思ひます。極端に云へば、もう、山城さんがゐてくれるんで、この人氣が出、それから東京へ行つても豫想以上の好成績をあげたんで、それは、私は山城さんを前において、云ひ難いのですが、山城さんがゐるからこの好況になつてゐると思ひます。もう一つは當局の理解による出し物の自由上演のおかげです。でも文樂そのものの將來は無論悲觀なんです。この文樂をどうするかと云へば學問的存在價値を認めていつてそのやうに勉强することです。今の文樂の好況は山城さん乃至文五郎さんがゐる間だけで、後は不安と思ひます。これは甚だ殘念です。

記者　何とか新しい時代について、新しい內容を盛りこんでゆけないものですか知らん。

三宅　これからではおそらく日本人が、餘程、考へ方が違つて來ると思ひます。世界の文化人の市場では、日本の少數の才能者を除いた以外、日本人といふものは低い地位におかれざるを得ないと思ひます。一等國といふのは昔の夢で、三等國、四等國になると思ひます。そして文化的にも當分どん底生活をしなければならないと思ひます。さういふ意味で傳統藝術の文樂といふものは日本人の間でも、つまらないと實質以下に評價をされる時が來るのではないかと思ひます。

山城　それに興行の時間の制限があります。これも一つの原因です。一回を三時間半くらゐにやる。三時間半くらゐしかやれないといふことになりましたから……昔は御承知の通り歌舞伎ではやらないところまでも、文樂へゆけば聞ける見えるといふ事が味噌だつたのですからね。今はそれがやれないのです。ですからよく分つたものを並べて、道行なんかで誤魔化してゐるのです。

「堀川」だとか「河庄」「太十」「寺子屋」ばつかりやるのです。ですからお客がまたかまたかといふやうな事になるのです。「太十」にしても、〃殘るつぼみの花一つ〃などといふところは今まで聞いておられるお客には分りますが、初めてきいたり見たりするお方には、そこの筋の分る「端場」を時間がないといつてカットするから、何をやつてるのか、何が何だか判りません。ですから、常時やつてゐるものばかりで――まあ我々耳がこえているものは、あれだなと判りますが、初めてきいた方には何が何だか判らんのです。

記者　さういふ意味で大衆性がないといふ事も云へますね。これを大衆化する方法はないでせうか。

三宅　こゝで一寸さきの話で說明が要りますが、山城さんが三味線ひきに成り手がないと云はれましたが、この三味線ひきに成り手がない

といふ事には註釋が要る譯です。今三味線ひきが三味線一丁を買うといふことは大變な金が要りますし、皮をはりかへる事だけでも大變で、それで三味線ひきになる者がなくなつたのです。

山城　そりやあ、大變なんです。犬の皮を張つても七百圓ぐらゐ。猫の皮を張ると千圓以上もかゝりますから……

三宅　三味線ひきは元來薄給でありながら、三味線を張りかへたりすると七百圓、八百圓、千圓と要ります。これはみんな自前なんですから、三味線ひきに成り手がないといふのも尤もです。

記者　新作をつくるとか、あるひは大衆化するといふ方法はないのですか。

三宅　その問題はよく出ますね。それは何とかしなければいけませんね。新しいいいものと、いい古典の復活を考へたい。

山城　綱太夫などもしよつ中そんな事を申しております。あれは頭がいいのですが。あれならどんどんあてがつて行けばやります。自分の方は頭も古いし、さういつたものは、やりたくないのです。

三宅　それは、貴方は古典の名手として一生を終らせたい。

山城　綱太夫は新しいものと、古いものとを交ぜてやつて見たいといふ事をしよつ中云つてゐます。時々新作は出來ますが、どうも尻切れとんぼで……淨るりはあのマクラで、出て來る人物が、どんな人で、どういふ商賣をしてゐるかといふやうな事が出てゐますが、新作にはさういふやうなものはないのです。この女中がいつ出て來たのか、また何時入つたのか分りませんで、煙になつてしまふやうなものが出來るのです。併し、今新しく書いて下すつて、順序のたつたものですと、やる人間が御座ゐますよ。私「鳥邊山心中」をやれと云はれましたが……

三宅　いや、新作としては「鳥邊山心中」など

が出るのがいけないのですよ。もつと上のものでなければ、もつと上のもので、名作と云はれるものからとらなければならないのです。「鳥邊山心中」は岡本綺堂のうちの名作かもしれないが、しかし廣い意味の名作ではありませんね。具體的な例が云へないまでも、名作と誰でも考へられるものから新作をやる事が一番と考へます。それで私は度々云つてゐる事で、出來れば谷崎さんの作品のやうなものからとる事がいいと思ひます。あの〝蓼喰ふ虫〟以後の谷崎氏の作品は名作といつてもいいものと思ひます。新しい文學であつて、また古典文學といつてもいいのですから、あゝいふものからとる事がいいですね。この前、谷崎さんと對談をした時にもその事を率直に申しましたら、谷崎さんは仲々いい意見をおつしやいました。自分のものをやれとはおつしやいませんけれども、私の意見に贊成して下すつて、文樂にいい新作をやらしたいといはれて、新作に對して谷崎さんは新しい考へをもつておられます。それは文樂に限つて新作は作者がいろ〳〵主張して、かうしてくれ、あゝしてぐれといつて註文をつけるのはいけない。作者は骨組だけを作つて、あとは節つけをする三味線ひきなり、太夫なりに無條件で渡してしまふ。そして好きなやうにやつてくれといつて。これはもう、私は文樂の大きな光明だと思ふのです。文樂の新作に限つては作者が立入るな。全部太夫と三味線ひきに任せて、むしろ、云ひ難いところは直していいといはれて、大體の作品の品格、內容を傷つけないさういふ新作をやらしたいといはれたのです。これは本當に新しい說で、文樂のためにこんな意見が出たといふ事は、文樂の光明です。さういふ風に今迄の新作といふ固苦しい、窮屈なものでなく、意譯あるひは行譯といつた形で新作をやつたらどうかといふのは谷崎さんの名論です。こんな事は今まで誰も云つてゐない事です。新作などやる場合、この際松竹などは實際

十分にその事を考へて頂きたいと思ひます。

記者　新作と申しますと現代的なものになるのですか。

三宅　それは作によつていろ〳〵です。新作だから必ずしも現代的なもの、新しいものとは限りません。

記者　洋服だとどうも合はないといふ事は……

山城　矢張り合ひませんね。何故ですか。併しまあ、今やつているものでも、初めは新作であつたんですから同じ事なんですが、どうも……古くなつて來ると、自然に調和するのでせうが。

記者　それ以外に、何か古いものでもやるといふ事は出來ないのですか。

山城　丸本なんぞにしても、昔のものはいくらあるか分りませんのです。ですから古いものの中から引張り出してやればいい譯ですが、兎に角一つのものは、初の方からずつとおしまひまでやらないと分らないのですが結局時間のために技や葉を取つて、效果が上るわけはありません。「壺坂」みたいに、一時間ぐらゐでまとまつてゐて分るものはないですよ。古いもので……。

記者　文樂は大衆化しなくても、一部分の人々が、それを好きで見て保護してゆくといふ事でいいのではないかといふ考へ方もありませんですか。

三宅　先に私が云つたやうに、文樂が、今より小規模で、良心的な、宗教家みたいな觀念で、文樂の人形淨るりをやつてゆけば存續出來るといふのはその意味なんです。或る意味に於ては、文樂を大衆化するといふ事は出來ないし、いいものが出來ませんから、さういつたものは排斥して、宗教家みたいな觀念で、それに殉じる選ばれた觀客層のみを獲得してゆけば、意外に續くのではないかと思ひます。山城さんや文五郎さんが云はれるやうに、亡ぶと云はれて六十年間も續いたといふ事も、結局この見方に近

いのではないかと思ひます。この七十年間やつて來られた間に、亡ぶ亡ぶと云はれながら今日まで來られたのは、その時の名人と云はれる人が本當に良心的な仕事をしたから續いたとも云へます。

山城　攝津大塚に「中將姫」だとか、「先代の御殿」だとか得意なものがありますが、これは三年か四年の間を明けて、それで繰返へして出てゐた。それで今度は大掾さんの中將姫かといふ事でお客がどかつと出て來ますが、今は「先代荻」にしても松太夫と伊達太夫、呂太夫や綱太夫がある。また私がやるといふやうな風でして、一つのものを、うけさへすれば何度でも出して、それでいいといふが、お客がまたかまたかといふ事になります。私の師匠は他の人がやりましたのは、やりませんし、またやつても昔は四年目、五年目、古くなると七年目ぐらゐにしかやりませんでした。ですからあの人のアレが出る、あれは十八番だからといふのでお客樣が來る。今はさういふ事もありませんからいけないのではないかと思ひますね。

三宅　つまり同じものをやりすぎるのが不利です。

山城　何でも、人の好くものなら、誰がやつても構はないといふ事で……

三宅　山城さんがおつしやつた意味に近いもう一つの大きな不安がこの頃は出て來たのです。どういふ事かといひますと、終戰後とちがひ、この五月からなまじ自肅の枠が外されてしまつたのがいけないのです。自肅の枠が外されて、かへつて興行師は珍しいものをやらさないのです。そして又「寺子屋」や「合邦」ばかりやらされるやうになつたのです。これが自肅時代ですと範圍がせばめられて、うけるとかうけないとかに拘らず、仕方なしに何か探してやつたのですが、さういふ枠がなくなつたから「寺子屋」や「合邦」の世の中になつた。これはいいかわるいか大いに疑問があるのです。

山城　千本櫻の「渡海屋」なんかもやらうかといひますと、いけないといふのです。しかも人の好くものと嫌いなものをつつこめてやつたらどうかと思ひますが、世間で受けるあまいものばかり並べてゆく形になつてゐます。

三宅　これは不利益ですね。

山城　それに時間問題で、續きものをだすといふ事が出來ませんですね。けれども東京で「忠臣藏」が出ましたから、もう文樂でもやりますよ。そして私に、「九段目」といつて來てゐますよ。けれど、私はやりません。「九段目」はやらない事にしてゐるので、今更やりたくないですよ。

三宅　貴方がね、「九段目」をやらないといふ事は非常に面白いと思ふのです。貴方がやらなくても、私はちつとも殘念ではないですよ。「忠臣藏」では貴方には「四段目」といふ天下一品の至藝がありますからね。貴方に不向きな九段目を必ずしもやらなければならないといふ事はないですよ。どの櫓下も九段目を語つたのに、この櫓下だけは九段目を語らなかつたといふのが（笑聲）非常に面白い。傳統を破つて「四段目」や外の場は語るが、九段目を語らぬといふのは一つの名人氣質と思ひます。

記者　先生、此處で中堅層の人へ期待だとか希望とか、また二三人、人形の方と太夫の方の期待出來る人をあげて下さい。

三宅　先程、私が云つた事は悲觀論ですが、これは私が九月東京へ文樂の講演にゆくまでさう信じ切つてゐたのです。東京へ行く汽車の中でもさう思つて、さういふ講演の原稿を汽車の中で作つたくらゐです。ところが、東京でいろいろな現象を見て、また東京劇場なり、觀衆諸氏の態度を見て、ちよつと光明を感じてゐるのです。といふのは日本は敗戰國で、日本の藝能といふものを過少評價する說があつても、うける世の中にたつてゐますから、もう、かういふ事をいへば私は反動派みたいにとられるかも知れ

ませんが、事實、日本が文化國家といふもので立つて行くといふのなら、かりに缺點はあつても、又長所のある歌舞伎や文樂も正しい見方をしなければならない。この考へ方がなくては文化國家といへぬと思ふ。つまり、文化國家といふ以上は、海外の新しい藝術をうけ入れると共に、よく傳統を持つてゐる、文樂みたいな古典を認めるといふ事も一つの義務と思ふのです。海外の藝術は勿論、紹介して、日本にも輸入するといふ事はやつて頂きたい事ですけれども、同時に日本の優れた藝能も一應認めて貰ひたいと私は思ふのです。同時に今の青年は一應、日本の藝能も知らうといふ知識慾はあると思ひます。さうした青年層の知識慾といふものが、文樂のためには將來の光明になるのではないかと思ふのです。知識慾を持つてゐるといふ事は、一應知つておくといふ程度で、必ずしも、それに心醉したりこれを擁護したり、またこれは日本のいいものだといつて推奬したりする意味と違ひます。併し、學生としての教養ですね。その氣持で文樂を見ようといふ——この氣持があるのを昨年の東上で私は見出しました。それがあれば文樂と雖も將來に生きのびる可能性があると思ひます。

山城　その通り大變に若い方が見えます。學生さんなどしよつ中です。部屋にも來ていろんな事をどんどんお尋ねになります。大阪ですと、もう、爺さん婆さんのものとなつてゐるのですから若い方は少いですが。もつとも、それでもその爺さん、婆さんに訊いてみると、私は子供の時分に手をひかれて連れて來られてから好きになつてと、おつしやつてゐます。ですから東京のやうに若い方が澤山來て下さるのは、本當に心丈夫で今度はそれがよけいふえたと思ひます。

三宅　さうなんです。京阪の若い人はかへつて冷淡ですが、東京では意外に青年層に文樂とか、歌舞伎とかを一應知つておきたいといふ良

識があると思ひます。それで私は日本が文化國家としてゆくには、この良識が必要だと思ひます。敗戰國だといつて日本の藝術を極端に過小評價したり、零に見るのは、文化人としての良識を疑ひます。私の知つてゐる米人の文化人に、日本の藝能で現在ものになつてゐるのは、歌舞伎と文樂だけといはれた人さへあります。何もこれをタテにとつて辯護はしませんが御參考迄にいつておきます。

それからもう一つの光明があるのです。これは今日初めて云ふ事ですが、私は綱太夫に非常に光明を感じてゐるのです。この人と、京都にいる關係上會ひますし、話をしていろ〳〵語り合ひましたが實に、綱太夫といふ人は――私は賞めすぎるかも知れませんけれども――人間もよく出來てゐるし、頭もいいし、仲々シンセリティのある人で、まあ、あのくらゐ三拍手揃つた人は珍しいでせう。それに、綱太夫君が今年四十四歳の人に拘らず、學生みたいな氣質のある人で――缺點をいふと器用すぎること――私はこの苦言を呈したのですが――他は實によく揃つた人です。この人がある間は文樂といふものは、一時的にしろ、生きのび策があるのではないかと思ひます。もう古靱さんに三十五年もついてゐてすつかり祕傳から祕法から、出來ないまでも知つてゐますから、この研究が大したものです。そして新作ものに對する理解があります。まあ歌舞伎の世界にも、文樂の綱太夫さんくらゐ有望で實力のある人は少いですよ。歌舞伎の方では、僅かに梅幸と芝翫だけぐらゐなもので、後は未知數です。兎に角綱太夫さんはしつかりしてゐます。この人が山城さんのあとを取つてくれ、この人柄で推してゆけば、意外に文樂の光明が來るのではないか。綱太夫君を、十分に育てて、文樂に藝術的に新鮮な性格を與へたいと思ひます。私の家の近くに文樂の三味線の元老鶴澤友次郎さんが隱退してゐますが、この友次郎さんが口を極めて綱太夫君を賞

めました。友次郎さんの處へもよく研究に來るさうです。友次郎さんみたいな人でも綱太夫君の藝だちがいいと云つて口を極めて賞めてゐます。友次郎といふ人はいづれかといふと綱太夫系ではない人なんです。この綱太夫系でない人が賞めてゐます。それを見ると私の氣持が本當に裏書されたやうな氣がして嬉しかつたのです。歌舞伎の方の役者でも、あれだけ熱心な人はまあないでせう。熱心でなければ、あんなへんぴの所で、しかも引退してゐるやうなお爺さんのところへ誰が頭を下げて教へを乞ひにくるものですか。それでこの綱太夫君が頑張つてくれゝば、私は文樂は存外生きのび策があると思ひます。彼はいい男ですよ、それに藝道はすべて誰か一人大きな才能者が現はれる。——スターが出來れば全體が浮び上ることが出來ますからね。

山城　一人二人、立派な者が出て來てくれましたらね。

記者　人形は如何ですか。

三宅　人形はこれといふ人はありませんね。紋十郎氏などしつかりしているやうに思へますが。あの人は仲々愛想のいい人で、才人です。

記者　光造はどうですか。

三宅　私もいいと思ひます。

山城　まあ併し、紋十郎さんの次には玉助さん、あの人達が御大將でおさまることになつて來てゐますから……

三宅　私はかう考へます。人形遣ひを藝術家にしたい。まあ、かういふ時代になつたのですから人形遣ひも教養を高めて貰ひたいと思ひます。人としてまつとうな良識を持つやうにして貰ひたい。人形を遣つてゐる人の中ではどうも——藝術家といふ人は榮三だけだつたのですから——甚だ云ひ過ぎるやうですけれども、人間として人としての教養を高めて貰ひたいと思ひます。

山城　さつき綱太夫をほめてもらひましたが、

私は百人足らずの弟子をとりましたが、本當の私の弟子は綱太夫あれ一人です。あれは八つの時からまゐつておりますが……

三宅　さうですか。貴方もそんなに……私もいろ〳〵語り合つて見て彼の人物が分りました。よく出來た人です。

記者　歌舞伎だとか、文樂だとかいはゆる日本にずつとあつた古典文化ですね。これらが果してどういふ途をたどるかといふ事を伺ひたい。

三宅　これは何です。日本人が――これは私が先刻云つた事に近いのですが――本當に文化國家となり、文化人として日本人の誇りを高めるなら古典藝能――歌舞伎、能などにも十分な知識と理解を持つべきだと思ひます。それでなくて、その其處までにゆかない半ぱな氣持では――例へば、歌舞伎や文樂を過少評價して葬つてしまへなどと云はれるのは――これはまあ一つの荒療治でせうが、この荒療治はどつちかと云ふと、文化國家としてたつてゆかうといふ新日本にとつて、どうですかなあ。私はこの荒療治といふものに疑を持ちます。民主主義といふものは、良心的に働くものの限り、それぞれの人格を認めて、決して過酷な處置はしない所に、その立派な意義があると思ひますが。どうでせうか。それから本當にいいものの古典藝術が生きてゆけないとは思へない。文化的にある完成された藝術といふものは、浮沈はあるが結局は生きてゆくのではないかと思ひますが。私はさう信じてゐます。もつともそれは本當にいいものだけの話です。しかし今みたやうに荒療治が流行る時は、それはそれとして一方一心に勉強しながら、もう少しすべてがおちつくまで待つてゐればいいと思ふ。

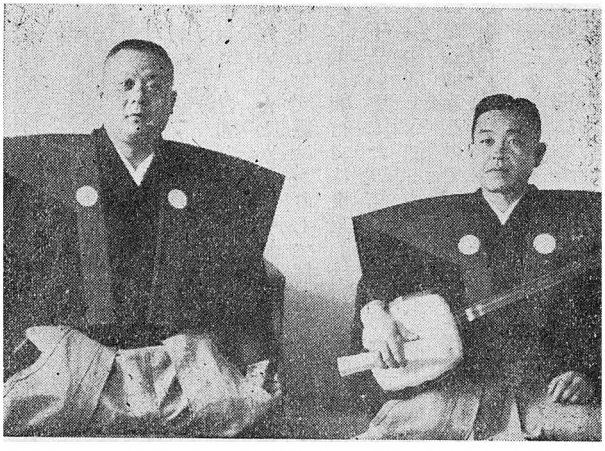
山城　まあ、私も自分が生きてゐる時には潰したくないといふ氣持です。それぢや止めてしまつたあとでは潰れてもいいかと云はれると困るのですが……

三宅　兎に角綱太夫がこのまゝ大成し、座員一

同が本當に努力精進すれば、小規模でも、やつていけるとは思ふ。併し、文樂に「生きる權利」を拒む過酷な時代思潮がくれば、キリシタン教徒の迫害のやうに、各人殉教者として、死の床にならぶ覺悟を思つてゐれば、それ以上の「最惡」はないと思ふ……

それから山城の古刹時代の御靈文樂座後期に、古刹一人ひとりの藝評や批評を受けた話がはづんだが、それは割愛する。尙この對談は京都新聞社發行「時論」に掲載。

（二三年二月）



綱太夫と彌七（右）

竹本綱太夫

三宅　東京では失禮。あの大入り滿員は講演に出かけた私迄も愉快でした。勿論久々の東上で、珍しいからの好況とは思ふが、それにしても私は何となく文樂の前途に光明が見えかけたやうな氣がしたのです。そこで歸京と共に、誰が見ても文樂の次の時代のホープたる貴方と對談したくなつた。十月の文樂があいてゐるお忙しい中を、わざわざお出で願つて有難う。せめてひる飯でも差上げたいのに、この時勢故にそれも出來なくて。――

綱　いえ、どう致しまして。東京では有難う存じました。實際、東京は大入りで有難いと思ひました。百圓の切符にプレミアムがついて五百圓迄いつたとか申しますが、無論私も先生と同樣それを樂觀ばかりして居りません。けど、今度の東京興行では東京の松竹が本當に親切にして下さいました。初めは申上げたやうに新富町の「松島」へ泊る筈でしたが、あすこは料理屋になつてゐるので、かへつて食糧問題がむづかしくて、東劇の樂屋へ泊るやうになつたのです。それを東京の松竹ではかゆい所へ手の屆くやうに親身になつていろ〳〵心配して下さいましたので、宿屋以上の有樣で皆も喜んで居ります。

三宅　それは結構、一體東京の人は好人物が多く親切ですよ。それに君たちの仕事は、完全な勞働で、人形の方もさうだが力業だから腹がへつてしようがないでせう。

綱　え。（うつむいて少々てれた形）時節柄いへぬ事ですが、我々の仕事は粉食では……

三宅　さうでせう。お察ししてゐます。日本人の惡い習慣ではあらうが、粉で一段語つちやあげつそりする筈だ。

綱　（やはりうつむいたまゝ）　へえ。どうもそれでやむなく補給の必要があるのを、東京の松竹はよくしてくれました。酒を飲む者も高いからといつてやめると、やはり腹に力が入らぬので、一合位は飲みたくなります。又、一合飲めばそれだけ飯は少くてすみますし、少々は頂かねば。……所が、師匠（山城少掾の事）も毎晩は飲みません。御ヒイキから頂いたり、配給の分は飲みますが、一升何百圓といふヤミの酒は勿體なくて、買へはしても冥利につきるといつてさう迄して飲まれません。併し、一寸一杯やらぬと腹にこたへがありませんし。

三宅　いやお察しします。だが、今は食事一つにもそんな苦勞が入る世の中になつたが、貴方がたは兎に角いい時代に修行して來た。貴方は若いが子供の時から文樂へ入つて、約三十數年になるが、名人はゐたし、食事の心配はなし、「大序」の正しい修行のあつた時代だし、考へ

るといい時代を通つて來たわけぢやありませんか。それと君は八つの時に斯道へ入つたとよく聞いてゐるが、そんな子供の癖にどうして太夫なんかになつたのですか。自分で進んでなつたにしては小さすぎるし、私はいつもこれが疑問でした。

綱　え。それはやはり親が大變な淨るり好きだつたためです。私の家は元來九州の宮崎縣延岡の御殿醫だつたので、父の代になつて大阪へ出て參りました。所が、父が淨るり好き、母もさうで私は三つになつた赤ん坊の時に、父が語る太棹のデーンといふ音を聞くと、泣いてゐても不思議に泣きやんださうです。それで兩親がこの子は餘程淨るりが好きらしいから、太夫にしようといふので、五つ頃から淨るりの稽古をさせられたらしいので、忘れもしませんが六つの時、故攝津大掾のお弟子で女義太夫ですが、竹本春之助といふ人が東京にゐたのが、その人の中國地方巡業について岡山へ行つたのを覺えてゐます。芳雄といふ名で「鈴ケ森」のやうなものを語つたり、「壺坂」の「三つちがひの兄さん」あたりをやつたりしたと覺えてゐます。

三宅　山城がその時分の君の事を、うちへ珍しい豆太夫が來た、坐る時くるりと裾をまくつたのには驚いた、とよくいつてゐましたが。……

綱　へえ。それはその後も私は大阪の色物の寄席へ出されてゐたのですが、大阪の高座では前に手すりがあつて下半身は見えぬので、はなし家は坐る時裾をまくつて坐つて、長襦袢の膝の上に手をのせてゐたので。――この方が着物がよごれぬといふわけで――それを子供心に見てゐて、私は明治四十四年八月十五日、今の師匠が二代目古靱太夫に改名したばかりのお宅へ、父につれられて弟子入りをしたのでしたが、その時高座のまねで裾をまくつて坐つたわけでせう。……

三宅　さうでしたか。それで古靱がいつた意味が分つたが、君が子供の癖に着物をまくつて坐

つたといふ話を、私は度々聞かされたが、今迄その意味が分らなかつた――それから？

綱　その八つの夏に入門し、師匠の幼名の竹本津葉芽太夫は、法善寺の師匠津太夫の津をとつた名だから、同じ名でもお前は私の弟子だからといふので、豐竹つばめ太夫と、假名でつばめと名づけられたのでした。併し、その時分は師匠も若いだけに元氣でやかましくて、いい男のおしやれで隨分こはかつたのです。その後東京の新富座へ興行に行くやうになつた時分などは、夏のせゐはあるが衣裳が大變な數で、羽織十何枚、着物何十枚といふ贅澤で、一ぺん着るとすぐ洗ひはりに出すなど、お弟子は中々大變でした。

三宅　さう〳〵。全くたいした美男子で色男でツヤ種も相當あつた人だ。……

綱　へえ。それでも不思議に私には入門當時に素人に稽古をするやうに一つ一つ分けて、丁寧に「沼津」と「忠臣講釋の喜内住家」とを教へて下さいました。あんな教へ方をして頂いたのはこの時きりで、後は聞き覺えで、文樂で役がつくと一度自分の役場を語つて師匠に聞いてもらつて、それを直して頂くといふやり方です。それも師匠は餘りやかましくいはない方です。

三宅　え、八つの子供に「沼津」と「喜内住家」とは驚いたな。でも貴方がたは幸福で、小さい時正式に「大序」の修行をしたのですものね。

綱　忘れもしませんが、私が大序に入つた時分、御靈文樂は朝七時半アキでした。大序も大勢で二十人はゐました。亡くなつた辰太夫と私とは一緒で、大序の修行をして來たのは今では私と七五三太夫あたりで終りです。それで當時大序のシンは今の源太夫の源路太夫で、これはいはば級長です。これがいざとなると故人の阿彌師匠のお宅へ、どつと押しよせて稽古に行くのに、早起きの方でしたからおそいと機嫌がわるい。私は朝五時半に電車の割引でお宅へ伺ふと、まだ電燈がついてゐますが、電燈が消え

る時分に行くと不機嫌なので、入り口で六時前から待つてゐます。すると弦阿彌師匠は神佛のお勤めを長い間かゝつてやつてゐられて、それがすむとどやどやと押かけてゐた大序の太夫二十人位が前へ坐ります。お師匠さんはこの中で誰が覺えがえゝのやといはれて、その誰かを主に教へられますが、勿論、シンの太夫と二枚目の太夫がすべてよく覺えて來ます。そして短い大序の半分をシンの人、次の三分を二枚目の人、その後のほんの僅の分を大勢に分けるので、シンの人に憎まれてゐると、殆ど語る所がありません。

三宅　面白いね。それをやかましやの弦阿彌が指導したのだが、いい教育法でしたね。私は未だに文樂の限り、この大序の修行が必要と信じてゐるんですが。

綱　さうです。併し、今はこんな修行があつても、それについて行く者がありません。私は自分の弟子や、若いつばめや雛太夫、濱太夫あたりによくいふのですが。――これは自分もいはれて來た事ですが――人の語るのを聞いておくやうにいふのです。所が、それさへしないから、「山の段」が出て久我之助や雛鳥がついても知らないので、初めて教はりにくるのです。でも、「山」が出れば大判事や定高が廻つて來ぬのは分つてゐるが、その久我之助や雛鳥はいつかは廻つてくる筈で、ふだん聞いておけばいいのに、それをしてゐないからいざとなるとあわてるのです。まあ私等迄のものはいやでもおうでも本式の修行はして來ましたし、弦阿彌師匠のえらかつたのは、我々大序の者でも、當時のいい太夫津太夫師の稽古でも區別をせずに、同じやうにやかましく叱言をいはれた事です。一流の大太夫も我々も一緒に叱りつけられたのでした。

三宅　えらいね。いい話だ。

綱　唯、不思議にうちの古靱師匠と、故駒太夫さんの稽古の時は叱言がありませんでした。何

もいはずにだまつてゐられましたが、外は誰彼の容赦はなかつたので。

三宅　弦阿彌名人ならずとも、あの人のスパルタ教育はよかつたね。名人團平の感化だがうれしい話ですよ。それに私は拙著に書いてゐるが、大正八年に故土佐太夫中心に「大序會」が結成、君はこゝで出世の緒についたのですね。

綱　え。三代目の清六師が死なれた直後、大正十一年二月の文樂の時でした。師匠が「一の谷」の「二段目の流しの枝」を、當時の猿糸今の廣助さんの糸で語られましたが、からだの加減がよくないので、私は「白湯」汲みに出ました。え、白湯くみは本當はいい太夫が出て、いつでも床の太夫に代れる實力のある者なのが本當なのを、いつの間にか下つ端の初心の者から出るやうになつたのです。ですから私は白湯くみは殆どしませんでしたが、この時、私は三代目清六師の糸で師匠がその前に、この「流しの枝」を語られたのを覺えてゐて、それを大序會で語りましたので、手心があつたため、代り役に間に合ふやうに白湯をくんでゐたのです。すると師匠の調子がよくないので急に代り役に出たのでした。

三宅　時に君は十九歳の筈、これが上出來で初めてつぼめのめが吹いた次第。それからも君は弱い師匠の代り役で相當噂に上りましたね。

綱　え。おかげでこの「流しの枝」から役がつき出しました。もう一つは文樂が燒けて、辨天座へ移つた昭和二年の興行に、「太功記」が出て私は「妙心寺」の口を語り、今の大隅が靜太夫で「十段目の夕顔棚」を語つて、師匠が切を語つてゐられた時です。急に師匠が病氣で、いきなり私が大物の「尼ケ崎」を語らせられました。所が、私は師匠から三代目越路師の淨るりだけは、何をおいてもよく聞いておけとくり返していはれてゐたので、文樂座時代に越路さんのはよく聞いて、「太十」など特に注意して覺えてゐたので。……

三宅　さう。それでその代り役がヒットだつたわけですね。さう聞くとその暫く後に東京の演舞場へ來た時、同じ「太十」で古靱がのどを痛めて、君が代りに出たが、私はその日聞きに行つて上出來と思つたが、成程タネは越路にありでしたか。いいわけですね。

綱　へえ。恐れ入ります。さういふと「太十」は私一門に中々因緣噺があります。師匠も文樂で越路さんの「太十」の時、越路さんが急病で、その時師匠は端場の「夕顏棚」でしたが、それを語ると一旦あのぶんまはしがぐるつと廻ると、越路師の相三味線の六代目吉兵衛師が、から廻りで一人だけ乘つて出られた。そこへ師匠が「夕顏棚」をすませたまゝで、別に出て來て吉兵衛師の傍へ坐つて「切」を語られたのでしたが、これが上出來で三日間の代り役が評判だつたのです。

三宅　さう〳〵。その話は古靱から私は聞いた記憶があります。その時分古靱は名人淸六の糸になつてゐて喜んでゐたが、扨、晴れの代り役で吉兵衛さんの糸で、「太十」を語つた時の氣持はなかつたさうです。又、淸六とちがつたい相三味線で、若い古靱をかばふやうにひいてもらつたその結構さはなかつたさうでした。あの吉兵衛はをとなしくいい人で、私は弦阿彌と正反對のたちの名人と思ひます。その越路と東京の歌舞伎座へ毎年年末素淨るりで來たが、このコンビの「太十」は全く絕品でしたよ。この絕品を私は大正八年十二月歌舞伎座の初日で聞いたが、これが越路の東京での「太十」の代表的演奏の終りでした。所が、古靱が十數年前東京劇場へ素淨るりで來た時、その初日が「太十」でしたが、今より若いだけに腹も强く實に結構で、私は右の越路に彷徨とした出來に感嘆して廊下へ出たのです。すると大谷社長が昂奮して、私の傍へ見えて「いい『太十』ですな。越路よりほんの少し小さいが越路みたいだ」といはれたが、私はかういつた大谷氏は嬉しい人と

思つた。淨るりがよく分ると共に、この時の古靱を越路に比較して、昂奮した大谷さんはえらい。興行師も至藝を聞いて昂奮する位でないと、これからもいい藝は育ちませんから。

綱　それで師匠のは勿論結構ですが、それがこの頃の戰爭前文樂で「太十」を語つてゐられた時、可愛がつてゐられた男の子の寅太郎さんが、十次郎と同じ十八歳で死なれました。そこで床で「十八年がその間」と語ると、十八歳の寅太郎の臨終が思はれてたまらんといはれます。私にも似た話があつて、十四五年前、奈良で、私中心のある人の追善會の會があつたのですが、その時私は「太十」を語つたのでしたが、その朝二十五歳になる私の弟が死んだのです。……それで約束だから奈良へ行つて、その「太十」を語りましたが、若い弟が死んだ日でそのつらさはありませんでした。師匠もさうですが、私も「太十」といふと語る度にこれが思ひ出されてやりきれません。……

三宅　でも、師匠と君と二人共「太十」が出世の當り藝となつたのは面白い。併し、君にはまだ得意なものがあるでせう。

綱　え。これは先達て放送しました近松原作の「天の網島」の「紙屋内と大和屋」です。これは大正十一年秋の近松二百年祭？　の記念興行の時、文樂で原作によつてこの通しが出、「茶屋場」は故津太夫さん、この「紙屋内と大和屋」とを越路さんでした。所が、この越路師の「大和屋」が殊に結構で、私はかげで聞いてゐて全く感心して居りました。尤も、「紙屋内」の方は改作の方とさう變らないし、節づけもその時こしらへたかと思ひますが、もう一と息でした。けど、「大和屋」の方は本當に結構と思ひましたら、何でも前からの朱（節づけ）の入つた本があつたらしいので、吉兵衞師の糸で猶更よくなつたわけでした。

三宅　さう〳〵。その時私は劇評家として、やつと最初の劇評集「演劇往來」を出した時代

で、當時「新演藝」の合評會で、この時の浪花座の鴈治郎の原作による「天の網島」の見物に、諸先輩（殆ど全部故人）と大阪へ來ました。十人近い人數のため文樂の方は見ずに浪花座一つで引上げたが、その時も「紙屋内」は平凡で、「大和屋」が面白く、故岡村柿紅氏はあれは一種の氣分劇だといつた批評をしたのを名評と覺えてゐます。君は當時十九か二十歳なのによく覺えてゐましたね。

綱　いいえ。私は唯感心してゐた程度でしたが、この春やる事になつたのも三味線の松之輔君が、吉兵衛師から習つてゐたり、朱の入つた本を持つてゐたので、それらを研究してやつと仕上げたわけでしたが、これは私として聞いて頂きたいものです。外には「鰻谷」。……

三宅　それから「近江源氏の八つ目」の「盛綱」でせう。君の會の「春秋會」で君が「忠九」を語つた時、山城は私に綱の「盛綱」を一度聞いてやつて頂きたいといつてゐました。――やはり弟子思ひですね。

綱　え。え。それはそのうちやれると思ひますが、……

三宅　賛成。私は二十年近い前、君は古靱の影法師でいけない。もつと自分の色を出さなくてはと苦言を呈したね。それが近年餘程師匠から離れて來たのは進歩だ。君は師匠とちがつて腹は強いし荒いものがいいので、戰爭中演舞場で古靱の絶品「長局」の時、「廊下」を語つたが、あの岩藤のうまさに驚いた。あれ以來君は古靱の影法師でなくなつたといへます。

綱　はあ。（をとなしく同感の意を見せる）さういつて頂くとあれは端場ですが、私は駒太夫さんと源太夫さんとお二人のを、よく聞いて覺えてゐました。お二人共に結構で一寸ちがつた所はあつてもすばらしいので、いつかは語りたいと思つてゐた處へ、東京であれが廻つて來たので喜んで語らせて頂いたのでした。

三宅　成程ね。いいわけですね。タネがいいも

のだ。全くその二人なら「廊下」はそれぞれいい筈だ。だが、あんな端場はよく聞いてやる客が少くて、演舞場の時も古靱の「長局」はあの通り選賞に入つたが、君の「廊下」をほめる人は批評家側でも殆どなかつたが、あれ以來私は君は進歩したと思ふ。兎に角師匠と君とはちがつた道をいつてほしい。その「長局」や「引窓」、「良辨杉」や「道明寺」では君が一生かゝつても駄目。

綱 さうです。それに先生、私は芝居が好きで、これは先生にお目にかゝつて一番いひたい事です。子供の時から芝居はよく見て居りますが、新劇も好きで瀧澤修がひいきです。「夜明け前」は初めの分も後の分も見ました。友田田村の小山さんの「瀨戸内海」や、築地小劇場では「火山灰地」も見ましたがそれぞれ結構です。無論歌舞伎は大好きで吉右衛門さんのものは、京大阪で大抵見ましたが「逆櫓」や「熊谷」は絶品ですな。それに南座で「盛綱」を見て感心して、これは私は淨るりでぜひ語りたいと思つたので。……

三宅 成程。

綱 その望みがあつた所へ、昭和五六年時分でしたか、明治座へ師匠と參りました時、濱町に故人の三味線の松太郎さんがゐられたので、これ幸と「盛綱」を教へて頂くやうにお願ひしました。すると快く聞いて下すつて丁寧に四つに分けて、一つづゝ三日間聞いて、三日私が語るといふ風に、一とくさり六日間、すべて四つで二十四日間で全部お稽古をして頂いたのですが、今では本當にいい事をしたと喜んで居ります。丁度二十五日の明治座の興行中に、私はあの一段丸ごと仕上げて頂いたわけです。それでその二十五日の出來上つた日、私は改めてお禮に伺ひました。するとどうです。名人といはれる人はちがつたもので、あ今日は一つ丸ごと通しておやんなさいといつて、自分ですつと立ち上られたのです。何事かと思つてゐると、三味

線の糸の新しいのをわざわざ出して、今迄かゝつてゐた稽古の古いのととりかへられたのでした。我々の稽古ですからそのまゝの古いのでいいのに、特別に新しい糸をかけられてひいて下すつたのには、有難いやら嬉しいやらで未だに頭が下ります。それも教へるといふより、自分で道を樂しむといふ風で、私に語らせながら樂しさうにひいてゐられるのも、えらい人は又えらい所があるものと思ひました。それで餘り叱言はいはれずに、親切によく教へて頂きました。

三宅　これもいい話だな。東京には以前は松太郎のファンが多かつたが、さういふ心がけの人なら必ず東京の水に合ひますよ。――そこで君の「盛綱」はいいタネで出來上つてゐるのを、山城が知つてゐるから私に聞いてくれといつたわけですか。それは大いに期待してゐますが、「盛綱」など山城が語るわけはないから、君はさういつたもので獨自の道を歩いて行く事ですね。勿論山城のエッセンスを君は十分吸收してゐる人だから、これをいふのだが。――獨自の道といふと君と故南部太夫との「新義座」の旗擧げは大變でしたね。

綱　へえ。あれでは人間の修行になつたと思つて居ります。いろ〳〵苦勞をしましたが昭和十一年二年とやつて、師匠から歸れといはれたので文樂へ入れて頂いたわけですが、あれで自惚れも分り、又ためになつた事もありますが、苦勞はしてもトコトン迄行かずにすんだのは仕合せでした。あの旗擧げの原因ですか。それは今更申上げません。併し、南部もあれ以來ぐつとよくなり、近頃は詞がよくなつていざこれからの所で死んだので殘念です。今の彌七もあの當時は團次郎といつてゐたのに、こゝ迄來たのも新義座の苦勞のおかげでせう。

三宅　いやよく分りました。過去は問はぬ事にしますが、全く南部は惜しい人です。この頃の文樂の山城、大隅、君に元老の住太夫では、大

體に似た傾向で名品でもお能のやうな氣分になる。所が、淨るりだけは一人美聲家の太夫がゐて、美音で大向ふを「ようよう」といはせる人がほしい。これは文樂を低俗にする意味ではないので、山城の二枚目か三枚目にはぜひつや物語りののどのいい太夫がほしいのだ。伊達太夫ではまだまだだから、それには丁度南部がゐるので、淨るりが明るく派手に一般化するのでした。その理由で私は南部に囑目してゐたのに、あの急死でがつかり。

綱　（しきりにうなづく）　さうです。一人は今のお說のやうな太夫がいります。御尤もで。

三宅　それも返らぬ昔話だ。併し、文樂は薄給だからこの時代では益々困つてゐるでせう。

綱　いや。それは大變よくなりました。無論一家の者が食つてゆくなんて事は出來ませんが、この頃は松竹も大變待遇をよくしてくれ、私の弟子の初步の者さへ、今度の東京行の給金もびつくりする程もらつてゐます。上下のひらきが少くなつたのです。

三宅　それは近頃にない朗かな話で愉快ですね。大阪松竹のヒットだ。大正十三年に私は白井さんと毎日新聞の用でお目にかかつた時分、文樂の大序の連中の薄給なのを聞いた事があつたが、今はそれも昔話となつたのは嬉しいね。

綱　私は文樂へ入つて三年目に初めてお給金を頂いたのが二圓でした。

三宅　そんな風だから私は文樂の前途を、待遇の意味のみでも案じてゐたんです。だが、今日のこの話を聞いてすつかり安心した。一應の最低生活さへあれば、それ以上は文句をいうべき世界ではないのだ。――どうか文樂の若い人たちも頑張つて下さい。初めにいつたやうに、私は今度の東京行でほんの少し光明を見かけたのです。我々を又がつかりさせぬやうに、綱太夫君、いや文樂の皆さんへ私は頭を下げてお願ひしておきます。

（二三年十月）

鶴澤友次郎

前書き。――文樂座の三味線櫓下格の名人六代目鶴澤友次郎は、前年の病氣以來左の手が幾分不自由のため、文樂を休んで偶然私がゐる洛北松ケ崎の、まだその奥の山端に二年前から引退して住んでゐる。道八亡き後この友次郎に越す三味線の古老はなく、穩健にして造詣深く物知りの彼は、どこやら人形遣ひの名人故吉田榮三を思はせるものがある。純粹の文樂座系の人故に、彦六座の大隅一派とはやゝ趣きを異にする點と、故津太夫の相三味線だつた點とで、かへつて實質を過少評價せられてゐるが、東京の淨るり通の紳士で、私も知り合ひだつたインテリ故澁澤篤二氏（竹洗）など、その師匠の故實通の豐澤富助（團平の弟子）歿後は、この友次郎の人物と藝とを高く買つて師事してゐた。私は再びいふがその穩健堅實な人物が好きで、昭和十五年改造社のために文樂物を執筆した時、先づ彼を訪ねてその藝談を書きこれは「續文樂の研究」の中へ收めてゐる。今不思議にこの人の住居の近くに住んで、時々表で會ふ事はあつたが、二年近くつい〳〵失禮してゐた。それをこの「對談」の企劃のため、思ひ立つて久々に彼の閑居を訪ねたのは晩秋十一月上旬の薄ら寒い日の午後。所が、私がその門に立つと、奥には三味線が鳴り、幽に「――繻子の帶鳴る」云々の節が響くではないか。「繻子の帶」といへば並木宗輔の名作「苅萱桑門筑紫轢」の三段目「ゐもり酒」の、女之助と夕しでとの濡れ事の描寫として有

名な文句だ。――おやと思つて私は入り口で躊躇してゐた。

するとお孫さんの可愛い十四五歳の娘さんが「どうぞ」と案内してくれる。思ひ切つて中へはいると果して稽古中、友次郎は病體に拘らずふだんとちがつて勇氣凛々、額に藝好きの情熱が迸つて一つの表情を成してゐる。相手は女義太夫の故參の三蝶と仙平だつた。そして正に「ゐもり酒」を習つてゐて、三味線の仙平は、友次郎のたたきの扇と口三味線とで、面白く引いてゐる。三蝶は詞や何か種々友次郎が直してゐるが、このくろうとの三味線と一緒の稽古は中々面白く、教へる方も習ふ方も一生懸命であつて、これのみでも私は直ちに藝に遊ぶ樂しさに浴した。「心の駒」のあたり、新洞の詞のいひ方など、私は本當にいいお稽古を見せてもらつたと、これが終るのが惜しい位であつた。……先月は若手の綱太夫、今月は故老の友次郎と、淨るり界の敦盛、熊谷とに續いて會談出來るなど、これは全く京都にゐればこその幸だとさへ思つた。

友次郎　（稽古を了へるとすぐ私に向つて）これはお待たせ致しました。（一方三蝶と仙平とが挨拶をして歸つてゆくのを見送つてゐる）此間頂いて「幕間」は樂しんで拜見しましたし、お出でになるのをお待ちしてゐました。あ、それより貴方にぜひ見て頂きたいものがあるのです。（といひつつ彼は立つて色紙に書いたものを出す。見ると「譜は見るべし、彈くべからず、學ばずして徒に譜を繰つてたつきとするはきん魚にひとしきものと存じ候」とある。）

三宅　これは前年私が紹介した貴方の朱（淨るりの節の譜）に對するお説だ。貴方は古曲をよく知つてゐて、その朱のストックのみでも第一人者だが、それでゐて淨るりを朱を賴つてひくのが大嫌ひ、朱は腹へ入れておけ、そんなしるしで三味線をひくと死物になるといふのが持論で、全く立派な教へです。その譜を麩にたとへて、譜で藝をやるのは錦魚だといふのは皮肉で面白い。これはこのまゝ記事に出させてもらひますよ。

友次郎　え、左様で、いやそんな下書きでなく清書したいのですが。……でも、私は朱をあてにしてやる三味線引き程困り者はないので、一寸そんな事を書きましたが、文章になつてゐますかいな。――あ、さういふと私はいつか申上げたその朱の入つた古いものや古い珍しい丸本を一間程の本箱にぎつしり一杯つめて持つて居ります。戰爭中大阪の宅で萬一を思つて、それを或る人の所へ疎開させましたが、殘念にもそれは燒いてしまひました。……こゝの家の方へ持つて來てゐればよかつたのに。

三宅　それは殘念。山城の文獻燒失につぐ惜しい話ですね。尤も、貴方は昔から朱は腹へ入れておく流儀だから、朱の材料を燒いてもそれ程惜しくはないでせうが。……さういふと私は第一にお話したいのは、さうした名曲の埋れたものを、貴方が達者な中に、ぜひ次の若い人へ敎へ込んでおいてもらひたい事です。さうしないと貴方きりで絕えてしまふいい淨るりがあつて、惜しい事この上なしだ。文樂も自由上演になつて有難いが、そのため又「寺子屋」や「合邦」ばかりが出だして、珍しい名作が出なくなりさうで、さうなると有難い自由上演がいいかわるいか分らないわけです。ぜひ今の中にいい古曲を後へ敎へ込んでもらはぬといけません。所で、それを誰が受けついでくれるか知ら。――私はそれが心配ですが。

友次郎　それには綱太夫がゐてくれます。

三宅　あ、さうでせう。私はそのためでも綱太夫を最も信賴してゐるのですが。

友次郎　あの人は熱心で器用、それによく覺えてくれます。そしてよくいろ〳〵聞きに來てくれますので。三味線の彌七も一緒で。

三宅　それは感心。それでどんなものを敎へられたのですか。

友次郎　だい分ありますが「菊畑」はよく敎へました。

三宅　あれは「鬼一法眼三略卷（きいちほうげんさんりやくのまき）」の三段目で大

物、段切れ近いノリが面白くて、あれだけ長いノリは一寸ありませんね。

友次郎　左様で。あのつめ合ひは面白いもので。芝居でも知惠内や虎藏はあのつめ合ひが腹にはいつてゐないといけません。さういふと若い時に見た中村宗十郎の鬼一、これはすばらしいものでしたが、その時鴈治郎が知惠内で、我當（十一代目仁左衞門）の虎藏で結構な「菊畑」で、あんないい芝居はあれつきりです。我當は私は懇意で世話にもなつて居りますが、あの通り淨るりが好きで、その時もよく稽古してやつたのでつめ合ひになると綺麗にさらつてゆきまして、鴈治郎は研究不足で押されてしまつた事があります。

三宅　仁左衞門になつてから虎藏を私も見てゐますが、寫實すぎて變な所はあつたが、お說のノリになるとあのノドはたいしたもの。「妹脊山」の「山」でも仁左の大判事は、部分的に變な所はあつたが、段切れの「倅情舟承れ」のノリになると、歌舞伎座それ自身があのノドでうなる感じだ。――それは扨おきいつも私はさう思つてゐますが、歌舞伎ではこの「菊畑」より、四段目の「大藏卿」の方が面白く作としても一歩上と考へますのに、淨るりでは「大藏卿」は出ませんね。

友次郎　さうですな。淨るりは三段目の「菊畑」だけで、四段目の方は餘りたいした事はないやうで。

三宅　これは一つの研究問題ですね。でも、この「菊畑」を綱太夫に？

友次郎　え、これはよく覺えてくれましたから後へ殘りませう。淨るりでは大物でよいものですからな。それから「襤褸錦」の「治郎右衞門出立」がいいものですが、これも綱太夫がよく覺えてくれました。

三宅　あ、あれは文耕堂の佳作でその場を歌舞伎でやりたいと、戰爭中私など歌舞伎に傳る臺本を研究したのでした。だが、歌舞伎では長す

ぎるので中止になりましたが。

友次郎　丸本では長くないので五十分位のものです。あれは上、中、下の卷で出來てゐる丸本物で「大晏寺堤」は下の卷で四段目の切りに當るわけです。この「出立」は上の卷で「彦山」の「吉岡館の出立」に似て、治郎右衞門兄弟が出立する所で、しの字づくしがあつたり中々いいもので、これも綱太夫に教へておきましたから後へ殘りませう。さういへば故人の中車がいつもやりたがつてゐられまして、私は中車さんとはウマが合つて、大阪へ興行に見えると、その宿屋の小山屋へ出かけて一杯やつて藝の話ばかりしてゐました。

三宅　いい話ですね。中車と貴方とがウマが合つたのはうれしいな。さうでせうね、そりやあ面白いでせうな。私はかげでそんな話を聞きたかつたな(笑)。併し、中車もうれしい人でこの「出立」をそんなに執心してゐたのですか。

友次郎　あの場の婆さんがいい役で、それを中車さんがやりたいといつてゐられたので。え、治郎右衞門は市村さんにやらしたいといつてゐられました。兎に角これは淨るりではいいもので、中車さんがやつて下されば歌舞伎で復活したのに話だけで惜しい事をしました。これは私の師匠の五代目豐澤廣助さんの得意のもので、私はよく覺えて居ります。出立の前に井戸で婆さんが立つて治郎右衞門兄弟を、水鏡で見る所があつて面白いものです。娘もいい役でこれが新七と戀仲になつて居りますが。——人形でも面白いもので。

三宅　これが中車でも實現せず、前年我々の方でも上演不可能だつたから、猶更文樂で復活してほしいですな、五十分位なら綱太夫一人で語らせたい。あの人本位で「すしや」や「盛綱」が出ても、外の太夫と分けて語るので私は行く氣がしない。綱太夫もかうなるとえらい存在で名曲の繼承者としても貴重。

友次郎　もう一つ「新薄雪」の「合腹」(三人奚

ひ）も、いいものなので、綱太夫がぜひ習つておきたいといつてゐるので、私も教へておかうと思つてゐますが、これはどういふものか習ひに來ませんが。

三宅　あれはいいものですね。人形の榮三は私にあの幸崎伊賀守をぜひ一度やりたいと、度々いつてゐましたが、貴方のお說とぴつたり一致しますね。何にしても綱太夫彌七に奮發して教へておいて下さい。――といふと先きの「ゐもり酒」は山城から聞くと、これも貴方が教へたものださうで。

友次郎　へえさうです。十年餘り前だすかな。私が一時古靱をひいた事がありまして、「すしや」「岸姫」「妹脊の質店」それにこの「ゐもり酒」を教へました。

三宅　澁い名曲のみですね。所で、山城の受領の前に、私は某所でさうとは知らず、山城に「ゐもり酒」をその披露の出し物にしたらといつた事がありました。その後山城に會つてそれをいふと、あれは一度しかやつてゐないので自信がない、二度やつてゐれば大丈夫ですが一度では、と案じてゐました。その癖その時、偶然私は小便に行くと、山城さんも用便中で私の隣に立つてゐたが、そこで丁度先きの「繻子の帶」の件を小聲で口ずさんでゐました。……小音でとてもたいしたもので、私は用を足しつゝ聞き惚れました。それで「ゐもり酒」だけはぜひ山城にやらせたい。受領の時「日向島の景淸」をやらせたいといふ說もあつたのですが、私は山城では「ゐもり酒」の方を勸めたいのです。

友次郎　さう〳〵。古靱さんにその「日向島」も稽古しかけましたが、これは半分の中途で病氣か何かで中止になつたまゝです。

三宅　でも、私は山城に「日向島」は何だかぴつたりしない氣がする。あゝいふ聲の要るものはどうですかな。

友次郎　それはさうで景淸はやせ衰へて、人形は「餓鬼胴」の骨と皮とだけの大物ですが、豪

傑の景清だからやせこけてゐても俊寛より大きく語らねばならず、腹に力を入れてどなるやうな聲でなくて聲が要る役です。けど、終りの「聲あららげ」なんかはあららげを力一杯大きい聲で語るから、その次の景清の詞を又もう一つ大きく語らねばならんので、ノドを痛めてしまひます。その「聲あららげ」は形容だから大きく聞えるやうにぼやつといつておいて、詞になつて力を入れるとかへつて樂に語れて、詞に力が入るのです。それを「あららげ」で聲を出しすぎるから、肝腎の詞がいへなくなるのです。これは「太十」の「現れ出でたる武智光秀」もさうで、「武智」を力一杯大きく語りすぎるから、「光秀」が小さくなるか又無暗に聲を大きくするかして、ノドをやつてしまふのです。あれは「武智」を一寸抑へてためていつておいて、「光秀」でうんと力を入れると大きく聞えて凄味も出て、それがかへつて樂なんです。それをこゝだぞと初めからイキリ立つから、肝腎の景清の詞や、「光秀」が尻すぼみになつてしまひます。大きな聲を出さずに、大きく聞えるやうにするのが、太夫も樂で聞く方はそれで十分大きく感じるものです。つまり、淨るりは必ずメリハリ、抑揚が必要です。これは節づけもすべてさうなつてをりまして「先代萩」のさわり（口説き）でも、政岡の「千年萬年待つたとて」あたりの節は、丸で踊りでも踊るやうな派手な節づけですが、あれはそれ迄「ままたき」の間の長いじめじめした節に對照して、うんと派手に反對の節づけにしてゐるわけです。又政岡が踊りを踊るやうな節づけだからこそ、子の千松が毒を飲むとか、死骸を抱くといふやうな陰慘な科（しぐさ）もどうにか帳消しになるわけです。「忠臣藏」の四段目の「判官切腹」でも、あれだけ陰氣な節と節づけになつてゐますから、諸士が籠をかついで遺骸を送る「ぼだい寺」の件の終りは、三味線を一つ調子を上げて不思議な位派手な節づけになつてゐます。いはば葬式にかゝる

のにあの節になつて、急に派手な手がついてゐるのは不自然ですが、それ迄が切腹で陰惨ですから、わざと「ぼだい寺」の所だけ派手になつてゐるわけで、それでこそ見物もほつと救はれるのです。これや政岡のさわりがそれ迄と同じ陰惨な節づけでは、理窟はその方が理窟でも、見てゐて暗い氣持になつてやりきれますまい。——これが淨るりの節づけが、自然不自然をこえて巧な舞臺效果といつた事を狙つてゐる祕訣かと思ひます。

三宅　いや實に結構なお說で、失禮ながらそれでこそ節づけの家元の貴方です。さういはれると私なども、政岡のあのさわりや、「忠四」の「ぼだい寺」の節が派手すぎると思つてゐたが、それにはさうした照應の妙が工夫せられてゐるわけですね。尤も、さういふ先人の工夫の妙があるからあゝいふ陰氣なものでも、見てゐて不思議に綺麗事で樂しめるわけですよ。いやよく分りました。所で、私は貴方に一つ質問を持參したのですが、東京に今年八十で非常な淨るり通がゐます。團平の崇拜者ですが、ある時、その人と私は古靱の藝を語り合つたが、その人は古靱は一競伊勢物語」の「春日野村」が一番うまいといふのです。皮肉な批評でこれは古靱が十數年前帝劇で一度しか語つてゐないもの。それを古靱の語り物全部を知つてゐるその人が、定評のある物より、「春日野」の紀有常が一番うまいといふのです。少し意地の惡い皮肉な評の感じですが、貴方のお說は如何ですか。そしてあの「春日野村」は貴方が敎へたんぢやなかつたのですか。

友次郎　いや、あれは故人の松太郎さんが古靱に敎へたのでした。併し、私はあれは好きで今ではやはり綱太夫に覺えておいてもらはうと思つてゐたものです。實は私は「春日野村」を古靱さんが一度聞いて見てくれといはれて、淸六も來て聞いて見たのでしたが。

三宅　成程。聞いてみてくれとは面白い。貴方

は聞いて如何でしたか。

友次郎　え、私は結構だと申して何もいひませんでした。

三宅　それでよかつたのですか？

友次郎　え、あの人のものにちがひありませんし。……唯、婆の小よしが一寸強すぎたのですが、これは山城の個性が出るからで、決してそれは缺點とは思ひません。ですからどうかと聞かれてもわるい所はないといつておいたわけです。併し、あの小よしはもう少し柔か味のある可弱い方がいいかと思ひますが。尤もそれは清六の三味線のせゐか知れません。兎に角一寸強すぎたのでした。でもそれはその人の持前で、私はその人の個性は尊重したいから何も申しませんでした。それは三味線引きにしても同樣で、ここに十挺の三味線を出して十人にひかせる。すると同じものをひいても十人の三味線引きは必ずそれぞれちがひます。氣の短い者は三味線に出ます。柔和な者はそのやうに出、屈托のある者は又そのやうになります。でも、それはその人の個性で、強いから弱いからといつて直しては藝が死んでしまひます。だから持前の色合ひは私はそのまゝに致します。それで師匠の五代目廣助は名古屋の三味線引きで良造といふ相當な人に「道明寺」を教へた。廣助師は何もいはずに兎に角良造に、「道明寺」の三味線を全部丁寧に教へ込みましたが、すべて出來上つて「さらひ上げ」の時、師匠は良造に「これで出來上つたがお前はこの「道明寺」だけはひいてはいけない。お前の三味線では、菅丞相が豆しぼりの鉢卷をしてゐる事になるから。」といつた話があります。――その良造はよくひくが腕が強すぎる人で、どうしても菅丞相の氣品が出せないのです。けれどそれは持前で直しやうがない。そこで教へるだけ教へて一切直さずに、これだけはお前がひくものでないと、一方その人の個性は尊重するだけに、むかないものは一切手をつけるなと戒しめたわけですな。

三宅　皮肉な話ですね。まあそれで貴方の個性を尊ぶ意味がよく分りました。併し、貴方として山城にやつてほしいお望みの語り物はありませんか。

友次郎　あります。それは「橋供養の文覺」です。

三宅　成程珍しいものですね。それは？

友次郎　いいもので、殊に攝津大掾が語られた「四の切」の「庵室」がいいのです。文覺が袈裟御前と知りつゝ、賢禮門院の身替りに首を打つて發心するのですが、こゝで袈裟御前の所へ亘が、小田卷の糸をたよりに逢ひびきに來たり、戀や情、それに文覺が袈裟に惚れてゐながら、首を打つ腹のある人物になつてゐて面白いものでして。……

三宅　あ、それは歌舞伎で明治四十四年頃、市村座で吉右衛門が一度だけ上演したものです。その後吉右衛門は「文覺」は度々やつてゐますが、それは悉く團十郎の活歴の方の「那智瀧誓祈文覺」で、お說の「橋供養」は一度だけ、しかも作としてこの方がぐつと佳作で、歌舞伎風だと思つてゐましたが、丸本にあるのですね。

友次郎　珍しい丸本物でこれも五代目廣助師得意のもので、私はよく覺えてゐます。山城さんにむくと思ひますが、綱太夫に教へておいてもいいと思つてゐます。この文覺は伯母の衣川に「ふたまた」と叱られる位に、源氏にも平家にも從はず、戀をしても戀人の袈裟御前を結局打首にしたりする複雜な性恨で。

三宅　いや、それだからこの「橋供養」の方が「那智瀧」より佳作で、若き日の吉右衛門のいい所が出た芝居です。これをみて小宮豐隆氏が有名な「中村吉右衛門論」を書かれた動機となつたものです。吉右衛門が一度しかやつてゐないが印象の深かつたもの。それから貴方はさつき東京の「忠臣藏」をわざわざ見物に行くといつてゐられましたが、……

友次郎　え、さうです。私は吉右衛門さんに會

ひたくて行くので。「九段目」の本藏をどうしてゐられるかそれを見に行きたいので。

三宅　（この時ぱっと電氣がつく）熱心ですな。――それならぜひこの「橋供養」の文覺の話をしてみて下さい。あの文覺は日本のハムレットです。――いや、どうもいろ〳〵伺へて有難う。又お伺ひするか知れませんよ。

（二二年十一月）

坂東三津五郎

京都にゐる坂東三津五郎は本筋の歌舞伎役者として定評がある。劇通はそれを知つてゐるらしく、私にその對談を求められる希望が多く、顔見世興行の一日、樂屋を訪問する。無論私として樂屋訪問は初めて、宣傳部の塚本氏が親切に案内して下さる後をついてゆくと、天井裏の樂屋ではなく、こゝは地下の一室を急に樂屋に造つた俄かぶしん、細長い三疊程の頭取部屋といつた感じ、でも上の樂屋は上り下りが大變、しかも、今月は三津五郎は朝十一時から殆ど出づつぱり故に、この狹苦しい樂屋でも、電力節約のためエレベーターすら休止中とあつては、上へ上つたり降つたりしないだけでも大助かりと喜んでゐた。

三宅　お忙しい所をお邪魔して相すみません。簑助君が東京から歸り次第、うちへ來て會つてくれといつてゐたのを、これ幸とお待ちしてゐたが、稽古でそれが出來ないさうで、あわただしい訪問を致しますが、ファン諸君の希望が强く、押して御迷惑な對談をお願ひに上りました。

三津　いいえ。どう致しまして。

三宅　それに私は貴方をこの際訪問するのに理由があるのです。それは東京の二長町の市村座で、貴方が座頭の所へ、歌舞伎座附だつた菊五郎と吉右衛門とが上置として、あの面白い市村

座の座が組織せられたのは、明治四十一年十一月、諸君の進歩向上が著しくあの通りの立派な一座が出來上つたわけですが、この十一月で丁度四十年目に當ります。私はその出來た當時の一兩年のみ、二、三見落してゐる興行はありますが、この貴方がたの市村座の感慨のある芝居を、京都へ一昨年疎開する迄約四十年、横濱へ出た分迄も全部見て來てゐます。その番附も全部保存して、所々書き入れた事があるため、以前から私はこの昭和二十二年十一月に、「市村座四十年」なる著書を出す積りでゐたのです。これは私は樂しんで出來る仕事なので、去年あたりから手をつけて、ぜひこの四十年目の十一月に多少用意した寫眞も入れて出版する筈でした。所が、この戰爭でかく東京を離れてしまつて、右の約四十年見學の番附を早大の演劇博物館へ寄附しようとしたのが、屆ける方法がなくて東京へ澤山の參考書と共に「風呂屋のたきつけ」にすてて來てしまつたのでした。——だから再び私の「市村座四十年」は不可能ですから、貴方に會つてこの私の闇から闇へ葬つた話を聞いて頂きたかつた。貴方は市村座中で記憶のいい人で有名でしたから、時間さへあればこの市村座四十年の話を、貴方とゆつくりしてみたいと思つてゐたのでした。……

三津　それはそれは。さう伺ふと四十年目ですな。それは惜しい事で。——さういふと十一月の東劇の「忠臣藏」で、梅玉さんの病氣に私が判官を代り役でやりましたが、あの大序で音羽屋が師直、播磨屋が若狹ですから、初めは三人で芝居をしてゐたので、三人共一緒に「市村座のやうだ」と互に話し合つてなつかしがつたわけで。

三宅　成程、その大序の三人は市村座の御大將でしたな。尤も、これは私の新版「演劇五十年史」にも書いてゐる事ですが、今四十年目の市村座連で健在なのはこの貴方がた三人と、時藏、男女藏位ですよ。後は幹部の十藏の片市、

秀調（初期はこの二人もゐた）、彦三郎、勘彌、菊次郎、友右衛門、國太郎、新十郎、甄助、紋三郎、粂三郎と十一人以上亡くなつてゐますからね。――それに反してお世辭じみますが貴方は終戰後大變若返つて、舞臺も活氣があつて結構ですよ。尤も、一時一寸何だか舞臺が冴えなかつたが。

三津 え。確にさうで。あれは盲腸が祟つてゐたのでした。時々熱が出るのでどうも變だと思つてゐたら、亡くなつた市村さんが、氣をつけなくちやいけないと注意をしてくれたのですが、たうとう盲腸と分つて手術をすることになつてしまつた。――五、六年前でしたよ。歌舞伎座の五月興行で吉右衛門さんの「淸正誠忠錄」が出て、私が康政、外に「河內山」が出て、私が出雲守をしてゐる時、たうとう惡化して明治病院で手術をしたのですが、それ以來すつかり丈夫になりましたが、市村さんが注意して下すつたのを、今も嬉しく思つてゐる次第で。――それから先きの話の「忠臣藏」の大序ですが、宗十郎さんの顏世御前が實に結構で、つやがあつて品もあり、私はほとほと感心してゐますが、六代目が「あの顏世をどう思ふ」と聞きますから、私は大きにほめると、六代目は私もさう思つてゐたといつて、二人で改めてほめちぎりました。年はとつてゐても藝は出來てゐる人と感じ入りました。

三宅 さうですか。よく分ります。一體宗十郎は、狹いが深い人で女形をしてゐれば大丈夫、顏世のいいのは當り前ですが、變に荒つぽい役をしたからいけなかつた。この夏宗十郎の「高賀十種」とかの當り藝を集めたのが、あの選定も一寸どうかと思ふ役がありますが、宗十郎で私は一番敬服してゐるのは「金閣寺」の直信です。あれは妙な役で後ろ手でしばられたまゝ若衆のやうなこしらへで出るため、誰がしてもものにならずに不得要領に終るのが、あの人だと實にたいした色氣や風情が出て、あれでこそ雪

姫の戀人です。それから「八陣」の主計之助がすばらしい。又「紙治のこたつ」の治兵衛が傑作で、帝劇時代に故梅幸のおさんに負けぬ出來で、二枚目の辛抱立役とでもいふやうな性根が、故鴈治郎以上に結構でした。宗十郎はこんな役者で、あなたと六代目との折紙附の顏世と共に、直信、主計之助、治兵衛などならまね手がない。尤も右の「高賀十種」にこの四つの傑作は入つてゐませんでしたが。だから役者の藝の評價はむづかしいわけです。

三津　（うなづいてゐる。）

三宅　所で、私は今日の會見で第一に伺ひたいのはあなたの傑作で一度しかやらない大正十年三月の帝劇所演「源平布引瀧」の二段目「義賢舘」の話です。これは前の團藏が得意の役を、當時久々に貴方が復活して、私は世間へ出たばかりでしたが大にほめた傑作でした。それを數年前の戰爭中、歌舞伎座でこの二段目と三段目の「寶盛物語」とを、羽左衛門一座で通して出す案が出て、私はその相談を受けた。すると貴方が急病、それを今聞くと貴方の盲腸の手術の時に當つたわけだが――そのため故十二代目仁左衛門に義賢をやらせる事になつた。併し、この役を知つてゐる人がないために內部で困つてゐたのです。それで私は貴方がそんな手術をしてゐるとは知らず、一寸した病氣位に聞いてゐたので、義賢なら三津五郎氏に聞くに限るといつて大に貴方を推薦したのです。といふのは、松竹は貴方の義賢を、社長や故岡さん、遠藤さん迄見てゐないで、偶然私だけより見てゐる者がなかつた。私はその相談の席上で一人で至藝とほめちぎつて、ぜひあの名演技を再演してほしいといつた。そこで貴方に松竹から聞きに行く事になつたが、その返事に「すつかり忘れてしまつた」といふ話だつた。そして誰も知らぬ役だからといつて、女役者の中山延見子に仁左衛門は敎はつてやつた。所が、これが貴方とは雪と炭の相違で丸でなつてゐない。それで私は

非難すると共に、記憶のいい評判の貴方が、あれだけよかつた當り藝を二十數年たつたとはいひながら、忘れてしまつたといふのが不思議だつた。役者として二十五日間やつてゐて、それを忘れるなんて、外の人なら兎に角、貴方としてどういふわけかと、これは數年來の私の疑問ですが、二十五日もやつて忘れてしまつたのですか。

三津　（考へてゐる）あ、それは今聞いて思ひ出したが私の手術中でした。成程松竹から人が見えましたが、私は絶對安靜でとても苦しくて、本（臺本）を手に取る事も出來ないし、口もきけないから、よく本でも讀み返さないと分らないとだけお答へしたのでした。

三宅　さうですか。それで初めて分つた。――忘れたのでなくて、病中では分り兼ねるといはれたわけですね。いや、それで分つた。私は大正三年十一月の狂言座第二回公演の市村座で、六代目が木下歪太郎の「南蠻寺門前」をやり、貴方と六代目とで吉井勇の「句樂の死」をやつたが、この公演は六代目がよくなく失敗の方だつた。併し、貴方の盲のはなし家の小しんは實に原作に忠實で、吉井勇氏は某誌でそれを語つて貴方がせりふをよく覺えたとほめられ、更に作者としてはせりふをよく覺えてくれる役者程嬉しいものはないといつておられた。私はそれを覺えてゐて成程作者たる以上、自作のせりふを覺えてくれる役者程有難い事はあるまいと、察しがついたわけでしたが、當時からかく貴方は物覺えがいいので有名で、私はそれが好きでしたのに、右の義賢のみ貴方故に不思議千萬だつた。でも、これは手術中のお返事の行き違ひと分つてそれでこそ貴方だと思ひます。でも、これを聞かぬ中は不審でならなかつたし、あの「義賢館」が、仁左衞門で不良だつたのは殘念です。あれはぜひその中簑助君に教へて復活してほしい。

三津　（うなづく）え、あの役は故人の傳九郎さ

んに教はつたので。傳九郎さんが團藏さんのを見て知つてゐて教へてくれたのですが、傳九郎さんは實によく知つてゐましたよ。

三宅　さうでせう。團藏畑のものは明るくて「佐倉」のめつたに出ぬ「門訴」を團藏ゆづりでやつたのを見て、私は感心したが、さうでしたか。

三津　それに私がやつた時、こんな劇評が出たのを覺えてゐますよ。三津五郎の義賢が幕切れに口をあけて死ぬのがをかしいと。だつてあの幕切れは口をぱくりとあいて、頭から下へつつとうつむいて倒れて死ぬのが、昔からの約束ですからね。その變つたやり方で口をあけたのが、逆に變だといはれたわけで。

三宅　やはり吉井氏をして感謝させた物覺えのいい貴方ですね。よくそんな劇評迄覺えてゐられるのは。――これで私の數年來の疑ひはとけたが、もう一つ貴方の傑作の「御所櫻堀川夜討」の四段目「藤彌太物語」について伺ひたい。これはこの七月東劇で三十餘年目で出た。東京で私の最も古いファンの某氏さへ、これは見落してゐて知らないが、かねて傑作と聞いたがどういふ所が見どころか、主な點を手紙で教へてくれと賴んで見えた。私は貴方のこの傑作がこの時代に無事復活したのが嬉しく、幸に演技を筆記した方のノートは小さいもの故十冊餘り持つて來られたので、この最終の上演大正四年十一月帝劇の女優劇の時のノートの、主な寫しを書いて送つた。尤も、この時は女優劇だから森津子の靜御前でよくなく、その前の横濱座の方が配役はよかつたが、兎に角書いて送り、出、三味線の立廻り、人形ぶり、物語の急所のよさをいつてやつた。すると見物後非常にほめて來て久々で本格の歌舞伎、つまり、近頃の理智的でない歌舞伎が見られたと喜んで來ましたが、あれは四代目芝翫ゆづりと聞いてゐますが、どういふ經路で貴方がやり出したのですか。

三津　え。あれは前の前の坂東秀調さんに教は

つたのでした。私の十六の時で新富座で八十助の子供芝居でやつたのです。靜御前が私の妹の故玉三郎、磯の禪司が獅々丸で、人形ぶりの足をふんだのが、今京都で常磐津の師匠をしてゐる當時の富之助でした。それで秀調さんは芝翫の藤彌太の時に靜御前をしてゐて、實にくわしくすつかり覺えてゐたので女形でもえらいものでした。

三宅 成程、それで分りました。あれが芝翫ゆづりとは聞いてゐましたが、貴方と芝翫との年代が離れてゐるのにどうして敎はつたかと、これも不審だつたが、それを知つてゐた秀調が、少年の貴方に傳へたと聞いて年代が一致してよく分りました。……だが、名人ながら女形であんな立役をよく覺えてゐたものですね。

三津 え、え。それはえらいものでよく知つてゐられました。

三宅 いや、名人なら女形でも必ず立役の事迄も知つてゐるやうですね。前の梅幸の勘平あれは結構。

三津 (それにひどく賛成して)さうですよ、梅幸さんの勘平は結構で實によく知つてゐられました。

三宅 さうでせう。藝に明るい貴方がさういつてくれて私は嬉しいが、大正三年秋帝劇の梅幸の勘平を見て全く感心した。所が、當時の新聞劇評は甚だ不評で私は三年後その駁論を書いて、梅幸の勘平を推賞した事があつた。だが、女形出で見た目がわるいので不評だつたのですが、仕事のうまさ、中にも財布を見る所の妙味は格別で、おかるの役者があれだけ勘平の細部と性根とに通じてゐるのも、五代目の側で勉强した頭腦のいい梅幸だからだと、本當に奥床しく思つたのでした。

三津 (目を光らせ同感しながら)え、え、梅幸さんの勘平はうまいもので又よく知つてゐましたよ。六代目の勘平でもみんな梅幸さんが敎へたのです。五代目の時は六代目や我々も子供でよ

く知りませんでしたから。

三宅　さうでせうとも。それでないと年代が合はない。藤彌太を後の秀調が教へ、勘平を後の梅幸が教へたと聞いて初めて年代が一致します。でも、この二人の名女形が貴方や六代目にそのいいタネを植ゑつけたのは藝界祕話だ。だからいいタネ、むづかしくいふといい傳統は大切にしたい。この頃歌舞伎の傳統と封建性とを一緒にしてゐますが、あれは行きすぎ論だ。――それで名人秀調は藤彌太でどんな所をやかましく教へましたか。

三津　それは全體にいろ〳〵教へてくれましたが、物語り、人形ぶり、立廻りなど殊によく教はりました。

三宅　成程、私がそれらの角々をノートして面白く感じたが、秀調の教へが光つてゐたわけですね。――序に、貴方のあの時の人形ぶりを結構と思ひながら、大正四年でまだ學生のため所感を發表する法がなかつた。すると小宮豐隆氏が「讀賣新聞」の文藝欄で、「人形ぶり」といふ記事を書き、貴方の藤彌太をほめ、特にその人形ぶりを認め、歌舞伎の人形ぶりの價値を推讃せられたのを、私は大にわが心の代辯と喜んだものでした。……傑作「藤彌太」はぜひ京阪でやつて頂きたい。そしてあれは義賢以上にトクな出し物だから、簑助君に傳へて殘して頂きたい。七月の東劇の時、某歌舞伎研究家は「藤彌太」を丸本の原作のみから推して、つまらぬ作故に亡ぶべき舊劇だといつてゐたが、それは視野が狹いかと思へます。歌舞伎や丸本物は作も作だが藝で生きるのです。「藤彌太」を大正十年頃明治座で故多見藏がやつたが、老巧多見藏でも貴方のやり方とちがふためか、丸で見てゐられずつまらなかつたのでしたが、貴方だといいものになり、小宮氏さへ動かしたわけです。ですから藝の力で、いい傳統の光る貴方の藤彌太を尊重したい。――もう一つ貴方の「吃又」、故菊次郎のおとくがやつたがこれも

よかつた。

三津　（この頃から鏡台に向ひ、「身替座禪」の奥方の顔にかゝり出す）え。本當にさうでした。（なつかしさうにうなづく）。

三宅　あれはきちんとしてゐて派手で歌舞伎的な「吃又」で、六代目とは正反對の賑かなやり方ですが、これもいつも疑問でしたが、あれは誰から敎はつたのですか。

三津　新十郎です。新十郎が九代目團十郎のを見て覺えてゐて敎へてくれたのです。

三宅　えつ。團十郎？　これは驚いた。團十郎の型といつてやつてゐる某優の「吃又」は、變な寫實一點ばりで不思議でしたが、貴方のが團十郎流とすると、私は初めてそれでこそ團十郎は名優と思へます。某優のがもし團十郎とすると、團十郎はどう考へても名優でないので、私は疑問だつたが、新十郎が傳へた貴方のが團十郎と分つて、それでこそ團十郎は名優ですよ。

三津　（苦笑してゐる。この前後から簑助君が樂屋の入口へ來る。狹いため中へはひらず上り口に腰をかけてゐる。そして簑助君もにやにやしながら、團十郎の型だといつてゐても存外團十郎を知らない人が多いのぢやありませんかといふ。鏡に三津五郎の微苦笑が再び寫る）。

三宅　それから失禮な質問ですが、震災前私は一年半新富座の仕事を手傳ひましたが、その時貴方も市村座を出て新富座の吉右衛門一座へ加入して見えた。それで幕内の人たちと貴方の舞臺を見てゐると、お得意の荒事の見得の時どうかすると片足の親指が上つてゐない。見得で足を出してきまる時は、必ずその出てゐる足の親指がぴんと力んで上をむくのに、貴方の親指が上らないのは、貴方だけの藝の出來てゐる人で不思議といひ合つたのでした。すると果して貴方のどつちかの足の親指が、……

三津　え。右の足の親指が不自由です。

三宅　さうですか。これも永年の疑問でしたがよく分りました。貴方だけの人に力のはいる筈

の足の親指が上らぬわけはないと思つてゐたのでしたが。

三津　六代目もどつちかの指が不自由ですよ。

三宅　さうですか。舞踊の二名人が互に指に缺陥があるなど天下の皮肉ですな。いや失禮。それから最後に私は貴方が明治末期に市村座で出した小品舞踊の「五變化」（番附では「七變化」とあつて、故彦三郎の榮三郎がツナギに出てゐた）を大變面白く拜見した。その寫眞も常に保存してゐますが、源太、傾城、朝日奈、福祿壽、丁稚の五役が實に絶品だつた。あれはあれつきり出ませんが、貴方らしい踊りで貴方の長所の出るものですね。

　簑助が傍で、さうさうあれは私の八つの時で、丁稚を見てそのまねをした覺えがあります、とささやく。

三津　さうでしたね。さういはれると思ひ出しますが、あの變化物は稽古なしで舞臺へ出たんで面喰つた覺えがある。

三宅　といふと。

三津　前の勘右衞門さんが丸で稽古に來てくれないんです。お前さんなら稽古はいいといつて振り附に來ないんです。それで初日のあく迄稽古なしで、いざとなつて舞臺のかげで一寸振りをつけてもらつて出たんで。――

三宅　そうでしたか。當時貴方は三十位の筈だが、既にそれだけ專門家から腕を認められてゐたわけで、あれが面白かつたのも道理ですね。

三津　（微笑してゐる）それにあの源太は、三代目の永木の三津五郎が當時江戸へ出て來て、踊りで三津五郎と競爭して居た三代目の歌右衞門の人氣がさかんなので、源太の唄の文句の中で「今年やかぼちやの當り年」（歌右衞門は頭デッカチ）と皮肉つたのに對し、歌右衞門の方でも早速景淸の踊りの中で「なんのへちまの景淸が」（三津五郎の仇名はへちま）と返報したという事で。……それで今日でもカボチャ源太にヘチマの景淸と言つて居ます。

三宅　さうですか。例の歌右衛門嫌ひの蜀山人が三津五郎に、そんな毒舌を敎へたのかも知れませんよ。私はいろんなものを讀んで三代目の三津五郎を尊敬してゐますが。……

この時いよいよ「身替座禪」の出が迫つてくる。

流石に三津五郎で、鶴澤友次郎なみに話はつきない。私は殘念ながら又の再會を約しつゝ樂屋を出る。今度の「合邦」の俊德丸すら上出來の、冴え返つた三津五郎の健康を念じながら。——

（二二年十二月）

尾上松緑

松緑の「權太」

三宅　顔見世興行のお忙しい中を、わざわざ來て頂いて相すみません。私は今の若手ではぜひ一度君に會ひたかつたが、東京にゐてその機會がなかつたのですが、君に會ひたい理由の一つは拙著「演劇手帳」の隨筆に書いてゐるが、君が役者になるかならぬ中の、中學生時代に、本郷座で吉右衛門門下の「梨苑座」なる稽古芝居があつた。私はそれを見に行つてゐると、偶然私の隣の席に紺絣の着物を着た君が、十才程の男の子をつれて見物に來てゐた。――私は當時豐といつてゐた君と分つたのだから、もう君は役者になつた時の筈だつたが、私は君が實に熱心に芝居を見てゐる態度に好感を抱いた。尖五郎の「石切梶原」を見てゐた時に、君はそのつれの子供に、あれはどうだ、これはかうだと一寸演技の細部を説明してゐたが、それも殆ど聞えぬ位控へ目でよけいなおしやべりをするのでもなかつた。私はそこでこの子豐なる役者は見

込みがある！　と内心思つたのです。これは考へてみると昭和四年冬でしたが、兎に角その隨筆で私は君をほめておいたのだが知つてゐますか。

松緑　（目を細くして笑ふ）え。それはあれが雜誌「東寶」に出た時拜見し知つてゐました。（少し顏を赤らめてゐる）

三宅　さうですか。私はそれ以來君を注目してゐたんですが、一體君はいつ役者になつたのですか。

松緑　昭和三年一月、市村座が松竹へ併合したあの最初の興行の時から、菊五郎さんの所へ預けられて、役者になつて豐として十六才で舞臺へ出ました。

三宅　さうでしたか。それなら中車が上置で、默阿彌の「日本晴伊賀仇討」の通しに、中幕に六代目初役の玉手で中車との「合邦」が出た時でした。してみると梨苑座はその翌年だつたわけ。それから先きにいつたやうに君を注目してゐたが、勿論役らしい役はつかなかつた。併し、「花形歌舞伎」といふのが出來て、新宿の「青年歌舞伎」の我當、簑助たちに對抗して若手養成をやりかけた時、歌舞伎座で君の「船辨慶」を見て私は感心したね。うまかつたね。この間の「土蜘」が好評だつたがそれ以上で、殊に、後ジテになつての引つ込みの業など、うまく六代目を學んでゐて驚いた。前の靜も小綺麗だつた。私は當時「東日」の劇評で極力賞讃したが。

松緑　（またも目を細くして笑ふ）え。覺えて居ります。（やはり少し顏を赤らめる。）あれは私の二十才の時ですから、昭和七年だと思ひます。

三宅　さうですか、あれは傑作でぜひもう一度やつて本式に世間をあつといはせてほしいね。尤も、この頃はふとつてゐるから前の靜は少し無理か知ら。

松緑　え。え。あの時分から見るとこんなにふとりましたから。（といひつゝ肩をそびやかして一寸着物の襟を合してみる。その樣子は流石に親子で

幸四郎の舞臺上の或るポーズに似てゐる）

三宅　それは殘念、靜はやはり女らしく小綺麗でないと困るからね。だが君は終戰後どの方面でも好評だ。この仕事でこちらの嵐雛助君と初めて對談した時に、雛助が子役時代、君が學生でゐながらよく親切にしてくれた事をいつてゐた。又、戰爭中「中央公論」の企劃で、私が芝翫と梅幸とを呼んで對談をした席上でも、女方として君がやりよく、よく舞臺やふだんでも親切でいい亭主役者だとほめてゐた。それは右の對談を集めた「俳優對談記」を見てもらへば分りますが、この間我當君が君の話をした時も、友達の松綠君といつてしきりに君の噂をしてゐたし、君は隨分評判がいい。所が、私は何かでちらと讀んだが今度休んでゐる彦三郎が、梅幸の話をして、梅幸は實に評判がいいが、役者は評判のいい人程自分で注意しなくちやいけない、といつてゐたがうまい事をいつたと思つた。吉右衛門はいつか私に「役者だけはほめるのがいけない」といつたが、これも味ふべき言葉で、若い人は無暗にほめると慢心するから警戒を要するわけだね。だから私は君が內外共に好評なのを實は案じてゐる位。

松綠　いいえ。梅幸さんやうちの兄の海老藏みたいな役者は、いくらほめられても大丈夫です。絕對に大丈夫で。

三宅　といふ意味はしつかりしてゐて、人のおだてや策動にのらぬといふわけですか。

松綠　（だまつてゐる）え、梅幸などその點は本當に大丈夫です。併し、私のやうな者はさうはいかない。私には大きに尤もな忠告です。——

（再び無言で考へ込んだ深刻な表情をする）

三宅　といふとどういふんですか。

松綠　私は氣が小さいのです。何事でもびくびくして氣になる性分なのです。ですからほめられてもけなされても動搖するから、私こそ世評で反省しなければいかん。氣が小さいので弱つてゐます。——

三宅　成程、君は今これを眞面目に眞劍にいひましたね。氣が小さいのがいけないと、いひ難い事をいふ君の反省心に私は打たれました。……それならいひますが役者でも藝術家だ。藝術家の以上私は氣が小さくなくては嘘だと思ふ。藝術家たる者がまきざつぽうのやうな神經を持つてゐてどうするのです。役者は氣が小さくていいと思ふ。勿論、理想的にいふと藝術家は細心で、一面剛放がいいにはいい。故羽左衛門はそれで太つ腹でゐて、一方細心でよく覺えてゐて針のやうな神經を持つてゐた。私はあの人と「對談」した時、私がつい女の話を出したら、當時六十數歳のその方のチャンピオンの羽氏が、ぽつと頰を染めたが、そんな若さや、神經質な氣の小さい一面があつた。六代目だつてあ見えて氣の小さい所はあると思ふ。それでなければあんな細密な藝が出來るわけがない。まして吉右衛門や井上正夫のやうな役者は、あの氣の小ささが天分で、いはば天才的な天の惠みです。吉右衛門にもし氣の小ささがなかつたら、木にきりで穴をほるやうな、あれだけ鋭い、人の氣持に食入る藝の滲透性はないと思ひます。役者にとつて氣の小さいのは決してわるい事ではない。……

松綠　（目を見はつてゐて無言が續く。）

三宅　私はさうして君が自分を顧みる反省の强い點を、初めて伺つてかへつていい事と思ひます。六代目だつて細心なんですよ。

松綠　え、それはもうその通りです。一昨年「千本櫻の四の切」の忠信をした時は、實に丁寧に一々こまかく教へてくれました。梅幸の靜にもさうで二人を呼んで本當に珍しい稽古をつけてくれました。ふだんはそんな風でなくて、こつちで見て覺えたり聞いたりしてどうにかまとめて、やつて見せると所々直す程度ですが。——忠信は一々手をとらんばかりで、初めの忠信でゐる間がやかましくて、引つ込みの下げ緒を持つての見得など、大事だといつて委しく教

へられました。それで初日など後見に出てゐてつききりで、例の「狐ぢやな」の所は、舞臺裏に隠れてゐて、白狐に變る衣裳のひきぬきの玉を後からひかんばかにやつてもらひました。

三宅 成程ね。さうでせう。

松綠 それから上野の「都民文化館」で、私が「三番」をやつた時も私につききりで、自分は翁（千歳は男女藏）に出てゐても、「いいかい、いいかい」と心配して聲をかける騒ぎでした。

三宅 それ御覽、苦勞性と小心とは同じで、それだけ苦勞性で心配するのは、つまりは人一倍氣の小さい所もあるからだ。あらゆる藝に携はる人は氣が小さくていいんだ。

松綠 ……

三宅 今六代目に忠信を教はつた話を聞きましたが、君は一體どういふ風にして仕込まれましたか。

松綠 （急に明るい顔つきをして）それがね。私は本當にいい時に仕込まれたんです。六代目ももう年で今なら根氣がありませんが、私が六代目の所へ行つたのは二十年近い前ですから、元氣ざかりで本當にいい時代だつたので、二度とあんな事はして頂けません。いつでも興行毎に千秋樂の晩は皆と一緒に「お目出度う」にお宅へ行きますが、それから食事が出ますと、その時何か一つその興行の時の六代目の出し物を、見てゐて覺えてゐる筈だからやれといふ事になります。「三味線を出せ」といつて、三味線をひかせて、大抵踊りですが、着物を着たまゝで踊りを舞臺通りにやつて見せるのでした。——それは夜おそく二時三時になつても平氣で、見てゐてくれて、急所を一々直して駄目を出すやり方でした。

三宅 いい事ですね。私はいつも思つてゐるが、六代目がさうして貴方がたに教へる所を一度見たいと思つてゐますが。それから。

松綠 又、それどころでなくてみつちり教へる時は、猿又一つの眞つ裸になつて、自分もその

裸で踊つて見せてくれるのです。こつちも裸で裸同士の稽古で、實に大變なもんで、あんな事はもう二度とやつてもらへません。何しろ年ですから。——私はそんな風にやらされたので全く仕合せでした。

三宅　どんなものを裸で習ひましたか？

松綠　忠信の「吉野山の道行」などです。自分が團十郎にさうしてやかましく教はつたのものですから、忠信は本式に教はりました。え、先づ性根からはひるやり方で、忠信は靜御前の家來だ。どうかして色戀の道行に見えるが、それは一番いけない、靜を見守つてお主についてゐる家來の腹がなくてはと、それをよくいひ聞かされてから仕事にかゝるわけです。兎に角裸でやるのですが、いくらやつても疲れずに教へてもらつたのでした。

三宅　今度の顏見世は六代目も元氣恢復だつたが、もう二度とそんな眞似は出來ませんね。君はいい修行をしましたね。尤も、芝居でもさうでせう。その方の話をして下さい。

松綠　七月の東劇の「髮結新三」の勝奴には閉口しました。隨分やかましくいはれて、毎日氣に入らず叱られました。新三のうちの場が廻つて「家主の內」になりますが、その休んでゐる間一々せりふや何かに駄目が出て、勝奴になつてゐないと叱られました。あれは伊三郎さんの松助が持ち役で、私は前年それをよく教はつてゐたんですが、奴だからやはり私のやうにふとつたからだの大きいものはいけないんでせう。あれには弱りました。もつと安つぽくしろといはれまして。

三宅　それでどういふ所に駄目が出たのです。

松綠　源七にいふ「たがのゆるんだおぢさんさね」の時代世話のいひ方がいけないといふんです。その後へ「ねえ親方」といつて新三にいふせりふもいけない。お前のやうだと波野の源七が怒れないつて毎日叱られました。中日になつても舞臺が廻ると駄目でした。

三宅　あ、それはその筈であの二人の「髪結新三」が、天下の生世話物の決定版となつたのは大正四年八月の帝劇で、市村座以來明治座と三度目の上演の時でした。その家主は初演が友右衛門の東藏、二度目が吉右衛門、その三度目が松助でしたから、この三度目から歌舞伎座以上の公定相場がついたので、實に面白く六代目と吉右衛門との油がのりかけた時代で、この時吉の源七、東藏が勝奴、その時松助がその「ねえ、親方」のせりふに關して藝談をはいて、六代目に話をしたのでした。この話は當時の「都新聞」に連載されて面白いものだつたが、その五代目以來の松助ゆづりのやかましい所を、貴方に教へ込まうとしたわけですよ。

松綠　さうでしたか。

三宅　兎に角生世話物といつても、時代にする所があるから面白い。それだけにそんな時代と世話とのなひまぜが一番むづかしい。六代目と谷崎氏などの會の時も、私が二月の東劇の「千本櫻の通し」は大變だ、第一六代目が二月は大阪だが、誰があのむづかしい芝居（それは「忠臣藏」以上）の二段目三段目を教へるのかといつたら、六代目も同感で、中にも三段目の「すしや」はまだしもだが、その前の端場の「木の實」がむづかしいといつてゐた。全くその通りであの場の權太のかたりなどは、悉く時代世話のなひまぜだ。權太が首が落ちるといふ件の「臺座の別れでござえます」なんか、そのメリハリが面白いのだと、つい私も物眞似をしていつたら、六代目はうなづいてゐたのでしたが、時代世話は君たちにむづかしい代り、うまくやれば見る方は實に樂しめるのです。

松綠　本當にさうです。私にもよく分りましたが、御自身は餘裕があつて、或る日木戸の戸が外れてうまくしまらず、私などあわてる所を、權十郎の家主に「大家さんあれを直してくんないか」といつたのが大受けでした。——それで家主をその中一度やつてみたい、その時は私に

新三をやらせるといつてゐました。

三宅　それはたいした話だ。君も名譽で六代目初役の家主長兵衞に、若い君が新三とは素敵ですよ。うまい事をいふね、あの人が家主とは。尤も、ふけ役は外れる時があつて、松助の傑作「因果物師」の小兵衞を、羽の六三、仁左のおそので六代目がやつて失敗してゐますが。でも、この家主の方はきつといいでせう。だから君は七代目尾上菊五郎になると、京の町では噂に上りましたよ。

松綠　いいえ。私が七代目なんて絶對にそんな事はありません。——

三宅　兎に角君は若手中第一の幸運兒だ。君がいつたやうに二度と再び出來ない六代目の藝ざかりの滋養分を吸收出來た。どの若手も六代目崇拜で君のやうに親類、いや實子のやうな世話をしてもらふのを望んでゐたのだ。君より實際は切つても切れぬ甥の彦三郎さへ、この頃某紙で役がつかぬから腕の見せやうがないが、機會さへ與へられれば自分は仕事をして見せるとかいつてゐたが、君は親類格のいい名をついでゐるといひ條、根が他人でゐて甥の彦三郎以上に役がつくのだ。それに幸四郎といふ人は人としてはよく出來てゐますね。私は數年前初めてある會で幸四郎氏に會つたが、私など劇評で相當無遠慮な事をいつて來たに拘らず、初對面の私に禮儀正しく「いつも伜が御厄介になりまして」といはれた。君などを誰よりも私はほめたのを知つて喜んでくれたわけだね。さういふ慈愛の深い父を持ち、六代目には梅幸が女の子なら、君は男の子として愛されてゐるのです。劇壇の限り天下の果報者で、君程惠まれてゐる人はありませんよ。

松綠　（同感して）さうでせう。私は本當にいい時に仕込まれました。それにこの嫌な時代に、私たち役者程惠まれた者はないと思ひます。今のやうな時でも、役者だけは何事も考へずに芝居だけしてゐればいいのですから。こんないい

商賣の者はないと思ふのです。

三宅　いや、その意味なら一寸考へて下さいよ。それにちがひないが、君がさうして役者、歌舞伎役者の仕事に安住出來るのは、つまりは去年五月以後の、歌舞伎の自由上演があるからぢやありませんか。もしあの理解ある處置がなかつたら、終戰直後のやうに時代物は殆ど自粛だから、一體どうして君たちの道は開けますか。君がさうして安心して舞臺に沒頭出來て喜んでゐられるのは、實際自由上演のおかげですよ。私は度々これをいつてゐるのだが。

松緑　（大きくうなづく）それは確にさうですね。

三宅　君だけぢやない、どの歌舞伎役者にも、興行師にもこの新情勢の深い理解を感銘してほしいんだ。日本人にさへその理解を持たぬ冷たい人があるが、文化國家の以上、お互に同黨異伐は謹しんで古典でもいいものは大切にしてほしいんだ。――所で、君は古典で何をやりたいと思ひますか。

松緑　時代物です。すべて楷書でゆく時代物をやりたいのですが。

三宅　賛成。それにはむづかしいが淨るりを勉強しなくてはいけませんね。東京の役者は割に義太夫を知らんから。

松緑　さうです。それでバワーズさんはいつも文樂をよく御覽なさいといはれます。

三宅　えらいね。全くその通りで丸本物や、時代物の限り文樂がもとだから。併し、見る時がありますか。

松緑　いつも興行の日が打つつかつて、九月の東劇の文樂も帝劇でしたし、その前六月大阪へ行つた時も歌舞伎座とかち合つて見られませんでした。

三宅　前年梅幸と對談した時もその事をいつたが、今の君たち若い役者は他の劇場の芝居を見物する時間がないさうですね。だから若い役者では知つてゐる「通し」の芝居などはないといふのでした。何とかこれは工夫して義太夫を勉

强してほしい。それに「聲」の訓練に義太夫程いいものはないから。

松緑　え。その聲で、私は自分の聲がよくないので心配してゐます。（暗い顏をする）

三宅　それも自己反省があるからで、一時より君の調子はよくなつたが、自分でその缺點を知つてゐればいい。又、缺點といふと六代目も神ではないから、あれだけの人でも演技上に缺點や、解釋の上に難はありますね。大正九年に市村座で默阿彌の「村井長庵」を通しで出した。「加賀鳶」の道玄があれだけうまい人だし「天下茶屋」の元右衞門で當てた後だつたから、私は實に期待した。事實、當時雜誌「新演藝」の權威を集めた「合評會」（この會へは六代目も時々出席した）でも、この「村井長庵」をとり上げて批評した程だつた。所が、この時分から六代目は古典に新演出をやり出して、このよかるべき村井長庵が、殆ど素のやり方で芝居をしない。太兵衞を殺した「丁度時刻も寅の刻」もさらさらとしやべるやうにいふだけ、內の場で千太郎に毒づく所も默阿彌調でないやり方で、砂糖なしのしることを食べるやうだつた。あれは當り藝となるべきものを好んで投げたやうな舞臺になつてしまつたのでした。六代目に稀にしろこんな缺點があるから、何もかも六代目さへ眞似ればといふのは危險ですよ。君にはよく分つてゐるでせうが。君はさういう利巧さを持つ人と私は睨んでゐますよ。

松緑　（うなづく）時々そんな事があります。一昨年四月の帝劇の「四千兩」もどうやらその方でした。

三宅　といふと。

松緑　初め一生懸命で舞臺稽古は宛で油が流れるやうによかつたのです。それが帝劇では初日があいてから、あの二番目狂言を初めの第一におきかへた。十一時アキの第一においたので「堀端」があいてゐても、お客がは入つてくる流れ込みの時間で、場內がざわついてあのしん

みりした世話物の氣分がもり上つて來ないんです。そこで自然と足を早くさつさとやり出したので、つまらなくなつてしまひました。

三宅　さうでしたか。それでよく分りましたが、あの時よかるべき當り藝の「四千兩」が恐しい不評で、私はそんな筈はないのにと怪しんでゐたが、それも尤もで、あのしんみりとした生世話の二番目物を、十一時のかん〳〵日ざかりの第一においてあけては、「おでん——あまいとからい」もありませんね。それでは芝居をする氣になれぬのも道理ですが、私は京都でそれが分らず、六代目は一生の當り藝を何故に投げたりするのかと、實に口惜しいやうな勿體ない思ひがしてゐたのですよ。

松綠　その代り氣を入れればたいしたもので、以前名古屋へ旅に出た時、「草摺引」が出て、私は朝比奈、男女藏さんの五郎でしたが、病氣で六代目が五郎に出たんです。

三宅　いい役者が下の役者の代り役は珍しいですね。旅だからですね。

松綠　するとこの五郎のうまさはたいしたもので、舞臺に出て全く恐れ入りました。この代り役を三日やりましたが本當に結構でした。

三宅　君にはさうして六代目のいい所、わるい所が分つてゐるのも頼もしい。うまいといふと私は度々譽たがあの「吉田屋」など、勿論、あの新演出はあの人のみに許される世界だが、あんなうまい藝は一寸六代目でもない位ですね。いはば六代目はフグみたいなもので、うまい代り時としてあたる毒があるわけですよ。フグは食ひたし命は惜ししといふやうに、君たち若手は六代目にフグの毒や、昔からいふチン毒があるのを知つてほしいな。でも、六代目は義太夫はよく研究しますからよくお聞きなさい。

松綠　え、私の缺點は聲です。聲をよくしなければ。……（再び眞劍な表情をする。私はこの人にはこれ以上いふ必要はないと寧ろ同情したくなつて無言の中にこの對談を終つた。）（二二年十二月）

實川延若

故市村羽左衛門と私が前年「中央公論」の企劃で對談した時、あの屈託のない羽左衛門が、珍しくぢつくりと考へ込んだ擧句私に「我々の藝は、まづ一人前の役者でも五十五才位をすぎぬと本當に出來ませんね。」といつた。——

これは同時に彼自身の體驗上の金言でもあつた。卽ち、彼は家橘の養子として竹松と名乘つて新富座で子役に出て以來、約五十年たつたその五十五才頃に、初めて自分の藝がものになつた。或はものになりかけた事實の經驗談でもあるのであつた。人生五十といふやうにかく舞臺生活五十年にして、やつとものになるといふのが彼十五代目羽左衛門の、藝道上の今では遺言同然となつた。私は「一藝三十年」と見て、歌舞伎や文樂の藝道の完成を見積つて來たが、羽左衛門の遺言によるに更に辛くて、實に五十年かゝるわけになる。今この原稿を書かうとして、着いたばかりのSS新聞を見ると、バワーズ氏が中村梅玉が七十でやつと本物になつたと見、それ迄の長い間の梅玉の今のやうにうまくない時期の、長かつたらしいのを諷したやうな意見を出してゐられる。これも卓見で、私は關西生れ故に、梅玉の前の福助、その又前の政治郎時代から彼を長く見て來てゐるが、率直にいふと彼は綺麗なだけでいはば大根(だいこん)の方だつた。初代鴈治郎の相手の小春、梅川、夕霧に扮しても不十分、初役や再演時代の玉手御前も故雀右衛門に一歩を讓つた。その意味で彼を四十年以上見て來

てゐる私が、彼に名技といへたものは僅に一つ、それは近松半二作「替唱歌糸の時雨」の大正元年封切りの女主人公のみだつた。これは東京へは持つて來ずに、左團次の自由劇場の「ボルクマン」の如く、上方のみでやつたよき丸本物の埋れた作の復活だつた。そして彼がその頃珍しく自分の出し物として研究して復活したものだつた。が、これは大阪松竹の非常な「發見」で作よし藝よしで、未完成福助が、この時この私に初めて大根でない名女形になつたのを思はせた。が、これのみで再び可もなく不可もなしの藝を見せられてゐる中、昭和十六年？の歌舞伎座で吉右衛門と「毛谷村」の六助に、おそのをした時、私は二度目で一本參つた。だが、この時は福助でない老梅玉で七十近かつたわけだ。でも、私はこの時分から梅玉は失禮ながら大根を卒業したのではないかと思ふ。そしてバワーズ氏のいはれる如く七十になつて以後、近頃の當りを見せ出したかと思ふ。して見ると梅玉は舞臺生活六十年でやつとものになつたわけだ。羽左衛門の遺言以上に辛いわけである。●

今度實川延若と對談をしたが、近頃で梅玉のライバルは延若、延若の相手は梅玉だが、この延若にも同樣の事がいへる。勿論、延若は梅玉とちがつて、これも四十年以上見てゐる私は、その延二郎時代にやつた歌舞伎物初め、大阪の新派の連中と共演した新派劇は勿論、明治四十二年頃に朝日座でシェークスピアの飜案物らしい「響」なる準新派劇の主役、後大正三年二月に東京歌舞伎座で、アイルランド劇の「兄弟」の新しい相當辛い飜譯劇に至る迄、彼のみは梅玉と正反對で、何をしてもレベル以下ではなかつた。が、彼の素質に根ざす純二枚目の上方のドン・ファン的つうころばしこそ名技といへたが、その他はレベル以下ではないが、さりとて名技と評する傑出した藝は案外尠かつた。所が、私は三年前から京都の殘留生活をしてゐて、所謂關西歌舞伎を見てゐると、私には梅玉より延若の方が驚異であつた。即ち、からだが不自由になつたのみで、その扮する役、殊にふけ役は輪廓の大、快く餘裕のある「間」が持て出した點、せりふ廻しが往來のやうにせきこまず、優に名調子となつた點など、十年十五年前の延若とは別人の感があつた。中にも「宮守酒」の新

洞、「引窓」の南與兵衛、「沼津」の平作、「矢口」の頓兵衛に至る迄相當な藝で、その荒い役は東京の老優以上なのに目を見はつた。更に、昨秋「大曇寺堤」の治郎右衛門を見て、私は全く一本參つた。これは十一代目仁左、初代鴈治郎で私は度々見てゐて、それが當り藝と稱しつゝ意外に空疎で低調な演技に陷つてゐたせゐか、正にそれを凌ぐ大舞臺であり、惡寫實のない歌舞伎性が濃厚であつた。私はその時分ラジオでもその名技を推した放送をした程だつた。

併し、私がかく延若見學五十年近くで、その藝の完成に目を見はつたのは、この三、四年來なのだ。延若が七十近くなつてからなのだ。それも延若が九才の初舞臺以來實に六十年の舞臺生活の然らしめる所なのであらうか。して見ると「藝」は實に五十年は愚か、六十年たゝぬと本物にならぬとすら結論づけられるのだ。今更私は「藝」のむづかしさを思ふにつけ、その「神聖」が分つた氣がする。

この意味で近頃の私は上方歌舞伎で誰よりも延若を見るのが樂しみだ。それは梅玉以上に藝にコヽクがある人故に一層樂しみである。そこで延若を初めて訪問したく、白井信太郎氏に御紹介をお願ひすると、「え、延若をまだ御存じなかつたのですか。」と目をくるつと玉のやうに動かされたが、（それが信太郎さんの驚きの表情の癖）引っ込み思案の私は舞臺上でこそ延二郎時代から、菊吉以上の古なじみでありつゝ、未だ一度も會つてゐないのは、かういふ仕事をする者の一人としては、信太郎さんが驚かれたのも御尤もであらう。そこで信太郎氏は親切にいろいろ斡旋して下すつて、延若の二月南座出勤中、その部屋へこの私を初めてつれて行つて下すつた。信太郎氏にお禮をいつておく。

すると延若老は「ようお出でやす。」と、舞臺以上にテンポののろい言葉だ。私はおや〳〵と思つた。舞臺はふけ役でこそあれ、又、この「忠臣藏」でも四段目の由良之助は堂々たる演技といへるのに、樂屋で會ふと悲しいかな意外の弱り方だ。

三宅　私は兵庫縣生れで子供の時から、大阪の姉の家で可愛がられて、貴方などの芝居は十才頃から見て來てゐます。それで貴方のこの頃の

藝が實に結構なので、進んでお目にかゝうて「對談」したくなつて、白井さんに御紹介を願つたのですが、貴方に會つて第一に聞きたいのは、貴方の延二郎時代に、我童（十二代目仁左衛門）、魁車の成太郎の三花形に、嵐吉三郎や映畫へ行つた嵐璃徳、それへ後見として名人の嵐璃珏を加へた若手一座が出來ましたね。あれは東京の市村座の菊五郎吉右衛門一座に匹敵したいい座組で、芝居も面白く人氣もあつて、鴈治郎の大一座にさうひけをとらなかつたのでしたが、あの面白い一座は何年から始まつたのでしたか？　私は當時の番附をすつかりなくしたので伺ひたいのですが。……

延若　（ぢつと考へてゐる）いや、あれはいつでしたかな。私はこの頃物覺えがわるくなつて、すつかり忘れてしまつたのでそれは困りましたな。……えーと……

三宅　さうですか、それは殘念。私は番附や記錄をなくしたので、はつきり斷言はしませんが、確かあの一座は市村座成立の明治四十一年十一月より四ケ月後の、明治四十二年三月この京の明治座ではなかつたでせうか。出し物は新聞小說の脚色物で時代物の「銀婚式」といふ通し狂言、上方流にいふとこれが前狂言で、中幕の上が貴方の「すしや」、下が當時の貴方のライバルの我童の「松平長七郎」で、大切に所作事がついてゐました。

すると傍から「まあ先生。よく覺えてゐらつしやいますな。」とあだつぽい、いい響きの東京辯が聞える。いふ迄もなくこの綺麗な聲の主は延若夫人。失禮ながら東京の赤坂でTといつた妓籍にあつた有名な人。延若とのロマンスは東京中に響き渡つてゐて、私すら慶應の學生時分既にこの夫人のTさんは知つてゐた。それ程延若の出る芝居へは實に度々棧敷へ姿を見せてゐた方。しかも、偶然他人のそら似ながらこの夫人は、既記の私の大阪の姉に似てゐられる。姉の方が年上だが、若い頃はよく似てゐて私は度々姉にそれをいつた位だつた。失禮多謝

延若夫人　ねえ先生、そんなによく覺えてゐらつしやるのなら、うちにもう十年位前に會つてゐて下すつたら、本當に話が合ひましたのにね。うちもそれ迄は實に物覺えのいい人で、何年何月と、妾が忘れてゐる事さへすつかり覺えてゐたのでした。惜しい事ですわ、本當に。もう少し早く會つてゐて下さるとよかつたのに。でも、先生、そんなに古い事を覺えてゐらつしやつて先生一體おいくつです。（これは小生の方でたぢたぢ、赤面。）

三宅　え。そんな昔を忘れずにゐるのはあの若手一座の芝居が面白かつたからですよ。ねえ、延若さん、あの一座はその四十二年三月に出來たのではなかつたかと思つてゐます。それでそれがお忘れは殘念ですが、これは市村座の芝居に負けぬいい芝居で「すしや」では、璃珏の彌左衞門が傑作で、東京でもあれだけのものはありませんでした。貴方の權太もこれで後年の當ゲ藝となつたのでしたが、あのやり方は誰に教はつたのですか。

延若　私は誰にも教はりまへん。あの時など幇間の芝居で「すしや」を見て、それから權太のやり方を考へたのです。

三宅　えっ！　さうですか。大膽なお言葉ですが、さういふと貴方は初代延若に早く別れ、孤兒で僅に十一代目仁左の引立てで一人前になられた方で、師匠なしの獨力でやつて來られたのは知つてゐましたが、當り藝の權太がそんな所にタネがあつたとは驚いた。さう伺ふと今「忠臣藏」が出てゐますが、戰爭中に東京の明治座で貴方が「忠臣藏」の五役をやられたが、それは簡略でつまらなかつた。それよりその初演の「通し」の大序から九段目迄の七役を、大正三年四月新富座でおやりになつたが、あれは面白かつたし、第一大阪の役者で東京の檜舞臺で「忠臣藏」をやつたのは、近世では貴方が初めて。鴈治郎さへその後でしたが、あの時の貴方

の早替りの七役師直、由良之助、勘平、定九郎、與市兵衛、平右衛門、戸無瀬は、まだ若い延二郎時代といふのに、相當なもので東京人はあつといつた。平右衛門が第一によく、それから意外に戸無瀬が結構でした。歌六の本藏もよかつたが。――

延若　え。歌六はえゝ役者でした。

三宅　同感。それであの七役の「忠臣藏」は劃期的なものでしたが。

突然延若の床山（とこやま）らしい爺さんが、延若の口がもつれてしやべり難いのを見兼ねて聲高く『え、あの時は歌舞伎座で歌右衛門さんの「先代萩」の政岡に、うちへ勝元一役を持つて來たので斷らはつた。そこでうちで「忠臣藏」の七役を持ち出したので、大谷さんが一つ道樂でやつて見ようといつて、同じ月に新富座で初めて出したのでした。大切に「ちよいのせの善六」がついて……』

三宅　さうでした。それが當つたので伺ふわけですが、あの七役の演出法は誰に教はられたのでせう？

延若　誰にも教はりまへん。古い話ですが上本町に「松の席」といふ小さい芝居小屋があつた。え、稻荷座やなんかよりもつと小さい小屋で役者もそれ以下の三流で、中村芝十郎とか、尾上小兎三といふのが出てゐました。そこでその「忠臣藏」の七役をやつてゐたのを見たので、あゝ成程かうかいなと思つて、それを私がとり上げてあゝしてやつたのです。

三宅　えつ！　それも驚いた。私さへ知らぬやうな名もない役者の演出にヒントを得て、大舞臺にむくやうにやられたのですね。（實に大膽不敵と心中でびつくりする。）それにしてはゲビてもゐないし、一寸見て來てよく覺えられたものですね。

延若夫人　さうなんですよ。さういつちや何ですが近頃こそこれですが、それ迄は本當に記憶のいい人でしたのに。……

延若　子供の時から物覺えはよかつたので。十一、二の時に落語のさげなどすつかり覺えてしまつて、寄席へ行つて二階からはなし家の話を聞いてゐてさげになると、私の方でいつてやつたので、「あの子供が」とよく叱られたものでした。落語なんかもみな宙で覺えてしまつてゐたので。……

三宅　いや、どうも、さういふと貴方の傑作として私が尊敬して、これのみは度々推讃して來ましたが、貴方の「雁のたより」「乳貰ひ」「宿無團七」などはどうしてまとめられたのですか。

延若　これも人に教はつたわけぢやないので。おやぢのやり方も分らないのでしたが、その時分の祇園や大阪の古い藝者や、京の「道場の芝居」の仕打の婆さんが大變な通だつたので、そんな人にいろ〳〵訊いてみたのです。すると、「お玉はん、あかーんがな」といつた所がよかつた。のれんから首を出したり、手紙を頰にまいたりするあたりのおやぢはよかつたといふ事で、臺本を見てそんな所を話のやうにそのまゝ移してやつただけです。

三宅　成程。よくそれであんなに出來上つたものですね。如何にも古い上方の芝居らしいので、さぞ型や口傳があつたと思つてゐましたが。……それに「雁のたより」などは貴方はいつが初役ですか。これを東京へ持つて見えたのは明治末期、「乳貰ひは」大正二年六月でしたが。

延若　（考へてゐる）どうもはつきりしまへん。その「雁のたより」も初めは「雪月花」でやつてゐたんで。それをその東京で初めて出す時、岡鬼太郎さんが手紙から思ひついて「雁のたより」といふ狂言名題をつけてくりやはりましたんで。……あとはみな私獨りの工夫で。

私は再び内心あつといつた。かうなると彼の性來の器用は寧ろ天衣無縫、これらの上方の世話物の名狂言は初代鴈治郎の神品「河庄」にさへ劣らぬ位、

よき傳統と時代のさびがついてゐるのに、それは若き延二郎の獨創同然で出來上つてゐたわけだからだ。さういふと明治大正中期の東京の小芝居へも、この延二郎は今の夫人をつれてよく見物に來てゐたのを、學生の私は何度見かけた事であらう。さういふ二級三級品を見學して、それを自分のものに植ゑつけるとは！　いはば「器用の天才」といつた特殊の頭腦を持つ人かと思ふ。そこでふと思ひ出すが大正初期彼は帝劇へ出て、その時梅幸が「土蜘」をやつてゐたのを、彼がひま〳〵に見てゐて、すつかり覺えてしまひ、凡そ延若に不向きな能がかりで踊りの「土蜘」を座興に梅幸の面前で、すつかりやつてのけて梅幸をあつといはせた逸話を思ひ出す。又、これは惡趣味で私は非難したが「髮結新三」すらやつてのけた。立役、敵役、二枚目、三枚目、實事、和事、親仁方、女形の世話女房や片外しものから婆、凡そ出來ぬ役はないのを、今更のやうに思ふが、それでゐて近頃のふけ役の老熟がある故に、世評の彼の器用は、「器用貧乏人助け」でなく、「器用長者自分助け」といへるかも知れない。——

三宅　いやどうも、いろ〳〵と私には意外な話で愉快でした。おかげんがよくない中を本當にすみませんでしたが。でも、終りに、貴方のヒットの明治四十二年秋の朝日座上演近松の「女殺油地獄」ですが、私はその初演、再演の翌年一月この南座の演出から、東京の分迄悉く見てゐますが、あの脚色者は當時渡邊霞亭氏との噂でしたが、無論番附には出てゐなかつたが一體誰でしたか。

延若　霞亭とはちがひます。間無聲といふ人。

三宅　といふと朝日座時代だから、それは新派の作者でしたか知ら。

延若　私もよく知りまへんが、そんな事で出來たのを私が考へてやつたので。

三宅　でも、あの東京の封切りは女房のお吉が魁車の成太郎でなくて氣の毒でしたね。あの時のお吉はこの京の歌舞伎座にゐた二流の役者の、中村福之助といふ女形でもない人だつたので。あれは當時の成太郎が傑作でよかつたので。

璃珏の母や卯三郎の父親と三絶でしたね。

延若　え。さうだす。成太郎のお吉はほんまによかつた。……

三宅　それでよかつたといふと、これは貴方は東京へ持つて來てゐませんが、貴方の「毛剃」は結構ですね。せりふも本文に近いし、上方の貴方がどうしてあんな江戸の役者しかやれぬ役を知つてゐたのです。（内心これのみは大阪の松の席でやる筈はなからうと質問して見る）。

延若　あゝ。あれは中車さんのす。明治三十二年に東京へ私が初めて行つて、東京座へ出ましたが、その時分中州の眞砂座で、當時の八百藏さんの毛剃で、私が惣七をしましたので覺えて歸つたもんだす。（これは私がほめると一寸上機嫌で頬の筋肉がゆるむ）

三宅　さうですか。それで私はやつと得心しました。貴方の當り藝が殆ど師匠なしか、自家の工夫なので一寸がつかりしたやうな、貴方のみには「歌舞伎の傳統」無用といふ不安があつたのを、貴方の傑作「毛剃」が中車のタネときいて、やはりいいタネはいいものとの私の考へ方が納得がいつたからです。勿論、中車の「毛剃」は團十郎の時に、あの乾分に出てゐて、あの人の事ですからそれをよく覺えてやつてゐたからいいタネですよ。

延若夫人　え、え、うちは中車さんには御懇意に願ひましたので。……

やがて信太郎さんにこの邊でと私は目でしらせる。二時間近い對談は老延若に餘りに重い負擔らしく感じたからである。併し、延若がこの話の中で、歌六をほめ、中車をほめた事實は流石に彼だと思ふ。この二人は「物知り」として近世の第一人者、私など今もし中車と歌六とが生きてゐたら、話して話してしやべつてしやべつて、語つて語つて語りあかしたい人だからである。更に、七世團藏を延若がその藝談中で、生けるが如く語つてゐる「團藏をよく知る人」なのも、併せて敬意を表しながら、お手數をおかけした白井さんと一緒に座を立つのであつた。……

（二三年二月）

鶴澤清八

三宅　清八さん、私は一度貴方に會ひたかつた。それは今の文樂の三味線の中で、上手下手は別問題として、最も特色のある三味線をひくのは實に貴方が第一だからです。――

清八　これはどうも恐れ入ります。

三宅　道八の三味線は勿論名人藝で、あの音色だけでも特色があつた。併し、貴方のは又一寸風が變つてゐて、殆ど太夫の緣の下の力持ちばかりをしてゐる。かといつて、それが一方に偏せずに、貴方の三味線の音色も亦實に一特色があります。それは女だが名人だつた故竹本小清（六代目菊五郎が大きに買つてゐ、その「鰻谷の古八」は小清の淨るりで研究したもの）の音色に似て、いはば水調子のやうなもの、これは相手の太夫の大隅太夫がこの頃丸で聲が出ず、低い調子で語りたがる結果、貴方の方で犧牲を拂つてもそのお相手をするために、低い三本位の調子になつてしまふのを、その範圍で貴方は實に見

事に淨るりをひいてゐられる。――一體、名人の三味線ひきは異口同音に、三味線をひくのではない、淨るりをひくのだといふ。卽ち、三味線はひいて聞かせるのではなく、三味線は淨るりのためにひくだけだといふ教義ですね。今の文樂でその教義をよく守つてゐるのは實に貴方だと思ふ。その心がけが床しくて、私は前から貴方に一度會ひたかつた。

清八　有難うござります。

三宅　まあ待つて下さい。もう一つ貴方に會ひたかつた理由がある。それは昭和二年八月東京の歌舞伎座で、珍しく故津太夫たちが素淨るりの一座で來た。その時代の津の三味線は友次郎だつたが病氣で貴方が代りをひいてゐた。この時代に私は私の「文樂物語」の研究にかゝつてゐたので、特に氣を入れて「合邦」を聞きに行つた。津太夫が東京で初めての「合邦」でした。古靱は度々語つてゐたが、津太夫は初めて故、大に期待して出かけた。するとどうでせう、實に面白い。前半こそつまらないが奥になる程大きく、不器用でも後半の玉手御前の亂行は鬼氣人に迫つて、津太夫としてあれだけ力の入つた大きい藝は珍しく、私はうなされるやうに感動して、ミスがおりると直に廊下へとび出し、ほてる頰を外氣にさましてゐた。所が、そこへ故瀨戸英一氏（新派の作者遺作名品「二筋道」）が、私の方へ走つて來て「いいね。大きいね。」と餘り親しくもない私に、興奮して話されたが私のいひたいのもそれと同じ考へだつた。だから互にうれしくなつて、二人でにつこりして上出來の「合邦」に敬意を表した。その時の三味線が當時鶴澤叶といつてゐた貴方だが、二十一年前でも實にうまかつた。聲のわるい津太夫をよく助けて、貴方が全くかげになつて、奥の力の入る所で津太夫に語りいいやうにしむけていつたのは、老巧の友次郎と同じゆき方で、少しも代用品の感がなかつた。私はこの時から叶の貴方に敬意を表してゐて、いつも、文樂では貴方

に注目してゐた。この時、貴方は四十九、本年七十といふから。

清八　本當に有難うございます。私のやうな者の藝を聞き分けて下さいまして。……え、あの時は實は私は大變な苦勞でした。あの廣い歌舞伎座で素淨るりですさかい、初日の舞臺に出ましたら、津太夫さんと並んでゐる場所が、舞臺なみにひろがつてゐて、私は三味線をひきかけて、ふと横を見ると、遙か向うの横、文樂なら人形をつかつてゐる舞臺のやうな遠方に、津太夫さんがぽつんとゐやはるのだす。私は私でこつちの方で俊寛みたいに離れ小島にゐるわけで、津太夫さんの聲やイキも分らず、手さぐりで三味線をひいてしまつたのでした。――尤も、友次郎さんの代りですが晴れの歌舞伎座で、素で行つた時ですので、私は本當に舞臺が心配でした。どうか無事に勤められるやうにと、神佛を祈つて精進をしてゐた時でした。その時先生にさう聞いてゐて頂いたのでしたか。……

三宅　これは貴方の藝の理解者で文樂研究家で、淨るりのレコード蒐集家の安原仙三氏にこの間もいつておいた話、そこで私は貴方との對談にこの前延若の時に白井信太郎氏にかいぞへ役を願つたやうに、今日は安原さんにかうして列席して頂いてゐるわけです。――それからその翌年の八月、私は「文樂物語」を「中央公論」に半年連載し、次の準備に下阪した時、餘り暑いので數日有馬の溫泉へ來て旅館『中の坊』へ泊つてゐた。すると前年歌舞伎座で敬意を表した貴方が、『中の坊』の湯治客の所へ訪ねて來てゐたのをちらと見かけて、おや叶さん！　と思つて、宿のおかみさんに紹介してもらはうかと思つたが、例の引つ込み思案でそのまゝにしたが、その時も私は內心貴方と話してみたかつた。……

清八　さう。さう。確に私は中の坊へ參りました。あすこのおかみさんはよく知つてゐましたので、さういつて頂けばゆつくりお目にかゝれ

ましたのに。……

この時列席して種々斡旋して下さつた安原氏が「さうでしたね。私は先生より十年餘り後の同じ慶大の經濟科出身ですが、お話の先生の「文樂物語」は實に結構に拜見して愛讀しました。あれが出たのは昭和三年一月からでしたが、あの頃私は西洋音樂をやつてゐて、ヴェートヴェンに熱中してゐた。併し、あれを拜見すると、洋樂も淨るりも結局は同一でそこに感動した。ヴェートヴェンは一つ一つそれは克明に整然と、根本的に樂譜を積み重ねてゆくのだが、淨るりも一句一句とこつ〳〵積み重ねていつて、大きなものが出來るわけで、それが先生の研究でよく分つた。そこで文樂ファンになり出して現在に及んでゐるわけですが、先生が清八師の事をよく仰有るので師の藝に敬服してゐる私は、以前からぜひ一度會つて頂かうと度々支度してゐたのが、やつと今日その機會が出來たんで私も喜んでゐます。」

三宅　いや、どうも顏が赤くなります。私こそ貴方には東京ででも度々お便りを頂いて、御蒐集のレコードの名品は大阪の放送局へ推薦した程ですが、何しろ持ち運びが大變で、折角の品を、もしきず物にしてはと躊躇してゐる次第です。扨、清八さんの履歴は？

清八　本姓奥田友松。西宮市高木東犬飼に在住。明治二十三年六月御靈文樂へ十二歳で入座、鶴澤鶴五郎といつて、名人の三代目清六さん（山城を今日あらしめた三味線ひき）の鶴太郎時代に弟子にして頂きました。それから大正二年に文樂で「檜本太功記」で染太夫さんの「鷺の森」が出た時、鶴澤叶を襲名させて頂き、昭和十七年に更に二代目鶴澤清八を襲名したので。

三宅　その染太夫は二段目の大物を、上品によく語つたまつたうな藝風の人で、私はその大正、三、四年頃「妹背山」の二段目の「芝六住家の段」を聞いて、ものもよく面白いのに感心したが、大正二年の御靈文樂全盛期に、あの大太夫をひいたのは出世でしたね。

清八　え。左様で。それ迄にも叶襲名は度々話が出たが、清六師匠の若い時のいい名だすので、いつももう少し待つてくれと遠慮してゐたので。それをこの時抜擢されたわけでして。……

三宅　さうでせう。併し、貴方が叶になつて以來一向私は氣がつかなかつた。やつと右の昭和二年津太夫の時友次郎の代りで私は貴方を發見したのだが。

清八　それには話があります。私は叶になるとすぐ故人の竹本叶太夫（攝津大掾の古い弟子）をひく事になつて、十三年半叶さんをひいてゐました。その大正後期は叶さんと東京へ興行に行つた時に、近松の原作の「天網島」の「紙治内」の端場をひきましたが、大谷社長が聞かれて、私にいはれるのに、お前は叶ばかりをひいてゐるが、あの太夫は本筋だが藝が内へこもつてしまふ方で、折角のお前が引っ立たぬのが惜しい。叶太夫とでは東京へ來ても芽がふかないと仰有いました。

三宅　流石に大谷さんでその通り、あの叶太夫は人物は圓滿で繪がうまく、相當な資産があつて北區の梅田邊に閑靜ないいうちを持つてゐた人で、私も一度人につれていかれて會つたが溫厚な君子だつた。尤も、君子すぎて藝がまじめ一方でつきぬけた所がなくて一生を終つたが、成程あの人を十三年半ひいたとは貴方らしい。だが、それで貴方が世に出られなかつたのも一種の藝道祕話だね。それを貴方が打破したのは友次郎の代りをしたからで、昔から斯道でいふ「代り役で出世」の道を、自分で開いたわけ。

清八　恐れ入ります。でも、あの代りの時に先生がさう聞いてゐてくだはつたとは、私は涙が出る程うれしい。私もこの年になつて今更出世も金錢の慾もござりまへん。一寸でもよい藝をしててみたいと思ふだけで、こんなお話をするのは何より樂しみです。——尤も私はこれ迄でも東京の故人の杉山（東京の淨るり通の第一人者の研究家「素人講釋」の名著あり）の旦那には時々

呼ばれてお目にかゝつた。こちらにゐて呼ばれて行つたのは殆ど私一人ですが、そんなうれしい思ひ出がございます。その代り三代目清六の直系の弟子の私が、どうして四代目清六を襲名しなかつたのかと、よく人から聞かれますが。

三宅　さうだ。貴方が當然四代目清六になる筈。私もさう思つてゐたら、震災直後今の清六の德太郎時代に、いい名の清六が、元來道八の弟子の若い德太郎がついでしまつた。德太郎も有望な人だつたが、不審は不審でしたね。

清八　それについても話があります。私の名の清八はさつきのお話の竹本小清の父の名で名人でした。そこで清八の名は小清さんが預つてゐて私につがせてくれたのでした。けど、山城さんの古靱時代に、東京で小清さんにお會ひになると、本當は四代目清六の名は叶の外につぐ人はないといはれたさうで、古靱さんはお歸りになつた時に、私にわざわざこの話を取りついで下さいましたのを、私は今以て感謝して居ります。

三宅　だが、それは昔話。貴方だけ實力があれば清六も同じだ。六より八の方が數が多いだけでも上だと思つてゐていい。兎に角私はこの頃の文樂では貴方の三味線を聞くのが樂しみだ。五十日興行の「忠臣藏の九段目」は惡例で前を綱、奥を大隅が語つたがそれはひどかつた。貴方の三味線もあつたものでなくあれではお困りでせう。殊に、由良之助が下へおりる庭の件りで、古來から問題になる「庭」の「アアア」を大隅は大變な勢ひで、「アアア」と首をふつて語るが、あれはどういふんですか。

清八　（だまつてゐる事數分。やつと口をきく）え。私もあれはよく知りまへん。唯本人があゝして語るのが先代大隅だといふんでさうしてゐるのですか。

三宅　無論、大隅も一と通り以上の修行をして來た人で、どこか古風素朴の面白味がある點は、理智一方になりたがるこの頃の文樂の太夫中で

は一特色です。去年九月東京の「熊谷陣屋」の奥なんかは、貴方の三味線の力はあるにしてもよく語つた。山城と一寸ちがつたとぼけた面白味のある人だから、もつと頑張つてくれると、山城のバンドを一應この人に渡したい。そして三四年大隅の天下にしておいて、その間に有望な綱太夫をぢつくり自重させ、綱太夫が五十を出て經驗豐富になつた時、大隅のバトンを綱太夫に渡してやりたい。さうすると山城百年の後でも十年間位は假りに人形は駄目でも淨るりは十分いいものが殘るわけだ。私はさう思つてゐるのに、この頃の大隅の不振は困るし、特に今度の「庭アアア」には驚いたね。第一、あゝ調子を低くさせて、自分がらくに語るやうにするのは本當でない。

清八　……

三宅　併し、さつきもいつた「熊谷」の奥は感心した。いや、貴方の三味線に聞きほれてしまつた。東京は流石に賴もしくてあの時、私の「毎日」の劇評に似て貴方の三味線をほめた批評は出たが。……

清八　さういつて下さるとうれしうございます。それでお說の津太夫さんの「合邦」を、東京の興行の後に、この京の南座へ持つて來て、人形入りで見せた時でした。その時に津太夫師が、やはり友次郎さんの代りに私に、今度の「合邦」は一切お客に受けぬやうひいてくれ、私もさう語るといつて例のさわりの後の「心根を」の所ですな。あすこは投げぶしで派手な手がついてゐて、お客に受ける所ですが、そこも陰にゆかうと仰有る。そこから「怒る目もとは薄紅梅」は力一杯三味線でたゝく所ですが、そこも「タタキ」はやめようといふんでやつてみたんです。すると全くお客に受けなかつた。私はくさつてしまつて、歸るなり繩手の宿屋のむさし屋でねてしまつた。すると當時長唄の名人で故人になつた松本貞子といふ藝者、これは三味線の名人で、故人の杵屋寒玉のお弟子でした

が、その人が津太夫さんと一緒に來て、私を起こして、今日の「合邦」の三味線にはほと〳〵惚れてしまつた。わたしは寒玉さんにいつも長唄でも三味線は「性根を持つてひけ」と叱られて來た。それがいつもうまくいかぬので叱られ通してゐたのに、今日の三味線は寒玉さんの教へと同じに、心でひいてゐられたんで、どうしてもあんたに會ひたうなつた。それでわざわざ會ひに來た。あんたの顔やない、あんたの藝に惚れぼれしたから來たといつて、それから御馳走をしたいといつて、急に酒肴が出て皆で一緒に一杯やつた事がござります。

三宅　さうですか。昭和初期の平和時代らしいいい話だな。やつぱり貴方の「合邦」の三味線は耳のある人だと、さうして分るんだね。東に瀬戸英一あり、西に松本貞子ありでそんな一級品の藝能人を動かしたのはえらい。當時五十餘りの叶の時代だからね。

清八　いいえ。さういはれる程ではないのですが。併し、私は杉山の旦那からもいろ〳〵教へられて、淨るりの三味線は結局イキと間と足どり、それから代る事と、この四つが祕訣と思ひます。

三宅　さうでせう。イキ、間は誰にも分る事で、イキのいいのは歌舞伎でいふなら十五代目羽左衛門のあの長所、間のいいのは故人の中車の時代物の見得や動きのあの間のいい長所で說明出來ますな。足どりといふとトントンと早い所は早くたゝみこんでゆくやり方で、山城の淨るりは若い時からこの足どりのいいのが津太夫以上だつた。だが、代るといふのは貴方から說明して下さい。

清八　あ、これは自分で考へた結果で、淨るりは一景一節がその文章次第でぐらつと變らぬと面白くない、一つの場面と思つて同じやうに三味線をひいてゐては、變化がないだけでもつまらんわけで。

三宅　さうですとも、確に「代る」事はいりま

すね。我々の文章でもさうでエッセンスをつかんで變化をつけぬと、讀者としても退屈してしまふ。

清八　それと浮るりでは「風一」が第一で、「風」を知らぬとあきまへん。西は政太夫風で陰、東は派手で陽、「道明寺」は西風ですので、まくらのかゝりから下の聲で出んとものになりまへん。「太十」は東風ですので「殘る蕾の花一つ」と、上の聲で出んといけまへん。――（こゝを小聲で口で一寸語つてくれたが、流石に腕でよくその區別が分る。皆さんに聞かせたいと思ふ事切。）

三宅　いや、正に同感です。

清八　それからこれは先生にぜひ書いておいて頂きたいのですが、我々の三味線では調子をやかましく申しますが、殊に本調子といふのはやかましくいはれますが、名人の初代小島屋文藏さんあたりからの敎へで、本調子といふのは、「二が一寸高い」といふのが本當のやうで。團平さんもこれを學んでゐられたさうで。――それから私も年をとつてしまひましたが、弦阿彌師匠も修行を積んで來た者は、年をとつてからは「故實でひけ」といはれました。全くそれはさうで私も年で今更腕の强さでは若い者には及びませんから、覺えた限りの「故實でひけ」を心がけて居ります。

三宅　それはさう願ひたい。それにしても貴方に後繼者はないらしいが？

清八　え、息子はあつて、以前は文樂で私と同樣三味線ひきにしようとしたが、前年夜半に妙な音がするので私が目をさましたら、息子は三味線の棹を二つに折つてしまひました。そしてこの仕事はやめるといつてそれつきり轉業してしまひました。

三宅　……

清八　これを强ひて進めても名人にならぬ限り、食つていけるかどうか分りませんし、むつかしい仕事ですので私はとめもせずに、そのままに好きなやうにさせました。

三宅　さうですか。――これは最近のニュースで御同席の安原さんにもつけ加へて申しますが、友次郎とこの間「忠臣藏の六段目」の話をした時、六段目位むづかしい淨るりは珍しい。人は四段目や九段目をむづかしいといふが、六段目は殊に三味線が皮肉でむづかしくそれは四段目や九段目以上といへる程ださうです。所が、これも前年津太夫の「六段目」に友次郎の代りを清八がした時、わざわざ友次郎の所へ來て、六段目の三味線が今度といふ今度つくづくむづかしくなつた。それで教へてもらひに來たといつたが、友次郎はその時それは清八の藝が進んだ證據だといつて、ほめて歸したといつてゐました。いい話ぢやありませんか。全く六段目はそんなもの。貴方はそのむづかしいもののむづかしさを知つただけでも、今では文樂の大先達といへるのです。

清八　……

（二三年四月）

後記

この對談中の安原仙三氏所藏の多數の貴重なレコードは、本書校正中の二十五年三月から、大阪放送局でその名品を選んで、「名人のおもかげ」として第二放送で全國放送をした。私は歌舞伎方面を受持つたが、故人の名人の義太夫も大阪の著名な研究家の解說づきで、それぞれ面白く放送せられたのは誠に意義ある企てであつた。

喜多村緑郎

三宅　しばらく。今日は貴方には藝の話以外、のんびりした閑談、清談といつたただのおしやべりをしてみたくお伺ひしました。

喜多村　いやそれはどうも。

三宅　といふのはつい最近南座出演中で、やむなく朝九時半から私たち「幕間」の「友の會」で、花柳、大矢、柳（急病で缺席）伊志井、それに大江良太郎君に來て頂いて、その方で新派の藝談をやつてもらつたからで。その時私が最も打たれたのは、新生新派すら役者が薄給でやつてゐるから、どうにか芝居がやれる。もし給金を世間並みに要求したら、とても成り立たない。それ程資材、衣裳萬事が高くて大變だといふのです。そして昨秋九月、三越劇場へ出た時――それは私も上京拜見し、八木氏の「はる、あき」を佳作といつて來たのでしたが――好評で滿員でゐて結局五十萬圓の缺損、それを劇團の幹部で借金をして穴うめをした話でした。そのイキこそ新生新派の寶で、私はいつも新派のさうしたイキを愛してゐて、歌舞伎方面でもそんなイキを持つてくれるといいな。歌舞伎の諸氏は育ちのせゐかそこ迄物事に打ちこめない所があつたり、人を警戒したりする嫌ひがあるが、新生新派の人々は根が我々と同じ素人出のため

か、これと信賴すると裸になつて誠意で打つつかつてゆく。これが値打ちでその純なイキが、私はその芝居よりいいと思つて敬愛してゐるのですが。……それも右の五十萬圓損失一件は餘りにイキがよすぎて、私は暗澹とした氣持になつてしまつたので、貴方の訪問には一切藝の話をよけたいと思つて伺つた次第で。そこで先日お引越しのおうちが郵便局の一と間ださうですな。貴方のやうな人が一と間きりの郵便局の一室とはこれも暗澹たる氣持ですが、ひどい住宅難で。

喜多村　え。澁谷の奥の祐天寺といふ驛からのるのですが、東劇へ行くのに二時間半かゝる。それも大變な殺人電車でわざと終點近く迄一度逆に電車にのつて、その終點からでないと市中へ出られない所です。尤も、郵便局だから人が來たら應接室は貸してもらふし、郵便や電報はすぐ打てるのは便利ですよ。

三宅　でも、郵便局住ひとは。……併し、いつも御丈夫で、お年より十年若く見えますが。何か養生法でも？

喜多村　蛇のエキスをのんだ事がありますがいいやうですよ。この頃は一寸手に入りにくくなつたが、これは御存じの末吉春人がずつと前に、臺灣からとりよせて持つて來てくれたのが始まりで。

三宅　一寸註を加へますが、末吉氏は喜多村の弟子格で今は京都に在住、料理旅館をやつてゐる人。喜多村が京都で最初にやつた「俠艶錄」の明治四十二年三月明治座の封切りに、主役坂東力枝の女弟子をしてあてた人で、私はあの時のいい出來榮えをよく人にいつて來た。その末吉氏は今は「友の會」の會員の一人でいつも熱心によく見え、去年貴方に出て頂いた時は、その前に三十分間程昔の新派の話をしてもらつたのでした。

喜多村　あれの叔父が我々の雜俳の仲間で相當巾をきかした人で、その緣で私の弟子ではない

が弟子のやうになつてゐた男です。

三宅　併し、蛇の效能は別問題として、それだけ丈夫な貴方も、この一月大阪の興行中に、住吉の太鼓橋でころんで怪我をなすつたといふぢやありませんか？

喜多村　え。あれはひどい目にあつた。あのそり橋を下りかけたはづみにころんだので。でも私は立廻りの心得があるから片肱でからだを受けたから、ころんで痛かつたが骨折はしなかつた。もうほんの少しで骨を折る所を肱でとめた。肱でとめなかつたらひどい事になつてゐたと思ふ。

三宅　さうですか。それはよく分る。私も昭和十二年の二・二六事件の當時、夜十一時頃芝居の歸りに日和下駄をはいてゐて、岩のやうに氷つてゐる雪の上へ打つ倒れた。私はその立廻りや踊りの心得がないから、見事に左の大腿骨を骨折して七十日入院のうき目を見、このため當時の「東京日日新聞」で幸運のチャンスを外した事があつた。だからその貴方の怪我のいきさつがよく分ります。でも、骨折でなくて何より。

喜多村　でも、二月の名古屋へ興行に行つてから、どうしても舞臺に出られず、芝居が「婦系圖の湯島境内」と、京都で去年見せた「梅ごよみ」だつたから、花柳で變りが出來たので助かつた。ただリウマチみたいにその局部が痛んで弱つた。名古屋で知つてゐる醫者にいろ〳〵厄介になつて、どうにか後で舞臺へ出られるやうになつたが。……尤も、普通だと貴方のやうにころぶとすぐ疵をする。故人の尾上卯三郎は御承知の立廻りで賣つた人だから、この呼吸をよく知つてゐた。つまり、貴方がころぶとすぐ骨折したやうに、卯三郎のある芝居で、座敷内で卯三郎の役がとんとつまづいて、腹ばひのやうに打つ倒れると額が當るあたりに莨盆がおいてある。その莨盆のフチに血のりがつけてあつて、倒れるのと一緒にそのフチの血のりが額につく。それから起き上るのだが、莨盆だけに血の

りが用意してあるとは分らず、誰が見ても打つ倒れて額を莨盆で割つた、それが起き上つた頃額から血がにじむとより見えなくつて、實にうまいものでした。

三宅　よく分るな。業の早い卯三郎だから私には目に見えるやうだ。成程うつぶせに倒れゝば、そこに莨盤でも出てゐればすぐ怪我をするのが當然。貴方が怪我をしなかつたのは立廻りのおかげ。その時分箋助の兄の青柳信雄君が私に、もし踊りの心得があると腰がかげんをするから、骨折をせずにすんだでせうといつたが、これは道理で今でもそれを覺えてゐる位。何にしても無藝はみじめでそれこそ藝は身を助けるですよ。（笑）

喜多村　無事にすんでよかつたと思つてゐますよ。

三宅　さつき「婦系圖」の話が出ましたが、今日は私はその「婦系圖」を話題の第一に持出した。藝の話はしないといひながら結局藝の話に近いのですが。

喜多村　（不思議さうな顏つき）え。「婦系圖」の話？

三宅　それはこの三、四月でしたか、貴方が九州地方へお弟子たちの無人一座で「婦系圖」の通しを持つて行き、貴方が酒井先生をやるといふ記事を見たからで。私は貴方の酒井先生はきつとよからう。第一私は見てゐないから見たい氣がするので、一體貴方はどんなやり方をされますか。でも、お蔦と酒井先生と二役やると大詰に困る筈だが。

喜多村　いや、二役いく時は「めの惣」で終りにして大詰を出さない。――だが、その九州行の旅はドロンで中止になつた。

三宅　といふと？

喜多村　え、あれは面白い話で太夫元がドロンで雲がくれをして中止にはなつたが、珍しく金の迷惑はかけてゐません。初めそれには小堀が關係してゐたんで。――私の所へ話があつたの

は「小堀劇團」とした名刺を持つた人が來て、小堀の口添へで小堀、伊井、紅梅に私の一座で九州方面へ行つてくれ、それで「婦系圖」の通しときまつて、私がお蔦と酒井先生と二役ゆき、小堀がめの惣、伊井の早瀬の豫定でポスター迄出來て、靜岡をふり出しときめてゐた。それを急に太夫元がドロンをして中止となつたが、誰も損害はなかつたのが取柄だが、兎に角不思議な雲がくれで、小堀があやまつて來たが妙な太夫元がゐたもんです。

三宅　さうですか。それは殘念で。私は見てゐないだけに貴方の酒井先生に興味があるので、どんなやり方をされるか聞きたかつた。

喜多村　いや、私は酒井は一ぺんだけやつてゐる。それもこの京都南座ですよ。

三宅　それは面白い。いつ？

喜多村　さう。十年ばかり前で八重子のお蔦でやつた時、初めて私は酒井先生を引受けた。それには泉鏡花先生が、私によく君は一度酒井をやつてくれ。あの酒井先生はモデルは登張竹風といふ事にしてゐるが、實は尾崎紅葉先生なんだ。所で、君が以前の古い御園白粉の廣告に素顏で頬杖をついてゐる寫眞を出してゐたが、あれが紅葉先生によく似てゐる。それに酒井先生は芝居でやると早瀬との對照上、何だかこわい叔父さんになつてゐるが、あれはせりふにもある通り、色の白い早瀬以上のいい男なんだ。だからぜひ君にしてもらつて、私に紅葉先生に似た所を見せてくれ。——と、こんな風に度々いはれてゐたからこの南座でやつてみたんです。

三宅　さうですか。それは見たかつたが、どういふ結果になりましたか。

喜多村　それにもこんな事がある。私はまあ自分で泉先生の仰有つた事を考へてやつてゐたが、こちらの新聞で劇評を見たら、これが餘り評判がよくない。それでも私はそれを參考にと思つて、寫眞とその劇評の切りぬきとを泉先生に送つた。すると先生から長文の電報で、あの

賴信紙にベタ一面書いたのが三枚來たんです。それが面白い事には電報の文句ぢやあない。みんな當り前の手紙の文章になつてゐるから面白い。兎に角手紙の電報が三枚來たから驚いた。そして君の酒井先生はわるいわけはないといつて、劇評と反對な意見でまあほめたやうな手紙の電報を頂いたのでした。

三宅　成程、面白い話ですね。手紙の電報三枚とは泉さんらしい。それに自分でいいと思つてきめてかゝると、見ないのにいいと斷定するあたり泉先生ですよ。併し、そんな面白い話がいろ〳〵原稿を書かれる貴方だが、これはまだどこへも書いてゐない特ダネものでしたよ。この記事で初めて公開させて頂くわけ。

喜多村　（一寸考へてゐる）え、え。この話はさういふと私もどこへも書いてゐませんね。尤も、その電報の手紙三枚は私は記念に保存してゐたんで、前年「鏡花展」へ出品したかと思ふが。……（考へてゐる）

三宅　さうでしたか。私はそれは知りませんが、何にしても酒井先生はさう聞くと貴方の仁にあるし、風格と氣品のいる役だから一度見たいもんです。

喜多村　それに泉先生は私に、紅葉先生は坐るとすぐあぐらをかく。それからはいてゐる白足袋をぬぐ。――これがいつもきまつてゐる癖だつたといはれたので、私も舞臺でそんな科もしてゐた。莨を吸ふのにも癖があつてそんな事もやつてゐた。

三宅　さうでせう。そんな細部の注意は貴方ならぬかりのあるわけはない。だから私は見たいと思つてゐるから、九州巡業の新聞の三行程の出し物の記事を、目を丸くして見つけて、見たいなと思つたわけです。ドロンは殘念でした。あ、それから劇評といふと去年の十二月のこゝの顔見世に「合邦」が出て、梅玉の玉手御前に、菊五郎が初役で合邦をしたので、例の如く私は「新大阪夕刊」に、その劇評を書きましたが、

その時貴方がさつきの末吉春人君にことづけをして下すつたのがうれしかつたな。

喜多村　さうです。私はあの六代目の合邦がどういふ事をするか見たかつた。その時ふと貴方のその劇評を見てよく分つたから、末吉にあの通りことづけをして、確にお說のやうなやり方ならいい合邦と合點がいつた。

三宅　いやどうも。吉井さんも流石にあの合邦はいいと後でほめてゐられたのを拜見したが。併し、見た目がいかつくてこわい感じが一般に、は一寸損でした。私は見た夜松竹の某重役にその事をいつて、見た目は損だがする事は丁寧で新演出はないし、せりふも本文尊重だから、六代目の古いものとしては上々といつておいた位。果して好評でしたがその時のあなたのおことづけの附帶條件も私は敬服した。——貴方はいい合邦なのが分つて安心したが、後をむくと少々「加賀蔦」の「道玄」になりやしないかといはれましたね。見ないでゐて實にうまい評と敬服したのでしたが。

喜多村　さうでせう。あの人は目がこはいから。それで道玄じみるのを恐れて一寸つけたしをいつておいた。(微笑、舞臺そのまゝの美しい目もと)

三宅　いや、どうもいろ〳〵有難う。藝の話をよけたいと思つてゐてつい藝の話になりましたね。でも、劇評の話が出ただけ變つてゐる筈です。私はうまい役者の劇評を聞くのが好きで、六代目や吉右衞門と話をする時、いつも劇評をさせるやうにしむけてゐます。それには多少記憶してゐる珍談や卓見がありますが、いづれ又。ではどうぞお大事に。長々お邪魔致しました。

(二三年七月)

阪東
壽三郎

壽三郎の「熊谷陣屋」

三宅　お忙しい中をお邪魔して相すみません。今度は貴方の番でいろ〳〵お話を伺ひたいと思つて。……

壽三郎　これはようこそ、こちらへお出でになつてゐる事は知つてゐましたが、去年あたりは病氣がちで御無沙汰致しました。ずつと入院生活をしてゐたんで。え、この頃やつとよくなつて、白井會長が、私が罹災して家がないのをそれならと、浪花座の楽屋をアパートのやうに改造したから、そこへはいれといはれるので、引越してやつと落ちついた所です。

三宅　さうですか。併し、私も貴方が病氣と聞いてゐたし、去年は京都へ來ても役が輕く老人なみに、一と芝居一役しか出てゐないから實は案じてゐた。でも、かうして會ふと中々元氣だが。

壽三郎　やつとよくなつたんで。肋膜と腎臓だつたのですが、この二月頃足を一寸痛めて神經

痛みたいになつてゐますが。

三宅　道理で、少しびつこをひいてゐられるんで、貴方も酒は飲んださうだから、菊五郎ぢやないが高血壓ぢやないかと思つた。だが、肋膜と腎臓ならまあ心配はない。高血壓だけは戀の病と同樣、醫者でも手のつけようはないから。

――それは何より、兎に角まだ若々しくて會つて安心したが、貴方のお生れは？

壽三郎　明治十九年。――

三宅　といふと吉右衛門氏と同年ですね。でも、貴方の方がずつと若く見える。私はもつと若いのかと思つてゐたが。それで貴方の事は餘り書いたものがないし、不思議に人が知らないが、貴方は早く親に別れた人だが、お父さんの阪東壽三郎といふ人はどんな方でしたか、それから聞かして下さい。それに東京には中村壽三郎（若松屋）といふ役者が、貴方のお父さんと同時代にゐたからよく間違へてゐる人もある位。

壽三郎　さうですね。私の父はその若松屋とは全然無關係で、東京へは行つた事がありませんでした。早く死んで明治二十二年三十三歳で、私の四つの時で、私は父の顏は全く覺えておりません。又、父は女形で「政岡」や「播州皿屋敷」の腰元お菊が當り藝でした。若死した原因もそのお菊は、三平のうちへ宙のりで會ひに行く所があつて、そこを逆ブリのきわどい藝當をやつてゐたために、その逆ブリの綱が切れて落ちて腦を打つたからです。それからからだの工合がわるく、芝居があいても精々七日頃迄しか出られなかつたので、見物はそれを知つて壽三郎を見るなら七日目迄に行け、といはれた位ださうでした。それで父の代りはいつも多見之助（後の多見藏）がやつてくれたさうで。

三宅　あの多見之助が代りをしたのでよく分るが、それなら先代は中々いい役者だつたわけだ。代り役が多見之助とはたいしたもの。――だから貴方も長次郎の若い時は女役をしたわけだね。貴方の女形は背が高くて驚いた。何か遊女

の役を明治四十二、三年頃朝日座で見て、これはとびつくりしたが。

壽三郎　さう〳〵。あれは新作物の「鹽原」の芝居で、先代の嵐吉さんの相手で高尾といふおいらんをしました。我ながら背が高いのに、あの時シカケを着た寫眞をとつたのに、シカケを前へ出して寫したので、本物よりまだ背が高く寫つてゐました。（笑）

三宅　それで貴方は十一代目片岡仁左衛門の世話になつたさうだが。

壽三郎　さうです。十一代目はあの氣性ですから親のない子で可哀さうだといつて、よく世話をしてもらひ、部屋子でいつも一緒に樂屋において頂き可愛がつて下さいました。初舞臺は六つの時で、角座で「朝日新聞」の小説を脚色した「紅清騷動」といふ狂言に、この間なくなられた梅玉さんの政次郎時代に、手をひかれて出ました。それからその梅玉さんの終りの舞臺の戸無瀬で、私は本藏をしたので、「幕間」の別冊「梅玉を偲ぶ」にも話をしましたが、初舞臺もお別れも梅玉さんでした。それに私は子供心に役者になる氣がなかつたのを、その梅玉さんのお父さんの先代梅玉さんに進められて役者になつたのです。でも、十一代目がよく目をかけてくれ、團菊歿後の我當時代歌舞伎座へ行かれた時も私はつれて行かれた。出し物は確か「大文字屋」と新作の義士の「ほしか船」の芝居でしたが、今の六代目が中幕の「寺子屋」でよだれくりに出てゐて、十一代目の身ぶり聲色をやつて當てた興行でした。又、子供芝居の淺草座へも出て、吉右衛門さんと一座してゐた事がありました。

三宅　してみると貴方は東京には緣が深いわけ。でも、貴方の長次郎から壽三郎の改名披露は明治四十四年十一月の浪花座で、初代鴈治郎が「熊谷陣屋」をして、貴方が軍次で鴈治郎が口上をいひましたね。親のない子で忠義な爺やか何かが育てて、一日も早う大きうなりなはれ

と引つばるやうに可愛がつたので、こんなに大きくなりましたといつた。（笑）

壽三郎　さうです。

三宅　あの時の鴈の熊谷は後年の東京風の團十郎系とちがつて、制札見得も坐つてやる上方風で、引つ込みは貴方の軍次をつれて一緒にはいりましたね。珍型じみたが貴方を引つ立てる積りでやつたのでせう。

壽三郎　さうです。さういふとこゝで（南座）私は同じ熊谷をしてゐますが、その制札の見得は團十郎系では會長のお氣に入らぬらしいので、あの通り首をかくす心持を主にして制札を斜についてやつてゐます。（カット寫眞參照）

三宅　さう〳〵。

壽三郎　それからもう一つ、後の鎧姿で出て來て僧形になる所で、私は先きに兜をとつて坊主頭を見せますが、これだけは私の考へでやつてゐますが如何でせうか？

三宅　さう。私はそれを見ていい考へと思つた。第一これは故伊原青々園氏にはいい追善で、伊原さんは死ぬ迄團十郎以來熊谷は誰でも先きに鎧をぬぐが、兜を後迄かぶると頭でつかちで形がわるい、あれは先づ坊主になつた頭を見せるのが效果的だと書かれ、私にそれを口でいはれた事さへあつた。私はその方が風情があると思ふし、あの老大家がいつもそれをいはれる心持を尊重して、誰かさうする人はないかと思つてゐたら、こちらでこの一月の中座で貴方のを見て、これで伊原さんも喜ばれるだらうと思つた。

壽三郎　さうですか。

三宅　序だが、以前から貴方は東京の方に人氣がある。こゝで聞くと少年時代度々東京へ行つてゐられたから、自然と東京の水がしみ込んでゐるのでせう。そして不思議な位こちらでは評判がよくない。一般は壽やんといつて相當人氣があるが、一部の人たちに貴方は評判がいい方ではない。だが、貴方の熊谷にしてもこの陣屋だけは決してわるくなく、上々ではないが相當

で、尠くとも右の明治四十四年當時の初代鴈治郎の熊谷にはヒケをとつてゐない。殊に、二月の「九段目」の本藏は傑作でしたのに、一向うまくない猿之助の勘平が案外好評で、豫想以上の貴方の本藏が、それ程でなかつたのは意外。

壽三郎　……

三宅　尤も、幕内では確實に好評でしたよ。それはその時延若氏と私は對談したが、その時同席してゐた延若の附人が、本藏の話になると貴方が今度大變いい事を、南座にゐて聞いてゐて、歌舞伎座が日延べになつたから、南座を打ちあげ次第すぐ見に行きたいとひどく期待してゐて、歌舞伎座の樂屋中でも評判になつてゐるといつてゐた。私はそれを聞いて流石と思つたが、一體幕内の評判は正直です。中車の「太十」の光秀は大正五年五月の新富座が初役。所が、あの光秀は芝居があくと第一に幕内の評判になつた。私はその頃東京の學生時代で下宿屋にゐたが、近所に故羽左衛門の弟子がゐて、若い青年だつたがそれが初日があくと間もなく幕内で光秀の評判が大變と、私にいろ〳〵内輪話を聞かしてくれた。無論、貴方の本藏と中車の光秀とを一緒にする程私はモーロクしてゐませんが、兎に角南座で歌舞伎座の幕内での貴方の本藏の評判は立つてゐたのです。いつの時代でも幕内の評判は流石にくろうとで、急所をついて誤りはありません。その代り不評の時はひどいわるロをいつて、とても當人の耳には入れられません。——

壽三郎　どうも恐れ入ります。私は不器用者で口不調法ですから。

三宅　それもある。東京はぶあいそでぶつきらぼうな率直を好むが、上方は誰にでもあいそがよくないといけない。そこで貴方は東京にむくわけ。だが、見る人は見てゐます。今映畫の方にゐる辻久一君、この人は新劇の劇評家として立派な專門家だが、去年九月、私は初めて氏に會つた時、これは私は見外したが、失禮ながら

貴方にはさうよくないと思はれる「夏祭の團七」さへ相當買つてゐて、私にいろ〳〵貴方の話をされた。勿論、新劇の劇評家だが歌舞伎の知識は十分な人で、その見方に一見識あつた。それに氏ははつきりと私は上方では壽三郎が好きだといつてゐられた。

壽三郎　さうですか。

三宅　私はあゝいふインテリに貴方を高く買つてゐる人があるのを知つて、やはりこの世界は神聖と思つた。亡くなられた岡鬼太郎氏も貴方に好感を持つてゐられて、上方の人で東京へ來て樂屋内の最もうけのいいのは壽三郎だといひ、世話のしやすい素直な男だとよくいつてゐられた。

壽三郎　（子供のやうにはにかんでゐる）

三宅　だから貴方は東京の役者になればよかつたのだ。……帝劇の山本專務（久三郎氏）など、貴方に目をつけてゐて、先代勘彌の次に出來れば貴方を引つこぬかうとしてゐた位。

壽三郎　あ、さういはれるとその大正八年十二月帝劇へ左團次中車一座で出ました。

三宅　君が我童の「松平長七郎」の浦戸の清藏でアテた興行。

壽三郎　さうでした。そこでその時から私は東京の方へ籍を移して、東京に永住する積りでゐたのです。おかげで御ヒイキの方もあつて、間もなく築地の本願寺前に家を買つて、正式に東京住居をした。――

三宅　それで？

壽三郎　震災でやられたのです。それもあの大正十二年九月は、久々に大阪へ出る事になつて故右團次のお岩、私の伊右衛門で「四谷怪談」ときまつて、あの時だけ大阪へ歸つてゐた。その留守中震災で家など全部丸燒けで、たうとう東京へ歸れなくなつて、止むなく大阪へ住み變へたわけ。

三宅　さうでしたか。それで分つたが貴方は震災でもひどい目に會つてゐたんですね。私はあ

れだけ好評なのに、なぜ東京へ來ないかと不審に思つてゐた。その前歌舞伎物では故秀調のおとわ、壽美藏の稻川で、貴方は鐵ケ嶽をして枡の立派が手傳つて大當りをとつた。新作も相當いけたし、上方役者といふととり合はない文士のK氏すら、壽三郎はいいといつてゐた。下町の某所の有名な待合は一家こぞつて貴方のファンだつたし、私はよく貴方の噂を聞いてゐたのに、惜しい事をしましたね。貴方が東京を離れたのは。……

壽三郎　私もさう思つて居ります。

三宅　（苦笑して）さう思つて居ります、と思つてゐるだけで何もしないで、おとなしく上方にゐついてしまふ所は貴方らしい。最近こちらの松竹の某有力者と偶然貴方の話をしたが、貴方のやうに野心がないのも困る。こちらでやらした第一劇場にしても、白井會長がどんな事をしてもいいと、破天荒な扱ひ方をされたのだ。大抵の役者なら、自分で積極的に働きかけて野心を滿足させたり、人を集めても仕事にしてゆくのに、貴方は眞面目一方で命令通りを守るだけ。だからあんまり齒がゆくて。……と厚意づくだがあゝ人がよくておとなしい一方も困るといつてゐられたが、その心持は私にはよく分る。

壽三郎　……

三宅　だが、私は貴方に一つ敬服してゐる事がある。十年前東京寶塚で、東寶劇團を造つて役者の引ぬきをした時、大阪では第一に貴方に白羽の矢をたてた。そこで貴方に手を變へ品を變へて誘ひの水をむけた。するとその時貴方は、御厚意は有難いし、自分としても行きたい希望はあるが、自分は以前から白井會長には何かと御厄介になつて、一方ならぬお世話にもなつて來た。だからその義理を思ふと、どうしても東寶へは行く決心がつかないと、實に正直に率直な返事をしたさうで、その役目に當つた某氏が私につくづく貴方の人柄に打たれたといつてゐた。今では嘘のやうだが、當時の東寶は派手で

人氣があつたので、一流の役者でも色目をつかつて、いざ交渉となると給金の多少でお別れになつたといふのに、貴方だけは一途に白井氏への恩義上動けないといつたわけ。私はこの話を聞いて快く思つてゐた。

壽三郎　……

三宅　何にしても松竹一本で、三羽烏といはれた猿之助、壽美藏と貴方との中、貴方が節操を通したのはいい話。東寶へ行かなかつたのはよかつた。東寶は誰よりも貴方をほしがつてゐたのに。

壽三郎　それはさうでした。何せ私は不器用者で、學問はないし、手紙もロクに書けぬ位で。……

三宅　それもいいぢやないですか。六十以上の歌舞伎役者なら、今更學問は入りますまいし、藝一方に徹底すればいい。貴方は「大阪の高島屋」で、左團次流に新作はうまく、今でもせりふはよく覺えてゐますね。一方、吉右衛門ぢやないが小唄もいけ、義太夫もうまかつた。ずつと前東京で貴方の義太夫を一寸だけ聞いた覺えがあるが。……

壽三郎　古い話ですが友右衛門さんなどと一緒に會をやりました。私は「本藏下屋敷」を語つたと思ひますが。

三宅　それ〳〵。だからこの間の本藏にもどこか役に立つたわけですか。

壽三郎　子供の時から踊りが嫌ひで義太夫が好きでした。

三宅　好きといふと酒も好きでせう。

壽三郎　以前は隨分飲みました。それで中車さんに叱られた事があります。お話の大正八年末に帝劇へ出た時、一番目に「奇兵隊」が出て、中車さんの井上聞多に私の役が食つてかゝつて立廻りをする所がありました。ある日山本專務から私は赤坂の某所へ招かれて、晝飯を御馳走になりましたが、その時分は若いにまかせて、晝でも酒を飲んで舞臺へ出たのです。そして間

もなく中車さんの役に打つつかつてゆくと、向うは豪の者ですから私に、「くせえぞ」とこごとです。後で酒は晝はよせ、俺は夜商賣をすませてから、ゆつくり一杯やるのが樂しみだといはれて一本參りました。……

三宅　中車の人柄が目に見えるやうだ。

壽三郎　その時分はよく飲みました。その翌年の正月かと覺えてゐますが、相撲とりの大錦（大阪出身）や常の花の七人の關とりにまじつて、役者では私一人で朝つぱらから新橋、日本橋、よし町と押して廻つた事があります。丁度明治座で新作の「め組の喧嘩」が出て、辰五郎が出ない芝居でしたが、故片市や猿之助に私など中心で書かれた作でした。そこで相撲とり仲間と、正月だといふので私が代表で押して歩いたが、いづれもたいしたものでコツプで酒をあほるのですが、私もぐい〳〵と同じやうにコツプでやりました。あの時分はいい時代で、どこへ行つても好景氣で、芝居はいつも滿員。

三宅　さうでしたね。震災迄の數年の大正時代は全く日本文化の黄金時代、あの數年間こそ今いふ本當の「文化國家」だつた。貴方がそれをなつかしがるのはよく分る。併し、今こんな時代になつたが、貴方の傑作の「宵庚申」を地方巡業に持つて行つたが、地方であれは受けますか。あれこそ東京で出す芝居だが。

壽三郎　田舍でも受けました。

三宅　それは何よりでさう聞いて安心したが、やつぱりいい仕事をする事ですね。あの時富十郎が休んで鶴之助が代つたさうですが、どうでしたか。

壽三郎　結構でした。若い女形では第一に有望です。

三宅　それは何より、そこで終りに苦言を呈しますが、貴方の時代は來たのだから、もう少し積極的に覇氣を出してほしい。私の親友の故中戸川吉二は「文士は紳士たるべからず」といふ隨筆を書いて物議をかもしたが、逆説論でゆく

と、役者にもさういへぬではない。役者が餘り紳士すぎると「水清ければ魚住まず」になり兼ねない。上方の若い役者には商人同様の才物や人を利用する位の腕のある人もありさうだ。その中で貴方が堅い一方でゐるのがいいとばかりいはれませんよ。――但し、これは貴方のみにいへる話でのん氣に酒の肴にでもする氣で考へおいて下さい。何のおみやげもないので「水清ければ魚住まず」を、貴方の酒の肴にお持ちした次第。――

（二三年六月）

壽三郎

桐竹紋十郎

紋十郎の遣ふ玉手御前

三宅　南座出勤中のお忙しくて暑い最中に、わざわざお呼び立てして恐縮ですね。

紋十郎　いえ、どう致しまして、こんな浴衣がけで失禮ですが。

三宅　いよ／＼九月は東京ときまつたので、去年のやうに成功させたいと思ひます。文樂は今大事な所ですし、日映演の組合の問題があつたりして、貴方や綱太夫君あたりの責任は重大ですね。

紋十郎　それでこの七月豐橋市へ興行に行きました時に、お名前は御迷惑になるといけませんからお預りしておきますが、そこの或る重い地位の役人で、まだ三十一、二の若い方が大變な文樂ファンでした。そして私に君たちがこんなむづかしい傳統を守る立派な仕事をしてゐるのに、いくらも年期を入れない素人上りの歌謠曲や、映畫の實演の連中はびつくりするやうな高い報酬をとつてゐる。それはその人たちの一と

晩の給料と君たちの一と月分の給料と同じ位に當るだらう、だから君たちは本當に氣の毒だといつて、いろ〳〵興行上で聲援して頂きました。それで私もその時にいふたのですが、我々の仕事は慾得づくやないので。これが好きでやつてゐるのと、前々からの名人の結構な仕事を、我我がなんでもよく守り通さねばすまんと思ふ責任とでやつてゐるのです。——私はいつもかう思ふて頑張つてゐます。

三宅　それは結構。好きと責任感とでやつてゆくとはいい心がけだ。どうかその調子でやつて下さいよ。——所で、貴方は若々しいが、いつか聞いて面白いと思つたが、初めは新派の子役に出たのでしたね。

紋十郎　さうだす。明治三十三年生れで、九つの時に最初は堀江座へ一旦出て、文五郎師匠に弟子入りをして小文と名のつたのですが、からだが小さうて舞臺のテスリの所へアゴがのる位で、舞臺へ出ても顔が見えぬ程小さくて間に合はんやうに思へたのです。それで一そ役者にならうと思つて、南地の春日座の縣妻吉一座へ入りました。婆さんの役が得意な人で、私は「己が罪」で、海に沈んで死ぬ子役（玉太郎の相手）をしたのを覺えて居ります。それから又左海屋の中村駒之助の一座へ入つた事もありますが、明治四十四年南の大火で春日座が燒けました。

三宅　さう〳〵。春日座はダダびろい小屋で安い場代だから、私は子供の時によく見に行つた。その中村駒之助もよく見て知つてゐるが、顔の大きい達者な人、今の嵐三右衛門君の前名だが、その駒之助とは同じ名でもちがふが、さうでしたか、私の少年時代のなじみの人たちだ。

紋十郎　それが緣があつたのですな。春日座が燒けた代りに、四つ橋に近松座が新築になりましたので、又元の文五郎師匠の所へ歸つて參り、十八の時に京都竹豐座へ小兵吉さんと出た事がありましたが、兎に角近松座が出來たため、今の師匠の所へ歸れたわけでした。それから大正

三年に師匠が文樂座へ近松座を出て入つたので、私もついて出ました。この時分に米太夫（晩年東京で吉右衞門のチョボになつた人）が、やはり文樂へ土佐太夫さんと加はつたのでしたが、或る時總稽古の日に、廣助師匠（後の弦阿彌）が丸本を膝にのせて稽古を聞いて居たのが、いきなり米太夫に「あんたは小說を讀んでるのか。あんたのは淨るりやないぜ。」といはれたのです。——

三宅　毒舌家の弦阿彌らしいな。

紋十郎　それで米太夫さんはすつかり嫌氣がさして、文樂を出て東京へ行つてしまはれたのだした。

三宅　さうでしたか、さう聞くと間もなく米太夫は朝太夫や都太夫の一座へ入つたが、そんなわけがあつたのでしたか。併し、米太夫も堀江座時代は相三味線の竹三郎（今の廣助）が賣り出してゐて、相當人氣があつたが、弦阿彌の目が光つてゐる文樂では勤まらなかつたわけですな。

紋十郎　弦阿彌さんはアダ名を「ぼんぼり」と申しましたが。

三宅　成程、ぼんぼりとはうまいね。腦天がはげて明るく、頭のまはりに毛が殘つてくろかつたから。……（笑）

紋十郎　先生、今度南座で「忠臣藏」が出てゐますが、私は「忠臣藏」といふと思ひ出ばなしがあります。先きに申したやうに九つで、堀江座へ初めて文五郎師について出ました時も「忠臣藏」でした。師匠も若く「九段目」の小浪を遣つて居られましたので、私は後見をして居りました。すると小浪の祝言の件で、私は後に居らずにぢらをしてゐて、あのうちかけをきせるのをとちつたのです。後で氣がついてあわてて舞臺へ行つたら、師匠が舞臺下駄で私を一寸蹴られたのですが、私は小さかつたのでその下駄がアゴへ當りました。でも、後になつて師匠から、後見をしてゐるからはその責任を知らん

といけないといはれたので、子供心に自分がわるかつたと思つて、今でも何事でも責任を思ふ事を第一にして居ります。それから大正三年に文樂へ師匠とは入りました時も「忠臣藏」でした。私はその時「討入り」に出る女中の役でしたが、端役でも工夫してやつてみました。すると白井會長の目にとまつて、女中を遣つてゐるのは誰や、氣を入れてゐるといはれて、それからおかげで役がつくやうになり、後には簑助と改名させて頂きました。それで今四月の文樂の五十日興行で、私は二回目にはむつかしい由良之助を遣はして頂きました。

三宅　さうでしたね。由良之助だけは君にはどうかと思ふが、「忠臣藏」の時、君の「九段目」の戸無瀬は結構でしたよ。落つきが出てぢつくりした味があつた。所で、あの「御無用」の件で下手（人形は逆勝手故にこれは芝居の上手に當る）の障子で立聞きするのに、芝居だと刀のぬき身を持つて背中へ立てまはしてきまるのを、人形ではぬき身を鞘へおさめ、鞘のまゝ背中へまはしてきまるのが面白かつたが、あれは人形らしい仕事ですね。

紋十郎　それだす。私は先生に會へば一番に伺ひたいと思うてゐたのは。——私の所へ人形を研究してゐる若い熱心な學生さんがよく見えますが、その方があすこで刀を鞘に入れてきまるが、あれは歌舞伎のやうにぬき身を持つたまゝきまる方が、繪になるといはれるのです。それで一度さうしてやつては見ましたが、どうも私には疑問で、これは先生に會つたらぜひ御相談したいと思つてゐたのでした。

三宅　さうですか。併し、人形で刀を鞘に納めるのはどういふ腹ですか、解釋から伺ひたい。

紋十郎　え。あれは外から御無用といはれたから、はつと刀を鞘に納める腹、つまり、刀を遣ふに及ばぬといはれたわけだから、刀を鞘に納めるのがあのやり方の性根です。そこでこれはうちの師匠、榮三さん、先代紋十郎さんも皆さ

ぶでした。

三宅　成程、それならよく分るし、人形だけに刀を鞘のまゝ逆に後へ持つても、すべて均整がとれてゐるから私はあれはその方がいいと思ふ。歌舞伎とちがつてゐるのも一つの特色になるから。まして以前からそれが傳はつてゐる仕事なら一そ大事にしたいね。

紋十郎　さうですな。私も考へましたがさう思つて、今度はさうしようと思ふ所でしたが、先生のお説を伺つて安心しました。我々の仕事もこれに似た事が多いので、いろ〳〵迷ふので、ぜひ先生方の御意見を伺ひたい。

三宅　いやどうも。さういはれていい氣な註文をしますが怒らずに聞いて下さい。私は貴方の藝を見てゐて、玉にキズといふが時々一寸した所で惜しいと思ふ不滿がある。

紋十郎　（目を光らせて）それはどんな事ですか。いつて下さい、ちつともかまひませんから。

三宅　失禮ですが、貴方は人形の急所のきまる所などの間が一寸早くないかと思ふ。それは貴方のやうな出來上つた人だ。間が早いといつてもそれはほんの二秒か三秒の一瞬間ですが、ほんの二、三秒間が持てぬ嫌ひがありはしませんか。

紋十郎　……

三宅　怒つちやあいけませんよ。これはほんの玉にキズの苦言ですから。――といふのはいつも私は思つてゐたが、君は昔から早言葉（上方では早口）だ。どつちかいふとせつかちだ。藝は恐しいもので必ずその人のふだんの生地が出ますよ。それ故君の藝が一寸早間になるのも、早口やせつかちの生れつきのためぢやないかと思ふ。意識をしないのにさうなるのではないかと思ふ。

紋十郎　（初めて合點がいつたらしく）あ、さういはれると私は早口であわて者だす。それがどうかして舞臺で出ると仰有るのですか。いやそれでよく分りました。

三宅　本當に失禮ないひ草ですが、君は頭はいいし、才人だし綱太夫君と好一對の文樂の人材だ。その上四十年近い年期の功がそろ〳〵見えて來て、この頃は藝に風格が出て來た。それで君は今が一番大事な所で、このまゝ上手で終るか、もう一つづぱぬけて名人になるか、その上手か名人かの今は兼ね合ひの所に立つてゐる。こゝ數年で君の心がけがよければ名人になれるし、こゝで君が慢心を出せば上手といふだけでとまると思ふ。その大事な所に立つてゐる人だから、目の前で失敬な事をいつたわけ。

紋十郎　いやよく分りました。私もそれをよく考へてゐまして、こゝで猶一生懸命にやらうと思うて居ります。そこで先輩の藝でも榮三さんは「陰」の名人で、うちの師匠は「陽」の名人ですが、私はその二人のいい所の「陰」の長所と、「陽」の長所とを何とか身につけたいと願つて居ります。又、玉藏さんはおだやかな人で、ふだんは今の山城師に似て、大きな聲一つ出さぬ溫和な人でしたが、それが藝によく出て、これは榮三、文五郎師に劣らぬ近頃の名人でした。この玉藏さんの長所もとり入れたいと思つて居ります。又、先代紋十郎師の長所もよく聞いて勉強して居りまして、「酒屋」のおそのはうちの師匠とちがつて、紋十郎さんの方でやつて、あのくどきも御承知の行灯を使う方でやつて居ります。

三宅　それは結構。兎に角人形の方は人材がないからしつかり賴みますよ。――それからこの方は一つほめたい事があるが、去年二月の「道明寺」の菅丞相だ。君があの役を遣ふのはどうかと思つてゐるが、見ると中々よかつた。この役は玉にキズの間の早い難はなかつたし、「段切れ」の「涙の玉」以下ぢつくりと結構でしたよ。

紋十郎　（にこやかに）さうですか。私は大役で心配だつたのです。けど、その前山城さんの「良辨杉」の良辨で苦しみましたので、菅丞相

もどうやらやれたのだと思ひます。その「良辨杉」の役がまはつて來た時は、本當に心配しました。山城さんのあの氣品のある淨るりに合はす聖人の役だすさかいな。私はこれは大變と考へてゐる中に、先きにいつた玉藏さんのこの役の藝を思ひ出しました。玉藏さんはどこかこの聖人のやうな肌合のあつた人ですさかい、先生の仰有るふだんが藝に現はれてよかつたのやと思うてます。それで一生懸命玉藏さんの柔和な藝を思ひ出してやつてみました。おかげでどうやら無事にやれました後へ、菅丞相の役がまはつて來たのです。

三宅　成程、良辨と菅丞相とはどこか似てゐますね。良辨で下地が出來てゐたから、丞相のやうな役が出來たともいへる。——兎に角、意外によかつたので、山城の藝もキズがつかなかつたわけ。それで菅丞相ではどこが一番むづかしいですか？

紋十郎　（一寸考へてゐたが）　え！。それはあの「身は荒磯の島守り」の所だす。

三宅　うれしいね！　さうでせう。淨るりでも山城はあすこが一番うまかつた。成程、あの「段切れ」もむづかしからうが何といつても節だからね。そこへゆくと「島守り」の件は節にして節に非ず、しかも、流人の孤獨、悲哀を强調するクライマックスなんだ。私は山城があゝいふ急所がいつもうまいのが好きです。山城の事を「むづかしい所程うまい人」といふのも、山城があんなむづかしい所で光る人だからだ。あすこは、山城が景を語り、情を語り、人を語つてつくしてゐる所だと思つてゐる。それを君があすこが一番むづかしいといつたのはうれしいよ。

紋十郎　さうだすねん。あれは腹でうれひを持つて、殆ど動かずぢつくりとやらねばならんので、とても骨が折れます。あすこも榮三さんと玉藏さんと二つのやり方がありますのや。榮三さんは丞相が坐つたまゝ、片手をぢりぢりとの

ばして節一杯にその手を膝の上にのせてきまります。これは澁くていい科ですが、玉藏さんのはもう一つ皮肉で動きがなく、一切手は遣はず、ぢつとしてゐてアゴを上手から下手へ動かして、いはばうれひの表情だけで科は一切なしにやるのだす。これも骨が折れますが、私はこの二つのやり方を代る代るやつてみました。

三宅　うれしい話だね。兎に角私はあすこで感動して身が引締つたが、それは山城の力ばかりぢやないのが分つた。君の人形もよく考へてゐたからでせう。歌舞伎だとあれはチョボが語るため、近頃のヘタなチョボで話にならず、折角のクライマックスがもり上つて來ない。あゝいふ所は文樂ですよ。

紋十郎　有難うござります。私も先きにいつたやうに割に早く女中の役で、白井會長のお目にとまつて、間もなく簑助になり、それから昭和二年辨天座で三代目桐竹紋十郎を襲名させて頂きました。こんないい名をついだので仲間からねたまれた位でしたが、その襲名披露は土佐太夫の「廓文章」で、榮三さんの伊左衞門に私の夕霧、師匠がおきさに出てくれました。この時先代鳳治郎さんが、前の紋十郎に緣があつたので見物に見えて、私に「もつと夕霧の人形をまつすぐ前へ出さんといかん」と注意して下さいました。鳳治郎さんは前の紋十郎について一旦人形遣ひになられた位の人で、くろうと同樣でしたから御尤もな駄目で、私もその時前へ出さうと思つても、手(左手を思はずつき出す)がいふ事をきゝません。つい人形がのびずにからだにひつついて持つてゐたからでした。所が、七年後「白石噺の揚屋」が出た時、私は宮城野を遣つてゐますと、この時も鳳治郎さんが見に來て下さいまして、「あ、手がのびて本當に遣へるやうになつた」とほめて頂きました。私もその頃からどうにか人形が持てるやうになつたわけですが、その時鳳治郎さんは「これはいいが、あんたが舞臺で汗をふくのはいかん。我々役者

は白粉をつけてゐるので、白粉が流れるから時時汗をふいて顔を直すが、人形遣ひは白粉はつけて居らんのやから、汗が出たらそれでえゝやないか。汗が流れたまゝやれ。舞臺で汗をふくと藝にスキが出る」といはれました。

三宅　えらい事をいふね。

紋十郎　私も本當に恐れ入つて、それ以來いくら汗が出ても、一切汗をふかぬ事に致して居ります。

三宅　いい話ですね。

紋十郎　成駒屋は人形はよく分つた方で、近年人形の「酒屋」のおそのの髪は「おしどり」になりましたが、あれも成駒屋の注意でさうなつたので、それ迄は「兩輪」でしたが「おしどり」の方が人形にはむいてゐます。

三宅　さうですか。それから君は榮三師の長所もよく知つてゐるから、君から榮三、文五郎兩師の比較論を聞きたかつたが、それは又別の日に譲りますが、文五郎の方は毎日殆ど一緒にゐるのだから話はありさうでないと思ふから、改めて伺ひますが榮三さんで教へられた所がありませんか。

紋十郎　ありますとも。それでいつも思ひ出すのは、「時雨のこたつ」で私が小春を遣ひ、榮三師が治兵衛の時でした。おしまひの殺しの後で小春の私がふるへてゐると、治兵衛が「こわい事はない」といふ所だす。そこで私の小春が坐つてゐるのに、榮三さんの治兵衛がこわい顔をして私の小春のからだをくると持つて、自分の方へ動かして引よせられるのです。これが毎日續いて舞臺で實に嫌な氣持です。からだを持つて引つぱりまわされるのですさかいな。そこで私は考へぬいて、これはこつちから先きに治兵衛の方へふるへてゐても、動いてよりそつてゆかうと思つて、「こわい事はない」で、一寸動いて行つたのです。するとそのまゝ受けて、からだを引つぱりまわされずにすみました。これは私の小春のゐどころが間ちがつてゐて、上

手の方にゐずぎだからでした。

三宅　成程ね。ほんの少しでもゐどころがちがつてゐたから、榮三が君を引つぱりまわしたわけですね。これもいい話ですね。全くゐどころは「最後のもの」だ。歌舞伎でも人形でもゐどころをやかましくいふ人は必ず名人ですよ。榮三さんらしい、いい話ですが、貴方がそれを悟つたのもいい話ですよ。――おやとんだ長談義でしたね。どうもいろ〳〵有難う。

（二三年七月）

市川海老藏、大谷友右衛門

三宅　やあこれはこれは、お二人揃つて來て頂いて有難う。

海老藏と友右衛門　いえ、こちらこそ、三越劇場で今日（十月十四日）十一月の出し物の發表がありまして、ついおそくなりました。

（これらの挨拶は友右衛門が殆ど一人でいつてゐる。海老藏の方はその後でもごもごと口を動かす程度で、餘り口をきかない。）

三宅　さうですか、道理でおそいので、今夜のこの會で君たちと對談の機會を作つて下さつた藤田年行君（前年雜誌「幕間」で〃三階席から〃の原稿を書かれた方で、熱心なその大向の經驗談の誠實は、讀む人の限り感動して好評嘖々だつた人。）とさつきから待ちくたぶれてゐた所です。

海老藏　（初めて口をきく）どうも相すみません。十一月に「黑手組の助六」をやるやうになつたのですが、これは……あの「權九郎」の方が私にはやれさうもないので……今戸さん（宗十郎が以前今戸に住んでゐたため帝劇の役者たちはその習慣で、この人も未だに宗十郎を「今戸さん」と呼ぶのもなつかしい感じ）がおやりになつた時は、この權九郎はおやりにならなかつたと思ひましたが？

三宅　さう〳〵。帝劇ではそんな事がありまし

たね。でも、「黒手組の助六」はあの「池の端」の權九郎の茶氣が面白いので、あれと助六と變らないと意味がない。

海老藏　（小聲で）でも、私には權九郎が。……

（ひどく氣にし、しょげてゐる）

三宅　いいぢやないですか、故羽左衛門もあの美男が、道化役の權九郎になるのが魅力だつた。今の若手中で女性の間で君のプロマイドが一番よく賣れるといふ、美男の君が、その權九郎になるなどいいぢやありませんか。

海老藏　それがどうも私には……

（ひどく困つたといふ顏つき、「まあ一つ」と慰め顏に同席の前記の藤田君が盃をさゝれたのを、そのまゝ下において考へ込む。鼠色の背廣を着た背中をまん丸く猫背のやうにし　名の海老の如くちぢこまつて屈托してゐる。）

三宅　何事も勉强だ。さつき友右衛門君が兄（海老藏の事）は不器用だから、權九郎のあのしやれがやれさうもないといつてゐたが、その不器用が値打だ。先代羽左衛門も不器用だつたが、それがあの役では却つて效果的でユーモアが出た。君もその積りでやつては。……

海老藏　……（無言）

友右衛門の「芦屋道滿大内鑑」の葛の葉姫
23 年 10 月於東京三越劇場

（この會話の如く海老藏は權九郎がやりたくない結果、十一月の三越では「黑手組の助六」は出たが、この「池の端」はカットし、宗十郎の場合の如く折角のこの芝居が半分に縮小せられたわけ。）

三宅　まあ、餘り海老藏君をいぢめると若い女性ファンに恨まれさうだ。この話はストップ。所で、私も君にはこがれてゐた。先刻「東劇を見る會」の主事酒井君が私にいふのに、私は切りぬきをして劇評を集めてゐるがその中で三宅さんは海老藏を誰よりも早く認めてゐられた。羽左衛門の「石切梶原」の時に海老藏の大庭をほめ、又その「松王」の寺子屋の時に海老藏の春藤玄蕃をほめてゐられた。外の劇評家はその頃海老藏に何の批評もしてゐないのに、珍しく一人でほめてゐたといはれ、その切ぬきをいづれ京都の私の方へ郵送するといつて下すつた。——さういはれるといづれも戰時中に私が書いた劇評だが、それらの切りぬきは勿論なくしてゐるので、すつかり私は忘れてゐたわけ、當時は早大の學生だつた酒井君が、そこ迄熱心に私のものなど、切りぬいて保存してゐて下さるのを有難く思つた。でも當の私がそれを忘れてゐたなど、私も少し年のかげんと悲觀してゐるわけ。

（友右衛門が若いのに、額に皺をよせて笑つてゐる。眼鏡の奥にリスのやうに目が細くきら〳〵光る。）

三宅　成程、海老藏君は噂のやうにしやべりませんね。利倉君がその無口を何かで書いてゐたが全くその通り、でも、義弟の友右衛門君はよくしやべるし、いつも舞臺の夫婦役で、こゝへ來ても友右衛門君は女房らしくしてゐるが丁度「吃又」だね。海老藏の吃りに友右衛門のおとくのおしやべり（笑）だが、さつきもいつたが私は海老藏君にこがれてゐた。私は酒井君がいつてくれた大庭や玄蕃より、戰時中歌舞伎座でやつた「伊賀越」の敵役（かたき）の又五郎を見て、若いのに立派で、あの「仇討」で紫のたすきをした姿が大きいのを有望と思つてゐた。それがこの

頃の好調は何より。しかし、君は一時からだが弱かつたが。そして中學は曉星の筈だつたが。

海老藏　（初めて權九郎の惱みを忘れたらしく）さうでした。中學は曉星へは入つて二年迄やりましたが、中途退學をしました。高麗藏になつた前後にからだがわるくて、一時鎌倉へ引つ込んでゐました。

（初めて盃に手をつけ、相當いける口らしく鮮かな飲みつぷり、藤田君は海老藏がのどがかわいたといつて上着をぬぐと、すぐ氣がついてコップにビールを滿々とつがれたが、それをも息をつかずに飲み干す。）

三宅　でも、この頃は丈夫で何より、だが、青年時代からだをわるくしてゐながら、近頃相當大きな聲が出るやうになつたが、もう大丈夫でせうね。

友右衛門　（おとくもどきに傍から助勢する）えゝ、この頃は元氣で、大きな聲を出しましてね。兄が舞臺でせりふを張ると客席で赤ん坊が泣き出した事があります。「寺子屋」の松王でも「無禮者め」や「うちで存分ほえたでないか」なんかで、大きな聲を出すので、舞臺に出てゐられる方が耳のコマクが破れさうだといはれた位でした。

三宅　結構々々。そのイキだ。私も年がひもなく君の「盛綱」を見たさに上京したのだが、先づ押出しの立派さを頼もしく思つたし、調子も相當、小生これはいいと思つたが、その後どの劇評を見ても好評なのは目出度いね。でも、あの盛綱の初めの出の衣裳は贅澤で綺麗だが、派手すぎて大きな菊の模様が菓子のレッテルのやうだ。

海老藏　私もさう思ひました。初めのあの衣裳は私の氣持にぴつたりしないので。……

三宅　さうですか、その言葉にはいいカンが感じられますよ。

海老藏　（少しテレながら）それで私は先生のその御意見を早く聞いたので、九日の日一日だけ

ありものの外の衣裳にとりかへてやつてみました。それも一寸どうかといふので、やつぱり初めの分にしたがどうも氣になります。

三宅　そこ迄考へてゐられるのは何より、兎に角京阪では君が「助六」でスタートをきつたためか、君を注目してゐますぜ。京都の劇通の菱田正男君も顏見世には、その中君たち若手中心で來てほしいといつてゐたし、私も松竹の遠藤さんに君をシンにして京都へ來てほしいといつた。いつか座談會で谷崎潤一郎先生にお會ひしたら、先生は幸四郎の「助六」は見たくないが、海老藏の「助六」は見たいと大に屬目してゐられた。だが、君は兄弟の松綠や染五郎たちとちがつて京阪へまるで來てゐないね。

海老藏　いいえ。さつき貴方の方の關さんがお見えになつてその話をしたのですが、そちらへ行く事は行つてゐるんです。えゝと、昭和十五年四月に堀越の家へもらはれて、翌五月に高麗藏から海老藏に改名しました。一年後ですか大阪へ行つて歌舞伎座でこの改名披露をしたのに、困つた事を覺えてゐますが、その披露の出し物が「六歌仙」の喜せんで、私には困つた出し物でした。文彌が幸四郎のおやぢで、業平が堀越の父の三升、小町が時藏さんで、その時藏さんが茶汲みのお梶で私につき合つて下すつたんですが。……

（さきの權九郎の時と同じく眉に皺をよせて困つた表情をする。）

三宅　成程、君に喜せんで海老藏改名とは妙な出し物だな。文彌とのとり合せもわるいし、君のやうな大男が喜せんは變だね。喜せんは三津五郎が天下一品とは六代目が市村座時代に折紙をつけたが、あれは小ぶりで小綺麗でないとね。君は若くても大件（おほとも）の黑主（くろぬし）で幕を切る方の人だから。

海老藏　え、困つたのを覺えてゐます。その一年後でしたか、えゝと、確か一年あとと思ひますが京都へ行つて父の長兵衞で、私は權八をし

たかと思ひますが。……

三宅　さうですか、その頃私は假りにも京阪に住まうとは思はなかつたので、丸でこちらの芝居は知りません。だが、京阪では誰でも君を見たがつてゐる。君のうちの支配人の堀さんも昨日三越で會つたら、君たちの一座で京阪へ行つてみたいといつてゐたが、あの人は興行師も兼ねてゐるから目が高いと思つた。ぜひ來給へ。尤も、遠藤さんの話では白井會長が大事をとつてゐるさうだが……。でも、こんなに誰もが期待してゐるのは、終戰後東劇の大舞臺で、「助六」といふ大役を君がしたので、私などあつといつたが誰でもそれがあるから。

海老藏　え。（うなづいて）私もびつくりしました。あれは二十一年五月でした。父の「助六」が出てゐる興行の終りの頃でしたが、私は宇野信夫さんの何とかいふ畫の部の現代劇をすませて、六代目さんの部屋へ挨拶に參りました時、六代目さんがお前に「助六」をやらせるからとおつしやるのです。私はびつくりしたが、あの時分歌舞伎座で本興行の後で勉强のため、我々の稽古芝居を時々先輩と同じ役でやりましたが、その勉强芝居の積りでゐたのです。でも、さうぢやない、本興行といふので私は本當に固くなつて、とても落ちついて樂屋にゐられないので、氣分轉換のために銀座へ散歩に行つたのです。……

三宅　さうでせうな。その氣持はよく分ります。それから。

海老藏　どうも苦しいし困つた。でも、その時私は福山のかつぎをして毎日父の助六を見てゐましたし、六代目さんに教はつたのでやつと出來たわけですが。父のはそんな事で手順は見てゐたので、舞臺稽古でいろ〳〵父からも教はつたので。

三宅　さて初日の感想は？

海老藏　え、揚幕から出るとぼうつとしてしまひました。花道のふりの間は何をしてゐるやら

よく分りません。本舞臺へ來てやつとどうにでもなれと度胸がすわつたのでした。それでもくわんぺら門兵衛に六代目さん、朝顔仙平に吉右衛門さんが出て來られたので、又固くなつてしまつた。すると、六代目さんと吉右衛門さんとが、私が力を入れる所や、せりふをはる所にくると、二人がその急所に小聲で「イキを鼻からぬいて」といつたやうにいつて下さるのです。それが實に救ひの舟で、さういはれてやつと元氣が出てやれたのでした。

三宅　成程。

海老藏　それで忘れもしませんが、初日の日その門兵衛と仙平とを二人重ねて切るまねをする所がありますが、あすこで二人の上にのしかゝつて切らうとすると、大向から「バチが當るぞ」と掛聲がかゝつた。（一同笑）これは忘れません。

三宅　しかし、よくやり了はせましたね。大體に好評らしかつたし、第一男前が立派とは衆口一致、私は寫眞で見ただけでよく分らなかつたが、今月の「盛綱」の立派から考へると、あのこしらえが歌舞伎的美化の極致だから、きつと立派に見えたでせう。でも、あの長い名のりのせりふなんかよくやりぬきましたね。

海老藏　それは市村さんの「助六」の時、私はくわんぺら門兵衛をやつてゐて、毎日舞臺で市村さんの助六のイキの緩急や、顔をよく見ておきましたのがどんなに役に立つたかしれません。

三宅　さうですか。流石に君たちはくろうとだから、一緒に舞臺へ出てゐればコツは分るわけだ。故人の梅幸や羽左衛門でもその調子で團十郎や菊五郎の藝を覺えてゐたわけでせうね。

（この時世話役で親切に斡旋して下すつた藤田君が、江戸つ兒共通のカン高い聲で「海老藏君が東寶劇團にゐた時に、なんかの新作をやつたね。その時うちの女房がそれを見て來て、高麗藏つて役者が嫌ひになつたといつてゐた。所が、この「助六」を見て來て海老藏が好きになつたといひましたよ」といふ。

一同大笑ひをする。）

海老藏　私のはそんなわけで市村さんの「助六」の時に出てゐたのが、どんなに役に立つたかしれないのです。市村さんはいい方で、さつき話の出た「石切梶原」の時でも、私が大庭に出てゐて、毎日ではないが、日によつて市村さんの梶原とせりふのやりとりで、向ふが「ウーン」と受けて下さる事があるのです。それはうまくイキが合つたわけで、成程こゝはかうするのだな、かういふのだと、私にはよく分つてどんなに勉強になつたか分りません。

三宅　さうですか、「助六」をぜひ一度見たいが、初演は勿論助六の「おゝさうだ」で幕だつた筈で、「水入り」はなかつたね。

海老藏　さうです。あれはやつぱり「水入り」がないと。……「おゝさうだ」で幕になるのはやつてゐる自分もつまりません。

（この時誰かが海老藏はさう丈夫でないから「水入り」がやれるかといふ。）

三宅　それはやらなければ。絶對に「水入り」はおやんなさい。君は立派な柄でわるくいふならグロテスクでもあるのだ。だから「水入り」は六代目以上びつたり柄にはまると思ふ。

海老藏　えゝ。それから段々日がたつてから、妹が見に來て、私に花道のふりの間が退屈だとコキ下しましたが。

三宅　それはいい。若い役者はほめるばかりぢやいけない。全くあの花道は餘程の腕がないとだれる。役者の家に生れた娘さんだから、それが分つてゐてわるロをいつたわけだが、君の場合はあの花道がきつとだれ易かつたと思ふ。急所をついた名評だ。

海老藏　（うなづいて苦笑してゐる。）

三宅　時に友右衛門君だが、先代の友右衛門はおとなしい好人物で、晩年は脇役者として堂に入りかけてゐた。素人出身であすこ迄出世したのはこの封建的な社會では珍しかつた。そこを永年私に厚意を持つてゐて下すつた同席の藤田

君が買つてゐられた。同君は熱心な先代のファンだつた。藤田君が應召後歸還して東劇へ先代を見に行かれ、幕がしまる時に「明石屋」と一等席のつい舞臺近くで、聲をかけられた逸話がある程のファンだ。尤も、先代はあの人柄の德で、前の話だがNといふ富豪が東藏時代からのヒイキで、大變な世話をした。先代は有名な酒豪だつたのを、N家は知つてゐて、いつも灘の生一本の菰冠りの酒樽が、先代の臺所にはN家から屆けられてゐたさうだ。さういふファンがあつたのも人德だつたが、先代歿後若い友右衞門君を、藤田君は同樣にヒイキにしてゐられて、今度の「葛の葉」を見てくれと、私へわざわざいつて見え、今夜も君を中心にこの會合をしたわけ、うれしい話ぢやありませんか。

（友右衞門再び目を細くしてにつこり、恥かしさうに藤田君の方へお辭儀をする。藤田君もてれたやうににつこり。健全なるラブシーン。）

三宅　だから友右衞門君も勉强し給へ。物質で助けるヒイキはあつても、藝が分つて藝のためにヒイキをしてくれる人は尠いからね。——所で、私は君の廣太郎時代、いや君といふと不思議に吉右衞門が本鄕座で「袖萩祭文」をやつた時の、子役のお君を思ひ出す。可愛らしくていい出來だつたから。

友右衞門　あれは昭和二年十月で殆ど初舞臺同然の時でした。八つの二月に初舞臺はふみましたが、あの十月で役らしい役がついたわけで、それで忘れもしませんが、波野さんの袖萩で私の手を握られると、手に汗がつくのです。波野さんは名高い汗かきですから、舞臺でぽたぽた汗が落ちて氣持がわるい。それをよく覺えてゐます。毎日手についた汗を自分の着物でこすつたものです。それが今度「葛の葉」をしてゐて、大役で骨が折れるので、子役の周子の童子の上へ私も汗かきで汗が落ちるのを、あの子役はいやがつてゐるやうで、歷史はくり返すと思ひました。（笑）

三宅　あのお君は上出來で、その後君の子役は大抵素直ないい出來だつた。

友右衛門　これも忘れられませんが、お君をどうにか勤めた、といふので、波野さんから御褒美が出て、小道具の藤浪へ誂へて、貞任のかんむりと笏とを身に合ふやうに作つたのを頂きました。（うれしさうにほゝゑむ）

三宅　さうでしたか。それから最近亡くなられた歌人の今井邦子さん、その遺著の歌集「和琴抄」にその時の廣太郎の事が出てゐるさうですよ。一體今井さんは芝居好きで私は前年わざわざ御手紙を頂いてうれしかつた覺えがあるが、大體我々年代の方のせゐか市村座の菊吉の芝居がお好きで、私の劇評を愛讀して下すつたわけだつた。閨秀作家は皮肉に美貌の方は尠いのに、あの方は綺麗な人で、約十年前私は歌舞伎座で吉右衛門が「河内山」を質店から出した時、偶然隣りの席で見物した事があつた。その今井さんが君のお君を見て、この子役は大變うまくて賴もしいが、それだけにおつとりとゆとりのある藝風に育てたいと書いてゐられるさうだよ。實に君のためには名評だ。御ヒイキの藤田氏がゐられるから苦言を呈するが、今度の「葛の葉」を見ても、若いのにあれだけまとめた腕には感心したが、氣が勝ちすぎて藝がナマになる嫌ひがないでもないが、今井さんは君の子役のお君を見てそれを喝破してゐられるわけ、苦言だけによく聞いてもらひたい。――それにしても立女形のやる大役の「葛の葉」をよくやりこなしたね。

友右衛門　（苦笑しつゝ）旅興行中あれを知つてゐる人があつて、教はつてみたのですが、うまくゆかない、それで歸つてから四日間夢中になつて稽古をしました。丁度山城さんがゐられた最後の九月二十七日、國學院大學へ綱太夫さんと行かれたのをおつかけて行つて、休憩の時間に、奥の子別れの所を語つて聞かせて頂きました。それから人形の紋十郎さんを訪ねていろい

ろ伺ひ、故榮三さんの型を教はつて、さつき貴方にほめて頂いた「畜生ざんがい」の後むきの形も、榮三さんの科ださうです。尤も、人形では足をばたばたやつて狐に返る科があるさうですが、それはやめてあれだけにしました。

三宅　さうですか、あすこはいい科と思つたがやはり研究があつたわけだね。兎に角よくやり通したと思つてゐる。君は氣骨の人らしいが、「毛谷村」のおそのの鮮かな再出發もその類と思ふが、あれはどうしたのです。

友右衛門　時藏兄さんに教はりに參りました。これもいろ〳〵親切にいつて下すつて、おそのは餘り男にならぬやうに、花道の出でも男か女かと怪しむ程度にしないと色氣がないといはれ、その通りに致しました。それから口說きにカラミを遣ひましたが、先代梅幸さんもさうださうですが、この次やる時はカラミなしにやりたいと思ひます。

三宅　人形もカラミは遣はない。數年前菊吉で「毛谷村」をやる案があつて、菊五郎も人形風でカラミを遣はない考へらしかつたが、先代梅幸の初役（大正五年一月）は傑作で、故梅玉のも名品だつたが、えらい女形がゐたものと思ふ。しかし、君はまだ餘り役をしてゐないから、最後に海老藏君にもう一度伺ひますが、「助六」の外、「實盛」と「松王」の大役をしてゐますね。

海老藏　え、一昨年夏「實盛」をやらされ、これは大體權十郎さんに教はりました。「實盛」は何もしない間がむつかしいと思ひました。それからあの時初日にバワーズさんと波野さんとが見えたので固くなりましたが、波野さんは自分は「實盛」は餘り手がけてゐないからといつて、駄目は出ませんでした。ただあの時臺本を檢討して、實盛の後の方の「坂東聲の首あらば池のたまりで洗ふて見よ」と、太郎吉が大人になつたら侍になるといつた風の、侍といふせりふが多すぎるのを少々遠慮して無事にすませま

した。又、松王の方はすべて六代目さんに教つてその通りにやつたわけでした。

三宅　さうですか、これで私並に京阪のファンが君の大役として見たがつてゐた「助六」「實盛」「松王」の大體の見當はついた。有難う。だが、そんな大役ばかりして初日の感想はどうです。もう一度聞かせて下さい。

海老藏　私は初日を出した後で憂鬱になります。人によると初日で鬱を晴らしてさつぱりするといはれる方がありますが、私は初日迄はそれ程でないのに初日を出してから一體これでいいのかと憂鬱になつてしまふのです。

三宅　あ、それなら君は自己反省をする人だからだ。井上正夫もそれをいつたが、自分を見つめて、自己解剖をするタイプ、役者として血液はA型の方だね。君の弟の松緑も私に自分は氣が小さいとこぼしたが、君の初日の後で憂鬱になるタイプといひ、いづれも藝術家にはあつてほしい血液だ。役者も藝術家なら、太い神經で自己反省も世論も批評も何とも思はないといつた血液は眞つ平だ。そんな血は軍閥型か、シャイロック型だ。大に初日後に憂鬱になつてくれ給へ、友右衛門もさうですよ。若い人は先づ苦しまなくてはいけないと思ふから。

（二三年十月）

片岡我當

我當の「忠臣藏」の若狹之助

三宅　時代の推移がはげしいから、貴方のお父さんの十一代目片岡仁左衛門を知る人が尠くなつた。菊五郎は十一代目を團十郎菊五郎歿後、第一の名人といつた位、本當の名人だつたが、いいお父さんだつたでせう。

我當　へえ、本當にいい父で私はどれ程敬服してゐるか知れません。こんないい父はどこにもないと確信してゐます。それで昭和九年に父は大阪で死にましたが、その時初めて貯金帳を渡されたので見ますと、案外うちには金がなかつた。人は松島屋は金持と思つてゐたやうだが、大磯に別莊があるだけで、死なれた後には少しか金はありません。といふのは先生もよくほめて下すつた名人だけに、名人氣質で役が中々氣に入らず、大谷社長を困らせた事があつたりして、休演が多くて一年に五回位しか出ませんでした。相當給金はとつたとしても年五回では收入は知れたもの、それで手許が苦しいのに派

手でしたから遺産は僅少、その時私はあのいい父だ。こんな金を私が持つてゐるべきでないと思つた。それに父はよく死んだ時すぐ燒くのはやめろ、人間は生き返る事もあるからといつてゐたので、大阪でも東京でも長い間十日以上の盛んなおつやをしました。その長い間毎晩飲めよ唄へよと大勢の人が來てさわいだので、貯金帳はゼロになりましたが、私はそれでいいと思ひました。

三宅 成程、私もお宅は裕福と聞いてゐたが。……でも、それは男らしいやり方だし、あの名人のためにはいい供養といへる。でも、舞臺は實に結構だつたが、君もいつた名人氣質がありすぎて困つたでせう。その苦勞で大變だつただらうと想像してゐた。

我當 え、え、いい人でしたが一つちがふとつむじを曲げるので、人樣に申しわけがなくて私はそれだけは全く苦勞しました。震災前の燒けた歌舞伎座時代でしたから私の十七八歳の頃ですが、樂屋で私は「こんにちはの千代之助」のアダ名をつけられた。それは父が氣むらで、人樣のきげんを損じるから、私は毎日はら〳〵してしまつて、樂屋中でどんな人に出會つても私の方から「こんにちは」と、申しわけの心で挨拶をした。それでペコペコする所からそんなアダ名がついた程です。

三宅 お察しするね。さういふとその後の昭和初期だが、私は菊池寛氏の依頼で第二次「演劇新潮」の編輯をした時、君の若い千代之助時代だが、古今座といふ研究劇團を再組織をし、それには君のヒイキだつた故安田善三郎氏の名が出た。氏は有名な劇通で趣味性のあるインテリだつたから、私は十一代目と君との話を聞くために訪問した。すると快く會つて下すつて、十一代目は名人だが、冷熱が甚しく困る事があると苦笑されて、そんなヒイキの方でも一寸手こずつてゐられたから。尤も、わる氣はないのだがね。

我當　さうですとも。腹にたくらみや魂膽は全くない人で、いはば正直すぎて何でも相手かまはずいつてのけるから閉口しました。そのお話の古今座は初め大正九年頃に作つたのでした。その頃故福助には「羽衣會」故榮三郎には「踏影會」が出來、若手がそれぞれ研究劇團を持ち出したので、私にもやれと古今座をこしらへた。その最初の發會式を帝國ホテルで開いた。挨拶を兼ねて洋食の披露をして、新聞社側から當時「都新聞」の平山さんや外二三の方、文士では犬養健さん、三島章道氏、近藤經一氏が來て下すつた。やがてテーブルスピーチになつて、大勢の方が何か私について話をして下すつた。その中でどなたでしたか、仁左衛門氏は名人だが子の仕込方は少し疑問で、千代之助君を餘りに可愛がりすぎる。猫可愛がりは面白くない。もう少し冷靜に本人を自由にのびのびと育てたいといつた事をいはれたのです。これはその頃よく人からいはれた事でしたがね。するとその話がすむなり、父は突然立ち上つていやそれはよけいなお世話だ。千代は私の子だ、自分の子をどう育てようと、それは自分の勝手だ、よけいなおせつかいはやめてくれといつたのです。——出席の方々はびつくり、座はしらける。あんな困つた事はありません。さういつて下さる方も私への御厚意ですのに、それを惡口とでも思つたのか、思つたまゝにづけづけといふのですものね。

三宅　いやどうも、それはお察しする。

我當　それで故市川右團次さんだけはよく私にあんたをお察しするといつて下すつた。といふのは右團次さんのお父さんの齋入さんも、私の父に似てゐたからで、大正四年二月歌舞伎座で、「皮足袋の久作」と「關寺小町」とで引退興行の時でした。ある日某新聞の方が見えて、齋入さんに何か話を聞かしてくれといはれた所が、齋入さんはあれはなんだと右團次さんに聞く。右團次さんが新聞の方だといつたら、「何、新

聞屋か、新聞屋ならあのチリンチリンと鈴をならしてくるあれやな」といつて號外賣り扱ひをしてにがい顏をしてしまはれたので、右團次さんは困つてしまつてどうにもかうにもあんな弱つた事はないと、私にいはれてうちの父とお宅のお父さんとは、似たところがあるから、あんたの苦勞が分ると、よくいつて下さいました。

三宅　いい役者だつたのに損な人だつたね。それに齋入以上に根本は善人だが、それで若い時から君は人間的にねれて來たともいへるから。……

我當　だから誰が何といはうとあんないい父はないのです。役者としても私は惚れきつてゐますし、親としてもあんないい親はない。

三宅　よく分る。今更ではないが「櫻時雨」の灰屋紹由のやうな爺さんには、實にたまらない父性愛がにじみ出てゐた。私は親に早く別れたので、父の慈愛さへよく知らぬ方だから、あゝいふ父性愛のあふれきつた爺さんを見ると、親とはこんなに有難いものかと泪ぐんだ事がある。だから十一代目の缺點はつまりバカ正直すぎただけで、君が父ののろけをいふのはよく分る。殊に、遺產の貯金帳をおつやで全部つかひきつたのは大賛成、男一匹だ、それ位の氣概がなくてはね。

我當　（うなづく）併し、その十七八歳時分は私の受難期でした。役はつかないし、舞臺へ出ても二十歳頃までは聲がはりで、せりふがしまらないのでダイコを食ひました。忘れもしませんが大正八年頃かに歌舞伎座で「新薄雪」の「三人笑ひ」だけ、中幕で出た事がありました。

三宅　歌右衛門の梅の方、十一代目の園部兵衛、中車が幸崎伊賀守でその一と幕だけ中幕に出すのが珍しい上、狂言名題を「散花（ちるはな）三人笑」としてもの笑ひになつたが、君はあの二枚目の左衛門に出てゐた。……

我當　さうです。それとその後明治座で「つづれの錦」の大晏寺堤が出て、父の春藤治郎右衛

門に私が新七を勤めた時でしたが、この時分は我ながら中途半端の大人と子供との間で、役者にとつて一番惱む時代でしたが、二た役共に舞臺でダイコを食ひました。私もまづいのが分つてゐただけ、一層つらかつた。その時樂屋で或る人が父に、貴方のやうに名人といはれて、天下の座頭役者になれて何の不足もない筈だといつた所が、あの負けぬ氣の父が、いや千代が舞臺でダイコを食ふのが、どんな事よりも私には情ない、千代が人にほめられるやうになる迄は私は仕合せでないと申しました。

三宅　成程。……十一代目の人間がよく分る。

我當　それで一方の古今座では第二回目に今の青山杉作先生の演出で、イブセンの「幽靈」をやり私はオスワルドを演じました。これは安田さんの御厚意で、あの九段のお邸の二十疊程のお座敷を二つ拜借して、小さな室内劇にして、お客は知り合ひの方だけ來て頂き、茶菓からサンドイッチ迄用意して見てもらひました。所が、青山さんの演出が嚴重で、原作のせりふの一字一句は勿論「お母さん、太陽」といつたせりふのいひ方も特殊なアクセントがあつて、實に生れて初めての苦しい芝居をしました。——え、外の役者は女優では帝劇の若い所から原光代、村田たけ子などに來てもらひ、嘘のやうだがうちの弟子の故人の我十の牧師がすばらしい出來だつた。

三宅　さうですか。私はずつと後でそれを聞いた位だが。

我當　それで餘り苦しい稽古をしたのと、未熟な私が一層未熟な年頃で苦しんでゐたのと兩方で、たうとうからだをわるくしてしまひました。人間心配が一番毒ですね。

三宅　さうですとも。

我當　その時父はどういふかと思ふと、へこたれるなといつて、舞臺でどんな役でも好き勝手なまねをしろ、くさいといはれてもしたい三昧をしろといふのです。つまり自分勝手にふるま

へといふわけで、これは私には一寸亂暴のやうに思へましたが、後で考へると、父にはちやんと考へがあつたのです。どうせうまくゆかない二十歳前後は、それでいぢけると一生くすんで臆病になつて藝がのびない。どうせさういふ駄目な時代なら、人に何といはれようと度胸だめし、舞臺度胸を作るためにも、舞臺でやれるだけの事はやつておけといふのでした。これが分つたのはずつと後、昭和七年に新宿で私どもで「青年歌舞伎」が出來た時でした。私もその頃は我當と改名後で幾らか舞臺の寸法が分りかけたわけでしたが、その時「太十」の光秀の役についた。すると父は、光秀なら當時中車だといつて、禮を厚うして中車さんの所へ敎はりにやらせるのです。「封印切」の忠兵衞の役がついた時も、梅忠ならまあ鳩治郎だといつて、成駒屋へ敎はりにやつてくれました。そんな風で六代目とか吉右衞門さんとかも父の方から行けといつて、習ひに參つたのです。すると皆さんは喜んで丁寧に敎へて下すつて、そんないい先輩方にいつでも近づける手がかりが出來ました。その後父はすぐ死にましたが、死ぬ前にかうして諸先輩に緣が出來てゐたので、父が死んでも私は少しも困りませんでした。——それで分つたのですが、どうしようと二十歳前後の生理的にも缺陷のある時代は駄目だ。だからそんな時は度胸定めだけにがむしやらにやれ、併し、少しものが分り出した時は名人や先輩について、丁寧に研究しろとかう考へたわけでした。そして諸先輩へ近づける道を、父が在世中作つておいてくれたので、父が死んでも困らずにすんだわけで。……

三宅　それだ。十一代目の舞臺のふけ役の父性愛のあふれる役そのまゝの話ですね。君がいつ迄もいい父だといふのも尤もだ。

我當　え。え。それで父は死んでも精一杯親孝行がしたいので、私は朝起きるなり身じまひをすませると、第一に父の位牌に向ひます。私の

家は日蓮宗で父も大の信者でしたから、先祖代代のお勤めをすますのに二時間かゝります。それで一月の南座のやうに十一時アキの序幕から出てゐると、十時に樂屋入りをするので何一つ本を讀むひまがありません。子供は十八の娘をかしらに八人ですし。……

三宅　おや〳〵、親孝行は賛成だが君らしくないいひ草だ。老いこむべからず、役者は世帶じみてはおしまひ。

我當　（苦笑）え。でも、私は自分が天分に乏しくいい役者でないのをよく知つてゐます。だから先生方のお話を聞いたり、いろ〳〵研究するのもそれで、自分は未熟だからせめて努力していい役者になりたいと、それのみ考へて一生懸命勉强してゐます。それがつい高じると舞臺で車輪になりすぎるといはれるわけですが、私のやうなぼんくらは努力主義でゆくより仕方がありません。それに父が死んでからは私は誰の弟子でもないため、師匠の型でやるといふ風に、いはば見習ひでやるわけにいきません。自然いろ〳〵の方のを調べてまとめ上げるわけで。……まだまだすべてこれからですが、その私が三月には吉右衛門さんの御親切なお招きで、終戰後初めて東上させて頂く筈でしたが、いろ〳〵な都合で取止となり、こんな殘念な事はないと思つてゐます。――しかし私は東京育ちですから、東京が未だに戀しくて、次の機會には是非……

三宅　私もその方だからよく君の氣持は分ります。――所で、育ちの言葉が出たが、君の子役は「櫻時雨」の丁稚時代の、君の七つ頃から私は大抵見てゐる。あの頃は可愛い目のくるつとした子役で人氣者だつた。お客がほめると十一代目は舞臺でさへ顏の相をくづしてゐた。その子役だが、子役の話と、子役の教育法だけは、未だどの演劇研究家も書いてゐないから聞きますが（但し、小生自身舊制度子役なるものは好まず）あの明治四十四年十一月の歌舞伎座で、羽左衛

門があてた「盛綱」の時、君は小四郎を初役でしたが、十一代目はどんな風にしこみましたか。

我當　それがね、ちつともやかましい事は申しません。先づ大體の筋をいつてくれ、この小四郎はえらい子だ、父の死顏を見て、一倍命が惜しうなつたといふやうな賢い子だといふ風にその性根をよく聞かします。それで「ポテチン」の床にあたる所などは、すべて自分（十一代目がその時微妙をしてゐた）の方でやるやうに舞臺で引き廻してくれるので、ちつとも苦しい事はありません。それからその後本鄕座で刈萱の「石童丸」を中幕にした時でしたが。

三宅　それは大正三年二月で先代段四郎の「岡崎の猫」が一番目、中幕が君の石童、二番目が「櫻時雨」で雀右衛門が吉野太夫の芝居だ。

我當　さう〳〵。その時は父はよく學ぶにはよく遊べだといつて、汽車や何かのおもちやをうんと買つて遊ばしてくれました。それから神田の須田町に「いく榮」といふ鳥料理がありましたが。

三宅　あつたね、江戸前の古い家で小座敷と二階とがあつて、鳥のたたきのうまかつたうちで私はよく行つた。

我當　これは話が合ひます、全くその通りで父もあのたたきが好きでよく行つたんで、そこへつれて行かれてうんと御馳走をしてくれ、私は大喜びで、床の昇太夫といふ太つたのをつれて行つて。

三宅　今の呂太夫を二たまはり大きくしたやうな大男。

我當　それ〳〵、そのため二階の梯子からおりられないので、歸りに梯子をおりる時には裸になつておりたのでした。（笑）そんな太夫迄呼んで、あのうちで大體の急所を敎へてくれた事がありましたが、その時も性根本位でしたが。

三宅　さういふとあの家も震災で燒けてしまつたが、淺草の金田に似て下町風の手堅いいい鳥料理だつたね。——だが、君は大變な音樂通で

レコードの蒐集家と聞いたが、それも震災で燒いたのでせうね。

我當　さうです。千枚以上のレコードで、義太夫から長唄その他の邦樂の名人のいいものを、全部揃へてゐたので、今殘つてゐれば何十萬圓、いや何百萬圓のもので。

三宅　惜しいね、私も君程ではないが震災前には義太夫のレコードの、明治大正初期の名人のもの、今の山城と先代清六との「太十」「菅原」「合邦」といつたものは全段集めてゐた。それを知り合ひの日本橋の者の土藏へ預けておいたので震災で全燒したから、君の氣持はよくお察し出來る。――でも、お互にぐちはやめるとして、最後に十一代目にほめられたやうな景氣のいい話をして下さい。

我當　それは一度だけこんな事があります。父が松竹と衝突して大阪の八千代座へ出た時で、大正十四年秋と覺えてゐます。長太夫や德三郎、門童といつた八千代座の無人芝居へ出て「城木屋」と「櫻時雨」、二の替りは「大晏寺」と「柿右衛門」で全くの大入り滿員でしたが、その翌月その無人の一座へ私だけが出る事にした。その時「小栗判官」の「人形廻し」の横山太郎をやる事になりましたが、あれはむづかしい役ですし、私は見た事もない芝居で困つてしまつた。父に聞いても今度はお前のための稽古芝居だといつて教へてくれない。私は困りぬいたが、正本と丸本とを父から借りてやつとどうにかまとめ上げた。そこで初日に父に見てもらひましたが、だまつてゐたと思つたら、間もなくダイヤ入りの指輪をくれました。口ではほめずに及第のしるしの意味でせう、私はあんなうれしい事はありませんでした。そのくせ父が休んだのでその芝居は散々の不入りで、前月の大入りを帳消しにしてしまひました。（笑）でも、長太夫の不寢兵衛（ねあべえ）は結構でしたが。

三宅　さうでせうね。あの芝居は皮肉物で私は明治四十三年一月この南座で、十二代目仁左の

我童の横山太郎で見た。その時の不寢兵衞は名人璃珏で、實にいくらほめても足りない位の傑作だつた。

我當　さうですか、それから私はいつも心にかけてゐる事ですが、戰爭中大阪で上田積といふ御ヒイキの方があつて、衣料だけでも疎開しろと、わざわざ車をよこして下すつたおかげで戰災で家や何かは全滅ですが、衣料のみは幾らか助かりました。それで終戰後第一にお禮に伺つてもお宅が變り、誰に伺つても御消息が丸で分りません。もし御無事ならその方も多分戰災でお困りでせうから、着物の一枚でも持つてお禮に行きたいのです、それをいつも思つてゐるのに、全く分らなくなつてゐますから、この對談を幸にもし御承知の方でもあればと思つてこれをこゝでいはせて頂きたいと存じます。

（二四年二月）

我當の「光秀」

中村時藏

三宅　隨分會ひませんね。去年の京の顏見世にも來なかつたし、……それで久々で無遠慮な事をいひますよ。去年の暮に演舞場で貴方は初役で「野崎」のお光をやつた。その時劇評を讀んでゐると、貴方のお光は幕切れに、丸本と變へて、お光が「尼法師」の氣持でなく、元の小娘になつて泣き出すといつた方の新演出でやつたやうでしたが？

時藏　え。その通りです。――實はあの幕切れをどうしようかと迷つて、結局おつしやるやうにしたのですが。

三宅　それなら菊五郎のやり方ぢやありませんか。

時藏　さうです。

三宅　それなら反對だ。菊五郎はお光をしても性來の丸ぼちやの顏で、何としても現代的なマスクの小娘になる。利巧な本人はそれを百も承知だし、根本はリアリストいや寫實家だから、理せめで本文を變へて、今樣の娘心で久松を諦めきれぬ女性としてやつた。あの人としてはそれは許されるが、貴方は梅玉歿後今は東西を通じて唯一人の傳統的で、古典的な立女形（たておやま）だ。そこに貴方の天分と立場があるのに、そんな現代的な解釋はいけませんね。私はこの時の劇評が

まちがひであるのを祈つた位。

時藏　さうですか。（あつさりと頭を下げる）いや全くそれにちがひありません。（と氣の毒なやうにしよげる）。この對談場所がその樂屋だから、細君が傍にこれを聞いてゐて「あの時は、いろ〳〵考へて迷つていらしつたわね」と、大きに慰め役にまはる。

三宅　とに角貴方は古典派の女形だ。やはり丸本物は原作尊重でいつて頂きたい。大谷社長すら時々私にそれをいつてゐられますよ。そのお光が新演出は困つた。私は見ないだけに、貴方に會へばこれを第一にいひたかつたのです。

時藏　よく分りました。この次は原作でやります。つい相談相手がなくて迷ふものですから。

――今度は梅玉さんの追善興行で、私は見た事もない「樽屋おせん」をやる事になりましたが、丸で見當がつきません。それで白井會長が見えたのを幸に、すべて梅玉さんのやり方を敎はつてやつてゐますがどうもうまくゆきません。

三宅　いや、そんな事はありません。いい脚本ではないが相當見られますよ。花道の出のポーズなどうまく梅玉をとりましたね。器用だと思つた。だが、衣裳が赤ちやけて變な色ですが、梅玉のとちがひますね。

時藏　さうですとも。梅玉さんの追善の出し物だから、衣裳だけでもその通りにしたかつたのを、こちらで註文したのであゝいふものになつたので、私も氣に入らないので。……

三宅　この頃それはよく聞く話だが、貴方の地位なら、そんな時は苦情をいつて、大阪からとりよせるぐらゐな事が出來ないのですか。

時藏　え。本當はさうしたいし、さうすべきなんですが、ついいろんな事であゝいふ結果になつてしまつて。ですからやつてゐても氣持がわるくて、白井會長のお氣に召すかどうか案じてゐます。

三宅　とに角衣裳は梅玉の方がよかつた。おしいね。

時藏　併し、梅玉さんでも衣裳で面白い話を、御本人から伺ひましたよ。あの玉手御前の衣裳は人と一寸ちがつてナス紺で結構と思つてゐました所、御本人の初役の時、註文した衣裳の色がうまく染らない。そこでその時分はお若かつたので強ひて別に染めろともいへず不出來な分を、その時の間に合せで黒つぽい色で急に染め直したんですつて。その出來上つたのを見るとあのナス紺、御本人は仕方なくそのまゝお召しになつたのが、あの仁にはまつて好評なのでこれが型になつたわけでした。

三宅　さうですか、その初役はあの人の福助時代の大正六年九月の浪花座で私は三度續けて見た芝居、先代梅玉の合邦が實に傑作でね。玉手より合邦を見たくて行つた。成程確にナス紺でしたが、これは怪我の功名でしたね。

時藏　でも梅玉さんは衣裳を全くよごされないのがえらかつた。あの黒つぽい玉手の衣裳で、手はまつ白に塗つてあるのに、あの膝をちつともよごしませんでしたよ。とても出來ない藝當で、どうしても手の白粉がつく筈なんですが。……外の役でもあの方ぐらゐ衣裳をよごさなかつた方は珍しい。尤も、「湯殿の長兵衛」の女房お時も、あの「子別れ」で着物の膝をよごしてはならぬのがおきてになつて居ります。

三宅　さうですか。それは立役でも同じ事で「忠臣藏」の定九郎や、勘平で血のりを衣裳につけないのが心得になつてゐますから。

時藏　梅玉さんは全くその方でした。又、玉手のさわりなんかも床が、どう語つてゐようと、平氣でてんで床などを考へないやうに、ゆつくりと落ついて、自分は自分でするだけの事をしてゐられました。「かちはだし」の片手の後むきの所なんか殊にさうで、丸で床を無視してゐられるやうなんです。それでゐて急所はぴたつと糸についてゐるんですから。恐れ入つたものです。——さういふと貴方に暮の宗十郎の伊左衛門を見て頂きたかつた。これも結構で恐れ入

つたものでしたので。

三宅　それ〳〵。その話もしたかつた。宗十郎の「廓文章」は東京では久々で本郷座でやつたきりだから見たかつたのが忙しくて上京出來ず、これは殘念でした。だが、流石に好評でしたがどんな所がよかつたのですか。見てゐない人のために書いておきたい。

時藏　全然丸本の本當の二枚目でした。若い方が御らんになるとお笑ひになるやうな本當のつころばしで、あんなやり方は今はあの方以外には出來ません。座敷になつてこたつをふみこえたり、萬歲傾城も賑かに踊るやり方で先づ上方風で。

三宅　あ、それなら分るが十一代仁左衛門に近いわけですね。

時藏　さう〳〵。御本人もそれはいつてゐられました。併し、赤のひもつきをはいてゐられたり古風なものでした。その萬歲傾城の件で「侍ける」あたりは、赤のひもつきの淺葱のあの脚絆が、ちら〳〵見えて本當に昔の芝居でした。藝者衆なんか、そこで紀の國屋さんは妙な足をするといつて、笑つたりしましたが、それが又獨得で面白いんです。

三宅　よく分ります。目に見えるやうです。私は宗十郎のものも殆ど見ない役はないのに、今度の傑作の伊左衛門を見外すなんて。……だが貴方の夕霧も好評で、劇評ではお光以上でしたよ。

時藏　いえ、いえ、とても我々は及びません。梅玉さんのが目に殘つてゐますから。

三宅　今二枚目の話が出たが、昨今東京に若い二枚目役者がありませんね。羽、宗が死んだがアトが續かない。所が、私は暮の顏見世で貴方の次男の梅枝君の若衆を見て、姿はすんなりと背は高いし、顏も女形をするより綺麗だし、この人を二枚目に育てたいと思つた。

時藏　本人も先生のそのお說を新聞で拜見して、喜んで私へ手紙でいつて參りました。本人

も女形より二枚目が好きです。吉右衛門にもよく賴んでさういふ風にさせて頂けば何よりです。

三宅　梅枝さん、こちらへいらつしやい。貴方はおいくつ？

梅枝　二十三になります。初舞臺は昭和十一年の歌舞伎座で、三代目梅玉歌右衛門の百年祭の時、故人の歌右衛門さんが「日まねぎの淸盛」をなさいまして、羽左衛門さん、左團次さん、菊五郎さん、吉右衛門さんなど全部大幹部がそろつて出られた狂言で、九つで里の童を勤めました。それからずつと學校で昭和二十年に曉星の中學を卒業しました。

三宅　それは〳〵。今の役者で正式に中學を卒業した人はないと思つてゐたが、貴方は卒業したとはいい事だ。

梅枝　でも、學校があつたので芝居へは餘り出られず、又戰爭中は勤勞奉仕が多くて芝居が見られずに殘念でした。

三宅　だが、貴方はよく人の芝居を見てゐますね。貴方が後の方で東劇や三越で先輩の芝居を見てゐるのを見て賴もしく思つた。しつかりおやんなさい。背の高いのが何より、二枚目役者がちんちくりんでは話にならぬ。(笑)　それでどんな役がやりたい？

梅枝　私も二枚目を勉强したいんです。故人の羽左衛門さんが好きで、學校へ行つてゐて餘り見てゐませんが、「勘平」「與右衛門」「與三郎」など拜見致しました。

時藏　(さあその位にしておいてと梅枝を脇へやる)でも、二枚目は大變です。私は梅玉さんの「酒屋」のおそのが結構なので、特にあのさわりは後へまはつて見てすつかり覺えて、動きからせりふすべて一切手帳にとつて居ります。それでやればいつでもやれる位になつてゐますが、おそのや私が梅玉さんの二役早替りの半七に、お名ざしでいつも三勝をしてゐますが、その三勝もまだいいのです。それが半七となりますとね、

私は旅でおそのをやつて、梅玉さん同樣半七と變つてやつたのですが、さあいけません。何でもないやうな半七が、あれが二枚目ですから、どうにもからだのあがきがつきません。今度も「熊谷陣屋」で義經に出てゐますが、手のおきやうに惱みます。扇を脇へ立ててゐればいいやうなものですが、全くむづかしいのは手のあつかい方です。白ぬりの役は本當に大變で、兄の「河内山」で松江侯をやりましたが、これもむづかしくて大弱りでした。六代目さんは河内山と對談の間にキョーソクさへ使はれずに、手を膝べおくだけでおやりになりますが、あのまねは出來ません。半七などもそれで二枚目は本當に大變です。からだを柔かくさせても、女形になつてはいけないのですから。

三宅　その通り。それだけに今の若手で二枚目に進む勇氣のある人がない感じだ。いつか彦三郎が二枚目を本當につつころばし風にやれば、お客に罵倒されるだらうと、座談會でいつてゐたが、理窟は正にその通りだが、さりとて二枚目なしに歌舞伎は成り立たない。梅枝君は幸に二枚目志望といふから、どうか本人の意志を尊重して勉强させたい。二枚目志願とはいい心がけですよ。

時藏　全く女形は若い者にはどうにかなり、いはばごまかせますが、二枚目はごまかせません。あれに出來ますか知ら。

三宅　田之助君がこの一座から出たのだ。その穴うめにも修行させたい。――所で、貴方は梅玉の話ばかりするが、貴方なら私は故人の梅幸の話をしてほしいな。梅玉を私はそれ程買はないが、梅幸は名人だつたから。それに貴方は梅幸崇拜の筈で、よく教はりに行つたでせう。

時藏　え。え。えらい方でした。「陣屋」の相模と「戻橋」とは特によく教はりました。相模はすつかり覺えてその通りにして、今度も訥升にそのまゝ教へましたが、梅幸さんは相模は腹のいる役だと一番にいはれました。そして梅幸

さんのは名人の秀調のやり方ですつてね。その秀調さんは團十郎の熊谷でヒケをとらなかつた程の、たいした出來だつたさうです。からいやり方だつたさうで、後の小次郎の首を持つて、藤の方へいふ「生み落したはこの敦盛樣」のあのせりふを、「敦盛樣」をいはずに、「これこの」だけにして、床にチンと受けさせ、もう一つ「この」でチンと受けさせるだけで腹で泣いて、敦盛樣をいはずに見物に分らせたさうです。結構なお話と思つて、私も旅でそれを學んで「この」チンを重ねてやつてみたが、とても持ちきれないのでやめました。又、「戻橋」では出をやかましくいはれて、あれはかつぎをかぶつて踊るから、足だけの踊りだといつて足を實にやかましくいはれました。所が、その通り踊るのが大變でとてもイキぎれがするのですが、それはおしまひの「來りけり」の所で、かつぎをかぶつてゐる間に、口をひらいてうんとイキをしろといはれるのです。そこ迄はイキをつめて、終りの顏をかくせる所でイキをするわけで、よく考へたものと恐れ入りました。

三宅　成程、それに梅幸はもの知りで、六代目の名品の、「勘平」も梅幸が教へたさうですよ。

時藏　さうです。梅幸さんは女形は立役も知らないと、女形のつとめが出來ぬといつてよく立役の事迄知つてゐられました。あの六代目さんの明治四十二三年頃の初役の「水天宮利生深川」の筆屋幸兵衛の時、私はあの娘を米吉時代で勤めましたが、その時は六代目さんと一緒に梅幸さんのお宅へ伺つてよく教へ込まれたのでした。

三宅　さうでせう。「筆幸」迄知つてゐたのはたいしたものですね。

時藏　それで面白いんですよ。舞臺の隅々迄よく分つてゐらしつて、大勢の腰元が出て板つきでせりふなんかいつてゐるのを、遠くからちやんと見てゐられて、あ、あの三人目は變だ、あれは見込みがないといつた風にいはれました。

それでよく氣をつけて見ると、その腰元は一人だけ調子外れの聲でせりふをいつてゐるわけでしたが、そんな事をいつの間にか見てゐられたのだし、その非難が圖星でよく當つて居りました。

三宅　教はるといふと、今度吉右衛門氏の「梅忠」は一寸變つてゐて、私は大變面白く見ましたよ。あれは明治四十三年？　の市村座の初役で、私はこの役のみ見落したが、芙雀（後の菊次郎）が梅川、東藏（友右衛門）の八右衛門でしたね。

時藏　え。え。あれは歌六がすつかり教へたのです。私も一緒に話を聞きましたが、お前（吉右衛門）に「紙治」は出來ぬが、「梅忠」なら出來るといつて、とてもやかましいつたので、兄は手も足も出ず固くなつて困つたのを覺えて居ります。それで東藏さんの八右衛門もやかましくいつて、あの引つ込みで封印の紙切れを行燈で見る所を、特別にむづかしくいろ〳〵教へてゐたのを覺えて居ります。

三宅　貴方はその時子供なのに、よく覺えてゐますね。吉右衛門氏はかへつてそこ迄いひませんでしたよ。但し、忠兵衛が二階から下りて來て、それ迄は二階にごろねをしてゐた心地で、貝の口に結んだ帶を前にしてゐたので、くるつと當り前に後へまはすのが珍しく、面白い古典的な演技と思つて、先程一寸本人に聞いたら、あれはおやぢに教はつたのでやりますが、外の人はやりませんといつただけでした。正にその通りだが、東藏の八右衛門の事などは聞かなかつた。前から貴方は記憶がいい。さつき見えた貴方のひいきの石川さんが貴方を「頭がいい」といはれたが、これも正にその通り。だが、その記憶がよくて頭のいい貴方が、去年の三月南座で出した「切られお富」は、失禮だが不出來だつた。貴方は故源之助に教はつた筈なのに、源之助風でなく仕事を忘れたのかと思つた位。

時藏　え。あれはすつかり御本人から教はつて

よく知つてゐたのです。それが何だか氣がさして、聲色を使つていい氣になつてゐると思はれさうなので、わざとあゝして芝居をせずにやつたのですが。……でも、そのため失敗したのはよく分りました。……あの「赤間屋」のゆすりのせりふは、合方は「たなのだるま」なんで、それに合ふやうあの通り「總身の疵に色艶も――」と、田之助ゆづりに時代にいふんですが、どうも氣がさしてね。……たうとうあんな中途半端な事になつて、貴方のおこごともよく知つて居りました。

三宅　それなら結構ですが、とに角貴方のあのやり方だと、「たなのだるま」の合方の芝居でなくなる。貴方は器用だから何も物まねはしなくてもいいが、あんな生世話の古風な面白味だけは出してほしい。序に「女團七」をやつてほしいね。名譽恢復のために。

時藏　え。私もやりたいんです。それに源之助さんはあの「女團七」を、歌六から教はつたんですつて。確にさういつてゐられましたが。

三宅　さうですか。一寸意外だが物知りで有名な歌六氏だから、あんな芝居迄知つてゐたのでせうね。記憶力では中車以上といはれた人で、古實通だつたから。

時藏　まあさうです。それで「沼津」のお米のさわりも、源之助さんは父から教はつたといつてゐました。それが丁度夏だつたさうで、父は裸でふんどし一つで、あのさわりを立つてやつて見せたさうです。源之助さんも驚いたが、裸でゐてきちんとお米になつてゐたのには感心したさうで、私にその時父の事を「旦那にさうして教はりました」と、旦那といふ言葉をはつきり使はれました。

三宅　よく〳〵感心したからでせうね。

時藏　それで源之助さんは歌六への御恩がへしだといつて、私があのお米をした時に、父が教へた通りを、源之助さんが私にそつくり寫して教へてくれました。私のお米はそんなわけで父

から源之助さん、それから私へまはつて參つたわけでございます。

三宅　これもいい話ですね。私など歌六氏や、源之助を知る者は、裸でお米を敎へる姿、驚きながらそれを見てゐる源之助のまなざしが、十分想像出來ますよ。――所で、「女團七」は義平次婆が大役でむづかしく、あれは故人の小團次が絶品で、木村莊八氏もそれをいはれた事があつた。あれはぜひ吉之丞にやらしたい。

時藏　いや、竹三郎がやらして頂きたい、團之助もぜひといつてゐますので。――

三宅　おや〳〵。義平次婆志望者が「忠臣藏」の勘平みたいですな。それだけ人氣がある芝居だが、むづかしいのも大變なものでせうね。度胸だめしに失敗してもいい大役だから見せて頂きたい。貴方に限つては失敗してもいいから、「玉手御前」のやうに、女形の大役を見せてほしい。つまり、樂を求めずに苦を求めて頂きたい。

（二四年四月）

井上正夫

三宅　昨秋から三回東劇で貴方の芝居を見て久久に會ひたくなりました。貴方も放送局の大岡龍男君に、私に會ひたいとことづけて下すつたし、お忙しい中をお邪魔しますよ。

井上　隨分お目にかゝりませんね、私も輕い喘息があるだけでどうにかやつて居ります。去年からこの猿之助さんの一座へ合同したが、さつきもこゝ（東劇）のエレベーターの中で會つた時、年はとつても、私があれだけの調子（聲）が立つ間は大丈夫ですよといつてくれた。

三宅　正にその通り、去年の十月こゝで貴方の司馬江漢を見て、ナマリこそあるが、昔に劣らぬ音吐朗々の立派なエロキューションには驚いた。

井上　さうですか。さういはれると私は聲だけは昔から風でもひかぬ限り、調子をやる事はありませんでした。若い頃「金色夜叉」の貫一をしてゐて、調子をはると、お宮の役者は傍にゐて耳が痛くなるといはれたのでした。その代りせりふは生れつき覺えられなくて困ります。それに役者は因果な事には、年をとる程大役がつくから、せりふをよけいに覺えねばならぬ。記憶のいい時の若い時は端役やなんかの、書きぬきをもらつても覺える用がない程しかせりふが

ない。それが年をとつて記憶が怪しくなり出した頃から、書きぬきのせりふがうんとふえるです。あべこべだから困るんです。年をとるに從つて、せりふが少くなるならいいんだが。――私はせりふとなると不安で、覺えてゐても、いつもわざとかげにプロムプター（後見）をつけておきます。何もせりふを一々つけてもらふのぢやないが、後についてゐてくれると思ふと安心して、せりふがすら〳〵いへる。ぢやが後についてゐないと、よく覺えてゐてもいいそこなつたりするから。

三宅　だが、五月の「明君行狀記」の光政はせりふをよく覺えてゐたね。私は二日目に見てあの長いせりふをよく覺えてゐられるのに感心した。左團次さへ手こずつたのに。

井上　いや、あれには驚きません。大變は大變だが、私は眞山さんのものでは二十年前の「平將門」（本鄕座上演）でたゝきこまれた。將門のせりふこそ大變ですぞ。あの事を思ふと池田侯の方はまだらくです。

三宅　それには貴方にぜひお傳へしたい吉報がある。私は京都に多くゐるため先日吉井勇さんに會ふと、貴方の「明君行狀記」をラジオで聞いて、大變感心してゐられた。立派なもので、ラジオで聞いても藝にストックのあるのが分る。あれは井上の生活の賜だらう。餘りあくせく働かずに、ぢつくり精力をためてゐるから、あんな力作が出來るのだらうとほめてゐられた。これは私と偶然一致した意見で、私もそれを書いた位。

井上　……。

三宅　まだあります。その五月の「宮本武藏」の澤庵が傑作で、私はほと〳〵感にたへて歸つた。すると先達ある會で、三十餘年前新派の若い女形で相當よかつた末吉春人君が、今は京都にゐて旅館をしてゐるが、その好人物の末吉君が私に會ふなり、東劇の井上先生の澤庵は大變な傑作ださうですねといふ。私は驚いてどうし

てそれが分る、實は私が東京にゐる間見た新聞劇評には、澤庵をほめたのに出會はぬから、私は不審に思つてゐたといつた。すると末吉君は一昨夜うちへ東京の某會社の社長が泊つて、その方は歌舞伎好きで新派は見ない。殊に井上は嫌ひだといつてゐた人だが、猿之助と一座したので見に行つた。するとあの澤庵の妙技に感心してしまつて、いつも好きな某歌舞伎役者が嫌ひになり、嫌ひだつた井上が好きになつたと、實に大變なほめ方をされたさうです。

井上　（固唾をのむやうにしてゐたが）さうですか。いやどうも有難う。

三宅　私はそれを聞いて末吉君にいつた。だから本當の仕事をする事だ。いい仕事さへしてゐればどこかで分つてくれる人があると、思はずどなるやうにいつた。――尤も、近頃さういふ本當のいい仕事に、敵でもほめるといつた人は尠くなり出したが。……

井上　さうですか。あの末吉君は私も覺えてゐるです。確か山口定雄の弟子で、おつしやるやうにいい女形だつた。それから私はあの人に踊りを教はつた事がある。

三宅　貴方が踊り？

井上　さうです。踊りです。あの人は踊りが出來ます。さあ何の芝居の時だか忘れたが、舞臺で一寸踊るやうな役がついた。私はそんな心得がないので、あの人にふりつけを賴んで教はつた事があるです。

三宅　それはいい、貴方の踊りは見たいね。（笑）尤も、本當の踊りでないダンスみたいなものなら、北條君の作で踊つたが。――

井上　（眞面目に）いや、踊りどころぢやないです。私は「夏祭」の團七をやつた事がある。故人の村田正雄の義平次でな。え、それは大阪の天滿座で、私が役者になつて間のない二十二歳の時です。それから「忠臣藏」の由良之助もやはり村田の平右衛門でやりましたぞ。

三宅　おや〳〵。

井上　笑つちやあいけない。私は四國に生れた關係で、子供の時から義太夫はよく聞いて好きです。先日貴方の放送の「義太夫入門」も二回程聞いていい勉強になりました。それで私は「沼津」の平作をやりたい。

三宅　そりやあいけない、貴方のやうな名人級の人は一藝に終始しなくては。貴方が平作をやつてうまくても手柄にならない。

井上　……。併し、今度の家康も、「坂崎出羽守」が出ると聞き私は進んで買つて出た位です。尤も、さて舞臺へ出て見ると新派のせりふとちがつて「間」を持たなくては困るので、「間」の持ち方に苦心してゐます。さつきも權十郎さんの崇傳を幕だまりから見て、參考にした位で、私には「間」を持つのが大變だ。ですがね、又、この一座でする新歌舞伎の芝居のせりふでは、「間」があるから大いに助かる事もあつて、司馬江漢や光政は、新派とちがつて間があるのでせりふをトチル事がないです。そこへゆくと新劇や中間演劇は間がないから、せりふがいひ難いし、十二分に腹には入つてゐんとつかへ易い。その代りこんな間の入るせりふの芝居は、相手がうまくないとやつてゐられぬ。新劇や中間演劇は、とん〳〵しやべるから相手が假りにまづくともやれるが、新歌舞伎はお互に間でものをいふから、相手がよくないと困ります。ぢやから左團次や菊五郎が、相手をやかましくいつて選んだのがよく分るです。

三宅　成程、でも、終戰後貴方は新協劇團へ出たりしたが、貴方としてはかういふ一座の方がぴつたりするでせう。

井上　えゝ。もう私など新協では入れてもくれないが、この一座で芝居が出來るのは結構です。ぢやが私はこの一座でもメーク・アップにトノ粉をつける役ばかりで、役者でゐて近年白粉をつけた事がない。それが今度の家康だけはトノ粉ですと、客席から見ると顏がまつ黑ださうで、今度初めて白粉を買ひました。（笑）

この時、不意に山本有三氏がこの對談中の樂屋へ這入つて來る。私と一寸雜談をしてゐると、井上が「如何です」と家康についての意見を求める。すると山本氏は一旦演出者にすべて一任した以上、作者として善惡可否は一切いはないと、例の如く人道主義的な考へをいふ。それですぐと出て行つてしまふ。

三宅　今度の「宮本武藏」は平凡で、貴方の澤庵もこれといふ事はないが、五月の初めの「宮本武藏」の澤庵は本當に傑作だつた。あの時人にもいつたが、あの坊主のかつらが特にうまかつた。

井上　あれは田島といふかつら師がやつてくれました。これは新派でも私がやらせる迄は使つた事のないかつら屋だつた。それが私と相談して工夫してくれるのであれだけのものが出來上つたです。

三宅　あの靑い色も寫實でなくて、少し毛ののびかけた坊主の頭らしい。それと坊主のかつらの後のぺらぺらしたものは、どの役者も困つて、あれをぴつたり襟もとにつくやうにしたいのだがうまくゆかない。それを今度實にうまくぴつたりと皮のやうに襟についてゐた。――これをいふと失禮だが、これは貴方が初めての成功者とはいへない。私は大正十三年夏松竹座で、故左團次が松居氏の新作の「文覺」で、少し毛の生えかかつた坊主頭のかつらを、あのぺらぺらを巧に工夫して、ぴつたり襟についてゐるやり方に感心した事があつた。坊主のかつらのうまいのは左團次のあの時の工夫がエポックのものかと思つたが、五月に貴方の澤庵を見て、あのかつらのうまいのに敬服した。左團次もメークアップやかつらに苦心したのは、丁度貴方に似てゐる。

井上　さうですか、あの田島は段々うまいのが分つて來て、近頃は外でも賴む人が出來たやうです。

三宅　これは貴方との拙著の「對談記」にも書いてゐる筈だが、貴方のそんな苦心は昔から大變だつた。若い頃東京へ來たばかりの中洲にあつた眞砂座の、伊井一座へ貴方が出て、仕出しのロシア人か何かで、頭を貴方が本當に坊主にすつて、その上へシュロの箒の毛を、一本づゝとつて植ゑつけた苦心の頭を、見に來てゐた八百藏後の市川中車が、あれは誰だ、うまい頭をしてゐるとほめた逸話がありましたね。

井上　え、あの時は毎日頭をかみそりでそつて、毛を植ゑつけたのでたうとう熱が出て來て、頭が燃えるやうでした。

三宅　それ以來のかつらの難工事ですな。とに角大正十三年に左團次の第一發、今度の貴方の第一發でむづかしい坊主のかつらの難工事がまづ完成したわけだ。

井上　いやどうも。そんな話が出ると貴方が京阪にゐられるから、若い時の事を思ひ出します。私は貴方に笑はれたが、さつきの村田正雄にはいろ〳〵厄介になつて、村田の大阪の家で居候をしてゐた事がある。それで東京の淺草にあつた國華座へ出る話が出來た。出し物は「オセロ」の飜案物で、私がカツシオの勝芳雄をやる筈だつた。ぢやが借金でどうにもならず、羽織を質に入れて、さし押へをされたふとん代を拂つて、五圓の殘金を持つて、東京へは行けずに、岡山をふり出しに旅廻りをした事があつた。私の二十二の時だが、一座には深澤恒造もゐたが、これが散々の不入りで、岡山の高砂座でトヤについたり、廣島、吳へ行つても失敗だつた。三圓だけ金があつただけでどうにもならない。所が、一方、村田と出てゐた大阪の天滿座では、前にいつたやうに東京へ行くと早くからいつてゐたので、お茶子（女案內人）たちが私に餞別をくれてゐるのです。ぢやがさつき話した次第で、私は大阪では仕打の借金の身替りにとられてゐた時もあつた位で、どうにもあがきがつかない。その間京都の女役者と一緒に芝居をしたりして

ゐた。――それが明治三十七年の日露戰爭の動員令が出た騷ぎで、やつと東京へ來られたのですが。……

三宅　とに角天滿座時代の貴方の話は愉快だな。二十二の若さで舊劇をやつてゐたりしてね。尤も、天滿座といふと私は喜多村氏からもいろいろ話を聞かされた事があつたが。――併し、頭に熱を出したり、借金の擔保に迄とられたりして、若い時に苦しんだ無名の四國の一青年が、今度藝術院へ推される役者になつてお目出度う。貴方も立志傳の人だ。だが、貴方はかうして芝居にはタマにしか出ないでよくやつていけますね。

井上　今は役者は皆可哀さうです。芝居だけぢや薄給でとても食つていけない。それで私も時時映畫に出るんだが、近頃藝術院入りを祝つて、八木隆一郎氏の「太平洋の風」を、私を主にして映畫化する話が出てゐます。

三宅　映畫に出たり、ラジオの「鐘の鳴る丘」に出たり、新しい仕事が多いので、かうして會つても一向年をとりませんね。顏も若々しい。

井上　その代り人に顏を知られて困る。私は横濱から省線で毎日通ふが、いつでもその電車の中で、書きぬきに一度目を通さんと氣がすまぬ習慣があるのです。それで驛ででも書きぬきをひろげてゐると、人が傍へよつて來るし、「鐘の鳴る丘」に出てからは、子供がよく顏を覺えてゐて、集まつてくるので、書きぬきを見る事が出來なかつたりして困ります。

三宅　だが、それも貴方といふものを若い人が知つてゐると思へば、大變な强味ぢやありませんか。とに角去年の「果實」の主役で、七尾伶子を相手にしておかしくない若さがあるのに驚いた。――七尾伶子といふと、あれは私の一生の親友で良友の水木京太の娘ですが、私は初舞臺で心配したが中々いいぢやありませんか。慾目かも知れぬが。

井上　いや聲はラジオで鍛へてゐるからいい方

です。それで自分でも相當考へてゐるやうで、顔はさういい方ぢやなし、からだが立派なだけに色氣のあるモダンな娘にはどうかと思ふ。でも、一度舞臺に出たから舞臺の魅力は感じてゐるから、ラジオだけぢや物足りぬでせう。ぢやが素直な子で聲はいいし決してわるい女優ぢやありませんよ。

三宅　どうぞよろしく。ぐちをいふやうだが、私は友達運がわるく、友達といふより先輩だが水上瀧太郎氏、中戸川吉二君のかけがひのない知己を二人とられ、又水木が亡くなつてがつかりした。――水木といふとずつと以前の不遇時代に、私がやつてゐた第二次「演劇新潮」へ出した「殉死」を、貴方が度々上演してくれたのを、本人はいつも喜んでゐましたよ。

井上　さう〳〵。「殉死」をこの頃やりたいと時時思ひますよ。あの主役のやくざ者を猿之助さんにやらし、私が家老の役にまはつたらと思ふ。

三宅　大東鬼城の晩年の傑作だつた役ですね。うまかつたね。幕切れの「棺の追加が三つ」といつて指を三本出すユーモアは全く獨得。

井上　誰でもそれをいひます。見た人の限りうまかつたといつて、貴方が今やられたやうに指を三本出しますよ。うまかつたな！　だから私はとてもかなはんと思つてゐますがね。

三宅　だが、「殉死」を諷した所に、今の封建性打破のさきがけをしたやうな脚本だ。貴方があの家老に出ればたいした芝居になります。でも、こんな一座へ出られるやうになつたのも、貴方が不幸がつてゐた井上道場の人たちが、岡田嘉子はあの通りだし、山口は死ぬし、解散して身輕になつたからでせう。前のやうに弟子が大勢ゐたら、こんな一座には這入れない。

井上　それはさうです。弟子といふとこの鏡臺は今としては立派でせう。（といひつゝ成程見事な新しい前の鏡臺を指さす）これはこの頃私の古い弟子だつた西尾克彦といふ男がこしらへてくれたのです。私は元來鏡臺なんか持つてゐなか

つた。どこへ出ても樂屋では石油箱などを毛せんで包んで臺にして、その上へ小さな鏡をのせて間に合はしてゐた。所が、戰爭前でしたか、昔の政治家の犬養毅が、よく煙管のナタマメといふ短い職人が吸ふやつで、刻みのたばこをのんでゐた。それが犬養さんだけに評判だつたが、人によると氣障だといふ意見もあつた。私はそれを思つて、石油箱に鏡をのせるやり方をやめてしまつて、あの時分としては相當金を出して、三面鏡の立派なのを松屋で誂へたんです。あの頃で一番いいものを作つてくれといつて註文したので、贅澤なものでした。所が、それを戰爭中燒いてしまつたので、又元の石油箱に鏡をのせてゐた。すると西尾がいつの間にか、こんな立派な鏡臺を作つて私に屆けてくれたです。

三宅　いい話ですね。一體その人は何をしてゐるのですか。

井上　とつくに役者はやめて、今は露店商人をしてゐます。私の所へも昔から弟子にしてくれといつて、出たりは入つたりした者は何百といへる位あります。その中でこの西尾一人だけが、役者をやめてもかうして私の所へ來てくれます。それに面白いのは不景氣で困つてゐる時は一切顏を見せない。景氣がいいと、ひよいと樂屋へ顏を出して何か持つて來てくれます。

三宅　近頃聞いた事もないやうな美しい話ですね。――だが、さういふと私はその戰爭中に長田幹彥氏が、一寸した隨筆を書いて、井上正夫といふ役者には、いつ迄たつても何人かのすばらしいファンがあつて、私もその一人だが、更に某電力會社の社長もその一人で、そんなグループで今以て井上中心に集まる會をしてゐるといつてゐられた事があつた。――狹くても深い藝を持つてゐる人の一得と、私は時々長田さんのこの隨筆を思ひ出してゐたが、西尾君にはそんなファンもかなひませんね。本當に近頃にない美しい話だ。この美しい話の後味の消えぬ中に、ではこれで失禮致します。（二四年七月）

市川壽海

三宅　貴方とは殆ど初對面同樣だが、舞臺では古い明治座時代は勿論赤坂の濱伎座、淺草の宮戸座などへ、貴方がかけ持ちをして出てゐた時代からのおなじみ、それに戰災で御同樣京都に住むわけでお會ひしたくなつた。

壽海　稽古の都合で朝早くからの時間しかなくてすみません。私は今日は大勢の會合かと思つてゐましたが、それは思ひちがひで「對談」の方でしたか。

三宅　さうです。だが、貴方も市川壽海と改名でお目出度う。この南座のその改名の口上に、貴方は「私も京都人でございます」といつてゐたが、貴方の京都好きは早くから聞いてゐたがその好きな京都に住まれるのは理想が實現したわけで。

壽海　え。それはうれしい次第で、元來家内が昔から京都好きで、京都に住みたいといひ暮してゐました。あの大正十二年の關東大震災の時は、私は幸に災難をまぬがれましたが、東京があのひどい騷ぎで、とても當分芝居はあくまいと思つて、持つてゐた衣類や何かを、御ひいきやおなじみの方に、少しづゝ御挨拶代りにお持ちして、東京を離れて京都へ來てしまひました。

三宅　さう〳〵、あの時貴方が震災で何もかも

なくした舊知の方々へ、さうしてお別れの挨拶に克明に廻られた話は有名で、岡本綺堂さんなど大變喜んでゐられたのを覺えてゐますよ。

壽海　（一寸ほゝゑむ）それで京都へ來て富小路竹屋町下ルに家を借りて住みましたが、兎に角商賣の俳優の鑑札を受けると、當時はこちらは東京とちがつて俳優の稅金が馬鹿に安いので、一等俳優の鑑札を受けてもたつた五圓でした。

三宅　おや〳〵。

壽海　けれども、こちらは震災はないから、その十一月すぐ故左團次さんの高島屋一座が、この南座へかゝりました。東京も麻布の南座があくし、淺草の松竹座も出來、復興は今度の戰爭とちがつて早かつた。そこで私は東京へ歸つたのに、家内は京都がいいといつて歸つて來ないのを、やつと人に賴んでつれて歸つて來させたわけでした。（笑）

三宅　貴方は故松蔦と並んで「お茶」の趣味が深いと聞いてゐたが、それには京都は本場だからいいでせう。

壽海　どう致しまして。でも、今ゐる家は人のおうちの離れを借りてゐますが、この南座の近所で、四疊半と三疊との離れで、閑寂な茶室で狹いが落ついた家で御商賣は油屋さん。

三宅　だから江戸つ兒の貴方が思ひもよらぬ「油屋與兵衞」をやつたわけだな。（笑）

壽海　え。親切なおうちで、二階に荷物を入れて、その二た間に何もおかずに、家内と二人きりの生活です。

三宅　好きな京都で、好きなお茶室の住居だね。それはいいが、その子なしの貴方が、「壽海老人子福長者」といつた一ダースもの子持ちの、七代目市川團十郎の俳號の壽海をついだだけは不思議。

壽海　白井さんからのお話でさういふ事になりました。尤も、私は前から今度一緒に改名した團次郎に、私の壽美藏の名をつがせたかつたのです。私は幼名小滿之助と名のり、後に登升と

いつた若い頃、勉強のため宮戸座へ出てゐました所、故人の壽美藏に可愛がられ、その壽美藏さんには實子の團九郎といふ役者がありましたが。……

三宅　やせた細いおとなしい一方の役者だつた。私は明治四十四年頃赤坂の演伎座で、故又五郎の珍しい「高時」に、その團九郎が安達の三郎をしたのを見た。

壽海　さうでしたか。その團九郎が實子なのに、元から役者にする氣はなかつたし、それは別家させて、私の壽美藏の名はお前に讓るから養子に來てくれと望まれました。そこで私は壽美藏を襲名して成田屋の一門に加はり、今度も宗家の三升さんに來て頂き、この冬の大阪同樣、市川家の一人として壽海の名をつがせてもらつたわけです。そしてその團九郎の實子がこの團次郎の壽美藏です。

三宅　さうでしたか。それにしては親子でゐて一向父の團九郎に似てゐない。

壽海　え。でも、祖父の壽美藏の方に似てゐますよ。

三宅　さうですか。その壽美藏は明治中期の九代目團十郎の弟子で、前の前の片岡市藏と並んで、脇役の名手として有名だつた。團次郎君の新壽美藏もさう聞くと、それも祖父に似てゐるわけで、あの人はまだ若いのに氣の毒な註文だが、結局端敵（はがたき）や脇役だとかへつて獨自の道が開ける人だと思ふ。前進座の長十郎君たちと、新劇をやつた事もあつたし、まじめな勉強家だから、地味だがそんな方向へ進ませてみたい。貴方の「大森彦七」でも道後の左衞門が中々よかつたから。

壽海　（につこりして）有難うございます。本人によく申し傳へますがさぞ喜ぶ事でせう。私も亦ふだんそんな風にいつてゐましたのです。お前は白くぬる役にはむかぬから、脇役の方を勉強しろと、さういつては可哀さうですが、あれはそれより仕方がありません。

三宅　それに上方には端敵や脇役が丸でゐない。松若といふ人がその方だが、この間の「傳授場」の希世はひどかつた。あの端敵を白ぬりのおくげ様でやるのだから。尤も、「油地獄」の法印はよくしてゐたから、注意をする人があればいいらしいが、兎に角壽美藏はそれで大成させたい。脇役でも祖父の壽美藏の老巧は記錄の上にはつきり殘つてゐるから。

壽海　いや、本當にさうで。さういふと父の壽美藏は、若い私に時々脇役の心得をいつてくれたのを覺えて居ります。それはどこ迄もシテの主役のかげに廻つて、主役の後にゐなければいけない。それから脇役は芝居の稽古場で、いざ稽古にかゝつたら、稽古中に主役のイキをのみこむ事が第一だといつてゐました。

三宅　それは名論だな。稽古中に相手のイキをのみこめとは、脇役の心得としても珍しい卓見ですよ。敬服。

壽海　（ちなづく）。

三宅　だが、貴方は壽海になつて何より。御承知の通り七代目團十郎は不思議に京阪に緣が深い。初めて大阪へ來たのが三十九歳の時、文政十二年五月中座へ出て「ひらがな盛衰記」の平次と松右衞門の二役、「夏祭」の團七をしてゐます。それが好評ですぐ後の天保元年四月には京都へ來て「伊達競阿國戲場」の、偶然今度南座で貴方がしてゐる細川勝元をやつてゐる。それから天保十三年四月に例の緊縮の改革の令で檢擧せられ、江戸を追放になつたから、五十三歳の翌年幡谷重藏と名のつて、伊勢あたりを旅興行をした後で、大阪へ海老藏で二度目に出た。その追放が許されてから嘉永六年正月に三度目に又大阪へ來て、得意の「景清」や「光秀」を見せたが、息子の八代目團十郎の自殺に出會つたりしたが、京阪にはなじみが多い。だからその俳號を元來市川家の門の一人がつぐのは、滿更緣がないではありませんね。でも、壽海といふ名の響きが坊主臭く、長い間の習慣でか壽美

藏の名の響きの方が若々しい。といふと貴方に會つて一番話したかつたのは、その坊主に緣のある「法界坊」の話だが。……

壽海　（少し怪訝な表情）『法界坊』ですつて？

三宅　さうですよ。大正四年七月の明治座だつた。これはまだ松竹の興行でなかつたと思ふが、夏芝居だが珍しい座組で、今の多賀之丞の伯父の淺尾工左衞門に貴方、故市川團升、故中村鶴藏などの一座だつたが、二番目に貴方が、「法界坊」を出した。これが實に傑作で、この頃はカットか、ぞんざいにやる「穴掘り」も丁寧克明で、賑かな下座をつかつて、下手から上手へ鍬をかついで踊りのやうに歩いて、合方について穴を掘るなど、やつてゐる役者も樂しさうだし、見てゐる我々も陽氣で樂しく、當時は法界坊程でないが不良の方の學生の私など、一緒に舞臺で遊んでゐる氣がした位。

壽海　（笑ひながら）さうでしたね。さうですか、あの「穴掘り」を近頃そんな風な事にしてしまつてゐますか。

三宅　さうですとも。それからそれは貴方がまだ三十歳の若い時だから、二役の女形のおくみの方も綺麗だつた。前後二役ともよくて、私は貴方の「法界坊」に感心した。それで一昨年だが、松竹の某重役に貴方に「法界坊」をやらせろ。甚三には壽三郎が適任だし、鴈治郎に要助をやらせば大芝居になるといつた事がある。その中鴈治郎の方がやつてしまつたが。

壽海　さうでしたね。確にさうで、私もこちらでやりたいと思つてゐたのです。

三宅　さうでせう。それで話はこれからだが、あの演出は本格で如何にも歌舞伎性が豐富だつたが、あんな芝居は貴方が肯つた左團次一座では知つてゐる人はなからうし、一體誰から教はつたのですか、それが第一。

壽海　（にこ〳〵して）え。あれは師匠番は特にありません。「法界坊」をやる事になつたので、當時あれは先代の段四郎さんが、お若い時によ

くやられたさうで、それを猿之助君も一度そのまゝやつてゐたから、それでやらうと思つて臺本を拜見しました。所が、その段四郎さんのやり方も臺本も、普通のとはだい分ちがつてゐたので。

三宅　さうですとも。澤瀉屋のは確にちがつた所がある。

壽海　そこで私は子供芝居の時代に、確か淺草座で吉右衛門さんが「法界坊」をおやりになつたのを思ひ出して、それの大體覺えてゐた分を土臺にしてやつたのでした。

三宅　成程、それで分りましたが道理で歌舞伎的だと思つた。

壽海　あれはお父さんの歌六さんが教へられた筈ですから、派手で面白いわけです。

三宅　吉右衛門が正式にやつたのは二十餘年前の演舞場だから、貴方の方が本家より一と足先きにやつたわけだが、タネがいいので誰に教はつたのかと、永年私は興味を持つてゐた。だが、工左衛門の甚三は實に結構で大歌舞伎だつたが、工左衛門に教はつたのかとも思つてゐた。

壽海　え。何か少し教はつたかと思ひますが、お話する程の事はありませんでした。

三宅　私は工左衛門を役によつては買つてゐたから、工左衛門の藝談でも聞かれゝばと思つたが、藝にかけては勿論歌六が造詣が深かつたから、あれだけ貴方もいいものを見せられたわけ。兎に角貴方は左團次一座では新作物ばかりだが、私は明治四十二年頃演伎座で、貴方の「桂川の帶屋」のお絹を見てゐる。これも小綺麗でどこか當時の大阪の福助(後の梅玉)に似てゐて、加役ながらいい方だつた。その時の長右衛門は幸藏で、これがあの人がまだ老いこまぬ時だから、寫眞の五代目菊五郎に似た立派な顏でよかつた。お半は鯱丸後の米藏でこれもよく、いい「帶屋」でしたな。

壽海　(うなづいて)　私も古典の勉强が左團次一座でつい後廻しになりましたのを、この頃古典

本位になりかけたので、新規に勉强したいと思つてゐます。

三宅 あ、その勉强といふと、こちらで若手の「つくし會」が出來たし、今度立ち廻りを稽古する會が出來たさうで、これは近頃大出來の勉强會だ。私は一度見に行きたいと思つてゐる位で、そんな下廻り諸君を大いに激勵したい。

壽海 (同感の表情) 私も結構と思つて、その立ち廻りのとんぼ會が出來たのを喜んで居ります。歌舞伎役者の限りとんぼは一應やつておかぬといけませんし、この頃こちらでとんぼの切れる人がなくなりかけてゐたので、これは何よりでした。先達それがきまつて四つ橋の文樂座の裏に、道場をこしらへ、土俵を造つて地鎭祭をやりました。その時私も出て挨拶をしたのですが、みんな裸で初歩の手拭を持つてもらつて、とんぼを切る所から初めて居ります。それから「逆ろ」の樋口の捕り物の大立廻りの型を見ましたが、延若一座の頭取の雁若が、元はタテ師ですのでそれが指南番でやつて居ります。

三宅 全く結構な企てで上方歌舞伎近頃のホームランだ。先代梅幸もあの女形で若い時は見事にとんぼを切つた。近頃の梅玉さへ、私は菊五郎と三人で藝談をした時、若い時はとんぼが切れたといつてゐた。歌舞伎はあれが歌舞伎國上陸第一歩ですから。

壽海 それに私のこの一座の頭取の小太郎が又とんぼが上手です。この小太郎は「狐忠信」の宙のりやけれんで、全國を歩いてゐた澤村源之丞の弟子ですから、とんぼが鮮かなわけですよ。

三宅 あの源之丞? あれは東京の宮戸座へも出たが、元來淡路の人の筈で、私は子供時代姫路あたりで度々見たなつかしい人だ。顏も滿更でなく藝も「忠信」の限り、旅役者らしいわる達者ではなかつた。あの人の弟子が貴方の方の頭取?

壽海 面白いでせう。私も不思議な因緣と思つて居ります。さうでしたな。大正の初めでした

か私は夏に伊東溫泉へ遊びに行きましたが、その時二代目澤村源之丞として「狐忠信」をやつてゐたので、一と晩見物に行つたら、それがこの小太郎でした。併し、私は滿更でないと思つて、樂屋へ「おそば」の祝儀を屆けました。するとこの小太郎は大變な御難で困つてゐた時ださうで、伊東から淺草の十二階の芝居へ出る筈なのが、金がなくて東京へ行けない。そこで仕方がなくて沼津の方へ歸つてしまふ所だつたさうで。私の祝儀でやつと息をついて、それで確か東京へも行けた筈で後で喜んでゐたさうです。それが廻り廻つて、この頃こちらにゐて、今度は私の頭取になつてゐるのですから、よくこの話をして喜んでゐます。

三宅　それはいい事をなすつた。

壽海　同じやうな因緣話がもう一つありますが、今度の「大森彦七」は大正の初めやはり演伎座で、さつきの話の鯱丸の千早姫で初役でやりました。この時に幸四郎さんにこれを敎はりましたが、丁寧に役の心得からいつて手をとつて敎へてもらひました。それから今年の二月歌舞伎座で「助六」を出した時、これも私は初役で直接東京へ行く時間がないために、間接だが藤間良輔さんに寫してもらつて幸四郎さんに敎はつたわけ。それが幸四郎師の最後の御指導でしたが、私の初役の市川家の物のこの二役が、幸四郎さん傳授で、私としては最初と最後の御指導に預つた次第でした。

三宅　だから貴方は歌舞伎座の口上で、泪ぐんで幸四郎に感謝の挨拶をしてゐたが、死亡の直後だから空々しく聞えなかつた。所で、その後の「盛綱」も初役だつたが羽左衛門を狙つてゐましたね。そこで私はふと思ひ出したが、大正五年十一月の歌舞伎座で羽左衛門が「盛綱」を三度目で出した時、貴方は珍しく早瀨に出てゐた。かがり火は十二代目仁左の我童。すると早瀨の貴方は羽左衛門のする事を本當に一生懸命で見つめてゐた。當時私は學校で小山内先生の

講義に出てゐた時だつたが、小山内先生もそれをいはれて、太田君は「盛綱」をやりたい一心であの通り早瀬の役を忘れる位に、舞臺で熱心に見てゐるよと微笑せられた事があつた。――それも道理で實に「盛綱」は傑作だつたから。

壽海　さうですとも。私はそれをよく覺えて居りますので、そつくりその通りにやりたかつたのですが。こちらでは初代鴈治郎さんのがお手本になつて居りますのでね。そこで參考のために鴈治郎さんの「盛綱」の映畫を見せてもらひました。

三宅　そんなものがあるのですか。

壽海　素人の方ですが大野屋旅館の息子さんが十六ミリでとつてゐられます。「盛綱」「實盛」「紙治の河庄」「富樫」「伊左衛門」など七つ持つてゐられます。尤も、これは皆上手(かみて)の舞臺の幕だまりからとられたので、すべて上手から見た寸法になつてゐますし、十六ミリで小さいし、素人の寫したもので馬鹿に早くちら〳〵して、我々商賣人が見ないとよく分りません。けれども、それで鴈治郎さんのやり方は分りましたが、微妙とのやりとりの前に方々を見まはしたり、床板をとんとふんだり、隨分寫實で。

三宅　それを私なんかは非難した次第。

壽海　兎に角市村さんのは結構でした。「實盛」も私はその昔やつた事がありますが、戰爭中市村さんの最後の「實盛」は特に結構で、舞臺で市村さんの後に御光がさしてゐるやうでしたな。友右衛門さんの瀬尾でしたがその時は一番目に「鳥居又助」が出、私は二番目の新作で、浮世繪の北齋の弟子の北馬をしてゐた興行です。

三宅　さう〳〵。

壽海　その「實盛」がすんだある日でしたが、亡くなられた岡先生も御らんになつて、すぐ頭取部屋へ見えましたが私がゐますと、いいね、今度の實盛はといつて、つくづく感心してゐられましたよ。

三宅　さうでせうとも。全く晩年の羽左衛門はたいしたものだつた。岡さんがほめられるのは當然だが、その前年かの夏に「伊勢音頭」の貢をした時、あの歌舞伎嫌ひの菊池寛氏すら、私につくづく名品だと感心してゐたから面白い。だが、貴方は若い時やはり小芝居だがその「貢」をしてゐたし、三十前後は古典をよくやりましたね。――それが大正元年の左團次一座の松竹入りで、貴方は新作本位となつて、古典は相當空白時代があつたわけ。

壽海　それをこの頃こちらへ來て古典を多くやりますが、新規に大いに勉強したいと思つて居ります。

三宅　何か考へてゐるでせうね。尤も、貴方は以前の山城の少掾の古靱時代から接近して、時時丸本物を研究してゐられた位だから、何かおありでせう。第一山城が何か進めませんでしたか。

壽海　恐れ入ります。前に「忠臣講釋」の「石切勘平」を進めて下すつた事がありましたが。……

三宅　それは偶然だが、早いもので十年以前伊原さん岡さん河竹さんに私などで、歌舞伎物の研究會をし空襲が始まる迄續いたが、その會でその「石切勘平」の話が出て、私は羽左衛門のものだといつておいた。皆さんと一緒に調べたが猿之助が子供芝居で團子の時代に、父段四郎に教はつてやつたきり打ち絶えてゐたから、誰も知る人がなく、又作も佳作とはいへぬからそのまゝになつてゐた。

壽海　左様で、私もついそのまゝにしてゐます。けれども、梅玉さんがゐられる時分に、こちらへ來て古いもので何がやりたいといつたお話が出、私は梅玉さんにつき合つてもらつて「良辨杉」をやらして頂きたいと申しました。するとすぐ承知して下すつてやりましたが、これは本當に結構でうれしく思ひました。

三宅　さうですか、それは私は知らなかつたが、

兎に角適材適所の出し物でしたね。その外に何か。……

壽海　山城さんは「菅原」の「道明寺」はどうかといつて下さいますが。

三宅　それはどうでせうかな。貴方に菅丞相は一應はまつてゐるが、さういふ役は大阪東京ともにいくらもいい名技が殘つて、我々のみでなく、歌舞伎ファンにはそれらの名人藝の印象が薄らいではゐないから、一寸不利でせうよ。それより一層人が餘り手がけてゐない丸本物をおさがしなさい。それには京阪には文樂といふ本行の道場があるから、いくらか東京より研究が便利でせうから。

壽海　ぜひそんなものをさがしたいので。

三宅　それなら「小野道風青柳硯」の道風は如何ですか。

壽海　成程、よくは存じませんが「蛙場」は時時拜見しましたが。

三宅　三十三年前市村座で菊吉があの「蛙場」だけ出して、それから時々出るが、あれだけ出すのは無意味だ。市村座であの場を出したのは、當時田村さんが菊五郎と吉右衛門とをかみ合す出し物さへ出せば當る所から、吉右衛門に道風は適材として、菊五郎に獨鈷の駄六といふ凡そ無理なものをやらしたのは、單に二人の顏を合せ、二人が勝負を爭ふあの相撲みたいな立ち廻りがあるからでした。これなど田村氏の窮餘の策の惡例の一つで、事實菊五郎の駄六は無理で、本人も日によつては藝を投げてゐた位。勿論あすこでなく少し長いが「館」の場ですよ。

壽海　と申しますと。——

三宅　これは明治三十八年頃團菊歿後の歌舞伎座で中車の當時八百藏がやつただけ。尤も、大正初期に宮戸座で傳九郎の當時芝鶴がやつたのが近頃の記錄で、兎に角一應參考品として面白く見ました。これも既記の研究會で案に出した所が、意外に菊五郎がやりたいといひ出した。だが、菊五郎には少し無理ですし、それにあの

婆の役が大變なのに、當時菊五郎一座に婆をする老巧な役者がゐなかつた。それで中止になつたわけ。でも、菊五郎は大變にやりたがつたのですよ。

壽海　さうですか。それはいい事を伺ひました。

三宅　勿論、こちらでもあの婆の役者はゐない。だが、道風なら貴方にはまるし、四十年以上は大舞臺（京阪の記錄は不明）に出てゐないし、霞仙といふ人のふけ役を私は存外買ひますから、あの婆はやつてやれぬ事はありますまいね。霞仙の「ヴェニスの商人」の公爵は、天下の奇觀だつたが、あれはやらせる方に罪があつたので、あの人の婆の役はこちらでは割にいい方ですよ。

壽海　え。え。あの人はものを知つて居ります方で。

三宅　さうですか。強ひてとは申しませんが、あの一段をカットをせずに、整理していくらかつめてやればと思ひます。——だが、左團次一座で今ゐるのは荒次郎と貴方だけ、猿之助は純粹の左團次一座の人でないから、全く二人だけになつてしまひましたね。

壽海　（こはばつた表情）本當にさうですね。

三宅　どうぞお大事に。自由劇場時代の話もしたかつたが、もう貴方の稽古の時間になりましたから又次の機會に。——早朝から引つぱり出して失禮しました。

（二四年九月）

白井松次郎

三宅　千日土地の白井信太郎氏やお社の日比氏のお口添へで約束通り伺つたのですが、會長との對談は「幕間」誌の長い間の希望で、かうしてお會ひ出來てうれしく思つてゐます。

會長　え、どうぞ御ゆつくり、今日はある會合をこゝ（大阪松竹の應接室）の上の會議室でやつてますので、時々一寸立つか知れませんが。―それはさうとこの間の「油地獄」の大詰ですが、あれは無論原作とちがつてますし、延若の初演以來いろ〳〵にやつて來たが、どうもうまくいかんので私もまだ考へて居ります。それで貴方に伺ひたいが、あの與兵衛は油屋へお吉を殺す心でくるといふ説がありますが、どうでせうかな。藤井乙男さんのこの作の解説では、與兵衛が殺意を持てあすこへ來て殺すとなつてます。又、外の一二の近松研究家も、與兵衛は成心があつてお吉を殺すと書いてゐやはるさうです。貴方はそのお説ですか。

三宅　いや、私は反對です。私は與兵衛はそんな惡黨ではなく、あれを計畫的にやるとは思ひたくない。今の不良青年同樣で、油屋へ來て、金がうまく借りられないので、ふと殺す氣になるととりたいのですが。

會長　（大きくうなづかれる）あ、さう、私もさう

で。――私は貴方の説で、與兵衛がふと殺すといふだけにしたい。それでないと與兵衛はほんまの惡人で、あんな事をする常習犯みたいになると思ふのでな。

三宅　さうです。妙な事を申しますが、私は去年七月引越し前に、荷造りしてゐた衣料全部盗まれました。それで警察でいろ〳〵泥棒の話を聞きましたが、不良青年の惡事は、殆ど發作的で、女のヒステリー同様、突發的にわるい事をするさうで、ふだんは存外無邪氣な青年が多いさうです。それがあるチャンスにふと惡心を起こすといふのでした。私はその實例迄見せられたのでしたが、與兵衛はそんな風の不良兒と思ひます。

會長　私もさうで、それは意見が一致して何よりですな。所で、その殺しですが、今度もあの通り證據が殘らぬやり方です。

三宅　え。ですから私は今度の舞臺成果は大體佳良として、大詰の「寺の門前」の解決はどうかと思ひました。あれはやはり證據の書きつけを鼠が持ち出して來て、それと分る原作の「たい夜」のやり方をとりたいのですが。

會長　（うなづいて）明治四十二年の貴方も御存じの初演はさうでした。あの時は與兵衛は油屋の場の出に、財布を持つてゐて、その財布に自分が遊興したツケ（勘定書き）の紙ぎれを結びつけてゐる。それでお吉を殺した時、その血のりのついた刀をふくのにその紙ぎれをとつてふく。そいつを與兵衛はあわてゝ下へ落して逃げてしまふ。その紙ぎれを鼠が「たい夜」の晩に咬へて出て來て、すべて證據が上つてしまふ。といふ手順をつけてやつたのでした。所が、一部から刀の血をふいたりするのは、與兵衛が侍のやうだといふ反對説が出ましてな。それでその後はやめてしまつたのですが。

三宅　さう〳〵、さういはれると記憶に殘つて居りますが、私はそれだけで侍とは思へないし、血のついた紙を落したり、鼠が咬へて出たり、

演技の順序が合理的に出來てゐて面白いと思ひますね。同時に、それが原作に比較的近いわけですからね。

會長　さうですな。（ぢつと考へてゐて）私もさう思うてます（この次はその演じ方をやりたいといつた表情）。

三宅　扨、東京の大谷さん同樣、貴方は興行を始められてから、私の勘定では五十年以上におなりの筈で、人生五十の五十年を歌舞伎と芝居と取り組まれたのは、興行師としては外國でもさう聞かぬ話ですが、その間で一番感銘の深かつた話を聞かして下さいませんか。

會長　……（無言が相當續く）。

三宅　それなら伺ひますが、やはり明治三十九年十月の、初代鴈治郎が歌舞伎座へ最初に出た時ぢやないでせうか。――それはちよい〳〵記錄にも出てゐる位ですが。

會長　さうですな。あれはその三十九年の夏でした。有馬の溫泉へ當時の歌舞伎座の責任者の井上竹次郎さんが、當時の市川八百藏と、吉右衞門の姉のお葉さんをつれて入湯に來て私に會ひたいといつて來た。その時は雀右衞門になつた芝雀などの若手一座が、有馬へ旅興行にいつてゐたりしたのんびりした世の中でした。それで私が會ひますと、この秋にはぜひ鴈治郎をつれて來てくれ、歌舞伎座も役者が手不足（この時代、後の歌右衞門の芝翫、幸四郎の高麗藏は神田の東京座に出てゐた）で、思はしくないからぜひ來て十八番の「河庄」を出してくれといふ話でした。私も承知してその外に「引窓」を持つてゆく事にした。これはこの少し前鴈治郎があれを丸本から研究して、初めて手がけて大阪で大變な人氣をとつた芝居でしたから。――扨役割となると鴈治郎は前から猿之助を知つてゐて、八百藏ではどうかといつて猿之助に孫右衞門をやらす事にした。それは一番目に「川中島東都錦繪」が出て、八百藏は山本勘助をやつて出し物としてゐたわけで、猿之助には役らしい役が

なかつたからです。所が、當時の八百藏はこの時に井上さんと來て、こんな話を出すやうな歌舞伎座の座頭格でしたし、鴈治郎も話の行きがかり上、孫右衞門は八百藏につき合つてもらふやうな事もいつたらしい。無論、八百藏はその積りでゐた。

三宅　成程、あの時の配役は、實に大變と我々にさへ想像出來る位ですから。

會長　それがいざ稽古には入ると猿之助で、一方、八百藏に善六、松助に太兵衞でつき合はされたのです。八百藏は眞つ赤になつて怒つたさうで、全く善六は氣の毒でしたが、納められて泣きの涙で舞臺に出てゐました。八百藏はこれで鴈治郎と私とを恨んでゐて、稽古場で鴈治郎に會つてもおくやまを食はせた（註、おくやまを食はすとは、顏を合はしても知つてゐて知らんふりをする樂屋の通語）。これは長い間續いてゐて、二人は中々和解せず、私が後に新富座を手に入れ、八百藏の松王で、鴈治郎の源藏の顏合せの「寺子屋」の時に、初めて和解して握手したんです。

三宅　それは大正二年二月の興行で大當りで、三月へかけ日のべ迄した芝居。

會長　さう〳〵。所で、一方の「引窓」の濡髮でも困つた。といふのは花形の羽左衞門と鴈治郎との顏の合ふ幕がない。そこでいやでもおうでも、市村に濡髮で出てもらはぬと顏が合はないので納めにゆくと、どうしても嫌だといふ。やせた細いからだから濡髮は出來ないといふ。併し、こつちはどうしても出さぬと芝居にならぬので、いろ〳〵手をつくして、市村は濡髮は一生でこれ一度といふ條件で納まつたのです。――扨、初日があくと豫想外の好景氣で殊に「河庄」になると、水を打つたやうにお客がよく見てゐてくれる。私はずつとついて行つてゐたので、この光景を見て本當にうれしかつた。それであの芝居は治兵衞が途中で一寸下手へは入る所がありますが、私はその下手の小幕のか

げに待つてゐて、鴈治郎がは入つて來ると、二人は抱き合つて泣いてしまつた。……

三宅　さうですつてね。どの記錄を見てもあれは大成功でしたな。東京の千軍萬馬の興行師の中へ、貴方が上方から初めての進出で、その時のお年は？

會長　二十九でした。

三宅　二十九とはお若かつた。……

會長　え。それで大當りをとつて、井上さんはこの興行で引退しました。それから大河内さんになつて、成駒屋の東上の二回目は明治四十二年十月の歌舞伎座。この興行中社長の大河内さんは亡くなられ、田村成義さんが正式に後を引受けた。私と成駒屋の上京はこの二度とも、一つは井上氏の引退、一つは大河内さんの逝去でいづれも責任者がその時きりで變つたのは不思議でしたが、それからいよ〳〵田村さんとの直接交渉になりました。尤も、それ迄も田村さんは歌舞伎座で采配をふつてゐましたが、いはば蔭の人で、この四十二年から表面に立つた。併し、鴈治郎も東京では實際痛い目に會つてこりてゐた。といふのは明治二十三年五月新富座へ初出勤の時、歌舞伎座では團十郎の「太十」の光秀で十次郎をして、かけ持で新富座へ出「盛綱」を切狂言に見せた。それは大變な待遇のやうだが、切狂言といふのを幸に、初代左團次に和田兵衞をつき合つてもらひ、四代目芝翫に時政といふ配役でゐながら、和田兵衞の引っ込みだけで、時間がないといつて「まあづ今日はこれきり」の口上で打出してしまつた。本人は今日は出幕になるか、今日はと思つてゐたのに、千秋樂迄それでやらせたので、本人は本當に嫌な思ひをした。それで東京は用心してゐて、この四十二年の時も、何か事が起らなければいいがと私も不安でした。當時は上方者といふと「ぜい六」といつて、妙に毛嫌ひをした時代でしたので。

三宅　前年大谷社長と對談した時もその話が出

ました。

會長　それで上京して見ると、一座すべき梅幸と羽左衛門とがゐない。我々にはいはずに、歌舞伎座は會社の芝居として、鴈治郎とこの頃は東京座から歸つて來てゐた芝翫とで「梅忠」、外に八百藏たちと「盛綱」でせう。そして東京座を田村氏個人の芝居として、團藏の有名な師直、羽左衛門の若狹、梅幸の判官で「忠臣藏」の三段目迄と、羽の勘平、梅のおかるで「落人」があつて、それがゐどころ變りで二番目として「四谷怪談」の通し。團藏の逸品の直助權兵衛、梅幸のお岩、高麗藏の伊右衛門といふのです。私はうつかり一杯食はされたと思つた。それでこれではたまらんと思つて、鴈治郎と二人芝居をしないで歸つてしまはふと思つて劇評家連の伊原さん、中内さんなどが集まつてゐられる所へ顏を出した。すると諸先生がまあ〳〵といつて、しきりに引とめられたので、やつと歌舞伎座へ出る氣になつたのです。

三宅　昔の興行師らしい意地わるですね。

會長　田村さんは子供のやうな事をする人でしたからな。それが芝居があくと私の方はおかげで大入り。東京座は案に相違して不入り。それで田村さんは歌舞伎座へよりつきませんでした。そして興行がすんだ樂の翌日、私の方へ支拂ふ金を一圓とか五圓の小札と銀貨とで持つて來た。勘定するのにも大變でしたよ。……それで私はこれでは東京では、どうしても自分の小屋を持たねばならぬと思つた。するとその時に芝鶴の後の傳九郎が新富座を持つてゐたのを、賣り物に出したので、私は人に知れぬやうな不便な本郷の公證役場へ行つて買取りの契約をしてしまつた。

三宅　それから第三回の東上が、新富座の明治四十四年四月の純大阪歌舞伎の時ですね。俗にいふ「頭(あたま)はりの忠臣藏」へ、鴈の「土屋主税」をつけ、中幕が「河庄」で芝雀の小春、先代梅

玉の孫右衛門で、鴈の治兵衛は絶好の配役で、私は野球の應援に行くやうな氣持で、上京して手に汗を握つて見物したが實に結構な芝居でしたね。でも、あの無人の一座で純大阪風の出し物でよく入りをとつたものですね。あの頃はまだ東京人は大阪嫌ひの時代でしたのに。……尤も、「河庄」の純大阪の配役がものをいつたわけですが。

會長　さうです。とに角鴈治郎が受けるかと用心をしたものでした。それはさつきいつたやうに、新富座を手に入れたのがその前年四十三年初めでしたが、誰でもそれは初開場に私が鴈治郎をつれて行くと思つてゐた。併し、私は大木は風當りが強いと思つたし、東京の當時の氣風を知つてゐたので、場内の手入れをして扨開場となつた一月に、私はわざと延二郎を上京させた。その時に「油地獄」を持つて行つたわけです。それから四十四年になつてもまだ考へてゐる中、私は福澤捨次郎さんに可愛がられて、大阪へ見えるとよく呼ばれてお會ひしたが、その年初めに福澤さんが見えて、その三月からあいた帝劇のこけら落しに鴈治郎を出さうと、澁澤榮一さんへ話をしてくれられました。私も喜んで一旦帝劇へ出しておいて箔をつけ、その翌月に上方からさつきの話の梅玉親子や芝雀や故延三郎を呼んで、新富座をあけたのです。

三宅　用心堅固ですね。

會長　（微笑）さうしたらあの大入りでした。尤も、私は上方の世話物は東京の女形では無理と思つたからです。それは歌舞伎座で「梅忠」をした時、芝翫が梅川でしたが、あの封印切りの後で、忠兵衛が梅川の顏を見て「死んでくれんとどもならせんがな」といふせりふがある。鴈治郎の忠兵衛が毎日それをいふのに、芝翫の梅川がうまく受けてくれない。つい東京の言葉で返事をするだけになるので、あの芝居の味が出ない。私はそれを見てゐたんで、どうしても大阪だけでこんなものは出さんといかんと思つて

梅玉親子に芝雀を加へて「河庄」を出したわけ。

三宅　私も鴈の「河庄」は十回位いろ〳〵の配役で見たが、あの時が第一の好配役でした。お庄を當時の福助がつき合つてこれも結構でしたから。

會長　（につこりとして）あの大入りで新富座へ鴈治郎をかけても大丈夫と分りました。又あの時分迄は今の一等席に當る座席の平土間など、五づめといつて東京は一間は五人づめだつた。お客を無茶な入れ方をしたわけで、四人しかは入れぬ席へ、その四人のまん中へ、もう一人割り込ませて五人で一間にした。そこで少し贅澤な客は一間買つて、四人で見物した位で、事實さうしないと莨盆やお茶のおき場がなかつた。私はこれはいけないと思つて一間を二つにしきつて、一と桝二人づめに改めた。つまり、一間を四人づめにしたのでした。

三宅　さう〳〵、さういはれるとあの時の新富座の場内を思ひ出しますが、新しい白い木の桝が細長く二人づつ坐るやうに新しく出來てゐましたね。大阪は早くからさうでしたが。でも、あの無人一座で相當高い場代でしたし、あの興行は儲かつたのでせうな。

會長　（微苦笑してうなづく）え。儲かりましたな。けど、この頃は實際えらい事になりました。この間の壽海の盛綱の衣裳は織物で新調したのですが、びつくりする程かゝりました。それに舞臺の道具の書き割り同樣の、遠見の道具一杯が何萬圓とかゝるのです。鬘は以前の何百倍に上りました。これではとてもやつていけません。税金の十五割を何とかしてもらはないと、芝居は亡びさうで、有樂座も映畫に轉向するさうですな。

三宅　全く大變ですね。私は芝居の税が地方へ移されたのだ。だからその地方地方で外に取るべき税があればそれからとつて、芝居をせめて十割にすればいいと思ふ。その例として戰災を受けてゐない都市の、餘裕住宅税ですが、あれ

は存外僅かで、小人數で城のやうな家に住んでゐても、稅金さへ出せばいいといつて、そんな富豪にその稅金は僅かなものだから、二階にくもの巢がはつてゐる家が多いのです。そんな非戰災都市の金持の餘裕住宅稅を、今の十倍にしたつて、さういふ惠まれた階級は一向こたえませんから、それをうんと取立てて、文化事業で苦しい仕事の芝居や、文樂の稅をへらす、といつた公明な社會政策をとつたらと思ふのですよ。

會長　（同感の表情）さう、さうですな。

三宅　それから私がいつも思つてゐたのは、その東京で貴方の苦勞が一と通りでない事でした。そこ迄貴方が苦しんで東京の地盤を造られたのに、どうして貴方は東京へ行かずに、大阪中心專門になられたのですか。

會長　あ、それはな、その四十二年の上京で一方ならぬ苦勞をしたので、歸つて來てから暮の十二月でしたな。太左衞門橋を通つてゐて、突然苦しくなつて吐血したのです。丈夫なからだですが、いろ〳〵心配しすぎたので、過勞で血をはいたのでうちへかつぎこまれてねてしまひました。それで大谷に東京へ行つてもらふ事にしたのです。

三宅　成程、四十二年末だと貴方は三十二のわけですね。この時代から私は東京、大阪の芝居は全部見て來てゐますが、どこもかしこも好況でしたね。併し、初めての大阪進出は道頓堀の朝日座でしたね。

會長　さうで、朝日座の買收は明治四十一年でしたが、最初の進出は三十九年二月中座の鳴治郎一座でした。その朝日座を手に入れた夏の話ですが、座の前へ夕涼みの床机を出して、座の者が將棋をさしてゐたので、私は後でそれを見てゐたら急に暴力沙汰をしかけて來た。私の年が若かつたので、そんな事をしかけたのですが、私や大谷の育つた京都は又大阪以上に、そんな人間がゐるうるさい土地でした。芝居へもお公

卿様の御用方だ、九條家の者だといつて、ただでは入る人間がうんとゐたので、私はなれてゐましたから、さう驚きはせず、朝日座で三日寢泊りをしました。でも、道頓堀はまだよかつたので、千日前はもつとうるさくて大變で、その時分有名な事件ですが、横井といふ興行師が殺された事がありました。そんな風で千日前と道頓堀とは格がちがつてゐて、千日前は税金も「日税」で毎日納める制度、それで税も安くてすんだ。その代り喜劇などすべてボテ鬘で、本物の鬘をつけると、劇場の格式といふので税が高くなつた。曾我廼家の喜劇もそれに弱つて、ボテ鬘を長い間つけてゐたのは、税が寄席なみで安くてすんだからで。それを五郎は嫌つて、本物の鬘をかけたいといふし、兄分の十郎は保守派だから、ボテでよろしいと意見がちがつてゐた。——え、五郎といふとその前は中村珊瑯郎の弟子（中村珊之助）で京都で下廻りをしてゐて延二郎一座に入つてゐた。けど、一寸やりすぎる方でな。それで面白い話があるが、先代延若が京都で「佐野鹿十郎」を出した時、左近といふ端敵（はがたき）を、例の市十郎（後の眼玉）がしてゐたが、あの立派な錦繪のやうな顔でせう。端敵で出て來ても、延若の鹿十郎が割を食はされる。延若は一寸いまいましいと思つたのでせう、その市十郎の左近を、傍にある石の地藏をとつて打ちすゑ、石の重味で左近が平目のやうにぺちやんこになる事を考へた。毎日その立廻りの終りで、市十郎をぺちやんこにして溜飲を下げたわけ（笑）。所が、子の延二郎が同じ京都で親讓りの「佐野鹿十郎」をしたが、この端敵が五郎になつた。後年あれだけになる役者だから、舞臺へ出ても小才がきいて出しやばるやうな所がある。延二郎もこれはと思つて、又同じ石の地藏でその左近を押へて、ぺちやんこにする手をやりました。（笑）。二代續いたわけ。

三宅　全く市十郎は立派な押出しでしたからね。五郎といひよく分りますよ、ぺしやんこに

してやらうとするシテの氣持が。所で、その後間もなく鴈治郎と貴方との關係が出來て、明治三十九年でしたか南座を貴方が買ひとられたわけですが、鴈治郎をよくもあれ迄大きくなすつたものですね。

會長　え。役者は先づ時代に合はんといけまへんな。私はいろ〳〵役者を手がけて來たが、その時代に合つた人が成功者です。若い頃の鴈治郎を、親の翫雀はよく「ボーダラ」（大根）やといつてゐた。その時代は右團次、橘三郎、璃寛がゐて、とても鴈治郎が出てくるすきがない位。けど、あの人はしきりに何か考へてゐた。どうしてこれからやつていかうかと、いつも迷つてゐた。私はそれを見て諫言をした。それはその時代は、どの役者でも自分の出し物といふと、例へば「梅忠」なんかなら、鴈治郎の場合だと道具ののれんやらんま、どこもかしこもイ菱の紋をつけて、舞臺が自分の家か樂屋のやうでした。さうして人氣をあほつた。私はそれを見てゐてよくないと思つた。そんな事をしていはば公私を一緒くたにして、人氣を出すのは昔の役者だ、今はそんな事より芝居を、一生懸命にまじめにやる時やと思つて諫言したんです。

三宅　あ、その貴方のお考へは私に實によく分る事があります。故伊原青々園氏が晩年私に、大谷君や白井君は實にまじめだつた。東京の興行師は殆ど通人でしやれ者だつた。だからいつの間にかまじめな松竹の方を、世間が重んじるやうになつた、といはれたが實に名評と思つてゐた。今貴方から鴈治郎の指導方針を聞くと、結局昔の役者風でなく、まじめな舞臺人としてやれと、貴方がいはれた事になると思ひます。——とに角私が知つてからの鴈治郎は、よくいふ事だが舞臺は一心不亂で、私は十三歳の日露戰爭時分、鴈治郎を地方の姫路や、神戸で見たが、そんな巡業の時でも藝に缺點はあつても舞臺はまじめで、明るく熱があつたのを覺えてゐます。あの舞臺の、伊原式にいふとまじめ一方

で世に出られたのでせうね。これも私は覺えてゐますが先々代仁左衛門の我當時代は、江戸つ兒風でいい役者でしたが、舞臺が時々とつぴで、少年の私でさへ、何となくこれはと思ふ所があつた。――併し、その鴈治郎が成功者として死んでも、この頃は上方の世話物のうまい人がないので心細いのですが、貴方にぜひ上方のいい傳統の世話物は殘して頂きたいので。

會長　（うなづく）それはさうだす。上方には上方の味がありますさかいな。それでよくいふのやが下座にしても、上方狂言にはそれでないと調和せぬ下座があつてな。東京の人にいはせると、頭の上から黃色い聲を出すと笑はれるが、鴈治郎がやつた「椀久」の序幕の、小判をまく「鬼は外、福は內」の幕切れでも、あれはどうしても合方が上方の「三國一の」でないとうつりません。又、實錄の方の「夕ぎり伊左衛門」の序幕の幕切れの合方も、「背戸の段畑」になつてゐるが、東京で何といはれてもあれでないと効果が出ません。それをあの頃で美音の芳村孝次郎が唄つてもちがふものになりますのでな。――上方の世話狂言もそれでやつぱりこつちの役者でないと……

三宅　二代目鴈治郎が「雁のたより」や、「乳貰ひ」をやつてもあの通りで殘念ですが、「岩井風呂」（宿無團七）など見せて頂けませんかね。あれなら延若も大正十三年九月に本鄕座で一度やつたきりで、假りに鴈治郎や我當に東京へ持たせてやつてもきつと受けますよ。それから伺ひますが上方のあんな古い世話物はまだありさうですが、貴方など知つてゐられるのだから、ぜひ何とか虫干しの意味ででも出して頂きたい。

會長　え、いろ〳〵あんな狂言はありますな。「とんとんの三吉」も面白い。

三宅　あ、その話はよく聞きますが、私は見た事はないのです。――日比さんのやうな私より年上で、京阪土着の方さへ見た事がないといつてゐられたが、して見ると松竹になつて五十年

間やつてゐないわけですね。

會長　（考へた上で）さうやな。私はやつてゐませんな。面白い芝居で「雁のたより」に似てゐて、三吉が相手の女に會ひに行つて戸をとんとんとたたく、これがまちがひでいろ〳〵面白い事があるが、そのとんとんとたたく音から「とんとんの三吉」の外題になつた。――さうや、あれは誰の作か知らん、昔からあるもので、私は三代目の延三郎、手の少しまがつた役者やが、和事のうまい人でその人のを見た。四代目の延三郎、八幡筋の延三郎のも見たが中々よかつた。

三宅　そんな狂言をぜひ見せて下さい。今はそんな芝居を見てゐる人さへないわけですから、貴方の指導で見せて頂きたい。鴈治郎ですか我當のものですか。

會長　さあ。

三宅　いや、いろ〳〵お話を伺へて何よりでしたが、東京の若手はやりすぎる位やり出しましたが、こちらは寂しいが何とか若い連中に奮發してもらひたいもので。

會長　あ、それには丁度よい話があります。先日鯉昇、太郎、莚藏などの若手が「つくし會」といふのをこしらへて、私にその發會式に何かいつてくれ、といつて來た。その會が出來たのは、去年中座で「すしや」が出た時、梶原について出る四天王が、せりふが如何にもまづくて困つた。それで今度の「盛綱」の四天王でも、前の時にこりてゐるので、古郡薪左衞門や、竹の下孫八にしやべらせて「唯々お目出度う」の件だけよりいはせなかつた。それで若い連中がこれはと思つて、そんな會を造つて勉強をし出したわけ、そこで私は日比君を代理に出して、藝はふだんが第一で、急に會を造つて勉強するより、平素を勉強せよといはせておいた。まあ心がけは結構な勉強會故に苦言を呈しておいたが、藝の勉強はふだんが肝腎です。この間の「天人香」の幕切れでも、「盜人か」「それが貴方の本役だ」のせりふなんぞも、みなまづうて

困つた。それを急に勉強しようとしても無理でふだんの舞臺の時に勉強した所を見せんとあかんのです。――尤も、私は戰爭前から若手のために自分の家を開放して、御承知の「技藝道場」を造つた。朝早くからみなやつて來て、藝事をよく勉強したので、あれから雛助や延二郎が出たんです。それが興行の時間の都合でやれなくなつたり、戰災でそのまゝになつた。とに角藝の勉強はふだんが大切ですな。

三宅　それもよく分りました。勉強會の急稽古は我々の學生時代なら、試驗勉強ですからね。徹夜で急に勉強したやつは、試驗がすんでしまへばすぐ忘れてゐる、それに當りますからね。――まだ文樂の事について伺ひたかつたのですが、又話がもつれたさうでどうにもなりませんから、それは割愛として、最後にこれからの時代に、貴方として上方の劇壇をどういふ風に經營なり、指導なさいますか、それを結論として伺ひたいのですが。

會長　え、これはむつかしいおたづねですな。菊五郎が死んだのでさういふ質問は尤もですが、私はその時その時で臨機應變の處置がとれると信じて居ります。いつの時代でも大きな役者が死ぬと、これでどうなるかと思ひますが、時代がそれだけ變るわけで、又どうにか道が開けて行くやうですな。それに今でも東京の若手、大阪の歌舞伎の方も役者の數は相當ありますから。そこで東京大阪ときめずに、これからは互に融通し合つて、東西の役者を、脚本、出し物次第で行つたり來たりさせれば、十分やつていけると思つて居ります。

三宅　成程、松竹は東西の役者を全部持つてゐられますからね。それは大變な強味、でも、どうかうまくやつて頂きたい。何といつても歌舞伎の限り、貴方と大谷さんとに頑張つてゐてもらはぬと益々混亂するでせうから。どうもいろいろと有難うございました。

（二四年七月）

中野好夫氏と語る

——歌舞伎のゆくへ——

中野　六代目の再起は當分望めないでせう？

三宅　だいぶよくなつてゐるとはいつてゐるが秋まではまづ困難でせう。

中野　自宅で發病したのでよかつたですね。

三宅　中野さんは新劇の方もよく見られますか？

中野　最近では、ある必要があつて民藝の「山脈」と俳優座の「孤雁」を見ましたが、「山脈」はいまの新劇の水準からいつて、立派だつたといへますね。「孤雁」はわかりにくい點があつて……でも新劇としては、こんどは珍らしく當りましたね。今後もこれだけの見物を集められるかどうかが問題だが……

三宅　ところが一説には、やはり新劇は樂觀出來ないといはれてゐます。つまり三越劇場といふせゐぜゐ七百人か八百人しか入れない劇場だからいつぱいになつたのであつて、滿員になつたからといつて喜んでおれんといふのですね。當事者も悲觀説で、まだまだ新劇の觀客は限られてゐます。

中野　ただこんどの新劇祭では、ジャーナリズムが人氣を煽つたともいへます。

三宅　さうなんですよ。ジャーナリズムの力といふものは恐しいもので五月は中村時藏が松竹

と縁を切つて三越劇場の專屬みたいになつて出演してゐますが、それも新聞などが書いたものだから芝居そのものはさういいものでもないのに相當人がはいつてゐる。ジャーナリズムにとつては、七百人くらゐの席をいつぱいにするくらゐ簡單ですね。わたしが氣持よく思つてゐるのは、三越劇場は觀客がたいへんいい。芝居の急所をよく見てゐます。東京でも下町の芝居好きがずゐぶんきてゐます。靜かにして熱心に見てゐます。海老藏や染五郎あたりが、急に賣りだしたのは、こゝで、見巧者の觀客を相手に芝居したおかげです。やりがひのある芝居を二年くらゐでもやつたためなんですね、時藏もこの客筋を見てとつて、こんどのやうにもつぱらここで芝居をしてみよう、と決心したのでせう。

中野　年齡はさう若くないでせう？

三宅　中年層です。東京の下町つ子だけは鄕土心が强くて、戰災であんなに燒け野原になつても、またもとの住んでゐたところへ歸つてきてゐる。さういふ芝居のよき理解者がきてゐるものだからむかし菊五郎、吉右衞門の修行した市村座時代を再現する形となつたわけですね。海老藏などはここで人氣が出たから、いまのやうに演舞場に出られたのであつて、さうでなければ、保守的な松竹が若手を起用するはずがありません。三越でも、こんどは專屬俳優をこしらへるといつてゐますが、小屋は小さくとも結構、興行的に成立つてゆくのは、衣裳部といふものがあつて、豐富に衣裳を持つてゐるためです。つまり衣裳に金がかからない。松竹の衣裳ときたら人絹かスフです。たとへば「夏祭」の團七の浴衣……あれ一枚でも今なら五萬圓はかかります。そんなに金をかけて新調しても、役者がそれを着て亂暴に動けば、やぶけさうになる。むかしながらの衣裳を持つてゐるといふことは强味ですね。それをつかはないで、しまひこんだまゝにしておくと、かへつて痛む。時々、虫干し代りにつかつた方がいいのでやるのでせ

う。

中野　團菊が亡くなつて、歌舞伎が一時、火の消えたやうになつたころは、もうおしまひだといはれたものらしいが、あれだけの傳統を持つた藝術はさう簡單に滅びるものではないでせうね。

三宅　あなたがさういつて下さると、まつたく心強い。いいものはやはり殘ります。

中野　ただ觀客がついてくるか、どうかですね。

三宅　さうです。問題は觀客の側にあります。歌舞伎の死活問題は觀客の動きにかゝつてゐます。

中野　最近、學生や若い娘さんの中に歌舞伎の好きなのがゐますが、いつまでもつづくか、どうかですね。わたしは、どんな人でも、一度は歌舞伎が好きになる時期があるんぢやないか、と思つてゐます。それまで歌舞伎を見ないでゐて、一度見て、その魅力にとらへられるのとね、全然見ようともしないで、つひに歌舞伎を知らずにゐる人もゐるでせうけれど……學生の中には歌舞伎研究會などもあるし、わたしの知つてゐる佛文學者のお嬢さんで、これがまた歌舞伎が大好きなんです。ちよつと不思議な氣がしますが……學校によつては、歌舞伎を自分でやつてみようといふ學生もゐるし……

三宅　あれは苦々しい傾向ですね。

中野　關西歌舞伎はもうダメですか。延若は上方歌舞伎のふんい氣を濃厚に持つてゐる役者でしたがね……

三宅　あの人が舞臺に立てなくなつたのは、ほんたうに惜しいことです、これでもう上方獨得の味のある役者は見られなくなりました。

中野　同じ「夏祭」でも、音羽屋のやるものとは違つた味がありましてね……

三宅　彼は年をとつてから、ずゐぶん見直しました、若いころはアクが強すぎて、それが抜けてから實によくなつてゐる。吉右衛門もその意

味で例の熱演癖がなくなつてから、滑味が出て、實によくなつた。熱演ファンには物足りないかもしれませんが……しかし、延若は江戸ッ子風の度量の狹い人には受けいれられません。

中野　さう、あのデレデレしたところはね。

三宅　上方役者の……これこそ完全に最後の人でせう。あとはもうつぐものがゐない。だいいち歌舞伎を育てゝくれる人たちがゐなくなりました。

中野　關西歌舞伎の支持者は船場の人たちでしたからね。

三宅　船場も燒野原になつてしまひました。そこには大阪のいい傳統を持つた文化人がゐた。船場の人たちは、戰災後は、船場に住宅を建てようとしないし、また阪神間の住宅地といふものは、氣候はよく、誰でも隱居したらこゝに住みたいと思ふほど申し分のない住宅地なんです。そこに住みついて、外國人なみに郊外の住宅から、市中心部のオフィスへ通ふといふ生活になつてゐます。さうなれば芝居から離れてゆくわけです。東京の下町の人とは逆ですね。下町の人はさつきも話したやうに鄕土心が强くて、一ペン燒けだされてもまたもとの地へかへつてくる。大阪にはそれがなかつたものですから、船場の人たちが郊外へ立ちのくと同時に、芝居はいいパトロンを失ふことになりました。歌舞伎や文樂がふるはない原因は、そこにもあります。

中野　文樂は東京へうつつたらどんなもんでせう？

三宅　それは大いに考へられていい問題です。いまの大阪は絕對に文樂を大事にしないし、その理解者は東京に多いんですからね。面白いことに、文樂は大阪ではいけないんですが、東京と地方ぢやとても客がはいるんですよ。どこでもえらいモテ方で、五月の有樂座も因會だけの出演で、それほどの大入りではありませんが、

尻上りしてきたし、先月、先々月のバレエや新國劇公演よりずつと客はきてゐます。東京へ引越した方が文樂のためにはいいのです。

中野　それだけ國家に近づくことにもなるし、保護政策をとるのにも都合がよい。文樂は、國家の保護がなければ、もうダメでせう。

三宅　それで法律で保護しようといふ話が國會内部でも起つて、わたしは參議院の文化委員會に呼ばれて、山城少掾と綱太夫といつしよにいつたのですが、興行上でも特殊な扱ひをされるやうになるかもしれません。少くとも入場税が十割に下る可能性はあります。新劇はそれ以下になるといふ話も聞いておりますが……

中野　山城少掾や文五郎の以後に文樂を維持するものがおりますか？

三宅　その點、世間でいふやうに無能力者がそろつてゐるわけではありません。歌舞伎の後繼者に海老藏といつた人たちがゐるのとは段違ひに有能な人がゐますし、文樂の前途については、必ずしも樂觀は出來ませんが、たとへば綱太夫……彼の淨るりはたいしたものです。年齡からいつても四十四、五で、この人のゐる以上、文樂は世間でいふやうに、ゼロになつてしまふことはないでせう。つばめ太夫といふ有望な人もゐます。

中野　あれほど修行し、いい藝を持つて報ひられるところが少い點、歌舞伎よりひどいやうですね。

三宅　まつたく……文樂の人たちの怒るのはもつともですよ。ただその方法が單純で、藝のまづい人ほど騷ぐんですね。さういふ思想を持つてゐる人は、よろしく文樂にくすぶつてゐないで、社會に乘りだし、實踐運動に乘りだしたらいいと思ひます。これがわたしの持論です。いまのやうに勞組側と因會との二つに割れてゐては自分で墓穴を掘るやうなものです。

中野　もう松竹をはなれて、つまり資本家に抱へられてゐるんじやないのだから、妥協の道が

ありさうなものですがね。最近は一般に勞働組合も會社自體をつぶしては、なんにもならんといふ風に考へるやうになつてゐます。

三宅　文樂には、たとひお客は一部の人に限られるやうになるとしても、まだ學問的價値はあります。人形淨るりを知らないで、日本の歌舞伎はわかりませんからね。その意味でも殘す値打ちはあります。そこでもし文樂が東京に引越すとすれば……人形の歷史としては劃期的なことなんですが學校と結びつくことも考へられます。

中野　要するに生活條件のいいところへうつるのがいいでせうね。

中野　菊五郎、吉右衞門が市村座で修行してゐたころと、いまの若手とをくらべるとどうでせう？

三宅　今の若手といふのは幸運兒ですよ。つまり世間一般に……戰爭中指導的地位にゐた人たちを排斥して、若手を迎へる氣運にある。それに乘つただけの話なんですね。歷史的に見ても、歌舞伎の世界で、これほど若手が迎へられた時代はありません。スポッと大物が拔けたあとの幸運です。それだけ彼らは勉强しなければ、ただ運がよかつただけだといはれることになる。市村座時代の菊五郎、吉右衞門を考へると、あれはまさしく血と涙の苦しい修行でした。菊五郎が初役の辨慶をやつたのが、廿九歲です。今は若手といつても海老藏は四十一でせう。それだけの違ひがありますよ。吉のまはりには小宮豐隆氏、菊のまはりには狂言座、柳澤健氏たちがゐて、智能もついていた。修行のはげしさからいつても今の若手は學ばねば……もつともインフレ時代で生活もたいへんなんですが、さういふ生活的な能力は市村座時代より利巧になつてゐます。變なところが利巧になるより、藝に利巧にならなければ困りますね。

中野　新劇にはまだまだ興行者が手を出さんで

せうね。

三宅　新派なんてのは、これこそ文樂よりもアッケなく消えてしまふでせうが、新劇については、まだそれだけの見透しが興行者にはつかんでせうね。千田是也氏もそれで悲觀說を述べてゐた。

中野　新劇といふと妙に型にはまつたところがありましてね。

三宅　それを打破しようと努めてはゐるやうですが……

中野　たとへばモリエールものを新劇がやる。すると、妙にそれが深刻な芝居になつてゐるんです。ところがモリエールものは、フザケる……といつては語弊があるが、樂しんでみるやうなものでなければならない。いつまでも殘る芝居といふものには樂しさがあります。モリエール、シェークスピア、歌舞伎などさうです。

三宅　瀧澤修がこんなことをいつてゐたさうですね。自分は新派的だといはれやうが、なんといはれやうが、とにかく觀客を樂しませるやうに演技したい、と。つまり今の新劇は固すぎるといふのです。

中野　これは、それとは違ひますが、「山脈」の瀧澤の演技ですね、手拭ひをぶら下げて寮歌を歌ひながら出てくる。その演技と、後の幕に現はれる瀧澤の惱みとの間に食ひ違ひが出來てゐるのです。高歌を放吟するやうな社會環境に對して疑ひを持つてゐるわけなんですから、脚本の要求してゐる主人公の性格と矛盾します。

三宅　來年の下半期には大恐慌がくるだらうといふ話で、だんだん不景氣がひどくなると思ひますが、芝居がどう切り拔けてゆくか、結局よく勉强するものが殘るといふことになるでせうね。

（二四年六月）

正宗白鳥氏と語る

六代目のお名殘狂言

正宗　六代目はほんたうに重態なんですね。もう全然立てないのですか。

三宅　今日きつと話が出ると思つて調べてきましたが、二、三日前までは昏睡狀態で危篤だつたさうですが、また持ち直したさうです。さう急なことはないだらうといふ情報が來る前に入りました。

正宗　なんの病氣ですか。

三宅　高血壓です。つまり腦溢血です。非常に惡性なもので、腎臟のある高血壓ですから絕對に回復の見込みなしです。

正宗　それぢや少くも舞臺からは緣を切つたわけですね。歌舞伎としては劃期的のことですね。先代がやはり六十くらゐのときに死んだんだが、やはり中風でしたね。酒好きだつたさうです。よい〳〵で二、三年やつておつた。

三宅　辨天小僧で、身體が不自由だつたさうですね。

正宗　辨天小僧はお名殘りでした。中風になつてゐても、これはうまかつた。あの二年ほど前から患つてゐた。それまでは團十郎は衰へておつたけれども、菊五郎は技巧が圓熟するばかりで老衰してゐなかつた。江戸の世話物の妙味を

最後に迄見せてゐた。

三宅　六代目も時間の問題らしいですね。持ち直したといつても、もう治る見込みはない。

正宗　さうするとお名殘り狂言は何になるんでせう。

三宅　「加賀鳶」の道玄、これは松綠が代つてやつたのですね。この代り役を松綠がどういふやうにやるかと思つて、私も非常な期待と不安と兩方の氣持で、上京してみたのですが、惡いものでしたね。

正宗　ぼくは、芝居は長い間見續けたけれども、戰爭の始まるころからはほとんどみなくなつた。見る興味がなくなつて、何年みないかな。だから新しい若手連中は全然知らなかつた。それで一昨年？　に「忠臣藏」の通しを見たのが久し振りの觀劇だつた。あれを見て非常におもしろくて、時々見るやうになつた。こつちには二、三日しか泊らないから、見る機會が乏しいので、若手のもちよい〳〵見たけれども、名前もよく知らないくらゐで、藝風もよくわからない。漸くこのごろになつていくらかわかるやうになつたのですが、若手でも五、六人は有望な役者がゐさうですね。しかし、この間の海老藏の辨天小僧と、松綠の土蜘蛛を見て、若手に對して幻滅を感じた。辨天小僧は度々見た芝居ですが、先輩の指導者がないためなのか、熱心がないのか、素質を缺いてゐるのか、歌舞伎の味がちつともあの辨天小僧には認められなかつた。第一無作法なやうに感じた。それから近松の「宵庚申」も筋を通すだけで近松の「自然の世相」といふ味がちつとも出ていなかつた。

三宅　……。

正宗　「宵庚申」の改作の方には、嫁いぢめがあくどい。婆さんが半兵衞に對して色氣がある。それも面白いが、さういふやうなことは今度のに拔けてゐるが、近松と改作の方との中途半端か。

三宅　あれは、われ〳〵がそんなことを言ふと

變ですが、あのおばあさんは惡意なしに、ただ嫁と氣性が合はないといふことぢやないですか。

正宗　原作では半兵衞に對して色氣があるのではないですね。

三宅　それはないやうに思ひますが、いかがでしたか。ただあれの最もおもしろいのは、あたり前の婆さんでゐながら、ただ嫁とだけはそりが合はない。それで半兵衞が苦しむ。おばあさんが惡い人ならよいのだがといつた氣持の詞がある。お母さんは物の道理もわかり、事理もわきまへた人だ。それでゐて嫁と合はないから自分で苦しんで、自分の方が身を引くなり、心中でもするより仕方がないといふ氣がしてくる。

正宗　あれはつくりかへだつたかね。わがまゝのおばあさんがしきりに半兵衞に色目をつかふ。

三宅　あれは改作です。「八百屋の献立」なる後世の改作物で、一般にこの方が有名です。

正宗　近松の方がそれだつたんではないか。それがいやなことだから、やめたんぢやないかと思つた。

三宅　それは違ひます。

正宗　近松が自然主義で行つて、變な芝居にしないえらさですね。

三宅　そこは實に偉いと思ひます。

正宗　どうもそれにしても、あまり氣乘りのしない、淡々とした芝居ぢやないですか。小說でもさうですが、無意味に淡々としたら、味も何もなくなる。

三宅　私などはかへつてあのばあさんは、まだあれでもいぢめ方が少し强過ぎると思ふ。もつと私はよい意味の淡々とした芝居にしたらどうか。しかしそれは芝居としてはしにくいですから、結局ある意味において今の型通りの婆さんを出すよりほか仕方がないと思ひますが、そこが舞臺上では一番缺點でした。それは先生がお氣づきになるのが當然で、私はあの婆さんの扱

ひがあの芝居では一番むづかしいし、缺點になつてゐると思ひます。しかし少くとも近松は、先生のおつしやるある意味の自然主義、そこの狙ひは偉いと思ふ。

正宗　すべて近松のものは、惡人らしい奴が心からの惡人でないのが多い。

三宅　寫實一點ばりの作家ではない。

正宗　近松で見ると、「冥途の飛脚」の八右衞門にしても、「天の網島」の太兵衞にしても、決して惡人ぢやないですね。

劇場と若手歌舞伎

三宅　私なども終戰後まごまごしておつて、東京へ一、二年來られないときがあつたので、このごろになつてやつと見出したのですが、これも先生に私は今日伺ひたいと思つておつたくらゐですが、不思議ですね、若手は三越でやつたときの方がおもしろいらしい。それが演舞場に持つてくると、どうも光らない。

正宗　ぼくは三越で見たのだけれど、役者の顏を知らず、隣りの人にきいてわかつたりしたのです。「四谷怪談」と「十六夜淸心」をやつたときで、初めて揃つて若手を見たのです。これは案外うまいなあと思つた。藝は至らぬにしても、整つたところを持つてゐると思つた。それからあのときに相馬の古御所を芝翫と海老藏がやつてゐた。芝居としては單純なものだが、あの時の芝翫を見て、離れて見てゐたせゐか、これはいいと思つた。いい風姿をしてゐると感じ入つた。昔の女形の面影があると思つた。それから友右衞門が「十六夜」をやつたが、あれは新しいところをやらうとしてゐるのでせうね。ちよつとさういふ意氣がおもしろいとぼくは思つた。昔の女形を連想するやうな芝翫は、二度くらゐしか見てゐないが、僕は好きだ。大體はどれも同じ程度、梅幸も割合によく見えたが、揃つていい加減なよさで滿足してるのぢやないか。

三宅　今先生のおつしやつた「十六夜淸心」も

「四谷怪談」もぼくは見てゐないのです。

正宗　あの時は出し物が揃つてゐたし、一番おもしろかつた。數を見てゐないのですが、この間「辨天小僧」なんか見ると、これではまだまだだなと思つた。あなたごらんになつたですか。

三宅　むろん見ました。ところで、私なども三越で海老藏の盛綱を見て、たいへん感心した。丸本物では盛綱は大物ですから、終戰後若手で一番最初に盛綱をやるといふので期待しておつた。御承知のやうに歌舞伎の型ものの横綱みたいなものですから、海老藏がやつたのでどんなことになるかと思つたら、なかなかよかつた。ちよつと意表に出るくらゐであつた。

正宗　昔の通りの型でやつたのですか、大體さうでせうが、何か新しい意氣込みはなかつたのですか。

三宅　それは懷古的といへるかもしれないが昔の傳統によつた方の盛綱です。それは必ずしも羽左衛門の型とか何とかといふやうな物眞似でなくて、昔の傳統を生かしながら、割合に海老藏が樂にやつてゐる。私がそんなことを言へば怒られるでせうが、若い時の話ですが、吉右衛門の初役の盛綱よりよいのです。これに感心して、それ以來昔の情熱がわいて來て、毎月東京に芝居を見に來るやうにした位です。ところが演舞場で見ると、海老藏が光らない。三越で人氣が出て、大きくなると思つて松竹が演舞場に入れてみた。ところがうまくいかない。どうもやはり「野におけれんげ草」といふ氣がする。毎月演舞場を見て、若手はあまり感心しない。三越の狹いところでやるからあの人たちのぼろが出なかつた。演舞場のやうな大きいところでやると、聲とか表情とか動きとかがどうも……。

正宗　ぼくはあの「辨天小僧」なんか大分無作法だと思つた。昔菊五郎がそれをやつた時は、身體が不自由であつても、行儀作法がよかつた。

三宅　それをやかましく言つたものですね。し

かし先生は與三郎の方をごらんになつたですか。

正宗　いいえ、見ません。

三宅　與三郎はこれこそ幸四郎風のミステークを出して、エラー續出の與三郎でした。ぼくらは海老藏は囑目したのですが、演舞場に出てからふるひません。

正宗　今は割合に若い見物も歌舞伎に興味が出たんですね。不思議なものだ。ひいきもできたし、環境もよくなつたんだから、やれば認められるわけだ。それが發達しないとすると自分が足らないのか、指導者のよいのがないのか。

三宅　指導者がないといふのが一つ、もう一つは若手連が割合に指導者なんかといふものを考へない。

正宗　今の時世だから、我流にやるのもいいわけでせうが。

三宅　民主主義といふ建前なんでせう。ところがそれがうまく行つてゐるかどうか、多少疑問でせう。

正宗　新劇ならいいが、歌舞伎は能樂のやうなものだから、昔の傳統のよさを持たない歌舞伎はつまらない。歌舞伎の內容といふものは筋もつまらないし、話を聞いても愚にもつかぬことだらけだが、あの形式美に魅力があるのだから。

三宅　それは傳統を無視してやればよいものができるはずがない。どうも私などもさう考へてゐるのですが、先生にさう言つていただくと非常に心强い。今はかういふ世の中だから割合に强氣の向う見ずでやつてゐるが、かへつてこれは歌舞伎をスポイルすると思つております。

羽左衞門の面影

正宗　女形もたくさんあるのですが、だれが伸びさうだといふ見當がつきませんか。

三宅　それはやはり女形なら芝翫や梅幸はよいでせうね。とても過去の名女形みたいにならないまでも、ある程度まで行くと思ひます。殊に芝翫はおもしろいと思ふ。

正宗　ぼくもあの時は行つて見てよいと思つた。あの時は大して活躍しない海老藏もよかつた。いかにも歌舞伎の味があつた。繪のやうで、ものはつまらないけれども、見ておつて風貌から何から、ほかでは見られない古典的藝術美があつた。

三宅　それはさうでせう。私はあれを見ませんが、よくわかります。歌舞伎といふ點から見れば、何といつても芝翫と海老藏です。

正宗　芝翫をそれつきり見ないけれども、あまり激賞してあとで何だけれども、ほれぼれする味を、あの役者は身に具へてるのぢやないかと思つた。何の關係かしれないが、あのときに昔の歌舞伎の面影をしのんだ。

三宅　芝翫を先生がさういふやうに思召すのも意味があるので、私はあの人の踊りを買ひます。

正宗　芝翫は前の福助の息子ですか。

三宅　弟といふことになつております。

正宗　ぼくは若い二十代三十代に芝居をよく見ておつた。はじめの方をよく覺えてゐて、途中は忘れてゐる。ぼくは梅幸や羽左衛門で芝居を觀て來た譯だ。あなたは菊五郎、吉右衛門の芝居を市村座でよく見てゐるでせう。

三宅　私などは同時代です。しかし歌舞伎の味を學んだのは羽左衛門、梅幸なんだ。

正宗　その羽左衛門、梅幸の記憶が薄らいでゐた。この間、以前中央公論でやつてた劇評を讀返して、なるほどかういふものだつたかといふことを思ひ出して面白かつた。ぼくは最初から家橘すなはち羽左衛門が好きだつた。染五郎すなはち幸四郎といふ人には左程興味がなくて、感心したものが殆んどない。あれだけ歌舞伎に浸つてちやんとした風丰も持つてゐる幸四郎の所演に、ほんたうに恍惚としたものはなかつたね。羽左衛門ならさうぢやなかつた。

三宅　あれは事變前でしたか、先生は新聞へ感想をお書きになりましたね。自分の芝居の上の興味は羽左衛門を見たことだ。羽左衛門と一緒

の時代に生きてゐたといふことは、それだけでも樂しいと、非常に羽左衛門を認めてゐらつしやつた。

正宗　あれは勉強する人か勉強しない人か知らないが、非常に進歩しましたね。あの時分は家橘染五郎が花形で贔屓々々を持つてゐて、羽左は初めはずぼらであつた筈ですが、やはりあれも、あれだけ進歩したのですから、藝には熱心であつたわけでせうね。左團次が出て、一時、昔風の歌舞伎は勢ひが衰へてゐた。左團次が盛んな時は、歌舞伎は羽左衛門が閑却されたやうだつた。しかし、彼は昔のまゝでまつておつたやうだ。幸四郎ほども新を志してゐなかつた。

三木竹二さんによく聞いておつたけれども、羽左衛門は、彦三郎の若いとき、竹三郎と云つてゐたところの、面影があるといつておりました。羽左は昔の江戸の世だつたら非常に人氣があつた筈だ。羽左は、五代目よりもこせ〳〵したところがなかつたし、ぼうつとしたところがあつた。彦三郎の方が五代目以上の風格を持つてゐたさうだが、羽左は五代目に學びながら、却つて、知らない彦三郎の趣きを出してゐたのぢやあるまいか。

三宅　御同感です。先生から伺ふとそれはよく想像できますよ。羽左衛門は何といつても「實盛」、「盛綱」といつた生じめ物のうまい人です。

正宗　實盛を見に行つたときは、年代からいつても、羽左衛門は實に歌舞伎の持つ魅力、歌舞伎特有の、理窟を絶した魅力を與へてゐた。昔の役者のそれを彼は備へておつた。

三宅　それが私らの伺ひたいところなんですが、五代目にそれはどうでしたか。

正宗　五代目は名人だし、江戸つ子の生粹だし、面白かつたが、あれはこせつく人だし、規模が小さかつた。團十郎は大きかつたけれども。

三宅　さういふ意味のことはだれも言ふのですが、羽左衛門が死んで、歌舞伎はほとんど滅ん

だといつていい。

正宗　理窟を絶した何かがあの人にはあつたのでせう。

三宅　ほんたうに晩年の羽左衛門は大したものでした。

歌舞伎稽古の今昔

正宗　この間どこかの雑誌で讀んだんだが、菊五郎は、吉右衛門は眼中にないけれども、羽左衛門を目の上の瘤のやうにしておつた。羽左衛門が死んでからあとの菊五郎はいけないといふことを、大岡君のもので讀んだ。

三宅　大岡君はぼくもよく知つておりますが、その通りです。あの人はぼくと同年代で、江戸ツ子で相當よく見ております。それは同感です。

正宗　しかし菊五郎も若くて世に出かかつたころ、青年時代は、これは五代目以上になると言つた人がありましたね。あれは親子だから、よく似ておりますよ。「狐忠信」のときは五代目の目つきから何からそつくりだつた。それに技巧が細かい。五代目は細かい人であつた。ある劇通が、六代目はよいけれども、「由良之助」ができない。詰り小品の名人だ。「由良之助」の出來ない歌舞伎の大立物はどうかと思ふと云つてゐた。

三宅　その説はよく言われた説ですね。

正宗　さういふ標準で見るわけにいかぬけれども、市村座の全盛時代にはほんたうによい芝居があつたでせうね。

三宅　併し、歌舞伎の味といふ點では、なんといつても、それは先生も御承知のことだけれども梅幸、羽左衛門、中車、この三人の芝居はおもしろうございましたし、片岡仁左衛門の芝居はおもしろいものでした。市村座の方は初期は若さの面白さだけでした。

正宗　青春期だから。

三宅　市村座連は歌舞伎に新しい考への型をうまくとり入れた。前のものが生れ變つて、別の歌舞伎になつて何となく大成した。その魅力は

たいへんなものでしたが、それが今の若手歌舞伎にない。

正宗　それは時代の關係もあるわけでせうが、天分を持つていないし、第一心がけがぼくは惡いのではないかと思ふ。

三宅　私などがかういふと、いかにも自分が意地惡を言ふやうですが、どうも今の若手歌舞伎は勉强心がないと思ふ。菊五郎、吉右衞門は今でこそさうなつておりますが、勉强家でした。

正宗　菊五郎は若くて親にわかれて、殊に中車なんかにいぢめられたんでせう。

三宅　自分で私にその話を聞かしてくれました。

正宗　昔の歌舞伎役者は實に後進をいぢめる。

三宅　舞臺で大根とか、ひつこめとかいふのです。菊五郎でも吉右衞門でも盛んに言はれた。

正宗　今の時代ならやれもしないが、昔はひどかつた。團十郎は弟子に教へもしなかつたさうだし、中車なんかに舞臺でなつちやゐないと、前の方の見物には聞えるやうな聲で云つた。聞きに行つても教へてくれなかつたさうだが、昔はさういふ習慣があつた。

三宅　舞臺で罵られるから、それが勉强になつた。

正宗　昔からの傳統的折檻で、前の見物に聞える位な聲で、なつちやないとか、貴樣もつとこつちへ寄れ、そつちぢやない、もつとこつちだなどと、五代目なんかそれを舞臺でやつたさうだ。（笑聲）

三宅　どうも今の若い連中は勉强心が足りないやうに思ひますね。

發達を阻害するもの

正宗　今は經營困難で利益が上らないから、次第に發達を阻害されるわけだけれども、どうなるのかね。映畫ならまうかつても芝居はまうからぬ。

三宅　このごろは不景氣で映畫もさつぱりまうからぬさうです。參考までに聞いてみますと、

映畫一本拵へるのに、少し大きなものをつくると、一つの會社を建てるくらゐの費用がいるさうです。だから必ずしも芝居だけでないので、その點どういふことになりますかね。松竹でも今年の三月までは、假に芝居で損しても映畫でカヴァできたけれども、今はカヴァする映畫の方が赤字になつた。興行界はほんたうに大恐慌らしいですね。しかし日本全體が大恐慌ですから、私はさう思つて度胸をすゑてゐる。

正宗　環境が文化の起る時代ぢやない。

三宅　文化國家なんといふのはちやんちやらおかしいので、日本がどうなるかわからぬのだから。

正宗　芝居だの出版だのは、天下太平が來てよい時代になれば、また興るのですよ。

三宅　芝居は天下太平でなければだめです。私はよく言ふが、歐洲戰爭のあつた大正六、七年から震災まで、あの五、六年はよい時代でしたね。御承知の中車、左團次、梅幸の賣出し時代、羽左衞門が圓熟して來た時代です。

正宗　役者もよい生活でしたのでせう。今はひいきが金をくれることもないし。

三宅　昔は休みになつたら、ひいきが役者を料理屋へ呼んで飲み食ひする。

正宗　ちよつとした役者でも自動車を持つてゐた。

三宅　少くとも道を歩くといふことがなかつた。役者の履いてゐる雪駄といふものは裏が汚れたことがない。うちの門を出てすぐ自動車。どこへ行くにしても自動車、そして行く先のそのうちは敷石づたひに石の上を歩くだけだから。むろんわれ〳〵みたいに雨ふりでもあしだみたいなものはいらないし、一足の草履が汚れたことがないといはれたくらゐです。あんな生活ばかりしてゐたから震災が來たといへるくらゐです。

新劇と歌舞伎

正宗　歌舞伎は、贅澤趣味がなければだめです。

貧乏な歌舞伎はだめだ。新劇とは違ふ。新劇は時世を現はして、貧乏な裏長屋を現はして深刻なつもりでゐられるが、歌舞伎はさうではない。あなたは新劇は好きですか。

三宅　新劇は勉強になつてよいと思ひます。ただ何といつても新劇を見ると非常に肩がこります。かた過ぎるといふ氣がします。でも見ておけば、後でよいことをしたと思ふ。よい新劇を見るまではおつくうでも、見たあとは、妙な例を言ふやうですが、寺參りか神參りをしたあとみたいな氣がする。だからぼくは築地小劇場時代に見た芝居の「ペリカン」「リリオム」などは實に感謝しております。

正宗　西洋のものをやつて、見ておもしろかつたけれども、本當の西洋は全然あれぢやないと思はれる。見たつてわからないし、西洋ではそれを娯樂的に見てゐるんだらうか、日本でやる飜譯物は樂しみの分子は乏しい。それは演劇の梗概を見てゐるだけだ。

三宅　レクチュアですね。

正宗　だからあちらでは藝に恍惚とするんだらうけれど、日本の新劇にはそれがない。新劇はおもしろいといふけれども、意味が違ふ。ぼくは西洋でイプセンを二つ三つ見たけれども、イプセンのヘッダ・ガブラなんかもまるで違ふやうに思つた。きれいな舞臺で、變な理窟のこわばつたものぢやない。見てゐて、見物が陶然とするだらうと想像された。ぼくは言葉がわからぬし、シェクスピアは譯文を讀んでゐたから分つたけれど、恍惚味は味はへなかつた。やはりシェクスピア物を見ればあちらの人は日本の歌舞伎を見るといふ境地でせう。こちらでは意味だけ考へてやつたり見たりだ。イプセンなんかの芝居は日本では人生觀が露骨に出てゐる。それもあるかもしれないが、それだけではないね。ヘッダなんかの擧動から何から、渾然としたきれいさで、繪を見るやうな氣がした。

三宅　イプセンでもさうですか。

正宗　それはさうです。まるで違ふ。ぼくはヘッダは筋を知つてゐたからだが、日本では飜譯がさうなつてゐるからでせうが、何か理窟ばかり出してくる。シェクスピアでも日本だとちやんと力んでやつてゐる。ハムレットの獨白でいきり立つて、このときといふやうな調子で、これこそ見せようといふことでやるから。

三宅　それは非常によくわかりますね。やはり芝居といふものは何といつても藝を樂しむものでせうから。

正宗　あなたは昔の德川時代の歌舞伎はずゐぶん御研究になつたでせう。

三宅　いや、あまり知らないけれども、常識的のことだけはいくらか研究しました。

正宗　ぼくなんかは空想家だらうけれども、とにかく空想して樂んでゐる。田村成義の歌舞伎年代記を見て、ばらばらになるまで見ておつたものですが、狂言名題と配役だけを見てゐてもおもしろい。僕は文化、文政の頃の歌舞伎が最もおもしろかつたらうと思つてる。歌舞伎が、歌舞伎らしく發達してゐたと思ふ。五代目幸四郎とか、永木の三津五郎とか、五代目の半四郎とかで一しよにやつてゐた頃を想像する。あゝいふ芝居といふものは錦繪を目で見るやうな夢のやうな時代ではなかつたかと思ふ。明治になつて、團十郎になつてから非常に理窟張つて來て……。

三宅　殊に永木の三代目の三津五郎は、あの人の話を讀むとおもしろいですね。又二代目左團次が非常に心醉してゐたが。五代目の團十郎といふのもよいらしいですね。

正宗　團十郎といふのは代々傑物ができたんだらうが、また十代目ができるのですか。

三宅　これはいろ〳〵說がありますが、結局はできるでせうね。

正宗　これからはさういふものができなくてもよいわけだね。これからは時代が變つたんだから、あれはあれでおしまひにすることだ。今度

菊五郎のあとを繼ぐ者はだれだらう。

三宅　ちよつとどうなるかわかりませんね。

正宗　新劇役者で特によいのはどういふ人ですか。

三宅　それは私が伺ひたいことなのです。先生はよく新劇をごらんになつてゐるのでせう。

正宗　やはりぼくは、見ると歌舞伎の方を見ますよ。新劇もときどき見るが、何だかうす汚くて。貧乏人だからといつて貧乏人をむき出しにしたりするのは面白くないね。歌舞伎は貧乏を出しても、貧乏的魅力がある。何かの魅力があるけれども、新劇はただ小汚いといふ感じだけの事がある。

三宅　先生の「天使ろかく」の脚本を拜見して、これは俳優座でやればよいだらうと思つて、私は先生にはがきを差上げましたが、そこでやる事になつたが、俳優座でやつてどうでしたか。

正宗　よくやつたのでせう。熱心にやつて、とに角芝居にしてくれたものだと思つております。

三宅　あの演出は千田氏ですか。

正宗　さうです。あすこではあの人ですよ。

三宅　しかし問題は、今非常に新劇が迎へられておりますが、新劇の將來性はどうなつて行くのですか。

正宗　どうなつて行くか、しかし感心といへば感心だね。一生物質的榮達の見込乏しく、生活に差障りがあるのにあれでやつてゐるのですから。

印象に殘る芝居

正宗　あなた方は見てゐて、沒頭したといふやうなおもしろい芝居がいくつかあつたでせうね。それはまあ歌舞伎でせう。新劇の方はいくらよくても。

三宅　沒頭した芝居といふと……。

正宗　夢にも忘れられないといふものです。ぼくなんか今忘れてゐるけれども、さういふことがあつたね。坪内先生が何かに書いてゐたが、

學生時代の自分の樂しみは新富座で歌舞伎を見ることだつたと。三木竹二さんも芝居が好きで沒頭しておつた。ぼくは田舍から出て來て團十郎を見て、大抵初日から何度か見てゐた。今でもその頃の芝居を最もよく覺えて居る。團菊所演の型も大分おぼえておつた。團十郎の高時なんか、拔群のできだと思ふ。前の菊五郎は初めは團十郎以上に面白いが、續けて見てゐると、どうも小細工をやる。團十郎のはそこはシンボリックだと思ふ。偉い役者だつたと思ふね。肚藝といはれておつたんでせうが。それからぼくは義太夫は、わかりもしないし、好きでもないけれども、昔文樂で偶然「忠臣藏」の九段目を見て、感に堪へたことがある。こんなよいものが日本にあるかと思つたね。作品として、よくできてゐるね。山科は芝居で見てはおもしろくないが、人形でやると實におもしろい。

三宅　だれですか。九段目を津太夫が語つたのは震災後ですよ。

正宗　津太夫が語つた少し前に土佐太夫か。その土佐の義太夫のうまさを言ふのではないけれども、作品としてこんなによくできたものがあるかと思つたですね。それからぼくは「忠臣藏」で勘平腹切りの場が好きだ。あれはやはり津太夫のときに行つて、やはりおもしろかつた。

三宅　六段目をやりましたね。それはよほど古いことですね。

正宗　芝居にしても、「忠臣藏」はよくできてゐるが、勘平の腹切りの場はおもしろいな。

三宅　私はそれは異論があつて妙なことを言ふやうですが、歌舞伎では「忠臣藏」は大序がたいへん好きです。大序は芝居として形式が整つてゐるしむろん六段目や九段目のよいことは重重わかりますが、先生にさつき聞かれた私がほんたうに芝居に魅せられたのは、四段目でも九段目でもありません。私はかへつて明治四十三年一月の、羽左衛門の「實盛」とか、同年六月歌舞伎の大一座の「新薄雪物語」、それから缺點

はありましたけれども、十一代目仁左の大正初期迄の「櫻時雨」、なくなつた鴈治郎の「河庄」とか、梅幸、羽左衛門の若さを失はぬ頃の「十六夜清心」、あゝいふ情痴物が好きでしたね。

正宗　ぼくもそれはよいと思ふ。

三宅　私は十一代目の仁左衛門なら、なんといつても高安月郊の「櫻時雨」はちよつと感心しました。大正初期迄の演出は、まはりの役者もよかつた。明治時代のものを見ておりますが、やはり中車のものは範圍が狹くても何でも、昭和二年七月に歌舞伎座でやつた太功記十段目の光秀などは、ちよつと寢た間も忘れられないものの一つですね。

正宗　中車は、團十郎の死後よくなつたと思ふ。

三宅　それは八百藏時分はだめです。

正宗　五代目は松助と一緒に出てゐる場が面白かつた。いかにもぼくは名人と名人が出るやうな感じがしてゐた。團十郎もさう言つてゐたさうだ。五代目に向つて、お前はよい弟子を持つてると云つてたさうだ。八百藏なんかは役者よりも、講釋師だと云つたさうだ。辯舌がよいし、記憶がよかつたから。

三宅　ほんたうに講釋師です。初めはワキ役の人で、中車がよくなつたのは、晩年だけです。

正宗　團十郎の相手をしてゐただけに、團十郎の活歴の相手になつた。團十郎は文字通りの活歴といふやうな活歴でなかつた。他の役者のは高時でもだめだ。團十郎のは昔の歌舞伎の味を持つそのまゝの活歴だけれども、中車なんかのは活歴そのまゝでやつたから、つまらぬものになつたのでせう。

三宅　成程、それは先生のおつしやるやうに、團十郎といふものが歌舞伎の味にあふれきつて活歴をやつたからよかつたわけですね、新しいお說でよく私には合點がゆきました。

正宗　高時なんかのおもしろさは、原作もいいが、團十郎はそれに肉をつけ、生氣を吹込んでゐたやうなものだ。

それから「河内山」なんか、あの後いろ〳〵見たけれども、まるで違つてゐた。無我夢中になつて見てゐた。あのときの芝居を私は天地の夢として受入れておつた。だから電車のないころ、早稲田から歩いて見に行つてた。

三宅　實際中車の八百藏や幸四郎の活歴は活歴そのものだけだからよくないわけで、それを團十郎は歌舞伎性を十分持つておいて活歴をやるわけだから。――名論です。

正宗　團十郎の弟子は大抵だめだつた。團十郎は、「芳哉義士の譽」といふ櫻痴の新作をやつたことがあつた。非常に惡評であつた。三木氏といふあの團十郎びいきの人さへ、ここは批評しないと憤慨してゐたくらゐだ。義士が敵討ちをしたあとの氣持を種の芝居をやつたのだ。それは芝居ぢやない。敵討ちをするまでが芝居になるので、あとの細川家へ預けられてからのことなんかをやるのも面白くない。作はさうだけれども、ぼくはあれはおもしろい試みだと思つた。團十郎は敵討ちのすんだあとの氣持を出さうとしたのだ。近代的の考へである。團十郎の思ひつきであらうが、私にはおもしろかつた。無論ほかの役者がやるとおもしろくないだらう。敵討があつた後の氣持を出さうとしてゐるやうな芝居だから、そんなものがあるかといふけれども、ぼくは濟んだあとをやるのがおもしろいと思つた。けれども非常に評判は惡かつた。

六代目亡き後

正宗　團菊が死んだあとは、歌舞伎は火の消えたやうだつた。昔の芝居の好きな人はもう芝居を見に行かないと云つてゐた、そこで若手はこれを盛返さうとして努力した。殊に中車なんかはあとはおれだと思つてたらしい。あのときに劇評家の會合があつて、ぼくは初めて行つたけれども、中車がやつて來て、みんなの御機嫌をとつてゐた。これから自分がやらうと思ふと、自分の時代だといふやうな何かがあつた。今菊五郎が立てなくなつたあと、それほど動搖はな

いかね。

三宅　私は動搖は一應あると思ひますね。ただ菊五郎の場合は、もう相當長い病氣ですからショックはもうなし崩し的に消えてゐると思ふのです。だから割合に私は樂觀說を持つております。死んでも、さう私は明治三十六七年の團菊左が、死んだあとみたいな恐慌時代は來ないのではないか。かういふ觀測は甘いかもしれないが。

正宗　歌舞伎の大きい芝居はできないといふおそれもないやうですか。

三宅　大きい芝居といふ點ではだめです。

正宗　菊五郎がなければ、吉右衞門一人になるわけですか。

三宅　規模は小さくなるけれども、どうにか私はやつていけるやうな氣がするのです。

正宗　吉右衞門も身體が弱つてゐるのでせう。

三宅　しかし案外で、柳みたいに折れさうで折れないですね。

正宗　特殊の病氣がないわけですね

三宅　存外持つかもしれない。それと、菊五郎もよい役者でしたけれども、近年は舞臺が非常に惡かつたと思ふ。戰爭前までがよかつたので、終戰後もよいものを一、二見せてゐる程度で、こゝ、十年間菊五郎はたいへん惡かつたと思ふ。藝をぞんざいにしてしまつたし、大阪、京都では相當惡いものを見せております。十年來からだが惡くて、元氣と勉强心がなくなつたんではないか。さうかといつて何も今の若手が有望で、囑目すべき第一流の役者になれるといふ保障のできる役者はありません。

正宗　吉右衞門は衰へておりませんか。

三宅　衰へておりません。吉右衞門には吉右衞門の缺點がありますけれども、割合に限られた範圍では無難ですね。十分やつて行けると思ふけれども、若手俳優はもつと勉强しなければだめですね。

正宗　よくなれば歌舞伎も復興するだらうけれ

ども、消滅はしないだらう。若い人で歌舞伎好きがおるから。見物がなければしやうがないけれども。

三宅　この間私の社（毎日新聞）で中野好夫氏と對談をした。中野さんの意見は非常に參考になつた。東大教授だから若い學生を知つておられるわけだが、相當に歌舞伎ファンが多いし、東大で歌舞伎研究會などもやつてゐるとの話です。

正宗　それは新劇もよいけれども、あれだけでは藝術慾は滿足できないから。

三宅　樂しみといふものがほかでは得られませんね。

正宗　藝術といふものは樂しみですから、恍惚とする何かがなければだめなんだらう。新劇がそこまで行けばよいですが、日本人につきまとつたものを傳統的に持つてゐるから、それを滿足させるまでは、新劇からそれが得られるまでには容易なことぢやないね。

三宅　歌舞伎もこれからほんたうに藝術の快感なんといふものはないでせうが、睡眠藥か何かしらんが、一時的にしろ、ちよつといつぱい機嫌にさせる魅力だけはありますから、それで當分やつて行けるのではないですかね。しかしせつかく醉つても二級酒の醉であることは免れません。とても灘の生一本の醉ひは望むべくもありませんが。

正宗　新進作家があつたら、今の若手歌舞伎はやれさうですか。

三宅　新しい脚本をちつともやらないことが最大缺點で、これはやらすと存外やれると思ひます。

正宗　書く人がなければだめですが、とにかく左團次には、岡本綺堂といふ人があつたから。

三宅　菊五郎にしても山本有三氏によつて助けられたし。

正宗　作家が出ればぼくはやれると思ふ。ぼくはできないけれども、ぼくが新作をやれば今の

やうな西洋風のものよりも、昔の言葉をつかつて若手歌舞伎にやらせればおもしろいと思ふ。

三宅　梅幸とか松緑は、まだやつておりませんが、新作役者として行けると思ひます。若い日の山本有三みたいな新しい作家が出なければ嘘です。

（二四年七月）

尾上菊五郎追悼

一、六代目亡き後の歌舞伎

六代目尾上菊五郎が死んだ。あの氣性だ、醫者のいふ養生ばかりしてゐると、ただ生きてゐるだけで意味がない、私は役者だから、生きてゐるだけで舞臺へ出られないのなら、死んでもいいから好きなものをたべて太く短かく暮した方がましだといつて一向養生をしなかつたといはれてゐる。だからこの急逝となつた。家族の方々の悲嘆は察せられる。だが彼のやうに各方面から名人扱ひをされ、この時代になつても國寶といはれてゐたやうな幸福兒はめづらしい。故羽左衞門は一部からよく惡口をいはれ、羽は名優ではなく下手な役者に過ぎぬとさへいはれたが、菊五郎のみ、だれ一人として惡口をいふものはなく、「別格」「名人」「天才」と評されてゐた。それが死んだ後でなく、生きてゐる間からこのやうな名優扱ひせられた役者は九代目團十郎以外にはなかつたわけである。

もちろん、人間は明快、愛嬌があつて細心、

男氣があつて女のやうに愛情に富んでもゐた。その弟子たちを可愛がる、度量は大きく、よく人心を收攬することも知つてゐた。おまけに歌舞伎では未だにモノをいふ名門でもあつた。鬼に金棒といふ譬へがこれくらゐピッタリする役者もなかつた。しかも、こつちが用意と敬意をもつてかゝれば、この人ぐらゐ面白い人もなかつた。やゝ理窟にとらはれてはゐたが、藝談も書いたものより、直接口で聞く方がえらかつた。私は彼と二、三回藝談をしたが、記事にするより、何とかしてナマの彼の言葉のまゝを、社會全般に聞いてほしいと思ふほどであつた。

しかし、彼もまた人の子だつた。天才、名人といはれてゐても、缺點はあつて、その藝への考察はやゝ理窟に落ちた。それは理論的といふより、やゝ幼稚な寫實論に陷る場合すらあつた。だから純歌舞伎における彼の道は彼一人で終止符を打ちたい。あとの若手歌舞伎俳優が彼の歌舞伎理論をそのまゝ學ぶのはそこに危險なしとはいへぬからだ。

ただし、新作は、秀拔、大正十年の「坂崎出羽守」の初演、「巷談宵宮雨」の初演、ものは陰慘でも「くらやみの丑松」の初演などのファイン・プレイは、まさに名人といふに値した。また默阿彌のぎぜわもののうまさはちよつと類がなかつた。

舞踊はもちろん名人であつた。「娘道成寺」の名品以外、「吉田屋」の伊左衛門の如きは、その新演出の意圖には反對するものの、一種の「舞踊劇」とすれば、これは先人の企て得ない新天地を開いたものであつた。

が、この幸運兒が死んでも、歌舞伎は沒落するとはいへない。なぜといつて、彼は歌舞伎役者といふより一つの新しいタイプの、尾上菊五郎なる歌舞伎役者でゐて歌舞伎役者でない俳優だつたからである。

二、市村座とその苦境時代

――菊五郎の生活力――

私は思ふ、男として菊五郎程一生を、思ふまに生きぬいた人間は殆ど例がないのではないかと。――

その意味で彼がハムレットでないのは勿論だが、さりとてドン・キホーテでもなかつた。人間はハムレット型、ドン・キホーテ型と區別せられるのが原則であるが、彼の偉大はその二大原則に當はまらなかつた點ではあるまいか。そして平和國家日本として一寸躊躇する例だが、彼のみは人間分類法二大原則を出て、いはばナポレオン型といふやうな人ではなかつたか。

つまり、彼は一代の英雄だつた。おだやかにいふと藝術的英雄だつた。彼の後半生の競爭相手は十五代目市村羽左衛門だつたが、羽左衛門も亦己が意志のまゝに一生勇敢に生き通した珍しい人だつた。が、羽左衛門は結局ドン・キホーテ型だつた。そして彼には英雄氣分はなかつた。そこへゆくと菊五郎は私などにシャリアピンの「ドン・キホーテ」を九回見て、心から感心したといひつゝ、彼は決してドン・キホーテではなかつた。その前半生の競爭相手が吉右衛門、尠くとも吉右衛門が市村座を脱退する迄の市村座時代のライバルは吉右衛門だつた。そして松竹へ市村座が降伏してからは羽左衛門のみになつてしまつた。併し、その一生を通して彼はいつもライバルを求めて止まなかつた。又、羽左衛門を相手どる迄の昭和中期は、二代目左團次をライバルとしてゐたと見ていい。かくそ

の一生は吉右衛門、左團次、羽左衛門と、ライバルなしにゐられなかつた所に、彼を英雄と見ていい根據があると思ふ。同時に、彼は七つの神童、二十五歳の凡人とちがひ、七つの惡童（いたづらの烈しいだけでも大變な惡童）、三十歳の秀才、四十の名人、五十の名優となつたのは、いつもライバルを意識下において、負けてたまるものかの、競爭心に燃え切り、その猛烈な對抗意識によつて藝が向上したのではあるまいか。つまり、ナポレオンが世界統一を志したやうに、菊五郎は名實共に日本で唯一人の名優を志した藝道の上のナポレオンではなかつたか。

そして彼の英雄的行爲は全くその烈しい負けじ魂の然らしめる所であつた。私がこゝで最初に語らうとする吉右衛門脫退後の、市村座苦境時代に、谷崎潤一郎氏が菊五郎が獨力で市村座で奮鬪する江戸っ兒氣質をほめられた事があつた。これはあの頃殆ど誰もが感じてゐた事實で、菊五郎の人氣は、これを見ても分る如く、いつも英雄的人望だつたと思ふ。

實際、彼だからこそ吉右衛門脫退の痛手を、どうにか食ひとめたのだつた。吉右衛門もさる者で大正十年三月に市村座へ辭表を出し、同六月に新富座へ旗擧げをした動きは、菊五郎には豫期以上の打擊だつた。吉右衛門の人氣旺盛は分つてゐるにしてからが、市村座をあれ程みじめな窮地に陷れやうとは思はなかつた。同じ六月にあけた市村座の慘敗は問題外、又、長田氏の「飢渴」の菊五郎も平々凡々、その九月山本氏の「坂崎出羽守」が、あの佳作でありながら、勢ひのいい方へつく芝居道の封建性は、その「坂崎出羽守」すら嘘のやうだが、その初演では決して好評でも大入りでもなかつた。ましてその翌月「娘道成寺」を道行から二時間近く、彼として全力をつくし、初めて本格に丁寧に見せ、「四の切」の忠信の出世藝を持ち出しても不入りだつた。そしてその十一月は十月末に燒けた歌舞伎座の代りに、市村座を貸して、松竹の厚

意を買ふ手に出、十二月は休んでしまつた。そこへ又三津五郎が休養をいひ出し、翌十一年一月の如きは、壽美藏を借りてあける苦しい策に出て散々の不入り、二月は帝劇から宗之助を借り、友右衞門の松王で彼が源藏をしても不入り、三月を休んで四月に新派の河合を入れて「冬木心中」で、故榮三郎の娘と彼の主役とで好演を見せても中の入りにすぎなかつた。そして三津五郎は愈々松竹入りときまつたのだ。踊りの興味は半減せられたわけになる。この後帝劇から梅幸、松竹で不滿だつた十一代目仁左をかりた興行が、兩三回一應の入りをとつた外、市村座は全くどこへ行くの有樣だつた。

そこへ十二年の震災だ。翌年の七月には田村家二世の壽二郎氏が死んだ。顧問で人物の岡村柿紅氏も病氣で引退同樣となつた。震災後、無理をし、菊五郎目あてで借金をして市村座をバラックで建てはしたが、同じバラックの松竹とは格段の苦しさだつた。その七月こそ梅幸と羽左衞門とを借りて、「加賀鳶」の通しでやつとお茶をにごしたものの、年末に座附の無人であけた興行など散々の不入りで、市村座は全く窮地に陷つてしまつたのである。

この時、もし彼に英雄の血がなかつたら、市村座は震災の翌年末松竹に無殘に降伏する外なかつたであらう。だが、彼は英雄であると共にナポレオンや東條英機のやうな誇大妄想の愚かな者ではなかつた。或は坊つちやんの彼も、吉右衞門脫退後の三年間で、十分な精神修養をし、人間學の修行をしたためか、この英雄は賢明な手を打つた。

即ち、一日彼は喧嘩別れ同然になつてゐる吉右衞門を突然訪ねた。そして吉右衞門一家の驚きをよそに君と僕とは一緒に芝居をしなくてはつまらないといつて、氣輕に市村座へ一度出てくれと申し出た。根は善良で感激性のある吉右衞門は快く承知した。そして二人の間で、翌十四年一月バラックの市村座で、大正十年物別れ

以後の、最初の「顔合せ」をとりきめたのであつた。

この時代、私は今の東京毎日新聞の學藝部の記者をし、芝居の限り社會部の手傳ひをさせられてゐた。そこでこの噂を確めると記事に書いたが、社でも大きな特種にして朝刊の記事にしてくれた。私はこの二人の顔合せに何を出すか、それは全く不明だつたのを自分のカンで二番目は「四千兩」の通しか「湯かん場吉三」の通しと、冒險的だが書いておいた。すると幸にこれが外れずに「四千兩」が出、一番目は「一の谷」で非常な人氣で大入り滿員、こゝに「菊吉合同」の言葉が生れるに至つた。又、次の九月の「顔合せ」には「湯かん場吉三」の通しが出た。

大げさのやうだが、市村座はこれで持ち直したのだつた。そして松竹もこの二人の顔合せがものになるのを見てとると、そのすぐ後の三月に狹い邦樂座でも再び合同をし、山本氏の「同志の人々」を上演、これも大當りをとつたのだつた。この五月に新橋演舞場が新築落成し、やつと菊五郎は窮地を脱しかけたといひ條、借金又借金の上、岡村氏も死んでしまつた市村座を、昭和初年迄どうにか持ちこたへたのは、彼の如き英雄でなければ絶對に不可能であつた。同時に、松竹へ降る迄の市村座で、當つた興業は吉右衞門との合同劇のみであつたが、その賢明な手を打つたのが、彼自身の考へから出た點に、彼が英雄ではあつても、十分に文化的藝術的英雄なる珍しい氣質であるのが分る。そしてあのひどいバラックの市村座で、大變な借金、それはいつの間にか市村座の借金でなくて、尾上菊五郎の借金になつてゐるのを、さう恐れずに、いぢけず、卑怯にもならずに生き通した生活力は全く非凡だと思ふ。藝も藝だが、私は菊五郎の生活力、特にバラック前後の市村座の苦境を、どうにか切りぬけた事實を、その一生で最も高く迎へてゐるわけである。

勿論、その市村座も昭和三年一月に松竹へ降

りはしたが、吉右衛門と三津五郎脱退後の七年間を、無人の一座で、あの不便な土地で頑張つた氣魄は、尾上菊五郎の一生で最も特筆大書すべき事件ではないかと考へる。

市村座へ正式に菊五郎が、吉右衛門と共に上置として出たいきさつは、拙著で書いてゐるから、簡單にいふがそれは明治四十一年十一月で、彼は「御所の五郎藏」を初役で演じた。が、この市村座の成立はその前月、羽左衛門が歌舞伎で初役のお祭佐七をした時、彼は巴の三吉をしてゐて、こんな役ばかりさせられてゐてはいい役者になれるわけはないと、吉右衛門と一緒に田村成義氏に直接談判をした結果だつた。これは後年市村座全盛となつた時、世間は田村氏があの一座を作つたものといひ、私もさう教へられてゐた。所が、前年亡くなつた田村氏の懐刀（ふところがたな）といはれ、市村座沒落迄同座に殘つてゐた人格圓滿の人三木重太郎氏が、我々の三田の會へ來て話してくれた新事實だつた。卽ち、菊五郎の二十四歳の生活力は相當大きかつたと見てよく、歌舞伎座でも十分迎へられる氣運は分つてゐたのに、それではつまらぬと自ら田村氏を刺激してその十一月に、あの一座を作らせたわけだつた。

併し、この開場時代吉右衛門は二十三歳の若さで「熊谷」が好評なのに反し、その「御所の五郎藏」は一と通りにすぎなかつた。そして菊吉と對立しかけた初期の緊張した芝居は、四十二年九月の「伊賀の仇討」の通しと、中幕に歌六の鬼一で、「菊畑」を奥庭迄出し、菊吉の一日替りの知惠内が出た興行あたりからであらう。事實この一日替りは双方のファンの聲援猛烈、私も固唾をのんで二人を見くらべたわけだが、よくいつたやうに吉の方に一分の强味があつた。又、「伊賀の仇討」の菊の夢の市藏も、うちの場でおこりを病むあたりの動作や苦しい動きは鮮かで、これのみ後の大正三年二月歌舞伎で、羽左衛門が初役でやつた分より、若くとも逞し

かつたが、それは後年の特色の「業」にすぐれた素質が閃めいてゐたのであらう。が、そのとんだりはねたりの業以外は、未だまん丸い顔と調子がカン聲のみの時代故か、一向世話物の妙はなかつた、かへつて先代勘彌の譽田大内記が、二枚目風の大名で器用をきはめ、この通しは一は吉の又右衛門、二は勘彌の大内記、三は菊の夢の市藏と私は獨りで評價した。

尤も、新作はその翌年十月歌舞伎の「桐一葉」の渡邊銀之丞で、よき芽生えを見せ好評嘖々、そこで四十四年十月の一年目に市村座として珍しく彼に井手蕉雨氏作「關白秀次」をやらした。が、作が平凡のためかこの秀次も亦平凡、かへつて二番目の吉右衛門の「腕の喜三郎」が大當り、といふより勘彌の源太の白ぬりが上々、芙雀（後の菊次郎）の姉が上々、駒助（後の友右衛門）のもみ裏甚三が上々、新十郎の端敵大鳥一平が上々の上々で、市村座はこの興行あたりから、一藝一能の役者があるのを見せかけた。

この時菊五郎は座頭役の幻長藏に出て、あの花道の四人の出のツラネを、余りに場内がざわめき、吉右衛門中心のかけ聲が烈しいため、にがい顔をし、獨り調子をぐつと落してやつてゐたのが私の目に殘つてゐる。この邊から特に菊吉對立意識が燃え出したわけであつた。

かといつて彼の世話物は未完成だつた。四十三年初役の權太も、何しろ顔が學生みたいな時代で、再演の大正五年八月帝劇では、別人のやうに進歩向上してゐ、まはりの配役が完備してゐたせいはあるが、十度近くやつた一生中の權太の最上の好演だつた。が、初役の時は私などその前年三月、京都明治座の延二郎の「すしや」のみだが權太の方に見た目だけでも歌舞伎性豐かを感じた位だつた。又、大正二年十月市村座で「魚屋宗五郎」の再演を見ても、樂屋内や新聞の宣傳程にいいものでなく當時は未完成といへた。

但し、菊五郎が本當のスタートを切る日は來

た。それは大正三年一月の市村座中幕に「鏡獅子」を初役で出したが、私など團十郎の娘二人の翠扇と旭梅（今の紅梅の母）とで、これを見せられ名程のものでないと思つてゐた。が、菊五郎で見て、一部の人が國寶視する程これを名品とはしない迄も、とに角扮裝のみでも、又はかつらの額をふじびたいに工夫したつくりのみでも、研究と清新とが分り傑作と認めた。更に「曾我の對面」が出、勘彌の十郎、三津五郎の五郎が風邪でそれぞれ休むと、近江の小藤太につき合つてゐた彼がその急場に代りに出、十郎と五郎とをやつてたいした腕を見せたのに驚いたが私はその代り役の報を聞くと一々立見へ通つて、市村座の牢屋のやうな立見場の鐵の格子（これこそ封建性！）にすがつて見て、そのそれぞれのうまさに魅せられたのだつた。

同時に、かうした事變が起きると彼の英雄の血が迸るのだ。五郎と十郎とを代るのは若い人には容易でない。が、さあ大變となつて外にやり手がないとなると、彼はかく神技を振ふ。尤も、この例はこれより先き明治四十四年二月の歌舞伎座もその一つ。この時吉右衛門は休んで大阪の角座へ出、彼一人が三津五郎たちと歌舞伎を引受けた。そして一番目に「櫻吹雪一の通し二番目に「文七元結」で、新作、生世話とそれぞれ上々の藝を見せた。が、これも吉右衛門がゐない歌舞伎座のわるい二月といふ苦境が、その負けじ魂を刺戟したからであらう。しかも、大入り滿員で、識者に彼の今日あるを思はせたが、この何にツ！　といつた血液と、それだからやり通す生活力は、二十六歳の若いこの頃既に見えかけてゐたわけになる。

かといつて彼とて全智全能ではない。この英雄だが無理は無理であつて、大正三年四月の三座競演の「勸進帳」の辨慶は、羽左衛門のそれが無理の如く、彼の辨慶も結局無理であつた。後半がいいのは分つてゐても、身につかぬ役であつて、後に再三やりはしたが部分的興味があ

るのみだつた。同様に、その前に當時の新劇熱にのつて作つた彼の狂言座も、鷗外の「曾我兄弟」が作、演技共に低調な寫實で失敗した。後の市村座での狂言座も、木下杢太郎の「南蠻寺門前」の彼の主役は失敗、吉井氏の「句樂の死」でも、よかるべき彼の役より三津五郎の小しんがよかつたりした。

が、よかるべき新作が、その寫實主義の崇りでか存外低調なのに反して、當時は歌舞伎物で新演出をしなかつた時代のためか、大正三年七月歌舞伎座の「天下茶屋」の元右衞門こそ、正にその古劇のホームランとなつた。これについて私は度々書いたから省くが、彼の藝の本當の進境は、この元右衞門以後ではなかつたか。

即ち、翌四年二月市村座の劃期的大入りをとつた「河内山」の通しの、初役の「直侍」は一種獨得な新手法が、默阿彌物によく調和してその巧緻は羽左衞門を凌いだ。これに自信づけられてか、その生世話は着々新鮮味を加へて、同七月の「四千兩」の通しの富藏が、「牢屋」など殊に傑作。但し、近年これはひどく氣をぬき、白さへ聞えぬやり方をし出し、終戰後帝劇の上演の時、一時劇壇を退いてゐられたため、この芝居を初めてこの時見られた楠山正雄氏が、當り藝といふのにどうしてかうつまらないのか、との批評をせられたが、これこそこの名優の唯一の缺點で、この役など三度目位迄よくて、その後無性をし手をぬき出し、我々その初期を見た感激に水をさす如き結果を與へ、私などが誤まつた劇評を書いたかのやうな印象を殘したのは、再びいふがこの名優にして殘念この上はない。

とはいへ、その翌八月帝劇で、松助の家主を初めて得ての「髮結新三」の面白さ、九月市村座の宇都谷峠で文彌と仁三の二役のうまさ、十一月同座の松助一生の代表藝「因果物師」に、彼の六の助の引締つた妙技など、その生世話の上達は實に日進月歩だつた。更に、翌五年一月

市村座で「棒しばり」を初演この新舞踊の身についた業のうまさ、その後の「太刀盗人」と共に、共演者に三津五郎があつたためとはいへ、舞踊も亦日進月歩だつた。自然、市村座は見事彼の手中に落ちて、座頭として威風堂々、ために吉右衛門側のひいきに多少不服の色があつて、二人の對立が周圍に一層毒された形があり出した。

が、この頃の「ゐかけ松」や大正八年末の「雪駄直し」の長五郎の、小團次系の世話物のくすんだ生世話の味は羽左衛門に絶對になくて、前者では女房役の芙雀が菊次郎改名後、その相手よろしきを得てか、本當に滋味津々の默阿彌物を見せてくれた。七年九月の「湯かん場吉三」の、吉三の初役も亦よく、吉の辨秀の優秀作があつたとはいへ、この時代の菊五郎の世話物に私は傾倒しきつてゐた。

だが、この年の末勘彌は「吉田屋」の伊左衛門を最後に、市村座を脱退して帝劇へ移つた。翌八年の前半は、彼として人氣隆々ながら、平凡な出し物や、再演物で終つてゐたが、八月の帝劇こそ彼の一生の最初の打撃が來た。即ち、「牡丹燈籠」でその

幸四郎の「坂崎出羽守」

伴藏の好演を見せてゐる中、女房役のお峰の菊次郎が急逝したからだ。――多くはいはない、これは彼といふより市村座全體、いや歌舞伎全體の不幸でもあつた。

これに氣をくさらしてか、翌九年一月の「村井長庵」で彼は妙な新演出をやり出した。以前時々見せてゐた案外底の淺い寫實癖が露出してもゐた。が、私がそれを洗ひ立てするのは心苦しいから、九年二月「新演藝」の合評會の記事を、研究家はさがして讀んで頂くと、當時の諸權威が、口をそろへてさうした合理化に反對してゐるのが分る。これは彼のこの後やり出した歌舞伎物の新演出にも、例外はあるが、大體に當てはまる見方かと思ふ。

扨、この暮に田村成義氏は逝去した。そして既記の翌十年三月吉右衛門の辭表呈出となり、一轉してその九月には彼は「坂崎出羽守」で、新作といふと朗讀と詠歎調とのエロキューションだつたのを、歌舞伎役者でゐて、それこそリアルなせりふでゆく新境地を彼は開拓した。かく見てゆくと多少の疵を除けば得難い名人名優に論はない。殊に、その英雄としても「逆境の英雄」で、苦しい時程光彩を放ち、生活力の偉大を見せた點は全く尊敬に値する。が、彼が死んで歌舞伎は未曾有の「逆境」に陷つた。この時この逆境を押し切つて彼の成した如く好轉の新機運を作る若手が、果してあるであらうか。否か然りか。

三、菊五郎の一生

菊五郎にかねてこの事があるのは、我々も予期はしてゐたものの、七月十日急逝の報に愕然とした。そして、その反響が余りにも大きかつたのを驚いてゐるが、一方に於て寧ろ當然ともいへるのである。

扨、菊五郎の一生を論ずる場合、種々な見方がある。先輩の佛文學者の言をかりれば、フランスではさうした偉大な藝術家に對しては、生前賞讃の辭を送つておいて、亡くなると相當てきびしい批評をするさうだ。日本では全く反對で、生前は口に苦い事をいつて居つても、死ぬと屍に鞭は打たないといふのが禮儀になつてゐるやうだ。私は菊五郎の話をするのに、フランス流にしようか、日本流にしようか。人間の一生は、善と惡との戰ひといはれて居り、それをコントロールして生きてゆくのが人間だと思ふ。無論、菊五郎にしても、長所もあり短所もあつた。ほめちぎられすぎてゐるから、缺點を書いてくれと言つて來た雜誌もあつたが、某紙で私がいつた長所はカツト、短所の方が主にのつてしまつた例もあるので、斷はつた次第だつた。その事は別として、私は、妥協點を取り、長所短所の兩者に就いて話してみたいと思ふ。

第一に、菊五郎の一生を顧みて、役者としては別であるが、人としてあの人程幸福な一生を送つた人はないと思ふ。したい事は全部やり盡し、それがあの人に限つては凡て許された。幼少時代は、餓鬼大將で、いたづらをしぬいたか

らえらい。又いたづらはいたづらとしてとほつた事も幸福であつた。もう一つは、天性の愛嬌である。これが死んでも、各方面で褒められてゐる理由の一つだ。

菊五郎は家庭でも惠まれた人だつた。梅幸といふ秀才が出、九朗右衛門も、好人物らしく何かをしようといふ熱意の見える人だ。文樂が久久に上京しても見に行く役者は存外少ないが、彼は見物に來て丁寧に見てゐた。さうした息子達にも惠まれてゐた菊五郎であつた。

又六十五歳といふ年齡は、悲しむ可きには違ひがないが、役者として耄碌して生きてゐる事は疑問である。例へば市川齋入（大阪役者で明治劇壇を牛耳つてゐた）など七十の聲を聞くとがつくりしてしまひ、ひどい舞臺を見せてゐた。正月に「五斗の三番」（演舞場所演）の名技を見せたが、初演再演（三演は氣をぬいてゐたが）から見ると、あれでも少し惡くなつてゐたといふものの、あれだけの物を見せ得る時に逝つた事は藝術家として、確に幸福だつたといへる。舞臺俳優は或意味で、職人で、體力といふものが問題だ。だから櫻の散る如く潔いのもよいと思ふ。老醜を曝すのは、決して幸福ではない。

だから「舞臺に出られない位なら生きて居ても仕樣がない。」と彼がいつたといふ事なども、うなづけるだらう。

菊五郎といふ人は、實に線の太い生活をした人だつた。あの人のやうに、ざくり〳〵と砂の中を踏みつけて行くやうに、足迹を殘して死んだ人はないと思ふ。あゝした生き方が出來れば人としての幸福これに過ぐるものはない。そして何でも徹底してやりとほしたからえらいものだ。くらしの臺所の方は不如意でも實に太い生活をやつてのけた。實に痛快だ。產をなす事だけが、人生の目的ではあるまいと思ふ。江戸ツ兒の見榮坊であゝした生活をしたのかも知れないが、それにしてもやりとほしたといふ事は彼の偉大さの一つである。

尤も、菊五郎といふ人は聰明な人でよく自らを知つてゐた。前年「中央公論」で對談をした時に、私は最初に、

「失禮だが、あなた程幸福な人はない。門閥からいつても、藝からいつても、子供からいつても申分なく、その上好きな芝居が十分に出來る。こんな仕合せな人は見た事はない。」

といふやうな意味の事をいふと、流石に、强張つた表情をしたが、仲々いゝ答をした。

「さうかも知れぬが、これは、今の世の中が菊五郎の藝がわかつてくれるからで、若し日劇の（あのでかい劇場と彼はいつてゐたと思ふ）變な踊にわんさと、押し掛けるお客ばかりの時代になつたらどうでせうか。だから油斷がならないのです。」

結局この問答は、私が負けた結果になつたが菊五郎は、幸にさうした不幸な時代は經驗しないですんだが、さういふ風に内省してゐる人だつた。

次の話は直接聞いたのではなく、追悼錄を讀んでゐて發見したのだが、生前、自分の缺點を擧げ、

「役者として三つの缺點がある。卽ち、背が低い事、顏が丸い事、聲が小さい事。」

といつたさうだが、これにも私は感心した。これだけ知つて居れば十分なのだ。菊五郎の藝術の批評も、皆これに盡くと思ふ。全くこれ程自己反省が出來て居るとは思はなかつた。確に歌舞伎役者としては、今一寸、猿之助なら二寸、欲しい所だ。又普通の人としてはいい男、女の人からいへば九十點以上の美男だが、役者としては丸過ぎる。市村座時代は相當丸かつた。それに今程肉附がなかつたから、ゴムマリみたいで世話物をしても面白くなかつた。聲の低いのは扁桃腺の惡かつたためであらうが、若い時は、デッサンのかたい發聲をして居り、吉右衞門に負けぬ位一杯に調子を張つてゐた。あの晩年の獨得な發聲法も吉の聲、羽左の調子にはかなは

ずと見て、窮余の一策として案出したのではなかつたかと、思はれる。聲が堅くてわるくいふとピイ〳〵聲だつたのは、明治の末から大正四五年位迄だが、最近の見振りでせりふをカバーする低い聲のいいまはしより、聲はわるくとも若い時の意氣と、負けじ魂で眞正面からやつてゐた難聲の時代を私は快く思つてゐる。

それにしても菊五郎といふ人は見上げた人だと思ふ。何といつても藝のわかる人だつた。幸に私は藝談を戰はす機會を數度持つたが、あれ程藝がわかる人が何故時として舞臺で變な事をするのかと思ふ位、ふだんの藝談ではいい事をいふ人だつた。あの人と膝を交へて語ると全く感服してしまふばかりだつた。中にも一番私が同感したのは、シャリアピンの「ドン・キホーテ」を九回見たといつた話である。私は映畫をさう〳〵澤山は見てゐないが、私の一生で大袈裟だが一番感銘したのはこの「ドン・キホーテ」なのだつた。それを彼が一等買つてゐたのだから、私は相槌の打てぬ位感心した。

大體人としては利口でもあるし、幸福な申分のない一生を送つた人だつた。

更に菊五郎といふ人は、坊ちやん育ちの故で、すく〳〵と伸びた竹のやうに明るい人だつた。それに一層幸福な事に天賦の社交性を持つてゐた。菊五郎の「御土砂」は有名だつた。「紅長」ではないが、ぐにや〳〵になつてしまふやうな人心を收攬する法も熟知してゐた。それも晩年は上つつらの見えすいた御土砂などは卒業してしまつてゐたからえらい。

戰後歌舞伎は種々の立場から、屢々論議せられたが、菊五郎に限つて、彼の賣り物の藝は踊だし、又世話物は、幕末の市井人のスケッチの如きもので、これは問題にならなかつた。確に尾上家位幸福な財閥はない。どこから見ても、封建的な處からも非難される點のない幸福な一家である。生活の上では、戰災者であるが、これは藝術の上に就てである。

その上彼は勘がよかつた。或は運がよかつたのか、やす夫人がえらかつたのか。他の役者には附人とか周圍に、相當妙なものがついてゐてスポイルされてゐるのに、彼は妙な人間にとりまかれずに、いい周圍を持つて、惠まれた人だつた。

尙菊五郎は幸福な事に、彼には藝術上で反對意見を持つてゐる批評家や文士が相當あつたにもかゝはらず、亡くなつてからは、さういふ方面からも一切苦い事をいはれてゐない。全部彼を謳歌したものばかりで、あの人位立派な葬式が出來、心からの弔辭を貰へて瞑目した人はゐない。その人德で、本當に疊りのない一生を送つたのが、いい感じを人に與へたからであらう。

併し、同時にさうかといつて缺點がないといふのではない。現に追悼錄の中に、利倉幸一君が——私は次の時代の劇評家の內では彼を一番買つてゐるが、一寸タイプの變つた人で武者小路氏の弟子で新しい村に入つた人——或所へ書いた印象で、輕く菊五郎の缺點にふれてゐるが、利倉君だからいひきつたのだ。瓢々乎としてゐて、井上正夫の「澤庵和尙」を思はせる劇評家で、「新澤庵」といひたい人だからあつさりいひきつたのだらうが。菊五郎は存外人を突放す處もあつたらしい。さういふ事があつても、それを乘り越えた明るい線の太い生活で、帳消しになつてゐる。一言の下に云へば果報者である。

以上は人としての菊五郎の事で、藝術家としては、存外不幸な人だつた。それは良き女房役者がなかつた事だ。私はあの人のいい時代と惡い時代を知つてゐるが、非常に隔りがあつた。それはこの女房役者の爲であつた。

先づ菊次郎（大正八年）に死別した事が大打擊だつた。彼の默阿彌物はそれ以來つまらなくなつたといひたい位、よく呼吸のあつた女形だつた。

それから色々な女房役者を持つたがうまくゆかずに、榮三郎をやつとものにしたばかりで、

「勘平の死」（大正十五年二月演舞場菊五郎＝勘平榮三郎＝お輕）で好評だつたが何かの因緣事のやうに榮三郎は死んで行つた。

それから後は五代目福助を女房にしたのは、大變結構だつたが、長谷川伸の「刺青奇偶」（昭和七年六月歌舞伎座、菊五郎＝半次郎、福助＝おけい）は非常によかつたが、福助もこれを最後に死んでしまつた。

かく菊五郎は三人の戀女房に別れたわけだ。歌舞伎役者に限り女形がよくなくては駄目だ。一昨年の暮、谷崎潤一郎氏と菊五郎と私が司會で座談會をした事があつた。（小說新潮）その時鯉三郎君が――端役の名人中村甑助の伜、父が役者にしたくないといふので學校へ入れたインテリ、菊五郎は支配人として彼に後事を託した――話のとぎれた時に、私に「女形がよくないと歌舞伎は旺んにならぬさうですね。」といつたが、正にその通りで女形のよくない芝居は考へられない。それを菊五郎といふ人は三度までもいい女房に死なれた。後年の彼の芝居でどこかくすぶつた印象を受けたのも、相手の女形が惡かつたり、反が合はなかつたからだらう。さうでなかつたら後半生の舞臺がもつと華かであつたに違ひない。私は女房運の惡かつただけでも不幸な人だつたと思ふ。

扨、菊五郎といふ人は努力家だつた。素質のいい人だつたが、あの缺點の多い肉體は、一通りや二通りの努力で克服出來るものではない。それを知つて、自己反省を繰返して自己を積み上げて行つた人だ。

團藏が「太十」の光秀（明治四十二年六月歌舞伎座）を出した時、菊五郎は十次郎を演じたがいいものだつた。その頃彼はフックリした藝とよくいはれたが、若き日の彼には、この「フックリ」といふ形容が非常にぴつたりしてゐた。

明治四十四年四月の先代段四郎の辨慶に初役の義經をやつたが、これもフックリしたもので

追ひつめられた貴公子らしかつた。辨慶と年の釣合もとれて實によかつた。あゝした役だと肉づきのいいもつてこいのいい手をしてゐて「判官御手をとり給ひ」の所などになると絶品だ。映畫でもあの手のいいのが分る。

四十三年十月「桐一葉」の銀之亟も（歌舞伎座）結構な貴公子だつた。

かくいいひらめきを見せた藝もあつたが、一方若い時代だからその反對の藝も見せてゐる。

大正元年九月「三代記」（新富座、吉＝三浦、菊次郎＝時姫）の佐々木高綱などはよくなかつた。今日の菊五郎ファンに見せたい位である。井戸から出ても、あの丸い顔に、あの特殊なかつらが調和しないで妙なものだつた。あの佐々木は大きな聲を出さねばならぬ芝居で、義太夫でも聲のない山城は、この「三代記」は失敗した位だ。この時の菊五郎にはその弱點をカバーする力はなくて、寧ろほゝえましい位稚拙な藝を見せた。

明治四十二年市村座「菊畑」の智惠内（吉と一日替り）は、そんなにひどくはなかつたが、昭和になつて中車を相手にしてやつた時はぐつとよく、格段の進歩があつた。それだけ努力で飛躍した人だつた。併し、若い時は失敗してもすべて正直にやつたのが氣持のいいまづさだつた。私はあの未完成がなつかしい。

後年の「坂崎出羽守」は勿論傑出してゐたが、若い頃の新作は必ずしもよくなかつた。「關白秀次」などその例である。

もう一つ大正三年十月市村座の狂言座第二回公演「小しんと焉馬」（吉井勇）の焉馬（菊五郎）は、見る迄さぞいいだらうと予測してゐたが、よくなく、それに反し、危ぶまれてゐた小しん（三津五郎）がよかつた。

そんな譯で菊五郎と雖も、若い頃はまづいものを見せてゐる。それは中車の八百藏時代にもあつた。明治四十年頃濱松で「先代萩」の對決で、中車の仁木に對し、勝元をした事があつた。

勝元と仁木のやりとりで、勝元が「オソレイッタカ」ときめつけると、八百藏は昔氣質の役者だから、「オソレイラナイヨ」と舞臺上でかすをくらはしたといふ話もある。それを細君のやす夫人が見てゐて、ゐたたまらず棧敷で泣いたと菊五郎は私に微笑しながら語つたのであつた。

又、大正九年一月「村井長庵」の通し（市村座）をやつたが、菊次郎に別れた後でくさりかけてゐたため、默阿彌のリズムをとつて素でやる新演出をした。大正十年「和國橋」の通し（國姓爺の默阿彌改作）でもカットしすぎつまらないあつけない舞臺を見せた。

丸本でもあの寫實の行き過ぎを屢行つた。「揚屋」（歌右衛門＝宮城野、菊＝しのぶ）のしのぶは人形と同じく、きれいな田舍の小娘である筈なのに、理詰の考で、顏を眞黑にぬり着物はしまものの何の事はない子守のやうなしのぶだつた。理窟から云へばさうならねばならぬのだが吉原の眞中で、しかも歌舞伎の樣式美を破壞してしまふものであつた。彼と雖も萬全の人ではなかつた。こんな事をいつたといつて敢て故人を辱めるものではないと思ふ。

秦豐吉君が「あのえらい人で舞臺で藝を投げた事は不服」といつているが、市村座では隨分ひどいものをみせられた。時によると八時半に終る芝居が七時頃はねてしまふ事もあつた。その頃「め組の喧嘩」や「文七元結」などで隨分はしよつた舞臺を見せた事があつた。これは何と云つても辯解出來ぬ缺點だつたと思ふ。

併し、以上は缺點だが、菊五郎といふ人は、それを越えて矢張り偉い所があつたから結局は非凡である。

默阿彌物は晩年より初演再演頃がよかつた。大正初期帝劇の「髮結新三」、同じく帝劇の「木の實」と「すしや」の權太、大正五年「鑄掛松」（市村座）など至藝だつた。大正八年十二月「雪駄直しの長五郎」なども印象に殘つてゐる。だが、困つた事に「天下茶屋」の元右衛門

にしても、段々悪くなり最後に演舞場でやつたのなどひどかつた。「四千兩」も同じだ。「牡丹燈籠」も大正八年八月再演（帝劇）がよく、菊次郎のお米と相待つて、この伴藏は結構だつたが、三度四度となるにつれて悪くなつた。あの名優としては惜しい事である。

更に、新作に於ては、徹底的に傑出してゐた。「坂崎」はいふに及ばず、永田氏の「夜」の桶屋はさう問題にならなかつたが、それこそいいリアリズムで徹底的にやつてゐた。「巷談宵宮雨」の龍達の初演再演のうまさ。「暗闇の丑松」「刺青奇偶」「一本刀土俵入」などの大衆物を、インテリが見て、いい世話物と思へたのも彼の力である。

殊に踊に於ては名人で何よりも、私は「娘道成寺」を高く買ひたい。それも大正十年十月市村座では丸ごと踊り一時間五十分の丁寧な演出が大變結構で、其後のものに不滿を感じた位だつた。馬鹿々々しいものではあつたが、寶塚の作者久松氏の書いた「高つき」は、下駄をぬいだりはいたりするだけの、ロシヤンバレーのやうな妙な事をするものであつたが、實に足の動きの巧妙さは素晴らしかつた。側近の人に彼がこれは二度とやれないともらした位、足の動かし方が絶妙で熱の入つた一寸見られないものだつた。もう一つは終戰後の「伊左衞門」（一昨年京都顏見世）。私は近年これ程無心に感動してぼんやりと見てしまつた芝居はなかつた。表へ出て初めて、大事なせりふのなかつた事に氣づいた。「七百貫目の借金」の大事なせりふがないのは、「六段目」で勘平が腹を切らぬやうなものだが、私は舞踊劇といふ意味の批評を書いたが、そんなせりふのない缺點はあつてもうまい事は絶品だつた。斜めのポーズを巧につかひあのからだをすらりとみせ、せりふを少くして聲を出さず、自分の缺點をカバーしたやうな演出だが、舞踊劇としては驚くべきいいものをみせてくれた。不思議な伊左衞門――それをあゝ

見せるのはすごい人である。

さうしたいい面を持ちながら、理詰と幼稚なリアリズムがどこか殘つてゐたのは惜しい。あの人の一生を考へて、あの「揚屋」のしのぶのやうな解釋を持つてゐた事は疑問だ。あれだけの役者で、妙な理詰な考へ方をしてたのは、確に疑問である。神技の伊左衛門でも何故原作の近松の伊左衛門の性格に關する重大なせりふ（七百貫目の借金云々）をカツトしたのか。默阿彌物にも時に幼稚な解釋があつたのはどういふわけであらう。

併しかういつても私は菊五郎を非難しない理由がある。それは死ぬ迄「芝居が好き」だつた事である。吉右衛門も好きではあるが、それ以上と思ふ。ねた間も忘れないといふ好きである。私も好きな方だが彼には一歩を讓つた。これには謹しんで敬意を拂ふ。

もう一つ最後に聞いて頂きたい事がある、これをもし私が生前に聞いて居れば心から彼を崇拜したと思ふ。それは死ぬ間際に九朗右衛門に「俺の芝居の考へ方は間違つてゐやあしなかつたかなあ。」といつたといふ話だ。この言葉に私は涙の出る程感激した。「人の死せんとする時そのいふやよし。」といふわけか、これ程大きな自己反省はないと思ふ。が、これは果してどういふ眞意か少し判斷に苦しむが、もし自分のやつて來た芝居のやり方を反省して、あゝするのではなかつたといふなら、そしてこれはさう解してゐる批評家もあるが、もしそれなら、彼は神様になつて死んだと同じだと思ふ。

私が敢てさう感じる理由は、菊五郎はよく「理窟に合はぬ芝居は出來ない」といつてゐたし、そこに彼のリアリズムの主張があつたが、その考へに十分見識はありながら、歌舞伎物は、その線を押し切つて超越して藝術化するも亦立派な見識だと思ふ。それを出來ない役者なら兎に角、若き日の菊五郎の既記の明治四十二年の十次郎、四十四年の義經、大正中期の「延命院」

の日當など、あの華麗、優雅さは、實に華も實もある技藝だつた。あゝした豐麗で香氣の高い歌舞伎性のエッセンスが出せる以上、新作に於てはそのリアリズムで腕を振へばいいのであつて、その反對の古典では彼の「華」を咲かせてほしかつたのである。私は菊五郎のすぐれた技藝は、谷崎潤一郎氏の近作の、あのほのぼのとした優婉な詩情と情操と雰圍氣とを出せる筈と思ふ。が、菊五郎は近頃の谷崎氏の作品の情趣を出せる筈の人でゐて、寫實風の乾いた感じを持つてゐたのが殘念である。歌舞伎物の最上の味ひは實に谷崎氏の近頃の作品のあの味に近いと思ふ。又、それが歌舞伎物の理想である。だが、それをきめ細かく出せる人は故羽左衞門よりも、菊五郎の方だつたと信じる。その天分を持ちつゝその藝域を若い頃の二三の役で見せたのみで、遂に十分に發揮出來なかつたのは更に殘念である。死の前、彼が血の出るやうな自己反省、それは實に日本演劇史上にない意味深い自己反省と信じるが故に、私は彼がリアリズムの名人と共に、優美で哀れ、華麗で匂ひの高い歌舞伎の古典の醍醐味をも現はす名優としたかつたわけである。——但し、これらの私の希望、或は非難めいた慾深い註文も、死の前いつた「俺の芝居の考へ方は間違つてゐやあしなかつたか。」で、すべて帳消しとなる。この言葉を反省していつた彼は最早神聖そのものだ。我々はこの一言で全く何等いふべき言葉はない。藝の鬼菊五郎は結局藝で淨化せられて天上、神となつたわけであらう。この心を持つ人に對して私は自分の批評、劇評、私見を恥ぢ入る。同時に、この神々しい謙虛な心を持つ役者を、四十年以上見て來た自分自身を幸福とする。

（「慶應義塾」講演大要）

（二四年十二月）

あとがき

今度創元社から、私が終戰後京都に殘留してゐて、多くの俳優諸氏、文樂の人々などと、私が「對談」をしたものの主な分を集めて、「藝能對談」として出版する。それに臨んで私としての喜びは正宗白鳥氏との對談の原稿を、この書中に納めてゐる事である。併し、私をよく知つてゐて下さる愛讀者以外、殊に、近頃の若い芝居愛好者のファンが、本書で正宗氏との對談が加はつてゐるのを見られると、一寸奇異に思はれるかと察せられる位、この書の正宗氏との對談はおやと怪しまれる人があらうかと考へる。が、年少の頃から鏡花を好まずに正宗氏が好きだつた私だ。氏と芝居の「對談」を「新小說」で企劃してくれ、それをこゝに入れたのは私として終戰後に二つとない喜びであつた。元より氏も亦ある肌合の方でゐて、歌舞伎や文樂を好まれ、その造詣は深く、お若い頃は劇評家でさへあつたのだ。だから氏とのこの對談の記事は私としては最もうれしいものの一つで、これが本書を如何に飾り、大きくしてくれるかは改めて說明する迄もなからうと思ふ。

尙、正宗さんと中野好夫氏と山城の少掾との分は速記だが、俳優その他の諸氏との對談は、悉く

私が書いて、多くは一讀を得てから發表したのであつた。それについて若い劇研究家の某君は、一昨年夏、某演劇雜誌上で、今日流行してゐる藝能の「對談」の形式は、十年前三宅が「中央公論」誌上で始めた樣式のものだといはれたが、僭越ながらさういへばさうであつた。「中央公論」でこれを故市村羽左衞門を最初に初めた時、私は今迄の「藝談」以外の形式にしたいと思つた。同時に、話す人のみの力に賴らすに、話を聞く方の力も出さなくては變化照應がないと思つた。そしてそれを速記にかけても、私の經驗上、悉く書き直さねばものにならぬのを思つた。そこで自分で相手の話をノートし、それを失禮でない範圍で自說を加へて、會話風の「對談」にしようとした。幸にそれが大過なくいつて同誌で一年程十人近い人たちと「對談」した。それは「俳優對談記」として出版してゐるが、この「藝能對談」はその續きと見て頂けばいい。但し、この書全部を「對談」にするのは自分として少し遠慮したい氣持が出た。そこで尾上菊五郎の追悼のみは、全部私自身が書いた原稿を入れた。又、この對談中、松本幸四郎と井上正夫とは共に故人となつた。それだけに生前この二人と會談出來た喜びは、今は樂しい思ひ出となつてゐる。菊五郎と並んでこれらの記事が、少しでも故人の卓越した藝を後の時代に殘すよすがともなれば、私としてこれ程有難い事はないのである。

次に裝幀は、私が御厄介になつた故岡鬼太郎氏の御令息岡鹿之助氏を煩して、これも有難い事だ

と思つてゐる。又、この書の校正その他に、明大の文藝科の學生時代から知つてゐた秋山孝男君が、舊知のよしみを忘れずに、誠實を以て斡旋してくれたのをも併せ記してうれしく謝意を表しておく。

更に、書中私と對談してくれた役者その他の方々へも、いつかは御厚意を報じる折もあらうかと念じてゐる。

昭和二十五年四月

三宅周太郎

藝能對談

昭和二十五年五月二十日　初版印刷
昭和二十五年五月三十日　初版發行

定價　二二〇圓　地方賣價　二三〇圓

著者　三宅周太郎
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四

發行者　矢部良策
東京都新宿區改代町二四

印刷者　松浦元
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四

發行所　株式會社　創元社
（大阪市北區樋上町四五）
電話茅場町二〇六四・四〇八三・五二六三
振替東京一五六五・大阪五七〇九九

印刷　理想社・製本　鈴木

萬一落丁・亂丁がありましたら取替へます

新編

文樂の研究

正 一二〇圓
續 一三〇圓

三宅周太郎著

三宅氏が十餘年の歳月を傾けて史實を探り、斯道の古老に聞き、實地に當り、出來上つた尨大なノートを整理してまとめたものである。然しこの種の研究書に有りがちな無味乾燥は微塵もなく、文樂の世界とその修業の嚴肅な忍苦は、全篇これ氏の情熱にあふれた文章で小說の樣に展開し、何人をも一氣に讀ませ、魅了せずにはをかぬ。

今日、人形淨瑠璃が我國藝能史の中に重要にして正當な位置を占めるに至つたのは、人の知る如く本書に負ふ所絕大である。そして衰亡を嘆ぜられ乍ら文樂が昭和期に異狀の復興を示したのも、蔭に本書のあつたことを見逃すことは出來ぬ。

近刊豫告

高田保
ブラリひようたん
隨想集
六月末刊

井伏鱒二
堀り出しもの
隨想集
六月末刊

中川一政
香爐峯の雪
隨想集
六月刊

幸田文
この世學問
隨想集
六月刊

創元社

東京都日本橋局區內小舟町2ノ4・振替(東京)1565

創元社